

山梨県笛吹市

# 跳子原遺跡

県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

山梨県峡東地域振興局農務部

笛吹市教育委員会

## 序

平成 16 年 10 月 12 日に 6 町村が合併して誕生した笛吹市には、先土器時代から近世に至る埋蔵文化財が数多く残る。特に度重なる洪水が押し出した砂礫で形成された御坂山地北西部に広がる幾多の扇状地と、降下火山灰で形成された笛吹川下流部左岸に展開する曾根丘陵東側に連なる丘陵の上には、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の大規模な集落遺跡や墳墓などが豊富に埋もれている。

本書は笛吹市八代町南部の上ノ原と呼ばれる上述の丘陵上に営まれた、主に縄文時代前・中期の集落遺跡「銚子原遺跡」の調査成果を収めたものである。山梨県発注の農道建設事業に伴うものであることから、調査面積は遺跡全体から見てほんの一部に過ぎないが、『第V章　まとめ』で指摘されているように、縄文時代集落を構えた住人たちの「遊動性」ないし「定住性」、あるいは「季節的移動」、さらに「大型住居」に関わる社会集団の構造を考える上で、非常に重要な問題を提起するものである。

本書の成果を踏まえ、その成果を追補する調査や研究がますます進み深められ、文字に残されていない私たちの祖先の生活が少しでも明らかにされるならば、銚子原遺跡の調査に携わった関係者・関係機関にとってこれほど喜ばしいことはない。

さて、このような学術的成果が分かりやすい形で市民に示され、ひるがえって親たちが子供たちに噛み砕いて伝えることにより、身近な郷土への愛着はいっそう深まるものと信じる。本書公刊を契機に、成果を理解しやすい形で市民に提供する作業は私たちにとってこれからも課題であることを肝に命じたい。

平成 18 年 3 月 31 日

笛吹市教育委員会

教育長　岩原正純

## 例　　言

1. 本書は平成 8 年度から平成 11 年度にかけて行った山梨県笛吹市八代町岡地内に所在する銚子原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は興農農林漁業用揮発油税財源身特農道整備事業に伴う「みやさか道」建設工事に先立つもので、八代町教育委員会が山梨県東上地改良事務所（現在の山梨県東地域振興局農務部）から委託されて実施した。
3. 発掘調査は平成 8 年 12 月 2 日から平成 11 年 9 月 6 日にかけて、途中、さまざまな要因による中断を挟みながら行った。
4. 当内整理・報告書作成作業は平成 9 年 3 月 24 日より平成 16 年 10 月 8 日まで、途中、さまざまな要因による中断はあったが八代町教育委員会が実施し、町村合併後の平成 16 年 10 月 14 日から平成 18 年 3 月 31 日まで笛吹市教育委員会が実施した。
5. 本報告書の執筆・編集は伊藤修二が行ったが、第IV章 第 1 節は保坂康夫氏（山梨県埋蔵文化財センター）から寄稿していただいた。
6. 発掘調査における遺跡の空中写真撮影と 26 号住居跡の平面図作成、また、石器および一部土器の実測図作成については（株）フジテクノに委託した。
7. 発掘調査によって出土した鉄製品の保存処理については帝京大学山梨文化財研究所に委託した。
8. 発掘調査から報告書作成に至るまで、次の諸氏・機関からご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。

今福利恵　岡間俊介　岡野秀典　小野正文　樋原功　小坂隆司　小林広和  
佐野　隆　末木　健　高野玄明　田代　孝　中山誠二　長沢宏昌　野代幸和  
原　雅信　林部　光　保坂康夫　森原明廣

山梨県教育委員会学術文化課　山梨県立考古博物館　山梨県埋蔵文化財センター

(順不同・敬称略)

9. 本書における出土品および記録図面・写真等は笛吹市教育委員会が保管している。

## 調査組織

調査事務局 平成8年12月2日～平成16年10月11日

武川 仁（八代町教育委員会教育長）平成8年12月2日～平成10年9月30日

霜村純志（八代町教育委員会教育長）平成10年10月1日～平成16年10月11日

石原明雄（八代町教育委員会社会教育課課長）平成8年12月2日～平成13年3月31日

宮澤和道（八代町教育委員会社会教育課課長）平成13年4月1日～平成14年3月31日

河野 修（八代町教育委員会社会教育課課長）平成14年4月1日～平成16年10月11日

調査担当者 伊藤修二（八代町教育委員会社会教育課文化財係係長）

平成8年12月2日～平成16年10月11日

主任調査員 小坂規恵（八代町教育委員会社会教育課）

平成12年6月9日～平成16年10月11日

調査事務局 平成16年10月12日～平成18年3月31日

芦原正純（笛吹市教育委員会教育長）

高野あけみ（笛吹市教育委員会教育次長）

田中勤一（笛吹市教育委員会社会教育課課長）平成16年10月12日～平成17年3月31日

風間喜久雄（笛吹市教育委員会社会教育課課長）平成17年4月1日～

調査担当者 伊藤修二（笛吹市教育委員会社会教育課文化振興担当）

発掘調査参加者 相川 幸 猪狩由美子 石倉倫子 石倉伸行 石倉美代子 出月和枝  
出月多枝美 出月多津子 宇野和子 大塚昭六 大原みき 長田久美子  
長田 千鶴 梶原猛美 柄澤真路 菊島正巳 橋田由利子 河野義雄  
小島百合香 小林 諭 小林としみ 小林義造 小林亮二 小森康弘  
齊間千鶴子 酒井夕輝 清水昭明 志村信子 下原茂雄 田中正江  
千野和子 千野富子 出羽万輝惠 中込けん三 中村賢太郎 中村雅子  
中山拓生 中山倫子 塙 邦宏 春成慎介 藤原さつき 古屋志乃ぶ  
古屋治道 宮川孝太 宮久保朝乃 宮澤雅希子 村松久美子 山本正彦  
横瀬孝雄 渡辺 愛 渡辺明美 渡辺喜乃女 渡辺啓美 渡辺礼子  
室内整理参加者 石倉弘子 長田てる美 河西久美子 柄澤真路 小島百合香 斎木愛子  
齊間千鶴子 志村信子 須田富美 高野眞寿美 西山和子 藤原さつき  
村松久美子 矢野美鈴 渡辺 愛 渡辺明美

## 凡例

1. 遺構の挿図中のスクリントーンは炉をあらわす。
2. 遺物の挿図中の土器断面が□は織錦混入土器、■は須恵器、▨は灰釉陶器である。
3. 表の大きさの( )は現存値をあらわす。
4. 住居跡や土坑等の遺構番号は、調査順序により順次付したものであるため、調査の進展に伴い遺構と判断し兼ねるもの、他の遺構と同一になると判断された遺構番号（8号住居跡・10号住居跡・12号住居跡・14号住居跡・15号住居跡・18号住居跡・23号住居跡・187号土坑・138号土坑・145号土坑・158号土坑・168号土坑・205号土坑・226号土坑・241号土坑・249号土坑・326号土坑・527号土坑・533号土坑・548号土坑）は、混乱を避けるために次番となっている。

## 目 次

序文、例言・凡例、目次、挿図目次、図版目次

第Ⅰ章	調査に至る経緯	1
第Ⅱ章	遺跡の位置と環境	
第1節	位置と地理的環境	1
第2節	歴史的環境	2
第Ⅲ章	調査の方法と層序	5
第Ⅳ章	遺構と遺物	
第1節	旧石器時代の遺物	7
第2節	縄文時代の遺構と遺物	
1	竪穴住居跡	7
2	上坑	63
3	屋外炉	87
4	竪穴状遺構	89
5	遺構外出土遺物	91
第3節	古墳時代の遺構と遺物	
1	竪穴住居跡	116
2	溝状遺構	116
3	遺構外出土遺物	118
第4節	平安時代の遺構と遺物	
1	竪穴住居跡	119
2	溝状遺構	122
3	ピット群	127
4	遺構外出土遺物	128
第5節	時期不引の遺構	
1	溝状遺構	128
第Ⅴ章	まとめ	129

## 挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図	2	第 55 図	33号住居跡	52
第 2 図	発掘調査位置と周辺遺跡分布図	4	第 56 図	33号住居跡出土土器	52
第 3 図	調査範囲図	5	第 57 図	34号住居跡	53
第 4 図	グリッド改定図	6	第 58 図	34号住居跡山上土器	54
第 5 図	旧石器時代の石器	7	第 59 図	35号住居跡	55
第 6 図	2号住居跡	8	第 60 図	36号住居跡	56
第 7 図	2号住居跡川土器	9	第 61 図	37号住居跡	57
第 8 図	4号住居跡	10	第 62 図	35号・37号住居跡川上土器	58
第 9 図	4号住居跡出土十土器	10	第 63 図	38号住居跡	59
第 10 図	5号・6号住居跡	11	第 64 図	38号住居跡出土土器(1)	60
第 11 図	5号住居跡川上土器(1)	12	第 65 図	38号住居跡出土土器(2)	61
第 12 図	5号住居跡出土土器(2)	13	第 66 図	39号住居跡	61
第 13 図	5号住居跡出土土器(3)	14	第 67 図	39号住居跡川土器	61
第 14 図	7号住居跡	15	第 68 図	40号住居跡	62
第 15 図	7号住居跡出土土器	15	第 69 図	40号住居跡出土土器	62
第 16 図	9号住居跡・4号堅穴状遺構	17	第 70 図	41号住居跡	63
第 17 図	9号住居跡出土十土器	18	第 71 図	41号住居跡出土土器	63
第 18 図	11号住居跡	19	第 72 図	土坑(1)	67
第 19 図	11号住居跡山上土器	19	第 73 図	土坑(2)	68
第 20 図	13号住居跡・5号堅穴状遺構	20	第 74 図	土坑(3)	69
第 21 図	13号住居跡出土十土器	20	第 75 図	土坑(4)	70
第 22 図	16号住居跡	21	第 76 図	土坑(5)	71
第 23 図	16号住居跡川土器	21	第 77 図	土坑(6)	72
第 24 図	17号住居跡	22	第 78 図	土坑(7)	73
第 25 図	19号住居跡 炉	23	第 79 図	土坑(8)	74
第 26 図	19号住居跡	24	第 80 図	土坑(9)	75
第 27 図	19号住居跡山上土器(1)	25	第 81 図	土坑出土土器(1)	80
第 28 図	19号住居跡川土器(2)	26	第 82 図	土坑出土土器(2)	81
第 29 図	20号・31号住居跡	27	第 83 図	土坑出土土器(3)	82
第 30 図	20号住居跡出土土器(1)	28	第 84 図	十塙山上土器(4)	83
第 31 図	20号住居跡出土土器(2)	29	第 85 図	土坑川上土器(5)	84
第 32 図	21号住居跡	30	第 86 図	土坑出土土器(6)	85
第 33 図	21号住居跡出土土器	30	第 87 国	土坑出土土器(7)	86
第 34 図	22号住居跡	31	第 88 国	土坑山上土器(8)	87
第 35 図	22号住居跡出土土器	32	第 89 国	屋外炉	88
第 36 国	24号住居跡	34	第 90 国	1号屋外炉出土土器	88
第 37 国	25号住居跡	34	第 91 国	1号堅穴状遺構出土土器	89
第 38 国	24号住居跡出土土器(1)	35	第 92 国	1号・2号・3号堅穴状遺構	89
第 39 国	24号住居跡出土土器(2)	36	第 93 国	4号堅穴状遺構出土土器	90
第 40 国	25号住居跡山上土器	36	第 94 国	遺構外出土土器(1)	92
第 41 国	26号住居跡	38	第 95 国	遺構外出土土器(2)	93
第 42 国	26号住居跡 エレベーション図・炉	39	第 96 国	遺構外出土土器(3)	94
第 43 国	26号住居跡 炉・28号住居跡 炉	40	第 97 国	土製円盤	95
第 44 国	26号住居跡出土土器(1)	41	第 98 国	石鍛(1)	96
第 45 国	26号住居跡山上土器(2)	42	第 99 国	石鍛(2)・石錐・石匙(1)	97
第 46 国	26号住居跡出土土器(3)	43	第 100 国	石匙(2)	98
第 47 国	27号・29号住居跡	44	第 101 国	打製石斧(1)	99
第 48 国	27号・29号住居跡出土土器	45	第 102 国	打製石斧(2)	100
第 49 国	28号住居跡出土土器	46	第 103 国	打製石斧(3)	101
第 50 国	30号住居跡	48	第 104 国	打製石斧(4)・磨製石斧	102
第 51 国	30号住居跡出土土器	49	第 105 国	磨石(1)	103
第 52 国	31号住居跡出土土器	50	第 106 国	磨石(2)	104
第 53 国	32号住居跡	51	第 107 国	磨石(3)	105
第 54 国	32号住居跡出土土器	51	第 108 国	磨石(4)	106

第 109 図	磨石(5)・圓石(1) .....	107
第 110 図	圓石(2) .....	108
第 111 図	圓石(3)・石皿(1) .....	109
第 112 図	石皿(2) .....	110
第 113 図	土偶 .....	110
第 114 図	裝飾品 .....	111
第 115 図	3号住居跡 .....	116
第 116 図	3号住居跡出土十七器 .....	116
第 117 図	1号・2号・3号溝状遺構 .....	117
第 118 図	2号溝状遺構出土土器 .....	118
第 119 図	3号溝状遺構出土土器 .....	118
第 120 図	遺構外出土遺物 .....	118
第 121 図	1号住居跡出土遺物 .....	119
第 122 図	1号住居跡 .....	120
第 123 図	42号住居跡 .....	121
第 124 図	42号住居跡山上土器 .....	121
第 125 図	4号・5号溝状遺構 .....	123
第 126 図	6号溝状遺構 .....	124～125
第 127 図	7号・8号溝状遺構 .....	126
第 128 図	6号溝状遺構山上土器 .....	127
第 129 図	1号ピット出土土器 .....	127
第 130 図	ピット群 .....	128
第 131 図	遺構外出土遺物 .....	128
第 132 図	4号溝状遺構山上土器 .....	129
第 133 図	26号住居跡拡張想定図(1) .....	131
第 134 図	26号住居跡拡張想定図(2) .....	132

## 図版目次

図版 1	遺跡遺景(南東側から) 遺構検査状況(チ-36グリッド付近から南西側) 遺構検出状況(ク-45グリッド付近から北東側)	
図版 2	1号住居跡 1号住居跡カマド 2号住居跡 3号住居跡 5号住居跡・6号住居跡 5号住居跡1号埋蔵出土状況 5号住居跡2号埋蔵III・II状況 9号住居跡・4号窓穴状遺構	
図版 3	11号住居跡 19号住居跡 20号住居跡 20号住居跡 台石・磨石山上状況 25号住居跡 26号住居跡 26号住居跡1号埋蔵炉体土器山上状況 26号住居跡4号炒油炉体土器山上状況	
図版 4	26号住居跡 條状耳飾出土状況 27号住居跡 27号住居跡 土器出土状況 27号住居跡 條状耳飾山上状況 28号住居跡 埋蔵炉体土器出土状況 30号住居跡 32号住居跡 33号住居跡	
図版 5	34号住居跡 上器皿出土状況 35号住居跡 36号住居跡 37号住居跡	
図版 6	42号住居跡 42号住居跡 土器出土状況 23号土坑 土器出土状況 50号土坑 76号土坑 土器出土状況 176号土坑 190号土坑 土器出土状況 208号土坑 土器出土状況	
図版 7	223号土坑 上器皿山上状況 236号土坑 土器出土状況 235号土坑 石組検出状況 235号土坑 セクション 237号土坑 土器出土状況 268号土坑・269号土坑 上器皿山上状況 526号二坑 土器出土状況 1号屋外炉	
図版 8	1号窓穴状遺構・48号土坑 7号溝状遺構 4号溝状遺構 8号溝状遺構 6号溝状遺構(ヘ-35グリッド付近) 6号溝状遺構(ル-37グリッド付近)	
図版 9	山上遺物(1)	
図版 10	山上遺物(2)	
図版 11	出土遺物(3)	
図版 12	出土遺物(4)	
図版 13	出土遺物(5)	
図版 14	山上遺物(6)	
図版 15	出土遺物(7)	

## 表目次

第 1 表	上坑一覧表 .....	75
第 2 表	土製円盤一覧表 .....	95
第 3 表	石器觀察表 .....	111
第 4 表	装飾品一覧表 .....	115
第 5 表	土偶一覧表 .....	115

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯

笛吹市は平成 16 年 10 月 12 日に、東八代郡下の石和町、御坂町、一宮町、八代町、境川村、東山梨郡下の春日居町の 6 町村が合併して誕生した市である。今回報告する銚子原遺跡の発掘調査は、事業主体である山梨県東土地改良事務所（現在の山梨県東地域振興局農務部）によって行われた県営農林漁業用渾發油税財源身農道整備事業に先立ち実施されたものである。この事業は、合併前の東八代郡御坂町、八代町、境川村（現在の笛吹市御坂町、八代町、境川町）の時に計画され、着手されたもので、これらの町村の中でもとくに整備の遅れている中山間地域において、従来の単純生産を中心とした農業から、観光農園の開設をはじめとする観光農業振興が可能となるように、同地域を東西に貫く「みやさか道」を建設するというものであった。ところが、この事業用地は多くの遺跡の中を通過するような形で計画されたことから、合併以前から御坂町、八代町、境川村の各教育委員会において、それぞれ発掘調査が行われていた。

八代町内は平成 5 年に同事業が米倉地内で着手されたのを皮切りに徐々に進められ、平成 8 年には同地内にある上ノ原の丘陵上で事業を着手することとなった。このため山梨県東土地改良事務所は、町教育委員会に対して事業用地内における遺跡の所在について照会を行ってきた。町教育委員会では、これに基づき遺跡地図との照合や現地踏査を行ったが、事業用地が周知の埋蔵文化財包蔵地である銚子原遺跡の中を概ね東西に横断するものであることが明らかとなった。このことから、山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県東土地改良事務所、八代町建設整備課と協議を行ったところ、丘陵の平坦地については遺物の散布状況や過去の発掘調査状況から記録保存を目的とした発掘調査を行い、平坦地から西側に続く緩斜面地と一段低い平坦地については、試掘調査を行った結果によって記録保存のための発掘調査を行うか否かを判断することとなった。

試掘調査は文化庁および山梨県から補助金を受け、平成 8 年 10 月 21 日から平成 8 年 10 月 31 日にかけて行った。その結果、縄文時代や古墳時代前期の土器が出土し、溝と考えられる落ち込みが確認され、丘陵上の平坦地から西側に続く緩斜面地と一段低い平坦地についても埋蔵文化財の所在することが明らかとなった。この結果をもとに山梨県東土地改良事務所、八代町建設整備課、町教育委員会は再度協議を行い、平成 8 年度から平成 11 年度にかけて、年度ごとに調査区域を設定しながら、全体で約 3,400 m<sup>2</sup>を対象に記録保存を目的とした発掘調査を行うこととなった。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 位置と地理的環境

山梨県笛吹市は甲府盆地の中央部やや東寄りに位置しており、市の東側は甲州市および大月市と、西側は甲府市、南側は東八代郡片川村および南都留郡富士河口湖町、北側は山梨市とそれぞれ境を接している。市の総面積は 164.77 km<sup>2</sup>で、奥秩父山系の一つである標高 2,475m の甲武信ヶ岳に源流を発し、南巨摩郡黒沢町で釜無川と合流して富士川となる笛吹川の中流域を占めている。地形的にみると、市の南東側は御坂山塊北斜面の山地や丘陵、笛吹川の支流である狐川、浅川、金川、日川等、また、日川に流入する大石川、京戸川等の河川がそれぞれ形成した扇状地が広がっており、市の北西側では大藤経寺山や兜山、柳山をはじめとする秋父山地の前衛の山々、周辺の山塊から運ばれてきた上砂が笛吹川や平等川により横に拡散されたことによって形成された冲積地が広がっている。

銚子原遺跡は、笛吹市八代町岡地内にある、通称「銚子原」と呼ばれている上ノ原の丘陵上に立地している。この丘陵は、背後の御坂山塊北斜面の山地から甲府盆地に向かって張り出している丘陵で、盆地の南縁を西八代郡市川三郷町の東部から笛吹市境川町のほぼ中央あたりまで達なる曾根丘陵のさらに東側に

続く丘陵の一つである。本丘陵上には東西400m、南北600mの広さを有する緩やかに傾斜した北向きの平坦面があり、東側を四ッ沢川が、西側を大谷沢川が流下しており、それぞれ深い沢を形成している。今回、発掘調査を行った地点は丘陵の先端から110m程度内側に入ったところで、標高はおよそ428m、甲府盆地を概ね180°の視野で一望することができる絶好の場所にあたる。

## 第2節 歴史的環境

先述したように、笛吹市は東八代郡下の石和町、御坂町、一宮町、八代町、境川村、東山梨郡下の春日居町が合併して誕生した市である。これらの町村は、県内でも屈指の遺跡集中地帯を構成しており、合併前にはさまざまな開発工事に伴う遺跡の発掘調査が盛んに行われていた。遺跡を時期的にみると縄文時代から近世にわたる各期を通して存在しており、その分布も粗密がみられるが、市内のほぼ全域に広がっていて、古来より人々の足跡が多く刻み込まれてきたことが窺える。

銚子原遺跡は、古くから縄文時代前期後葉から中期末にかけての遺物が濃密に散布していることが知られていた遺跡で、これまでに八代町教育委員会によって3回の発掘調査が行われている。最初の調査は昭和63年(1988)に果樹の作付け転換作業の際、多量の土器や石器が出土したことから、遺跡の状況把握を目的として行われた。この時は約50m<sup>2</sup>が調査され、縄文時代前期末の住居跡4軒と土坑2基、縄文時代中期末の住居跡1軒、時期が特定できない土坑3基が確認されている。また、平成6年(1994)には八代町が行った「ふるさと公園」の古墳の広場整備事業に伴い、事業用地内の構造や遺物の状況を把握するための試掘調査が行われ、事業用地のほぼ全域から縄文時代前期後葉から中期末にかけての土器や石器が



第1図 遺跡位地図 (S=1:50,000)

多量に出土し、一部の試掘坑では遺構が確認されている。さらに、平成6年（1994）から平成7年（1995）には軒道拡幅工事に伴い、幅約2m、長さ約84mが調査され、縄文時代前期末の住居跡2軒と上坑7基、古墳時代以降の溝跡2条、時期が特定できない上坑5基が確認されている。このように、これまで行われてきた発掘調査の状況から、本遺跡は縄文時代前期後葉から中期末にかけての拠点的な集落であることが明らかとなり、また、過去において縄文時代草創期の細石器や尖頭器等が表探されていることから、笛吹市内における最古級の遺跡の一つであることが確認されている。

銚子原遺跡が立地する上ノ原の丘陵上には、本遺跡以外にも稻山原遺跡（5）、岡・銚子塚古墳（2）、盃塚古墳（3）等の遺跡が所在している。また、上ノ原の丘陵の周囲にある他の丘陵上にも多くの遺跡が所在している。

稻山原遺跡は本遺跡の南東側、つまり、丘陵の奥に広がる遺跡で、まだ発掘調査は行われていないが、主に縄文時代中期の土器が散布している遺跡である。岡・銚子塚古墳は山梨県の指定史跡となっており、平成3年（1991）から平成5年（1993）にかけて史跡整備に伴う発掘調査が行われ、4世紀後葉に築造された全径92mの前方後円墳であることが確認されており、笛吹市で最も古い古墳である。盃塚古墳は笛吹市の指定史跡で、平成4年（1992）から平成5年（1993）にかけて史跡整備に伴う発掘調査が行われ、5世紀代に築造された直径23mの円墳であることが確認されている。この他にも3基の古墳が所在しているが、詳細は明らかとなっていない。

上ノ原遺跡の丘陵の北西側には、一段低い丘状を呈する小規模な丘陵が2箇所みられ、これらの丘陵上には縄文時代中期の八幡遺跡（21）や、古墳時代中期頃に築造された直径15mの円墳、鳩峰原古墳（22）、弥生時代前期の容器形土偶が2体出土した岡遺跡（24）が所在している。また、上ノ原の丘陵の東側を流下する四ツ沢川を挟んだ東隣にも舌状を呈する丘陵があり、この丘陵上にも縄文時代中期の大覚杯遺跡（6）が所在している。さらに、浅川の東側にある花鳥山の丘陵上にも、縄文時代前期末の花鳥山遺跡や、直径20mの古墳が所在している。花鳥山遺跡は昭和62年（1987）に行われた笛吹川農業水利事業国営副幹線敷設工事に伴う発掘調査をはじめ、これまでに3回の調査が行われ、縄文時代前期後半の住居跡や上坑が多数確認されており、同時期の拠点的な集落であることが確認されている。

一方、本丘陵の西側を流下する大谷沢川を挟んだ西隣にも、通称「竜安寺山」と呼ばれる上ノ平の丘陵があり、この丘陵上にも、上ノ平A遺跡（13）、上ノ平B遺跡（14）、大谷沢A遺跡（11）、真福寺遺跡（10）、竜塚古墳（15）といった遺跡が所在している。上ノ平A遺跡は、昭和59年（1984）に農道の拡幅舗装工事と耕地整備工事に伴い発掘調査が行われ、縄文時代中期後葉の住居跡や土坑、ピット、焼土跡、弥生時代後期の住居跡、平安時代の上坑、時期不明の溝跡が確認されている。大谷沢A遺跡と真福寺遺跡は、平成5年（1993）に県営農林漁業用排水施設整備事業に伴う「みやさか道」建設工事に伴い発掘調査が行われた。当時は合併前で両遺跡の間に八代町と境川村の町村境があったため、別の遺跡名が付けられているが、本来は同一遺跡である。八代町教育委員会が調査した大谷沢A遺跡からは、縄文時代前期末と中期後葉の上器や石器、平安時代の住居跡と溝跡が確認され、境川村教育委員会が調査した真福寺遺跡からは、大谷沢A遺跡で確認された溝跡と同形・同規模の溝跡が確認されている。竜塚古墳は平成13年（2001）から平成16年（2004）にかけて、古墳の保存整備を前提とした事前の基礎的資料を得ることを目的とした発掘調査が行われ、5世紀前葉に築造された一辺の長さが55mから56mの方墳であることが確認されている。

このように、本遺跡が所在する丘陵上、および、周辺の丘陵上には、縄文時代の拠点的な集落をはじめ、丘陵上にみられる弥生時代の集落、古墳時代前期および中期の古墳などが多数点在しており、笛吹市のみならず山梨県の歴史を解明する上で、欠くことのできない重要な遺跡が多数集中するエリアとなっている。



- |          |           |          |          |           |           |          |
|----------|-----------|----------|----------|-----------|-----------|----------|
| 1. 銚子原   | 2. 銚子原古墳  | 3. 益塚古墳  | 4. 無名古墳  | 5. 稲山原    | 6. 大覚林    | 7. 欠沢    |
| 8. 無名古墳  | 9. 無名古墳   | 10. 真福寺  | 11. 大沢谷A | 12. 龍安寺川西 | 13. 上ノ平A  | 14. 上ノ平B |
| 15. 龍塚古墳 | 16. 金山    | 17. 花田   | 18. 大仏塚  | 19. 夜長    | 20. 大仏塚古墳 | 21. 八幡   |
| 22. 鳩峰   | 23. 無名古墳  | 24. 岡    | 25. 無名古墳 | 26. 無名古墳  | 27. 緋塚原古墳 | 28. 沢添   |
| 29. 土井原  | 30. 米倉氏館跡 | 31. 無名古墳 | 32. 石塚古墳 | 33. 無名古墳  | 34. 大沢谷B  |          |

第2図 発掘調査位置と周辺遺跡分布図 (S=1:10,000)

### 第III章 調査の方法と層序

今回の発掘調査区域は、「みやさか道」建設工事に伴う幅約10m～14m、長さ約377mの道路建設部分である。調査区には5m四方のグリッドを設定した(第4図)。グリッドは、調査区が銚子原遺跡の中を南西から北東に向かって緩衝するように細長いため、南西端を起点として、磁北に合わせて北方向にむかって1・2・3～48までの算用数字を、東方向へA・B・C・D～Zのアルファベット、統けて、イ・ロ・ハ・ニ～コというようにカタカナで表記したものを用いて呼称した。

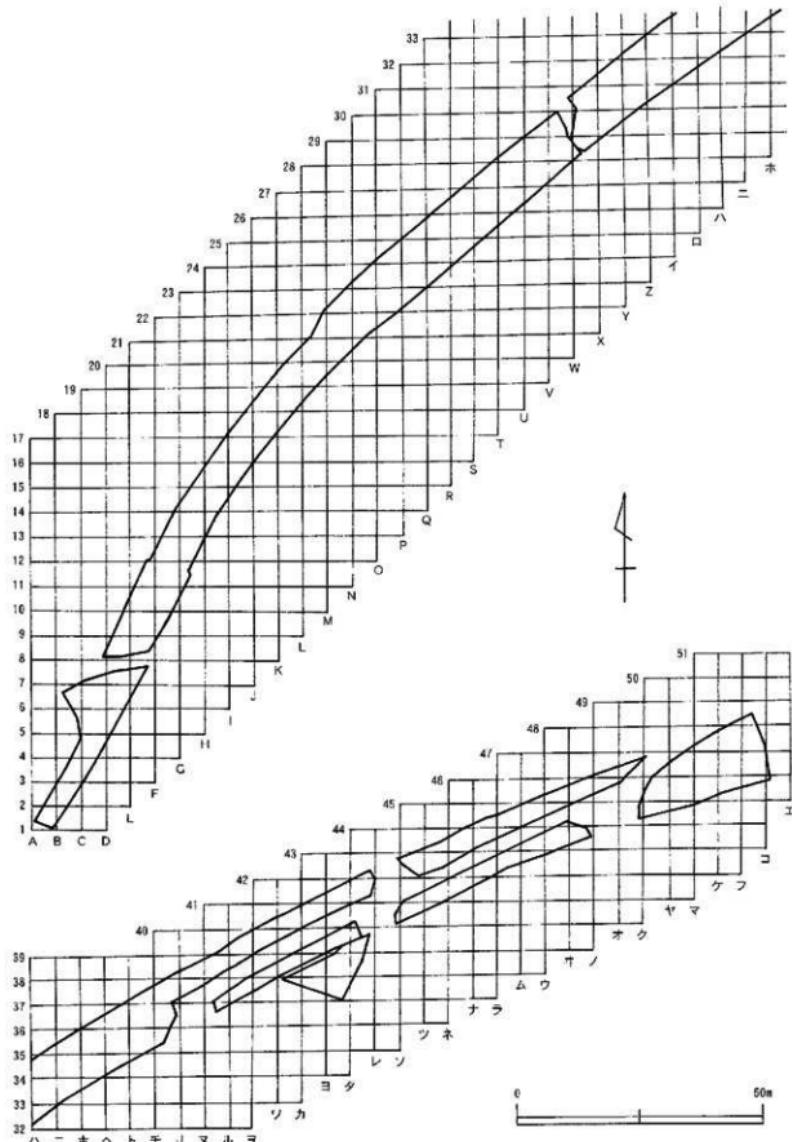
調査の方法としては、重機により表土を除去した後、人力で精査して遺構の検出作業を行い、その後、検出された各遺構の調査を行った。

本遺跡の基本層序は次に示す通りである。

- I層 表土層(耕作土)
- II層 黒褐色土(カーボン・スコリアを含む。古墳時代や平安時代の遺物包含層である。明確な土層としてほとんど捉えることはできないが、1号住、3号住、42号住、溝状遺構の覆土としてみられる。)
- III層 暗茶褐色土(カーボン・スコリアを多量に含む。繩文時代の遺物包含層である。)
- IV層 黄褐色土(ソフトローム)
- V層 暗黄茶褐色土(ブラックバンド)
- VI層 黄褐色硬質土(ハードローム)



第3図 調査範囲図 (S=1:2,500)



第4図 グリッド設定図 (S=1:1,000)

## 第IV章 遺構と遺物

### 第1節 旧石器時代の遺物

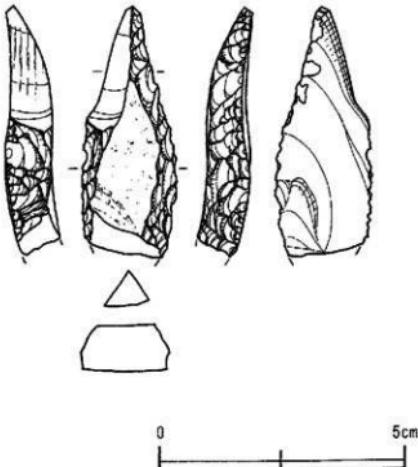
イー31グリッドから旧石器時代の石器が1点出土した。縄文時代の遺物包含層を精査しているときに出土したもので、実測図の作成およびトレース、原稿については保坂康夫氏にお願いした。

#### 切出形石器（第5図）

切出形石器である。分厚い横長剥片を素材とする。素材打面を正面右側に置き、打面側と素材剥片端部側を急角度剥離で加工し、左側縁に素材の刃部を残している。この刃部を構成する剥離面は、先端側からの打撃によるもので、極状剥離とみまがうが、主要剥離面に切られており素材時の剥離面である。円盤状石核の打面周囲を打撃して、求心的な剥離作業を行うような剥片剥離技法で剥離された素材であると考えられる。調整剥離は2~3段階がみられ、厚く深く加工がなされており、加工縁部は鋸歯状を呈して、切出形石器特有の調整剥離である。先端部は正面左側からの曲げの剥離で折れている。背面中央部は自然面で、古い剥離面がスリガラス状に風化したズリ面である。基部側は広くガジリ面で覆われ、基部端を欠損する。また、裏面先端側左側縁にもガジリがみられる。石材は透明な黒曜石で、信州系の黒曜石の内、鍛  
訪星ヶ台系の可能性がある。

こうした特長を持つ石器は、武藏野台地IV下・V層段階、相模野台地III期、渕跡層編年段階Vにみられる。層年較正年代で今からおおむね26000~24000年前頃である。この段階は、武藏野台地、常総台地、相模野台地では遺跡が増加し巨大な遺跡群を形成するが、愛鷹山・箱根山麓や磐田原台地、八ヶ岳山麓、野尻湖遺跡群、北関東などでは逆に遺跡数が少なくなる時期である。[1] 梨臥内ではブロックや礫群を伴う生活遺跡は確認されておらず、豊富村（中央市）赤二郎遺跡や、中道町（甲府市）立石遺跡で切出形石器が単独出土している程度である。本資料は、この段階の遺跡の存在を推定させる希少例として重要である。

(保坂康夫)



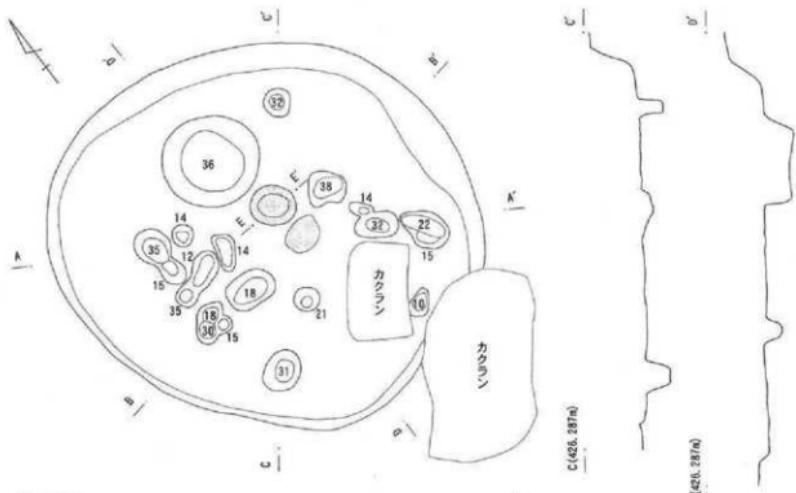
第5図 旧石器時代の石器

### 第2節 縄文時代の遺構と遺物

#### 1. 壁穴住居跡

##### 2号住居跡（第6図）

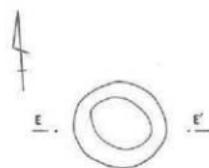
本住居跡はK-19・K-20・L-19・L-20グリッドに位置しており、他の遺構との重複関係はない。平面形は梢円形を呈し、長軸5.4m、短軸4.7mの規模を有する。壁は緩やかに立ち上がっており、確認



A(426, 287n)

B(426, 287n)

0 28



E(425, 637n)

0 18

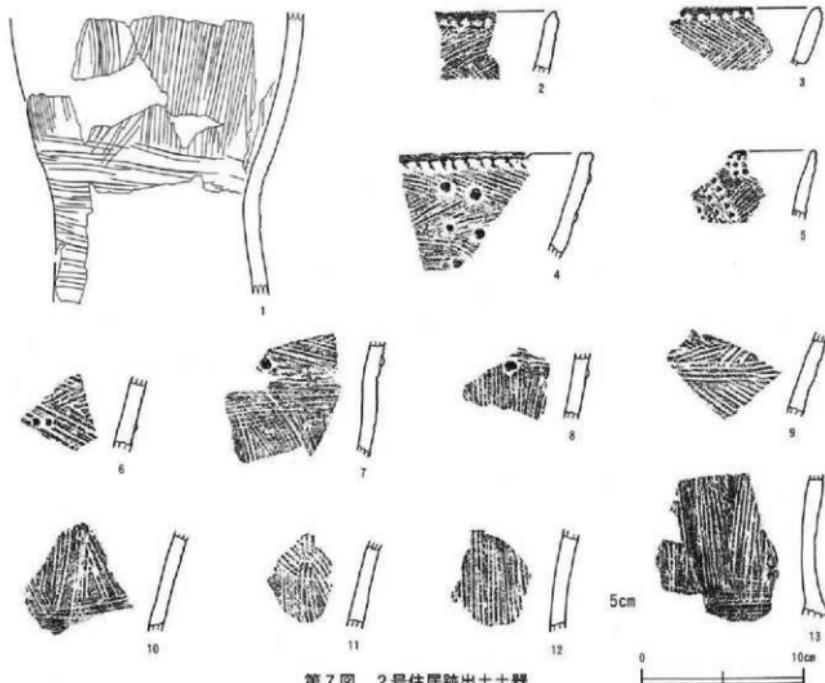
第6図 2号住居跡

された壁高は最大で 52cm を測る。床は西側が低くなるように緩やかに傾斜しているものの概ね平坦で、貼床は確認できなかったがしっかりとしている。炉は地床炉で、住居跡の中央からやや北東寄りで確認された。直径 55cm で円形をしており、深さは 11cm を有する。焼土は明確な堆積はみられなかったが、焼土の粒子やブロックが認められた。ピットは 19 本確認されており、径が 22cm から 62cm、深さが 10cm から 38cm である。

この他に、炉の北側で土坑が 1 基確認されている。平面形は円形を呈し、規模は径が 115cm、深さが 32cm である。

土器（第 7 図）は覆土中より諸機 c 式土器が比較的多く出土した。1 は縦方向の条線で区画した間に((O)) 状の条線が施され、以下、底部付近には横位の条線が施されている。2~6 は横方向の矢羽根状条線が施されたもので、4 と 6 にはボタン状貼付文が、5 には棒状結節浮線文とボタン状貼付文が施されている。7 は横方向の矢羽根状条線や横位、斜位の条線の上にボタン状貼付文が、8 は縦位の条線の上にボタン状貼付文が施されている。9 は横方向の矢羽根状条線と横位の条線、10 は縦方向の矢羽根状条線、11 は((O)) 状の条線、12 と 13 は縦位の条線がそれぞれ施されている。石器は磨石（第 105 図 147）が出土した。

本住居跡の時期については、出土した土器から前期後半の諸機 c 式期に属するものと考えられる。



第 7 図 2 号住居跡出土土器

#### 4 号住居跡（第 8 図）

本住居跡は N-21・O-21 グリッドに位置している。25 号土坑や 4 号溝状遺構と重複しており、重複関係はこれらの遺構によって切られている。

南側のおよそ半分が調査区域外にあるため、全貌は明らかでないが、平面形は円形を呈するものと思われ、現状において確認できた規模は東西3.5m、南北1.3mである。壁は緩やかに立ち上がっており、確認された壁高は最大で38cmを測る。床は概ね平坦で、貼床は確認できなかつたが比較的しっかりしている。炉やピットは確認できなかつた。

十器（第9図）は諸磯b式上器（1）と諸磯c式土器（2）が出土した。1はR.L.と思われる単節縄文を地文にして、彌状に平行沈線文が施されている。2は磨耗気味であるが、波状I線で平行沈線文の上に結節浮線文が施されている。石器は石鏃（第98図2）が出土した。

本件居跡の時期については、出土した上器が小破片のもので、出土量も極端に少ないとから判断に困難を伴うが、前期後半の諸磯b式上器や諸磯c式土器が出土していることから、その時期に属するものと考えられる。

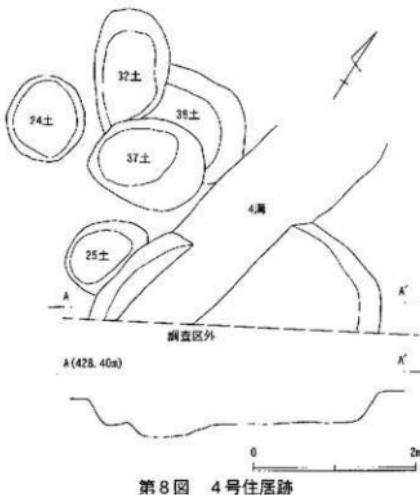
#### 5号住居跡（第10図）

本住居跡はQ-26・R-26・R-27・S-26・S-27グリッドに位置している。6号住居跡や6号溝状造構と重複しており、これらとの重複関係は6号溝状造構によって切られ、6号住居跡を切って構築している。

北西側の一帯が調査区域外にあるため、全貌は明らかでないが、平面形は梢円形を呈するものと思われ、現状において確認できた規模は長軸7.1m、短軸4.8mである。壁は緩やかに立ち上がっており、確認された壁高は最大で25cmを測る。床は概ね平坦で、貼床は確認できなかつたが炉の周辺が硬く硬化していた。炉は石圓炉で、住居跡の中央からやや北東寄りで確認された。東側の炉石のみしか存在していないが、炉内より被熱を受けた礫が複数検出されていることから、これらの礫が炉石に用いられていたものと考えられる。長径156cm、短径94cmで不整形をしており、深さは43cmを有する。焼土は炉の底に6cm程度の厚さで堆積していた。ピットは6本確認されており、径が46cmから80cm、深さが33cmから67cmである。

この他に、土坑1基と埋甕2基が確認されている。1坑は炉の西側で確認されており、平面形が円形を呈し、規模は径が75cm、深さが18cmである。埋甕は2基とも生居の西側で確認され、隣り合うような近い位置にある。1号埋甕は深鉢型土器を、2号埋甕は底部を打ち欠いたX字状把手をもつ深鉢形土器をそれぞれ正位に埋設している。埋甕傾は2号埋甕が古、1号埋甕が新となる。

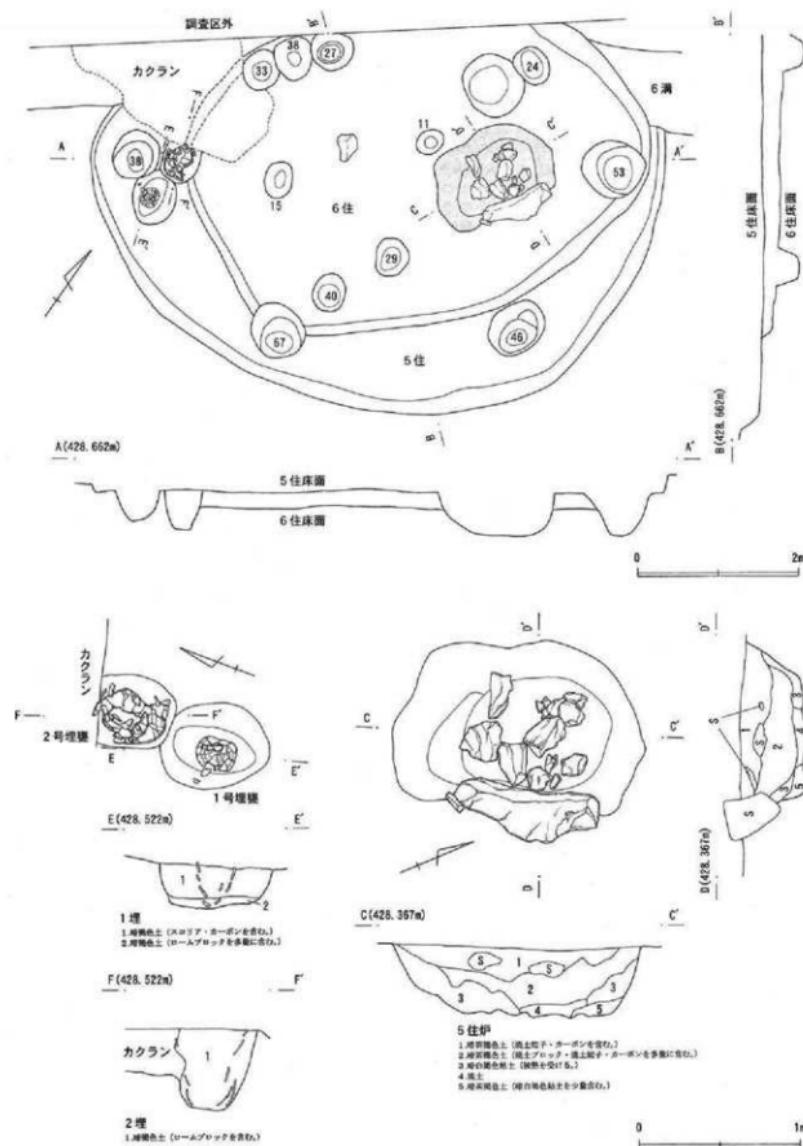
上器（第11・12・13図）は曾利IV式土器（1～12・14～16）と加曾利EⅢ式土器（13）が出土した。1は2号埋甕である。X字状把手をもつ深鉢形土器で、縦位の条線を地文にして、隆帶により渦巻文が施されている。2はX字状把手の破片、3は条線を地文にして、隆帶による渦巻文が施されている。4はX字状把手をもつ深鉢形土器で、縦位や斜位等の条線を地文にして、隆帶により渦巻文が施されている。5はX字状把手をもつ深鉢形土器で、縦位の条線を地文にして、隆帶により渦巻文が施されている。6は1号埋甕である。縦位の条線を地文にして、隆帶によりII状の区画が行なわれている。7は縦位の条線を地文にし



第8図 4号住居跡



第9図 4号住居跡出土土器



第10図 5号・6号住居跡

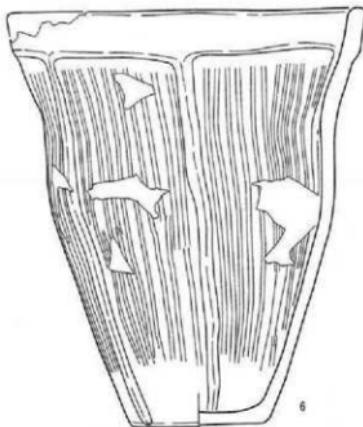
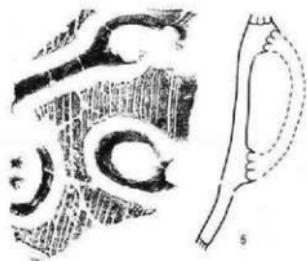


0 10cm



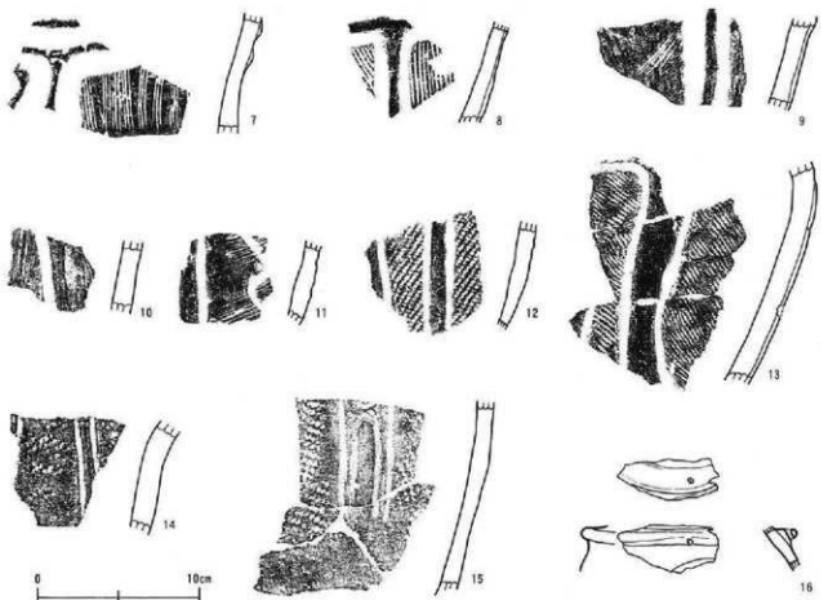
0 10cm

第11図 5号住居跡出土土器 (1)



0 10cm

第12図 5号住居跡出土土器 (2)



第13図 5号住居跡出土土器（3）

て、隆帯によりII状の区画と溝巻文が施されている。8~10は縦位や斜位の条線を地文にして、隆帯と隆帯に沿う浅い沈線により縦の区画が行われている。11は斜位の条線を地文にして、2本の沈線による縦の区画が行われ、沈線による蛇行懸垂文が施されている。12・14はLRの単節繩文を地文にして、2本の沈線による縦の区画が行われており、沈線の間の繩文は磨消されている。13は隆帯と隆帯に沿う浅い沈線によってU字状のモチーフが施されており、隆帯間にLRの単節繩文が充填されている。15はLRの単節繩文を地文にして、沈線によるH字状懸垂文が施されており、沈線の間の繩文は磨消されている。16是有孔鈎付土器で、孔が鈎を貫いている。石器の出土量は比較的多く、石鎚（第98図3）、打製石斧（第101図58）、磨石（第105図148）、石皿（第112図219・220）が出土した。また、この他に土偶の頭部（第113図2）も出土している。

本住居跡の時期については、出土した土器から中期後半の曾利IV式期に属するものと考えられる。

#### 6号住居跡（第10図）

本住居跡はR-26・R-27・S-26・S-27グリッドに位置している。5号住居跡や6号溝状遺構と重複しており、重複関係はこれらの遺構によって切られている。

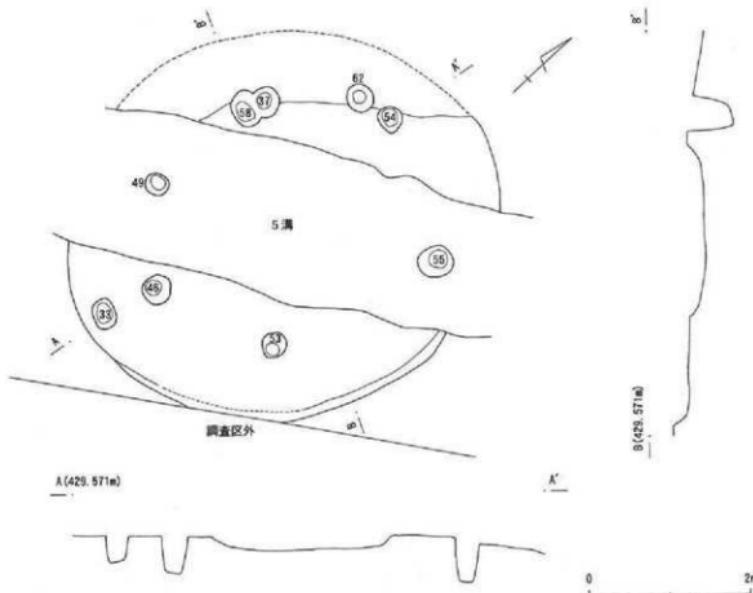
北西側の一部が調査区域外にあるため、全貌は明らかでないが、平面形は椭円形を呈するものと思われ、現状において確認できた規模は長軸5.8m、短軸3.7mである。壁は緩やかに立ち上がり、確認された壁高は最大で21cmを測る。床は北西側が低くなるように緩やかに傾斜しており、貼床は確認できなかったが、比較的のしっかりとしている。ピットは6本確認されており、径が36cmから52cm、深さが11cmから40cmである。炉は確認できなかった。

本住居跡からは遺物がまったく出土していない。このため、本住居跡の時期の判断が極めて困難なものとなっているが、中期後半の曾利IV式に属する5号住居跡によって切られていることから、その時期以前に属するものと考えられる。

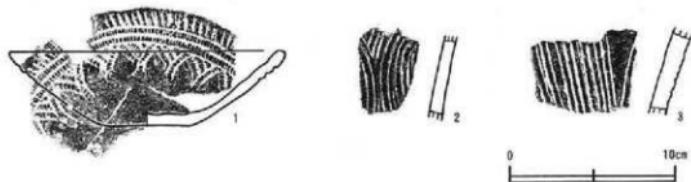
#### 7号住居跡（第14図）

本住居跡はR-24・R-25・S-24グリッドに位置している。9号住居跡、19号住居跡、5号溝状遺構と重複しており、これらとの重複関係は5号溝状遺構によって切られ、9号住居跡、19号住居跡を切って構築している。

本住居跡は9号住居跡、16号住居跡、19号住居跡の覆土中に掘り込まれていたため、当初、土の色調の変化ではまったく確認することができなかつた。ところが、調査を進めていく中で五領ヶ台I式の土器が散見されはじめたことから精査を行ったところ、南東側の壁と柱穴が検出され、このことから住居跡の存在を確認することができた。



第14図 7号住居跡



第15図 7号住居跡出土土器

住居跡の北西側は畠境の段差によって削平を受けていることから、全貌は明らかでないが、平面形は梢円形を呈するものと思われ、規模は長軸が5.5m、短軸は推定で4.8mを有する。壁は緩やかに立ち上がり、確認された壁高は最大で20cmを測る。床は概ね平坦で、貼床は確認できなかったが、遺構の覆土よりもシマリのある面が認められた。ピットは9本確認されており、径が29cmから46cm、深さが33cmから62cmである。炉は確認できなかった。

上器（第15図）は五頭ヶ台I式土器が少量出土した。1は浅鉢形土器で、連続爪形文によりY字状のモチーフが描かれている。2は弧状の集合沈線が施され、3は縦位の集合沈線が施されている。石器は打製石斧（第101図59）が出土した。

本住居跡の時期については、出土した上器が少ないことから判断に困難を作り、接合してある程度復元された中期初頭の五頭ヶ台I式土器が出土していることから、その時期に属するものと考えられる。

#### 9号住居跡（第16図）

本住居跡はQ-24・Q-25・R-24・R-25グリッドに位置している。7号住居跡、16号住居跡、19号住居跡、4号竪穴状遺構、77号土坑、5号溝状遺構と重複しており、これらとの重複関係は4号竪穴状遺構と5号溝状遺構によって切られ、7号住居跡、16号住居跡、19号住居跡、77号土坑を切って構築している。

住居跡の北西側が畠境の段差によって削平を受けていることから、全貌は明らかでないが、平面形は梢円形を呈するものと思われ、現状で確認できた規模は長軸6.4m、短軸4.7mである。壁は緩やかに立ち上がり、確認された壁高は最大で26cmを測る。床は南西側に向かって低くなるような傾斜がみられ、貼床は確認できなかったが、シマリのある面が認められた。炉は地床かで、重複している4号竪穴状遺構の下から検出されており、長軸が76cm、短軸が58cmで、深さは確認されたところから16cmを有する。焼土が6cm程度の厚さで堆積していた。ピットは11本確認されており、径が28cmから41cm、深さが16cmから43cmである。

この他に、住居跡の南西側で十坑が1基確認されている。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸が70cm、短軸が54cm、深さが17cmである。

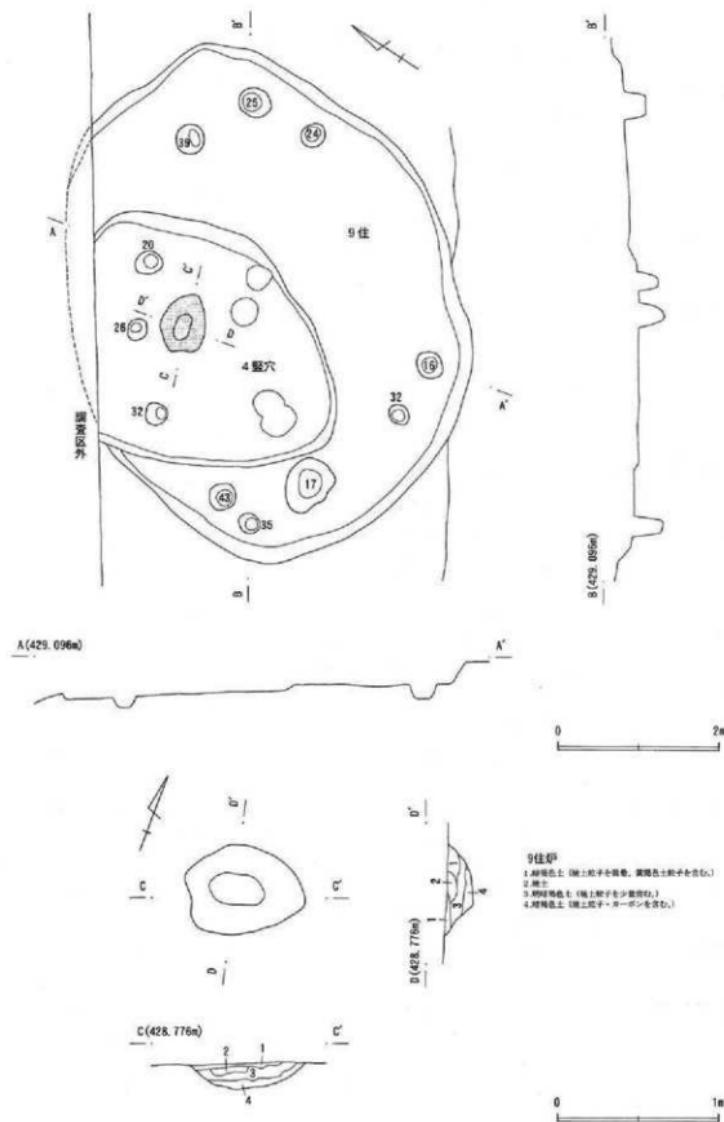
土器（第17図）は諸穀c式土器が多量に出土した。1～2は横に近い斜位の沈線上に棒状結節浮線文とボタン状貼付文、また、口縁に沿って結節浮線文が施されている。3・4は横に近い斜位の沈線上にボタン状貼付文、また、口縁に沿って結節浮線文が施されている。5は横方向に矢羽根状条線が施されたもの、6は(( ))状に条線が施されている。7は縦位の条線と縱方向の矢羽根状条線の上に、8・9は渦巻状結節浮線文の上にボタン状貼付文が施されている。10・11は底部で、横方向の矢羽根状条線が施されており、11にはボタン状貼付文が施されている。12は底部付近の破片で、縦位の条線と縱方向の矢羽根状条線の上に、ボタン状貼付文が施されている。13～15は有孔浅鉢形土器で、脛曲部が肥厚している。中でも13は脛曲部に赤彩痕がみられる。石器の出土量は比較的多く、打製石斧（第101図60～63）、磨製石斧（第104図137）、磨石（第105図149～152）が出土した。

本住居跡の時期については、出土した土器から前期後半の諸穀c式期に属するものと考えられる。

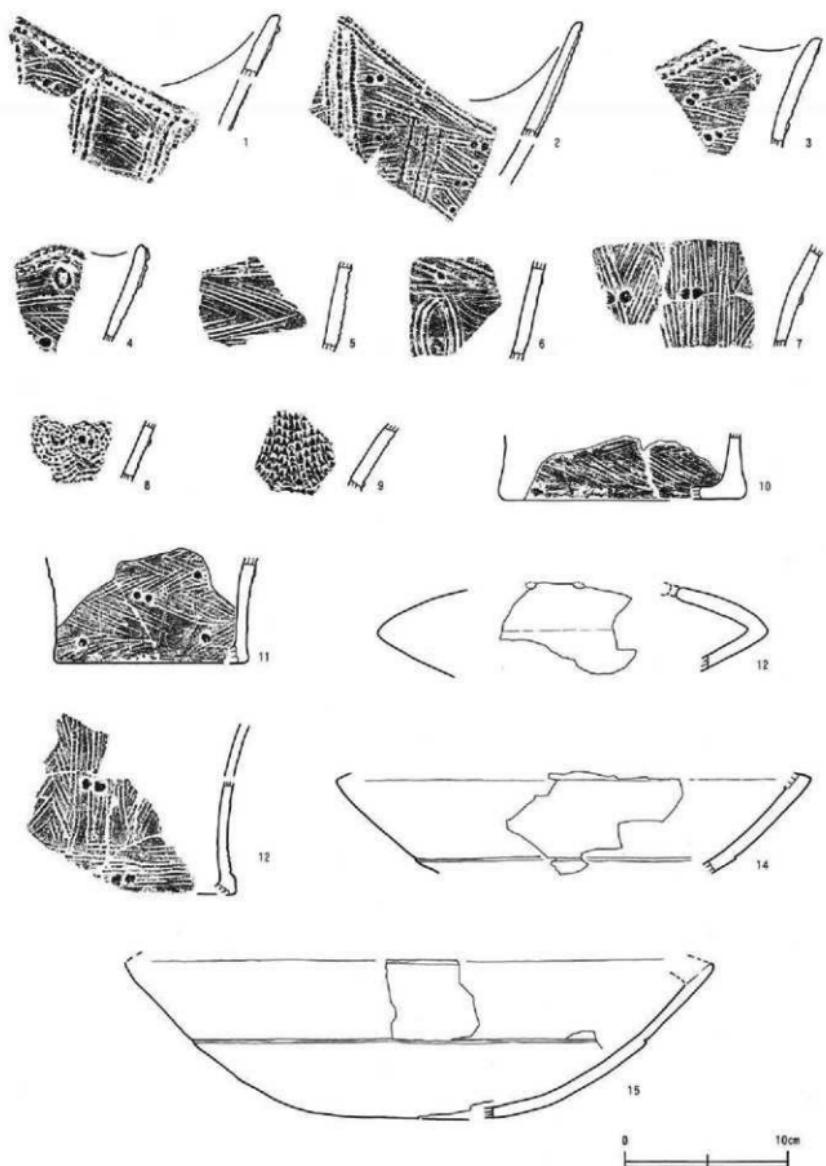
#### 11号住居跡（第18図）

本住居跡はT-26・T-27・U-26・U-27グリッドに位置している。64号土坑や70号十坑と重複しており、重複関係はこれらの遺構によって切られている。

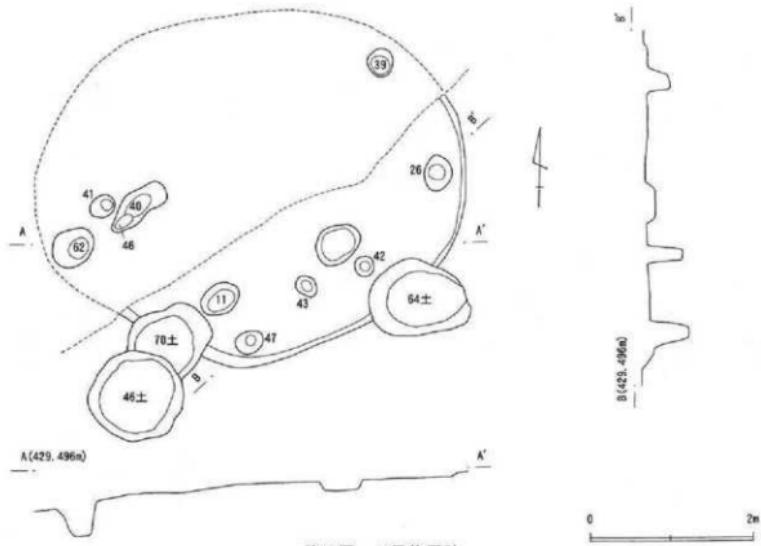
住居跡の北西側半分が畠境の段差によって削平を受けていることから、全貌は明らかでない。しかし、柱穴を確認することができたことから、住居跡の大まかな様相を捉えることができた。平面形は梢円形を呈するものと思われ、規模は東西5.4m、南北4.5mと想定される。壁は確認された壁高が最大で15cmと低いため、はっきりとは言えない面もあるが、緩やかに立ち上がる傾向が窺える。床は平坦で、貼床



第16図 9号住居跡・4号竪穴状遺構



第17図 9号住居跡出土土器



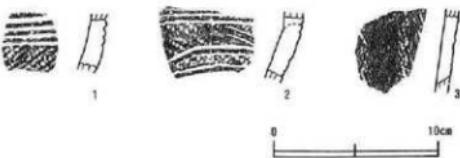
第18図 11号住居跡

は確認できなかつたが比較的しっかりとっている。ビットは10本確認されており、径が25cmから55cm、深さが11cmから62cmである。炉は確認できなかつた。

この他に、住居跡の南東寄りのところで土坑が1基確認されている。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸が57cm、短軸が46cmで、深さが14cmである。

土器（第19図）は五領ヶ台II式土器が少量出土した。1はLRの単筋縄文を地文にして横位や弧状に平行沈線が施され、2はRLの単筋縄文を地文にして横位の沈線文が施されている。3は結節縄文が施されたものである。石器は打製石斧（第101図64）が出土した。

本住居跡の時期については、出土した土器が少ないとから判断に困難を伴うが、中期初頭の五領ヶ台II式土器が出土していることから、その時期に属するものと考えられる。



第19図 11号住居跡出土土器

### 13号住居跡（第20図）

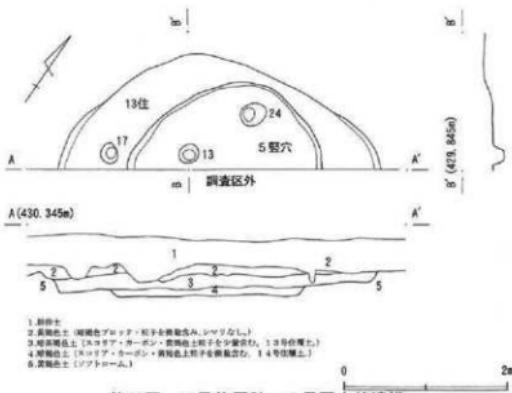
本住居跡はT-25・T-26・U-26グリッドに位置している。5号竪穴状遺構、60号土坑、62号土坑と重複しており、重複関係はこれらの遺構を切って構築している。

南東側が調査区域外にあるため、全貌は明らかでないが、平面形は円形または梢円形を呈するものと思われ、現状で確認できた規模は東西3.9m、南北1.4mである。壁は確認された壁高が最大で16cmと低いため、はつきりと言い切れない面もあるが、緩やかに立ち上がる傾向が窺える。床は北側に向かって低くなるように緩やかな傾斜がみられ、固く硬化した面が認められた。ビットは3本確認されており、径が26

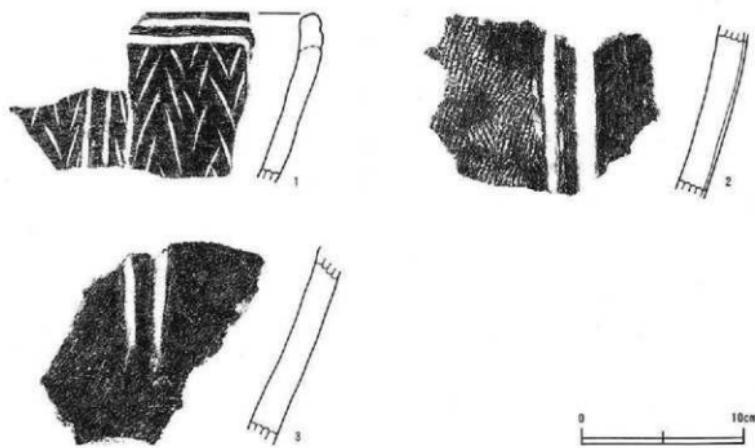
cm から 34cm、深さが 13cm から 24cm である。炉は確認できなかった。

土器（第 21 図）は曾利 V 式土器が少量出土した。1 はハの字文を地文にして、沈線による II 状の区画が行われている。2 と 3 は同一固体と思われるもので、R.L の単節縄文を地文にして、隆帶と隆帶に沿う浅い沈線により縦の区画が行われている。石器では石棒（第 111 図 215）の破片が出土している。

本住居跡の時期については、出土した土器から中期後半の曾利 V 式期に属するものと考えられる。



第20図 13号住居跡・5号竖穴状造構

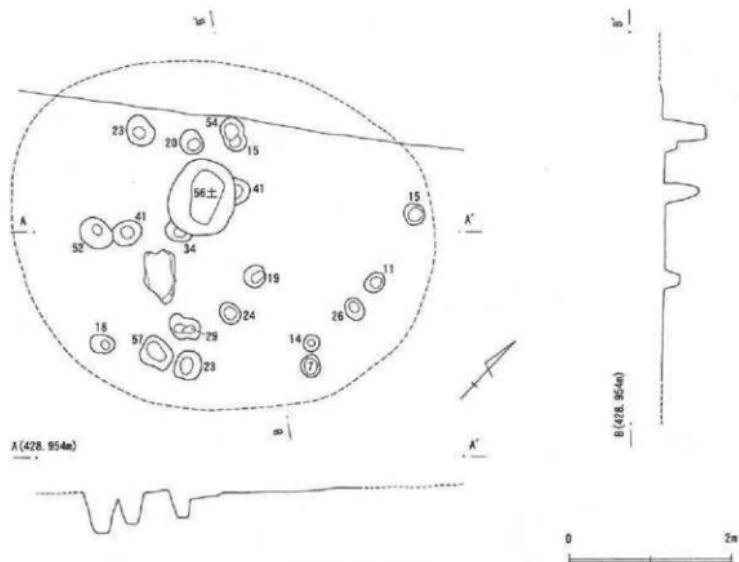


第21図 13号住居跡出土土器

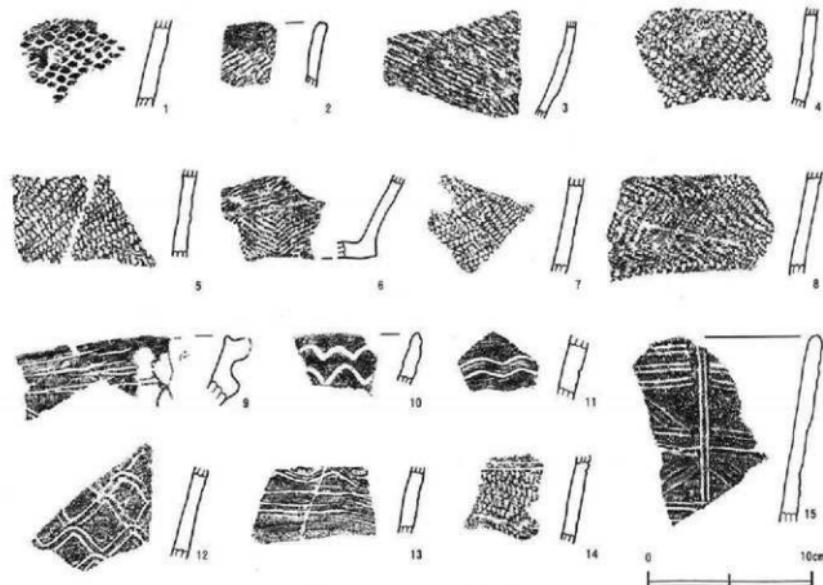
#### 16号住居跡（第 22 図）

本住居跡は R-24・R-25・S-25 グリッドに位置している。9 号住居跡、19 号住居跡、56 号土坑、77 号土坑、5 号溝状造構と重複しており、これらとの重複関係は 9 号住居跡、56 号土坑、77 号土坑、5 号溝状造構によって切られ、19 号住居跡を切って構築している。

本住居跡は 19 号住居跡の覆土中に掘り込まれていたため、土の色調の変化ではまったく確認することができなかった。ところが、調査を進めていく中で少量ながら諸磯 a 式土器が出土したため精査したところ、床と思われる覆土よりも多少シマリのある面が確認され、さらにピットも確認されたことから、住居跡と判断し調査を行った。当初は梢円のプランで、長軸 4.1m、短軸 3.3m の規模を有する小型の住居跡を



第22図 16号住居跡



第23図 16号住居跡出土遺物

想定したが、本住居跡の下にある 19 号住居跡の調査が進んでいく中で、出土した土器の状況や新たなビットが検出されたことなどから、本住居跡の様相を想定することが可能となった。

平面形は長軸 5.3m、短軸 4.4m の楕円形と想定される。ビットは 20 本確認されており、径が 20cm から 43cm、深さが 7cm から 57cm である。炉は確認できなかった。

なお、住居跡の中央南側の床面上より出土した櫛は、65cm×37cm の大きさで、厚さ 15cm の板状を呈するもので、使用痕は認められないが作業台的なものではないかと思われる。

土器（第 23 図）は押型文土器（1）や駅迎堂 Z 3 式土器（2～7・9）、諸磯 a 式土器（8・10～15）が出土した。1 は楕円押型文土器である。2・3 は RR の反の擦りの無節縄文が施されており、4 は LR と RL の単節縄文による羽状縄文が施されている。5 は LR の単節縄文が、6 は底部で、Lr と Rl の無節縄文による羽状縄文が施されている。7 は Lr と Rl の単節縄文による羽状縄文が施されており、2～7 の土器の内面には指頭痕が残っている。8 は LR と RL の単節縄文による縦束のある羽状縄文が施されているが、この上器の内面には指頭痕が残っていないことから、諸磯 a 式土器と判断した。9 は波状口縁で、口唇部から垂下する陰帯と II 線に沿うように横走する沈線が施されている。10 は半截竹管の背による波状沈線文が施されており、11～13 は半截竹管による波状の平行沈線文が、14 は RL の単節縄文を地文にして半截竹管による平行沈線文が施されている。15 は平行沈線による縦束の区画を中心にして、その両側に横位や斜位に直線が施された米字状文である。石器は石鏃（第 98 図 4）と磨石（第 106 図 162）が出土した。

本住居跡の時期については、出土した上器に諸磯 a 式土器が比較的多く含まれていることや、重複している 19 号住居跡との関係から前期後半の諸磯 a 式期に属するものと考えられる。

#### 17 号住居跡（第 24 図）

本住居跡は V-27・V-28・W-27・W-28 グリッドに位置している。51 号土坑、52 号土坑、53 号十坑、54 号十坑と重複しており、重複関係はこれらの遺構によって切られている。

北東側の一部が調査区域外にあるため、全貌は明らかでないが、平面形は円形を呈するものと思われる。確認できた規模は東西 2.9m、南北 3.0m である。壁は確認された壁高が最大で 16cm と低いため、はっきりとは言い切れない面もあるが、緩やかに立ち上がる傾向が窺える。床は概ね平坦で、貼床は確認できなかつたが、硬化した面は確認できなかつた。ビットは径 38cm、深さ 22cm のものが 1 本確認された。炉は確認できなかつた。

本住居跡からは遺物がまったく出土していない。このため、時期の判断が極めて困難なものとなっているが、本住居跡を切っている土坑のうち、51 号十坑より中期初頭の五領ヶ台 II 式土器の破片が出土していることから、その時期以前に属するものと考えられる。

#### 19 号住居跡（第 25・26 図）

本住居跡は Q-24・Q-25・R-23・R-24・R-25・S-24・S-25 グリッドに位置



17号住居跡 (スカリア・カーブン、新規内土は下を削除後、210土坑廻り)。  
2. 十字型土坑 (スカリア・カーブン、其他の土坑を半埋めで西側あり)。  
3. 十字型土坑 (スカリア・カーブンを西側、其他の土坑を半埋め)。

第24図 17号住居跡

している。7号住居跡、9号住居跡、16号住居跡、56号土坑、65号土坑、66号土坑、67号土坑、77号土坑、5号構造遺構と重複しており、重複関係はこれらの遺構によって切られている。

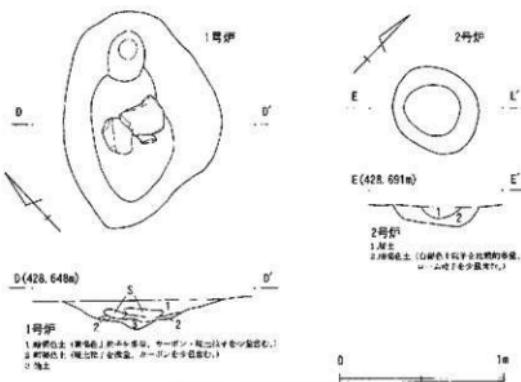
南東側の一部が調査区域外にあるため、全貌は明らかでないが、平面形は小判形を呈するものと思われ、規模は長軸9.9m、短軸6.3mである。壁は緩やかに立ち上がっており、確認された壁高は最大で84cmを測る。床は平坦で、貼床は確認できなかったが、全体的に硬化している。炉は住居跡の中央付近とこれよりやや西寄りの2箇所で検出された。ともに地床炉で、住居の中央付近で検出された1号炉は楕円形のプランを呈し、長軸が130cm、短軸が95cmで、深さは確認されたところから17cmを有し、1号炉の西寄りで検出された2号炉は円形プランを呈し、東西が56cm、南北が50cmで、深さは確認されたところから12cmを有する。双方とも焼上が6~7cm程度の厚さで堆積していた。ピットは19本確認されており、径が22cmから70cm、深さが21cmから70cmである。

この他に土坑1基と周溝4本が検出されている。土坑は住居跡の南西側で検出されたが、平面形は橢円形を呈し、規模は長軸70cm、短軸54cm、深さ17cmである。周溝は北西コーナーと南東コーナー、東壁中央付近、南西コーナーから有傾中央にかけて検出された。幅は20cm前後、深さは10cm前後である。

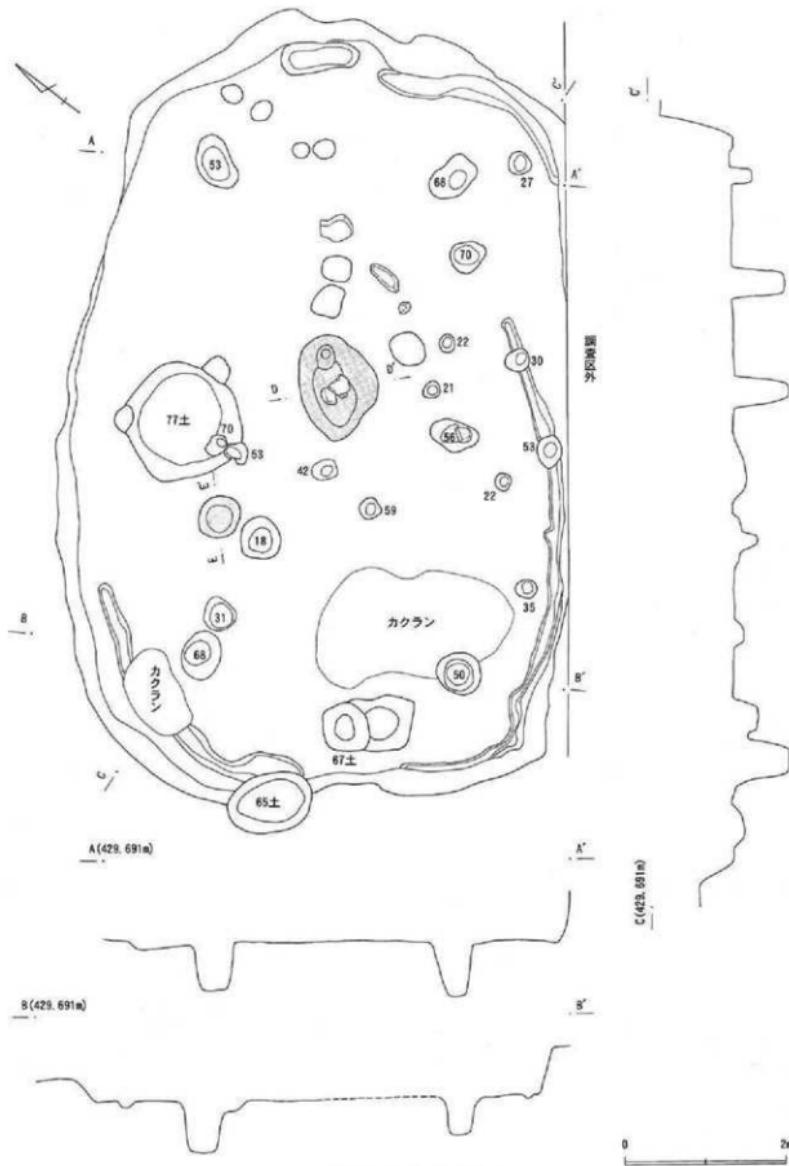
土器(第27~28図)は覆土中より多量に出土しており、积迦堂Z3式土器(1~19)や諸磯a式土器(20~22)、東海系の土器(23)がある。1はR $\theta$ の無節縄文とR $\theta$ の凸節縄文が施されている。2・3・6はR $\theta$ の無節縄文が施されており、同一個体の可能性がある。4はR $\theta$ の無節縄文、5はL $\theta$ の無節縄文、7はR $\theta$ と思われる無節縄文が施されており、8はLLとRRの反の擦りの無節縄文による羽状縄文、9・10はL $\theta$ とR $\theta$ の無節縄文による羽状縄文、11はR $\theta$ の無節縄文による羽状縄文が格子目状に施されている。12はR $\theta$ の無節縄文が施され、13はLLとRRの反の擦りの無節縄文による羽状縄文、14~16は底部で、14・15はL $\theta$ の無節縄文が、16はL $\theta$ とR $\theta$ の無節縄文による羽状縄文が施されている。17・19はR $\theta$ の単節縄文、18はL $\theta$ の単節縄文が施され、20はLRとR $\theta$ の単節縄文による羽状縄文が施され、部分的にコンバス文が薄く施されている。21はLRとR $\theta$ の単節縄文による羽状縄文が施されており、22はR $\theta$ の単節縄文を地文にして半截竹管による平行沈線文が施されている。これらの中で1~19は内面に指頭痕が残っているが、20~22は内面の横ナデが比較的丁寧に行われており、ほとんど指頭痕が残っていない。23は東海系の土器で、内外面とも部分的に条痕文が施された薄手で丸底の土器である。石器の出土量は多く、石鏃(第98図5)、石刀(第99図38~41)、磨型石斧(第104図138)、磨石(第106図159~161)、凹石(第109図194・195)が出土した。

ところで、本住居から出土した凹石のように、磨石として用いられた石器の中に凹みをもつものがあるが、これについては本報告書中において凹石として扱っている。

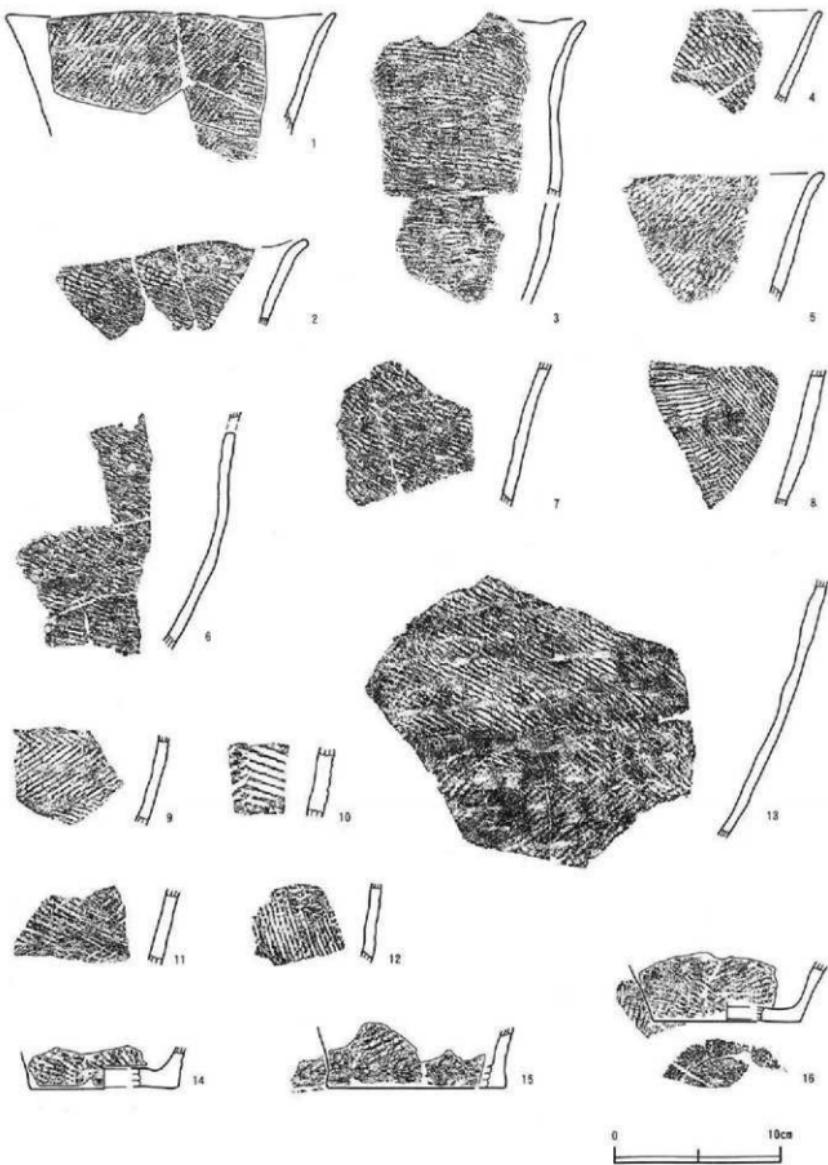
本住居跡の時期については、出土した土器のほとんどが积迦堂Z3式土器であることから、前期前半の积迦堂Z3式期に属するものと考えられる。



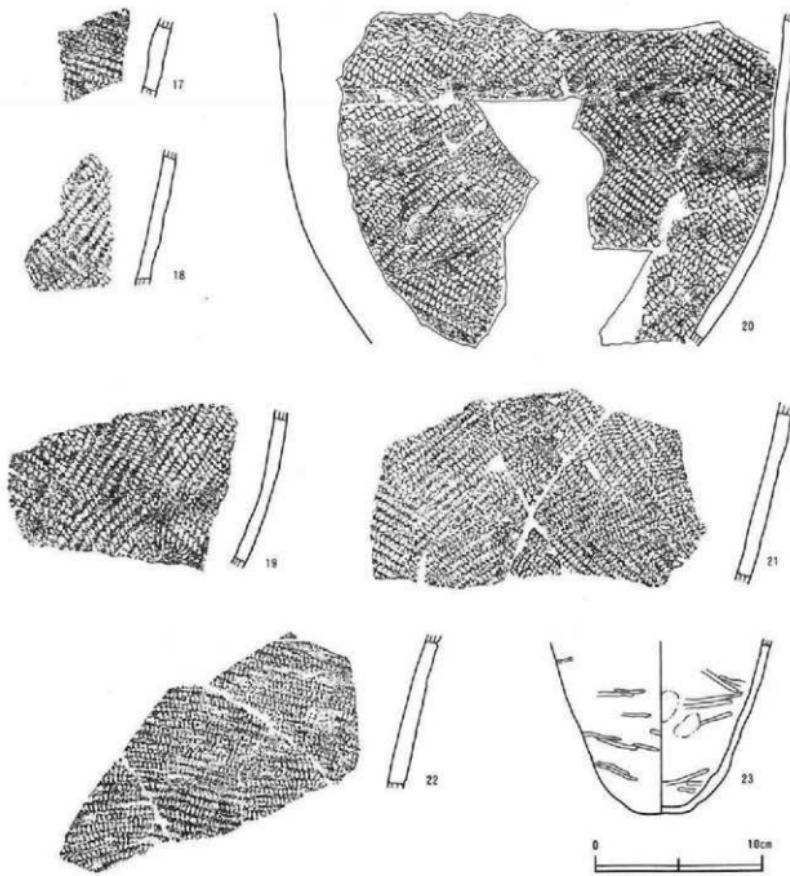
第25図 19号住居跡・炉



第26図 19号住居跡



第27図 19号住居跡出土土器 (1)

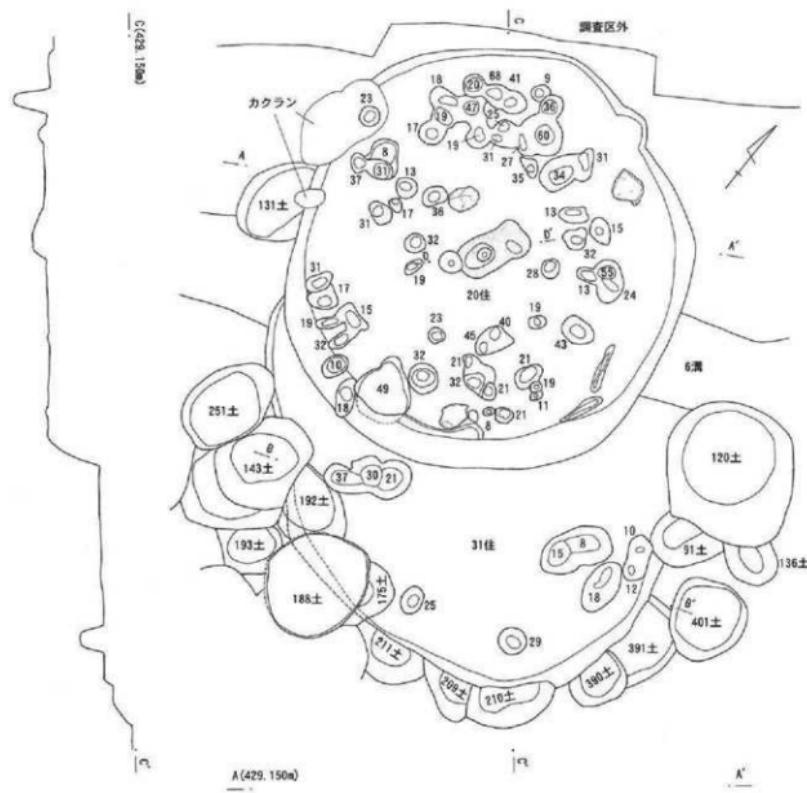


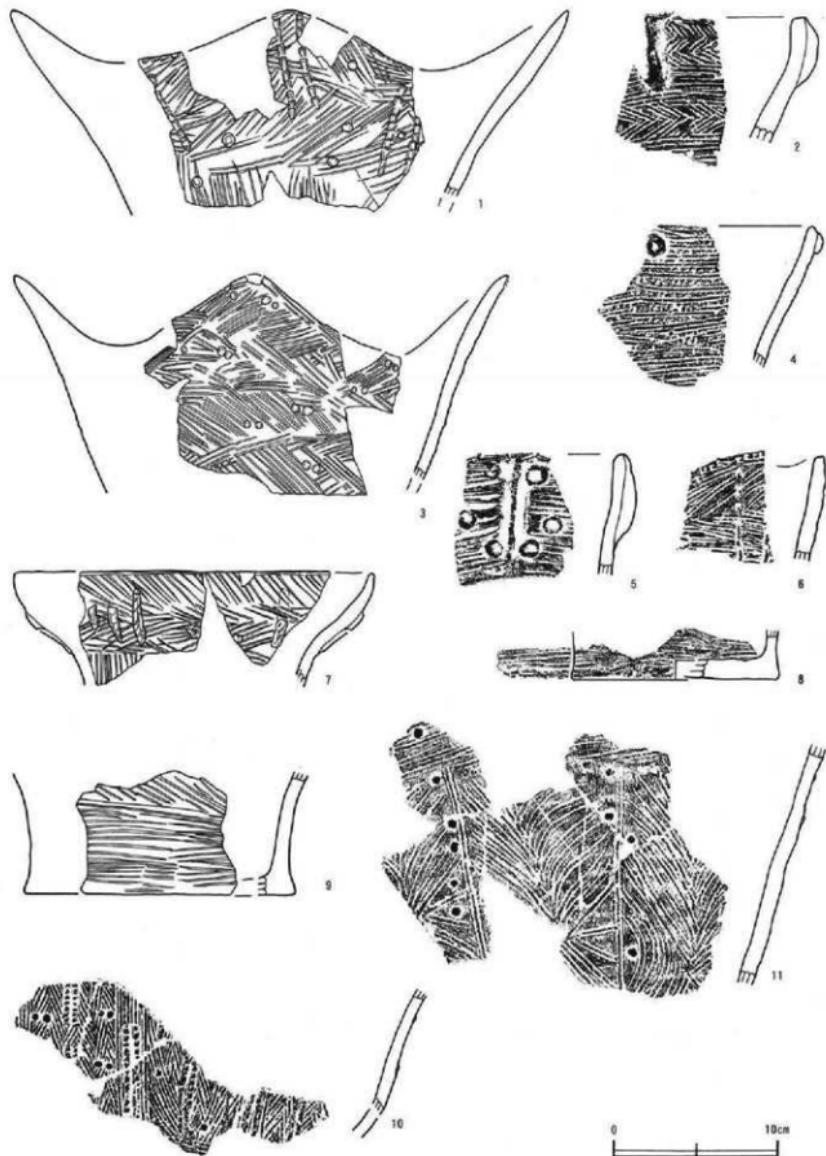
第28図 19号住居跡出土土器（2）

#### 20号住居跡（第29図）

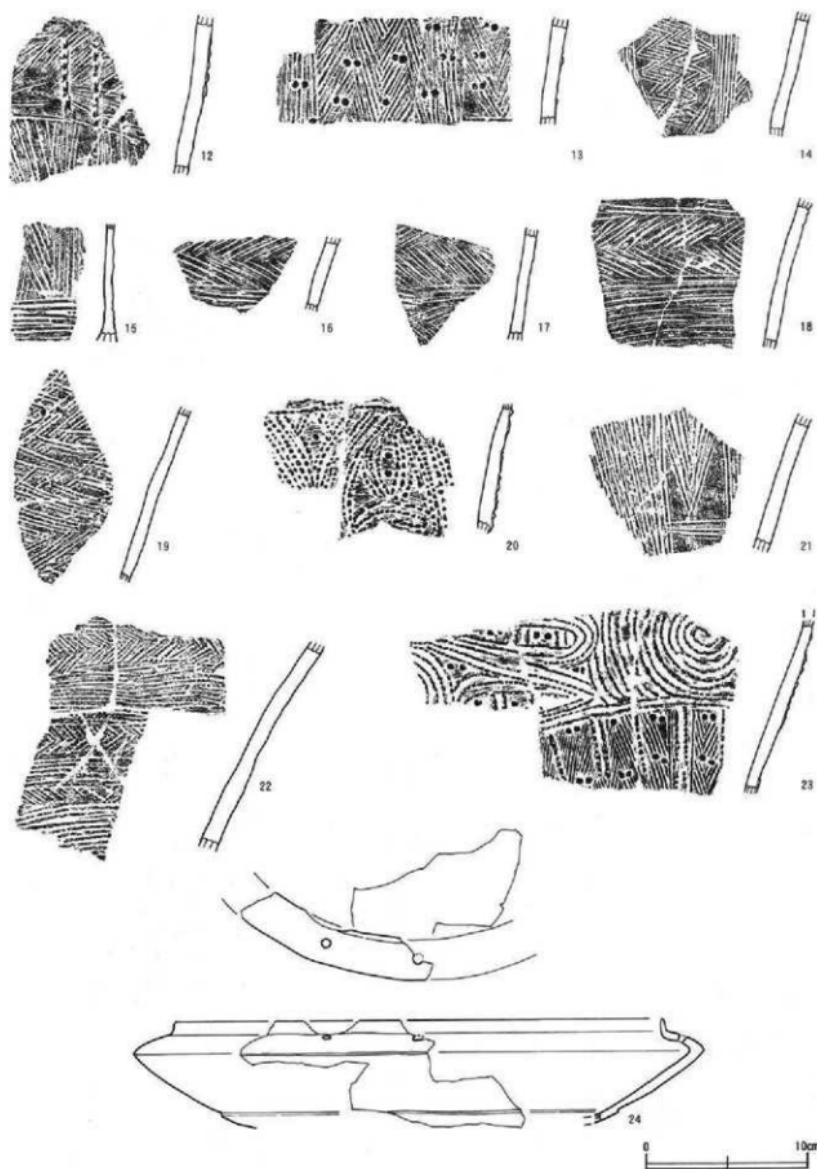
本住居跡はX-30・X-31・Y-30・Y-31グリッドに位置している。31号住居跡、131号土坑、140号土坑、6号溝状遺構と重複しており、これらとの重複関係は31号住居跡、140号土坑、6号溝状遺構によって切られており、131号土坑を切って構築している。ところで、本住居跡と31号住居跡の重複関係については、31号住居跡の床や覆土が削平の影響を受けていたことから、直接的な確認ができなかった。このため、住居跡から出土した土器によって本住居跡が31号住居跡により切られていると判断した。

住居跡のほとんどが畠境の段差により削平を受けていたが、住居跡の掘り込みが深かったため、壁や床面を確認することができた。平面形は円形を呈し、直径5.1mの規模を有する。壁は緩やかに立ち上がっており、確認された壁高は最大で70cmを測る。床は壁際に比べ中心付近が10cmから20cm程度低く





第30図 20号住居跡出土土器 (1)



第31図 20号住居跡出土土器 (2)

なっており、貼床は確認できなかったが、全体的に硬化している。炉は地床炉で、住居跡のほぼ中央で確認された。長辺 90cm、短辺 47cm の長方形を呈し、深さは 12cm を有する。焼土の明確な堆積はみられなかったが、焼土の粒子やブロックが認められた。ピットは全部で 57 本確認されており、径が 14cm から 55cm、深さが 8cm から 68cm である。ただ、これらの中には壁に掘り込まれたり、炉を切ったりして本住居跡に伴わないと考えられるものも存在していることから、全てを本住居跡のものとすることはできず、烟窓の段差等により削平された別の住居跡等の存在が考えられる。

この他に住居の南壁際で、径が 71cm、深さが 49cm の規模を有し、南側の立ち上がりがオーバーハングする十坑が 1 基検出されている。また、住居跡の南側と北側の壁際において、床面より若干浮いた状態で礫が出土している。南側で出土した礫は、40cm × 34cm の大きさで、厚さ 8cm の台石で、磨り面が認められる。北側から出土した礫は、37cm × 35cm の大きさで、厚さ 14cm の板状を呈するもので、使用痕は認められないが作業台的なものではないかと思われる。

土器（第 30・31 図）は諸磯 c 式土器が多量に出土した。1 は波状口縁で、横方向の粗雑な矢羽根状条線の上に、棒状結節浮線文とボタン状貼付文が施されている。2 は横方向の矢羽根状条線の上に、半截竹管により刺突された棒状貼付文が施されている。3 は波状口縁で横方向の粗雑な矢羽根状条線の上に、4 は横位の条線の上にそれぞれボタン状貼付文が施されている。5 は横位の条線の上に棒状貼付文とボタン状貼付文が施され、6 は横方向の矢羽根状条線の上に棒状結節浮線文とボタン状貼付文が施されている。7 は横方向の矢羽根状条線の上に、半截竹管により刺突された棒状貼付文と、ボタン状貼付文が施されており、8・9 は底部で、横位の条線が施されている。10 は縦方向の矢羽根状条線の上に棒状結節浮線文とボタン状貼付文が施されており、11 は縦に区画した条線の間を斜位の条線で充填し、さらにボタン状貼付文が施されている。12 は横方向の矢羽根状条線の上に棒状結節浮線文を、13 は縦方向の矢羽根状条線の上にボタン状貼付文が施され、14～21 は横方向の矢羽根状、縦方向の矢羽根状をはじめとする条線が、22 は弧状の結節浮線文が、23 は渦巻状結節浮線文がそれぞれ施されている。24 は有孔浅鉢上器で、口唇部は直立しているが、底曲部は肥厚していないものである。石器の出土量は比較的多く、石器（第 99 図 42・43）、打製石斧（第 101 図 65）、磨石（第 105 図 158～157、第 106 図 158）、印石（第 109 図 196）、台石（第 111 図 218）が出土している。

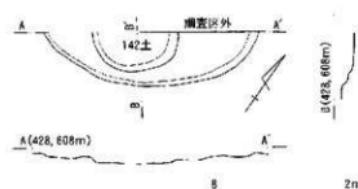
本住居跡の時期については、出土した土器から前期後半の諸磯 c 式期に属するものと考えられる。

## 21号住居跡（第 32 図）

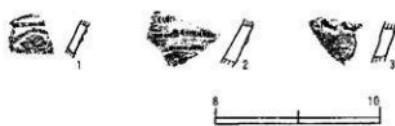
本住居跡は V-30・W-30 グリッドに位置している。142 号土坑と重複しており、重複関係は 142 号土坑によって切られている。

南側の一部を調査しただけで、ほとんどが調査区域外にあるため、全貌は明らかでない。今回は住居跡として扱つたが、住居跡ではない可能性もある。平面形は円形または梅円形を呈するものと思われ、確認した規模は東西 3.0m、南北 0.8m である。壁は確認された壁高が最大で 10cm と低いため、はつきりとは言い切れない面もあるが、緩やかに立ち上がる傾向が窺える。床は多少の凹凸があり、貼床は確認できなかったが比較的のしっかりしている。がやピットは確認できなかった。

土器（第 33 図）は十三菩提式土器がわずかに出士した。1・2 は結節浮線文が施され、3 は押圧隆帶が施されている。



第32図 21号住居跡



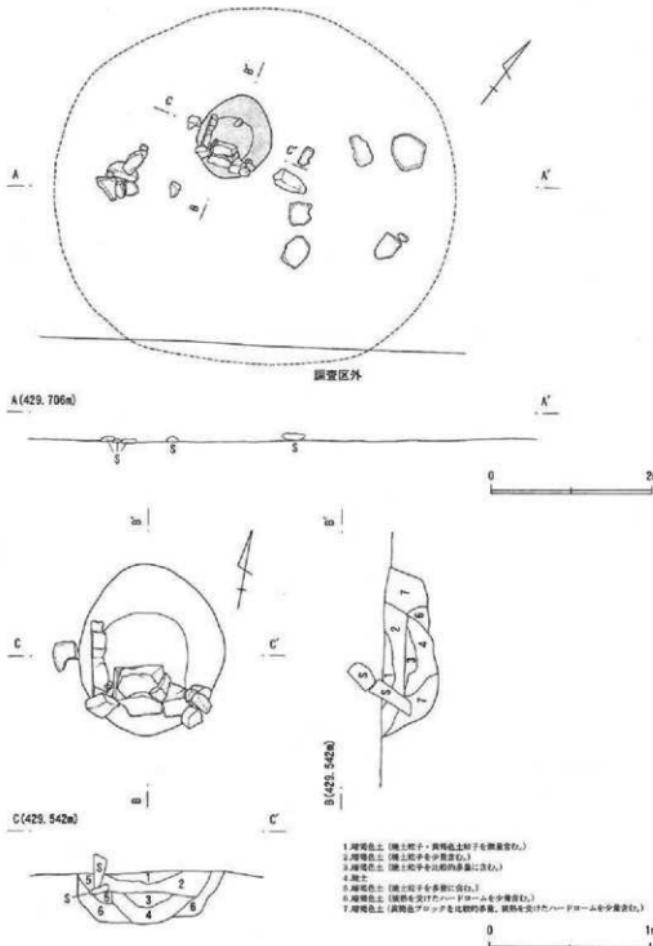
第33図 21号住居跡出土土器

本住居跡の時期については、出土した土器が小破片のもので、出土量も極端に少ないとから判断に困難を伴うが、前期終末の十三菩提式土器が出土していることから、その時期に属するものと考えられる。

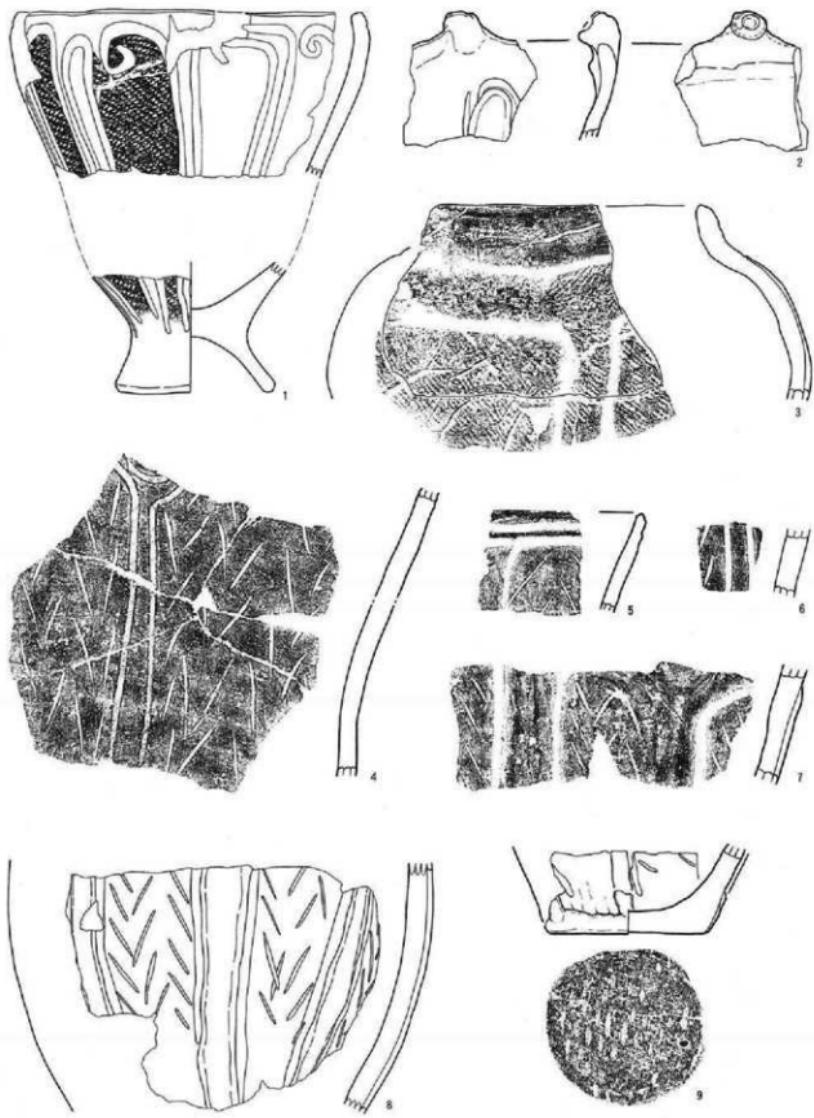
## 22号住居跡（第34図）

本住居跡はX-29・X-30・Y-29・Y-30グリッドに位置している。

遺構の確認作業を行っていたところ、石圓炉と思われる石組が検出された。このため、住居跡が存在しているものと考え、周囲の精査を丹念に行なったが、掘り込みや床面、ピットなどを検出することができなかった。しかし、周辺からは炉の中より出土した土器と同時期の土器が多少まとめて出土し、中には接合



第34図 22号住居跡



第35図 22号住居跡出土土器

するものも認められた。さらに、これらの土器と、概ね同一レベルで複数の礫も検出されていることから、一応住居跡として扱った。本報告書で示した住居跡のプランは土器と礫の範囲から想定したものである。

本住居跡は 125 号土坑、132 号土坑、139 号土坑、144 号土坑、146 号土坑、147 号土坑、148 号土坑、149 号土坑、150 号土坑、152 号土坑、155 号土坑、162 号土坑、166 号土坑、170 号土坑、171 号土坑、173 号土坑、174 号土坑、180 号土坑、183 号土坑、189 号土坑、254 号土坑、255 号土坑、395 号土坑と重複しており、重複関係はこれらの遺構を切って構築している。

平面形は円形で、規模は東西 5.0m、南北 4.8m を有するのではないかと想定される。炉は石壇炉で、炉石は引き抜かれたためか、西側と南側に残っているだけである。壇模は長軸が 94cm、短軸が 83cm で、深さは 60cm を有する。焼土は炉の底に 10cm 程度の厚さで堆積していた。

土器（第 35 図）は曾利 V 式土器が出土している。1 は台付十器で、L R の単節縄文を地文にして、沈線により U 字状等の懸垂文が施されており、沈線の間の縄文は磨消されている。2 は口縁に突起を有し、沈線により U 字状の懸垂文が施されている。3 は両耳把手広口壺形十器で、L R の単節縄文を地文にして内側に浅い沈線がつけられた巾の広い隆帯によって区画がなされている。4~8 はハの字文を地文にしている十器で、4~6 は沈線による区画が行われており、7・8 は両側に浅い沈線がつけられた隆帯による区画が行われている。9 は低い隆帯と隆帯に沿うように浅い沈線が施されており、底に網代の圧痕がみられる。

本住居跡の時期については、川上した土器から中期後半の曾利 V 式期に属するものと考えられる。

## 24 号住居跡（第 36 図）

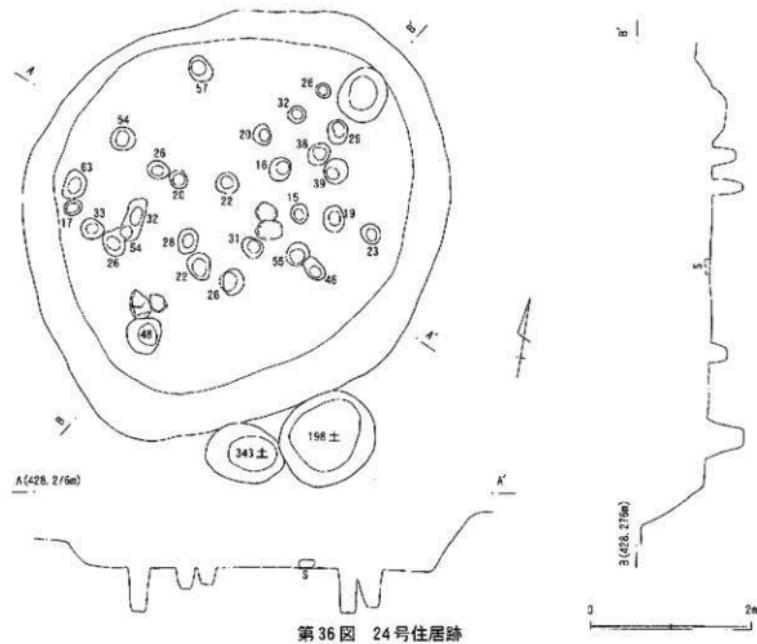
本住居跡はハ-34・ハ-35・ニ-34・ニ-35 グリッドに位置している。198 号土坑や 343 号土坑と重複しており、重複関係はこれらの遺構によって切られている。

平面形は円形を呈し、東西 5.3m、南北 5.6m の規模を有する。壁は緩やかに立ち上がっており、確認された壁高は最大で 75cm を測る。床は平坦で、貼床は確認されなかつたがしっかりとをしている。ピットは 28 本確認されており、径が 16cm から 46cm、深さが 15cm から 63cm である。炉は確認できなかつた。

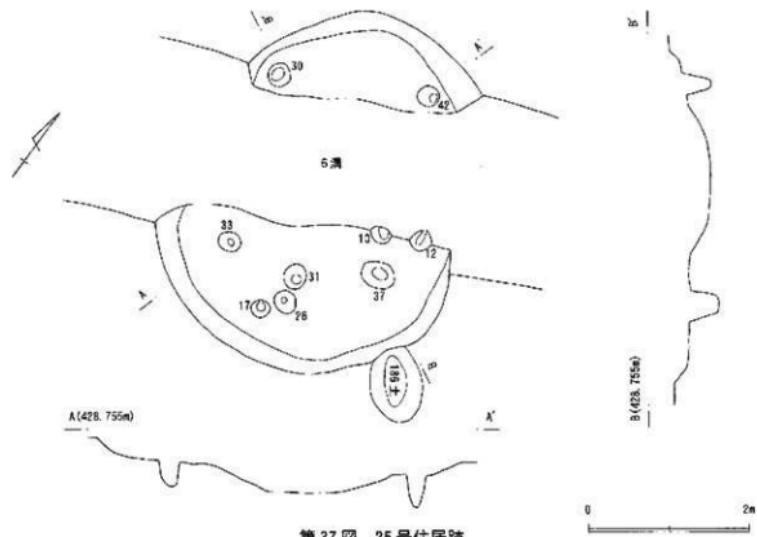
この他に、住居跡の北壁隣で十坑が 1 基確認されている。平面形は梢円形を呈し、規模は長軸が 66cm、短軸が 58cm で、深さが 16cm である。

上器（第 38・39 図）は多量に出土しており、釧路堂 7.3 式土器（1~21）や黒浜式土器（22）、兼藏 a 式土器（23~32）、北白川下層 I b 式土器（33~36）がある。1 は Lr の無節縄文が施され、内面には輪積痕がみられる。2 は Lr と Rl の無節縄文による結束のある羽状縄文が施されており、焼成前に行われた穿孔が 2 箇所みられる。3 は Lr と Rl の無節縄文が施され、4 は LL の反の捺りの無節縄文と Rl の無節縄文による羽状縄文、5・6 は Lr と Rl の無節縄文による羽状縄文、7・9・10 は Lr と Rl の無節縄文による羽状縄文が施されている。8 は Lr と Rl の無節縄文が施されているが、部分的に格子目状を呈しており、3 と同一個体の可能性がある。11・12 は Lr の無節縄文、13~15 は RL の単節縄文、16 は LR の単節縄文、17・18・19 は LR と RL の単節縄文による羽状縄文、20 は RL の単節縄文による羽状縄文で X 字状に施され、21 は LR の単節縄文が施されており、上げ底気味であり、これらの土器は内面に指頭痕がみられるものである。22 は Lr の無節縄文が施されており、胎土には纖維を含んでいる。23 は LR の単節縄文、24 は I 織に突起を有し、コンパス文が退化した波状沈線が施され、25 は半截竹管による平行沈線とコンパス文、26 は口縁に沿って半截竹管による連続爪形文とコンパス文が施されている。27 は口縁に沿って爪形文が施されており、28~32 は半截竹管による波状の平行沈線文、33・34 は C 字形連続爪形文、35・36 は条痕文が施されている。石器の出土量は比較的多く、右巻（第 98 図 6・7）、石匙（第 99 図 44）、磨石（第 107 図 168~170）、凹石（第 109 図 197・198）が川上した。また、この他に耳栓（第 114 図 1）ではないかと思われる上製品も出土している。

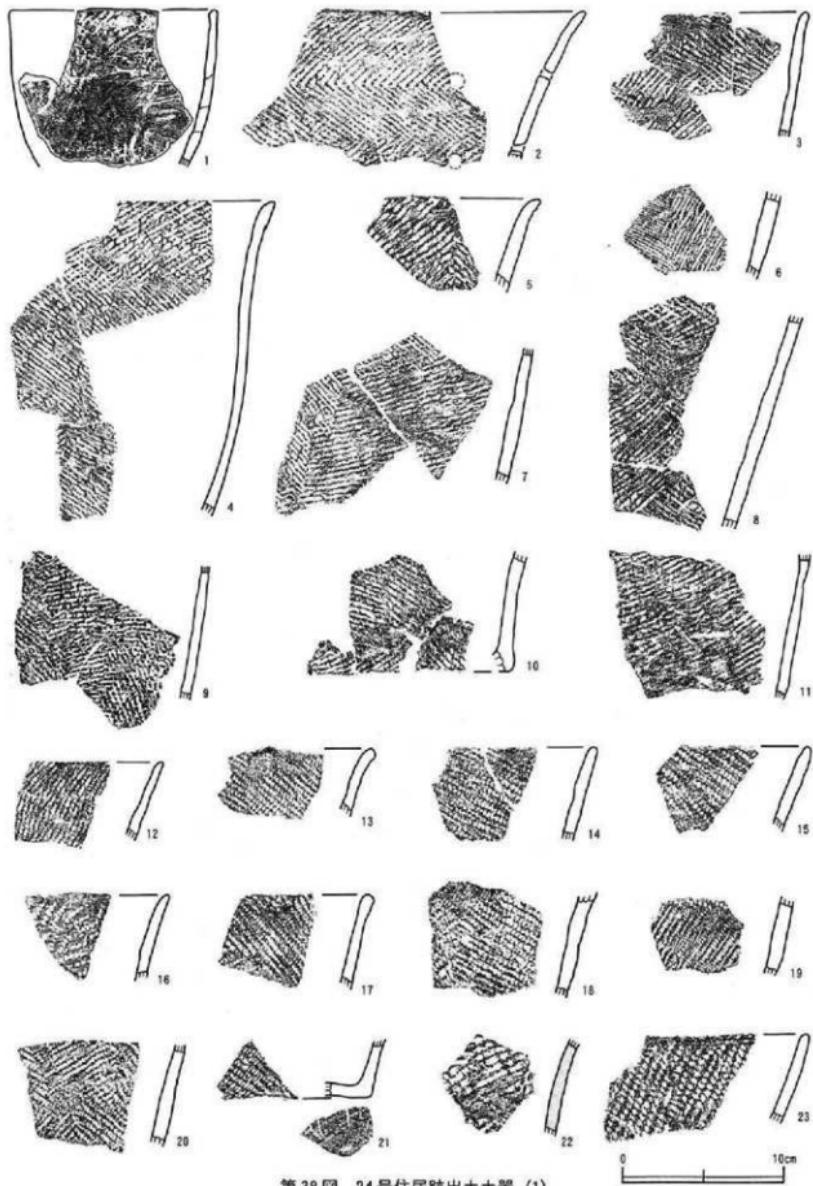
本住居跡の時期については、出土した土器に諸磯 a 式土器が比較的多く含まれていることから前期後半の諸磯 a 式期に属するものと考えられる。



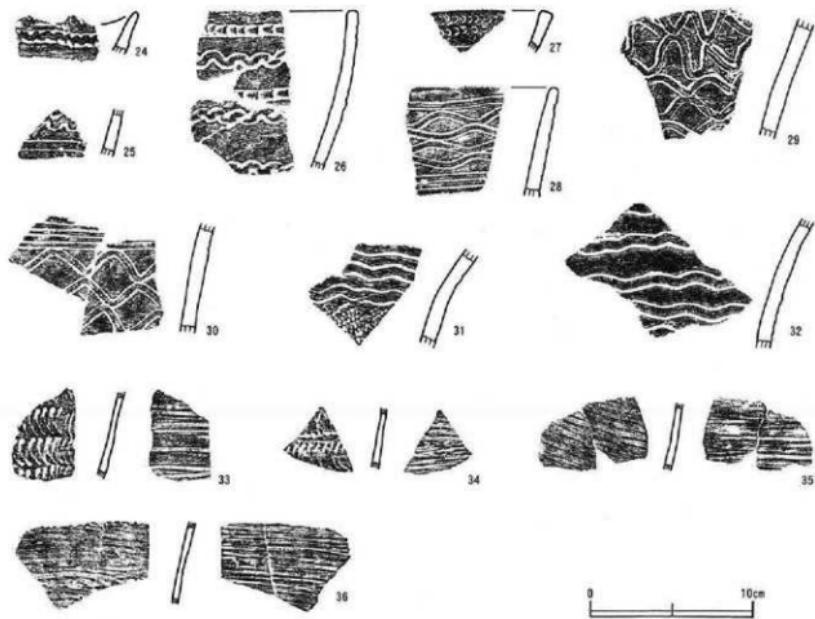
第36図 24号住居跡



第37図 25号住居跡



第38図 24号住居跡出土土器 (1)



第39図 24号住居跡出土土器 (2)

#### 25号住居跡 (第37図)

本住居跡はハ-33・ハ-34・ニ-33・ニ-34グリッドに位置している。33号住居跡、186号土坑、245号土坑、266号土坑、336号土坑、365号土坑、6号溝状遺構と重複しており、本住居と245号土坑、266号土坑、365号土坑との間で調査順序を誤っているが、重複関係は186号土坑、245号土坑、266号土坑、365号土坑、6号溝状遺構によって切られ、33号住居跡や336号土坑を切って構築している。

平面形は楕円形を呈し、長軸4.6m、短軸3.7mの規模を有する。壁はかなり緩やかに立ち上がっており、確認された壁高は最大で20cmを測る。床は概ね平坦で、全体的に軟弱で、貼床や硬化した面は確認できなかった。ピットは9本確認されており、径が22cmから42cm、深さが10cmから42cmである。炉は確認できなかった。

土器 (第40図) は覆土中から少量ながら出土した。諸磯c式土器 (1) や十三菩提式土器 (2)、五領ヶ台II式土器 (3) があり、多少磨耗している。1は斜位と横位の条線上にボタン状貼付文が施されている。2は弧状の集合沈線と三角印刻文が施されたもの、3は連続する逆U字状文が施されたものである。石器は石鏃 (第98図8) が出土した。

本住居跡の時期については、出土した土器が小破片であり、出土量も極端に少ないとから判断に困難を伴うが、重複している土坑との関係や中期初頭の五領ヶ台II式土器が出土していることから、その時期に属するものと考えられる。



第40図 25号住居跡出土土器

## 26 号住居跡（第41・42・43図）

本住居跡はW-28・W-29・W-30・X-28・X-29・X-30グリッドに位置している。28号住居跡、92号土坑、135号土坑、141号土坑、143号土坑、159号上坑、161号上坑、165号土坑、173号土坑、179号土坑、212号土坑、217号土坑、230号土坑、240号土坑、246号土坑、250号土坑、251号土坑、255号土坑、256号土坑、264号土坑、267号土坑、409号上坑、410号上坑、6号溝状遺構と重複しており、重複関係は92号土坑、135号土坑、141号土坑、143号土坑、159号土坑、161号土坑、165号土坑、173号土坑、179号土坑、212号土坑、217号土坑、240号土坑、246号土坑、250号土坑、255号土坑、256号土坑、264号土坑、409号上坑、410号土坑、6号溝状遺構により切られており、28号住居跡、159号上坑、230号土坑、251号土坑、267号土坑を切って構築している。

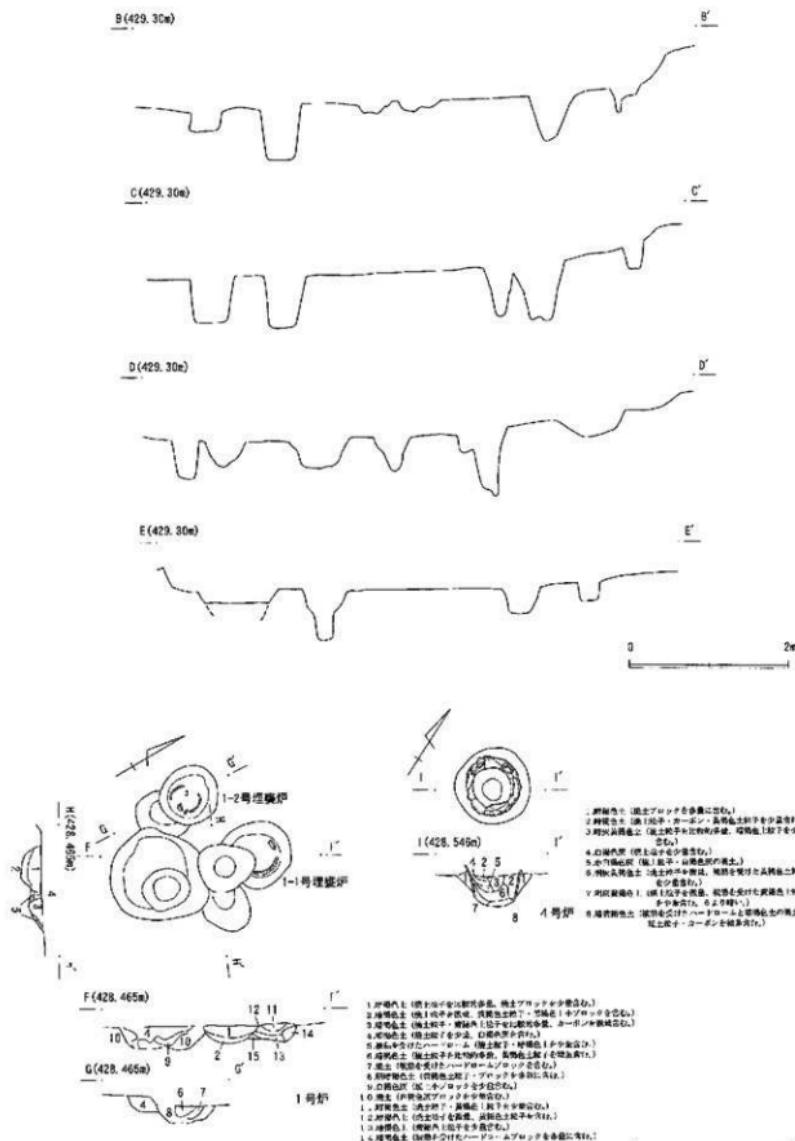
北側から西側にかけて畠境の段差により削平を受けており、全貌は明らかでないが、ピットを確認することができたことから、住居跡の大まかな様相を捉えることができた。平面形は小判形を呈するものと思われ、長軸12.2m、短軸5.7mの規模を有する。壁は緩やかに立ち上がり、確認された壁高は最大で55cmを測る。床は北側に向かって低くなるように緩やかな傾斜がみられ、貼床を確認できなかったため掘り方のハードローム上面を床面とした。ただ、今回検出された埋甕炉の中で、炉体土器の上面が現状の床面よりも5cm程度延びた状態で検出されているものもあることから、本来は5cmほど上に床面が存在していた可能性がある。炉は7箇所で検出された。しかし、3号炉として調査した炉は、28号住居跡のものであることから、本住居に伴う炉は6箇所である。この中で、6号炉と7号炉を除く他の炉は、概ね住居跡の長軸方向へ一列に、しかも130cm～140cmと一定の間隔をもって並んで検出されている。また、6号炉は5号炉の北側で、7号炉は住居跡北側の塀近くでそれぞれ検出されている。1号炉は埋甕炉が2基、地床炉が4基の計6基の炉が重複しており、炉下よりピットが1本検出された。2号炉は地床炉で、椭円形のプランを呈し、長軸75cm、短軸57cm、深さ15cmを有する。焼土が3cm程度の厚さで堆積していた。4号炉は埋甕炉で、掘り方は円形のプランを呈し、直径47cm、深さ21cmで、内部に深鉢形上器の脚部を埋設した炉体土器が存在している。この炉体土器は上部が被熱により非常に脆くなっているところがあり、完全に取上げることができない箇所もあった。焼土粒子を含む白褐色の灰が炉体土器の中に3cmの厚さで堆積していた。5号炉は地床炉で不整形なプランを呈し、長軸123cm、短軸80cm、深さ25cmを有する。焼土が13cmの厚さで堆積していた。なお、この炉よりピットが1本検出された。6号炉は地床炉で椭円形のプランを呈し、長軸47cm、短軸40cm、深さ14cmを有する。明確な焼土の堆積はみられなかつたが、焼土粒子やブロックが認められた。7号炉は地床炉で隅丸方形のプランを呈し、一辺が60cm、深さ12cmを有する。焼土が5cm程度の厚さで堆積していた。このように、本住居跡からは埋甕炉3基と地床炉8基の計11基の炉が検出されている。ピットは全部で158本確認されており、径が11cmから79cm、深さが4cmから77cmであるが、これらのピットすべてが本住居跡に伴うというのではなく、重複している28号住居跡のピットも含まれており、区別が困難である。ただ、上柱穴となり得る直徑40cmを超えるピットは、概ね長軸方向に並んで検出された炉の列を中心に、概ね左右対称に、壁よりも若干内側をめぐる配列がみられる。また、直徑20cm前後の細めのピットは、壁際をめぐる配列をみることができる。

この他に2号炉と重複する土坑と、4号炉の西側で柱穴と重複する土坑が検出されている。これらの土坑は炉やピットと重複していることから本住居跡のものではなく、28号住居跡のものと考えられる。

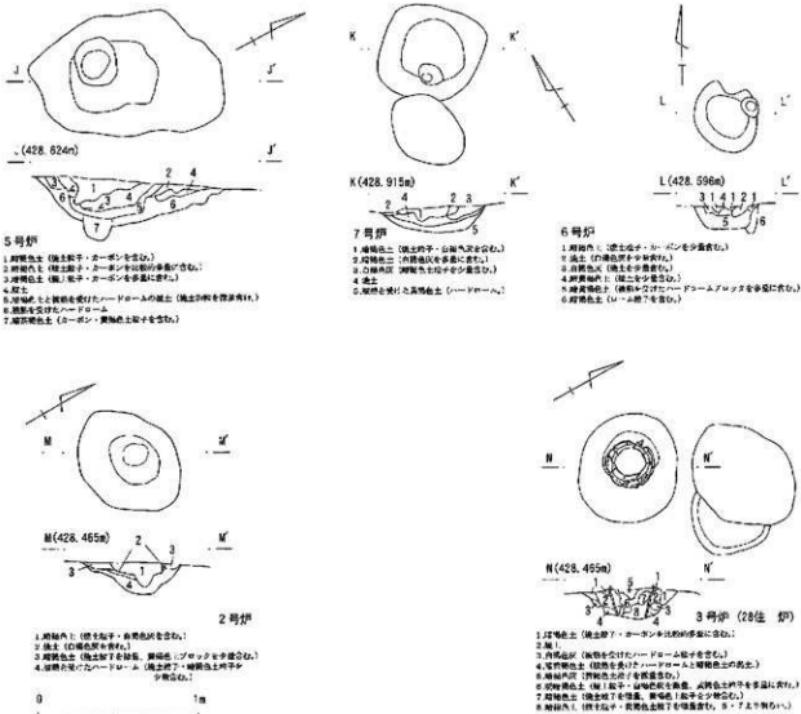
土器（第44・45・46図）は五領ヶ台I式土器が多量に出土している。1～18は沈線文系土器である。1は口唇部に耳状突起、口縁部に棱状把手を持ち、結節沈線文が施されている。2は口縁が外反するもので、口縁部に波状の集合沈線、胴部に格子目状の集合沈線が施されている。3・5～9・13・15は「I線が「I」の字状に屈折しているもので、3は格子目状や縦位の集合沈線が施され、5～9は矢羽根状の集合沈線が施され、さらにその下に波状の集合沈線や斜位の集合沈線が施されている。13は横位と縦位の集合沈線が施され、15は耳様の突起が付いており、矢羽根状や横位の集合沈線が施されている。また、平行沈線で区画しているところがあり、その中を抉っている。4は4号炉の炉体土器で、格子目状や矢羽根状、縦位の集



第41図 26号住居跡

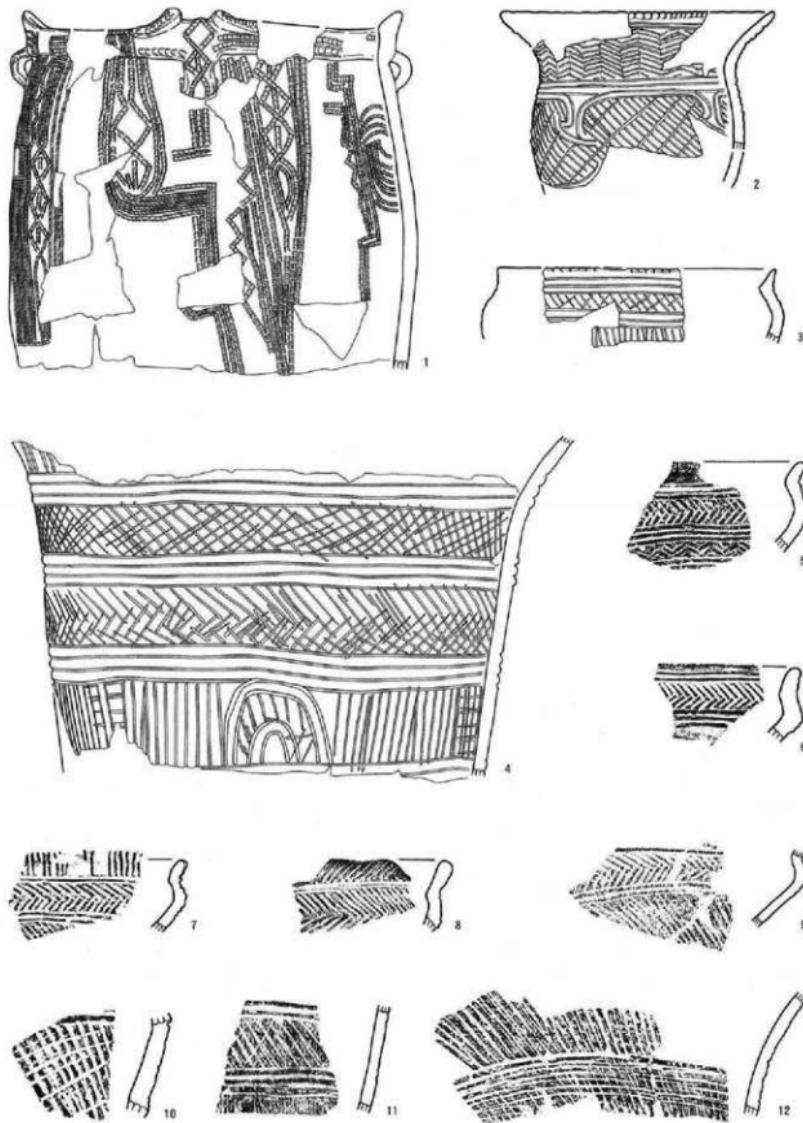


第42図 26号住居跡 エレベーション図・炉



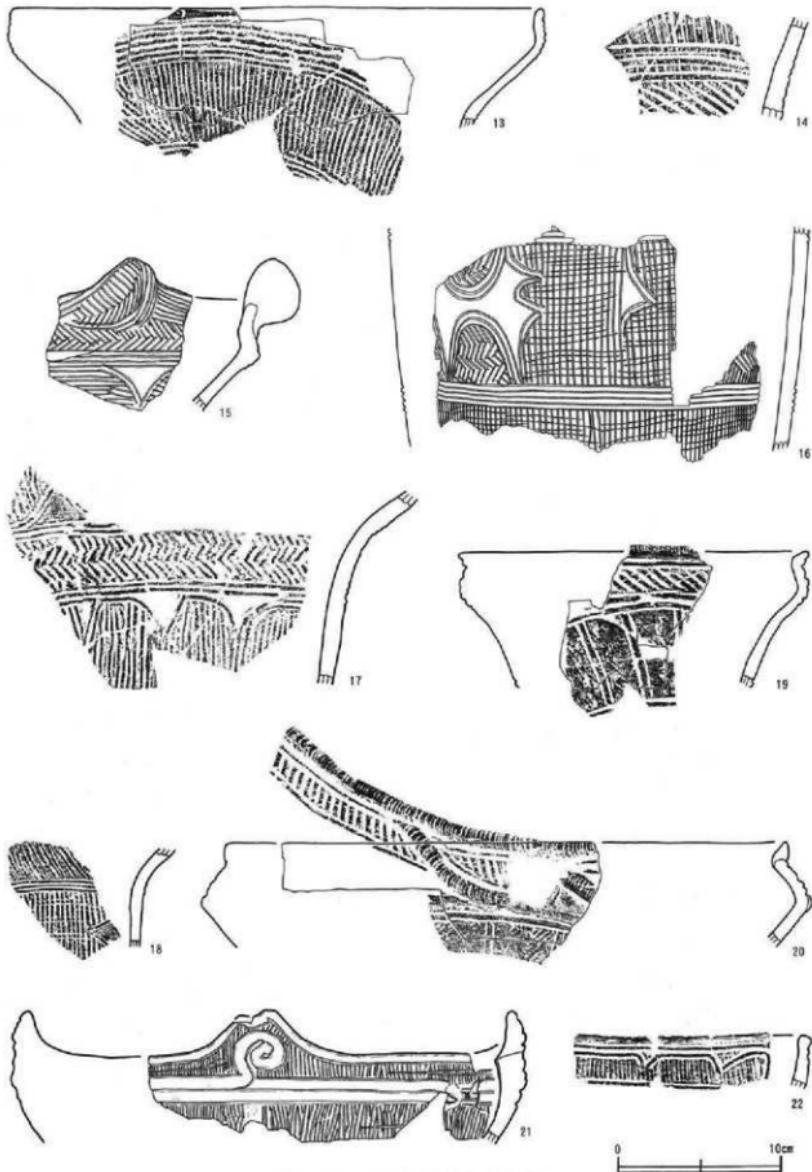
第43図 26号住居跡 炉・28号住居跡 炉

合沈線が施されている。10・11は格子目状や縦位の集合沈線が、12は斜位と格子目状の集合沈線が、14は縦位と横位、斜位の集合沈線がそれぞれ施されている。16は1-1号埋甕の炉体土器で、格子目状の集合沈線が施されており、平行沈線で雲形状に区画した中を矢羽根状の集合沈線で充填している。17は縦位と矢羽根状の集合沈線が施されており、平行沈線で雲形状に区画した□を空白、または、抉ったりしている。18は斜位や格子目状の集合沈線が施されており、平行沈線による区画が行われている。19-31は網文系土器である。19・20は口縁が「く」の字状に屈折しているもので、口縁部に格子目状の集合沈線、以下結節網文を地文にして間隔のあいた縦位の平行沈線文が施されている。21は口唇部に突起、口縁部に橋状把手を持ち、細線文が施されている。22は細線文、23は口唇部にアーチ状の突起、口縁部に橋状把手を持ち、紅線文と半截竹管による押し引き文、三角形の刻目が、脇部は結節網文を地文にして弧状の平行沈線文と三角形の刻目が施されている。24は細線文と三角形の刻目が施され、平行沈線により下抱き三叉文状のモチーフが描かれている。25は口唇部に突起を有し、R Lの単節網文を地文にして細線文、三角形の刻目、上抱き三叉文が施されている。26は平行沈線によって渦巻文と三叉文のモチーフが描かれている。27は結節網文を地文にして、斜位の集合沈線と三角形の刻目が施されている。28は1-2号埋甕の炉体土器で、結節網文を地文にして、平行沈線による三角文が施されている。29は結節網文、30は平行沈線により三角形や渦巻のよう

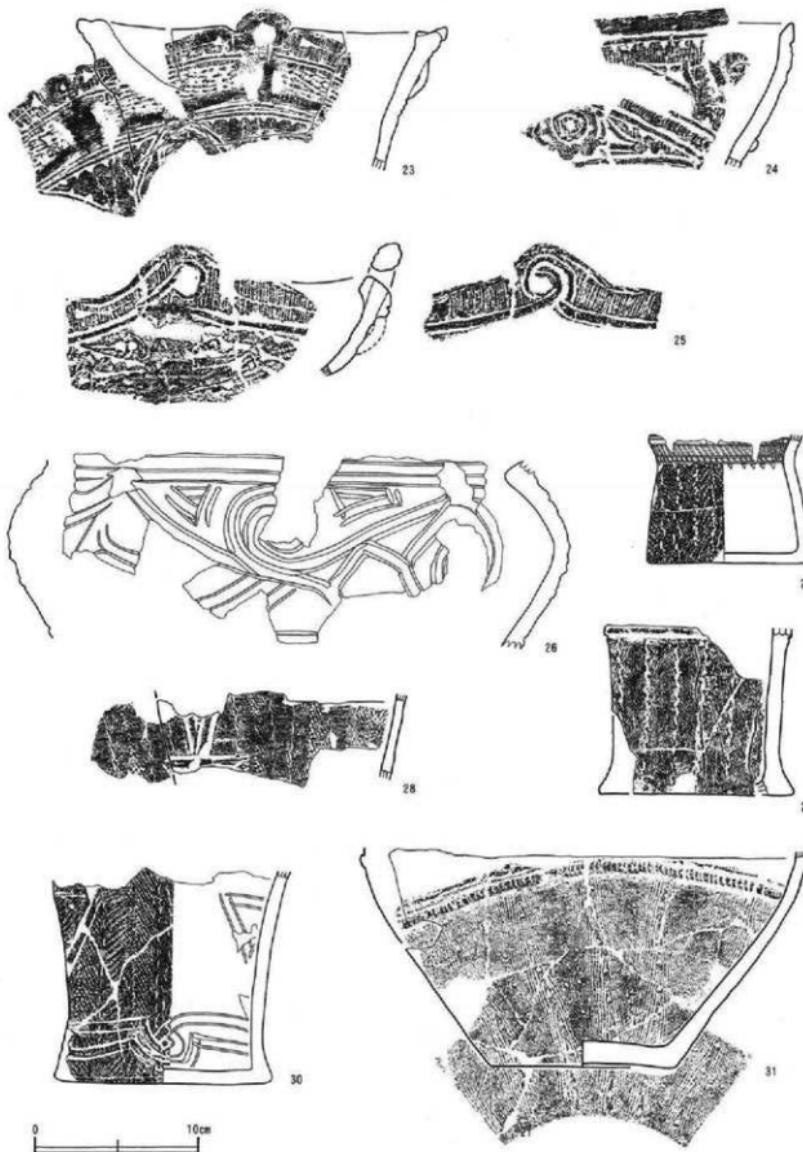


第44図 26号住居跡出土土器(1)

0 10cm



第45図 26号住居跡出土土器 (2)



第46図 26号住居跡出土土器 (3)

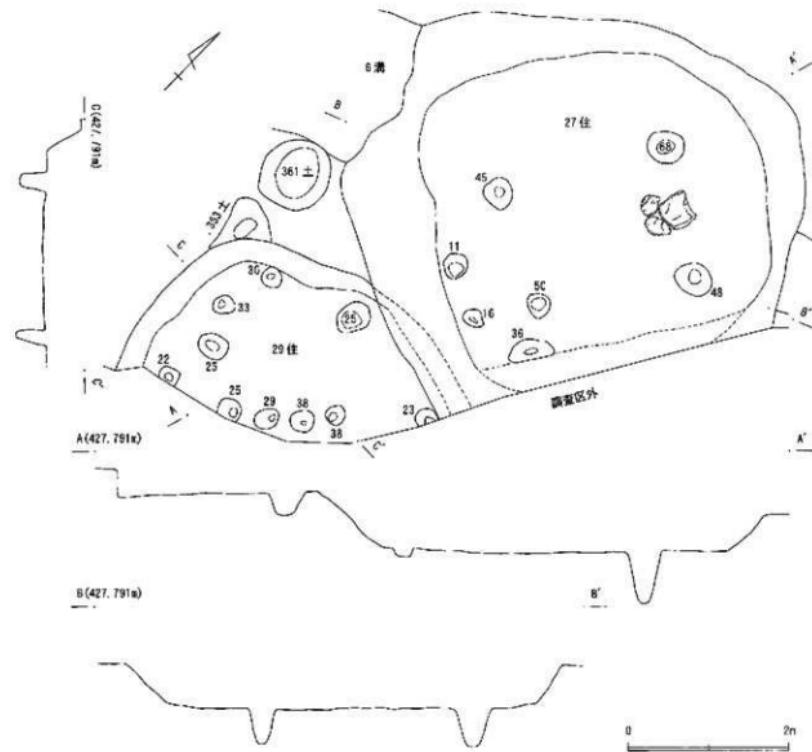
形のモチーフが施かれており、地文は結節繩文である。31は木目状捺糸文が施されており、北陸系の影響を受けたものである。石器の出土量は多く、石礫（第98図9・10）、石匙（第99図45、第100図46）、打製石斧（第101図66・67）、磨製石斧（第104図139）、磨石（第106図163～167）、凹石（第109図199～201）が出土した。また、この他に上製の块状耳飾（第114図2～6）と滑石製の块状耳飾（第114図7）が出土しており、2・3は赤彩され、5は赤彩痕がみられ、6は平行沈線による装飾が施されている。

本住居跡の時期については、出土した上器から中期初頭の五額ヶ台I式期に属するものと考えられる。

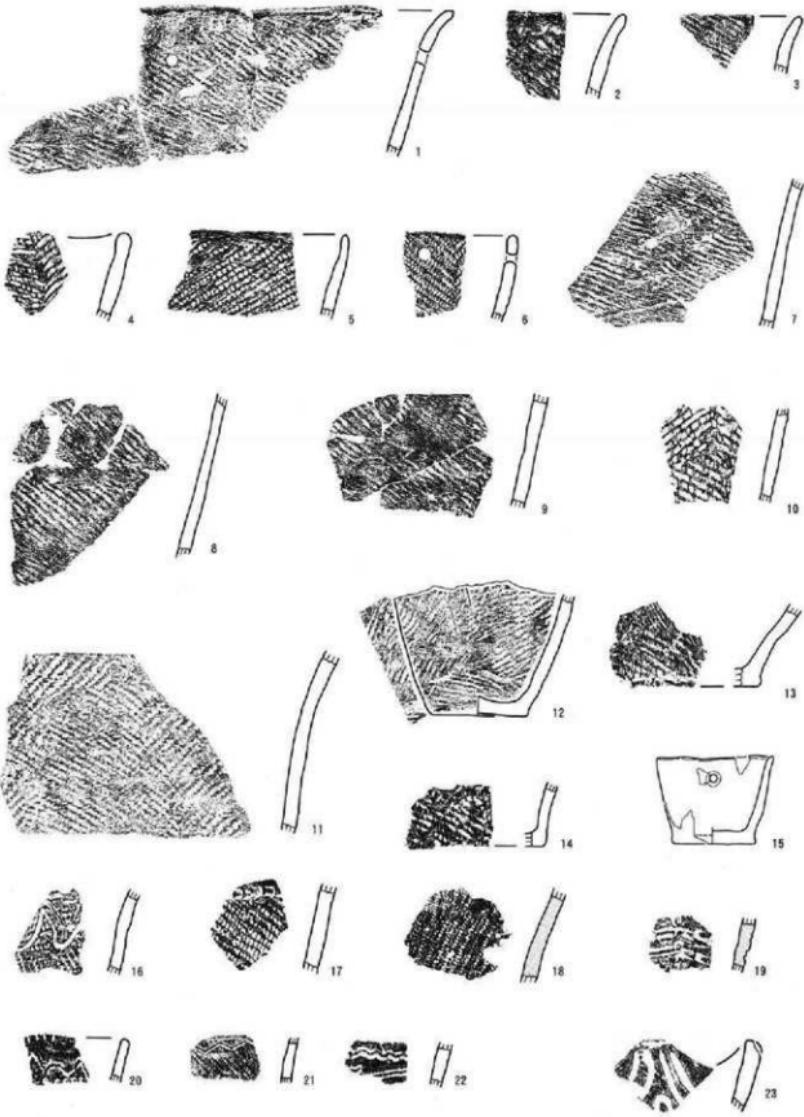
#### 27号住居跡（第47図）

本住居跡はト-35・ト-36・チ-35・チ-36グリッドに位置している。29号住居跡や6号溝状遺構と重複しており、29号住居跡との間で調査順序を誤っているが、重複関係はこれらの造構によって切られている。

南東側の一部が調査区域外にあるため、全貌は明らかでないが、平面形は開丸方形に近い形を呈するものと思われ、現状で確定できた規模は東西4.9m、南北5.6mである。壁は緩やかに立ち上がっており、確認された壁高は最大で102cmを測る。床は住居跡の北壁裏に柱穴がみられる付近で、他と比較して床面



第47図 27号・29号住居跡



第48図 27号・29号住居跡出土土器

が 15cm から 20cm 程度の高まりがみられるほかは概ね平坦で、若干硬化した面が確認されている。ピットは 7 本確認されており、径が 22cm から 48cm、深さが 11cm から 68cm である。炉は確認できなかった。

なお、住居跡の中央からやや北東寄りで、縦 41cm、横 38cm、厚さ 10cm の板状を呈した礫を含め、使用痕のみられない 3 個の礫が床面上で検出されている。

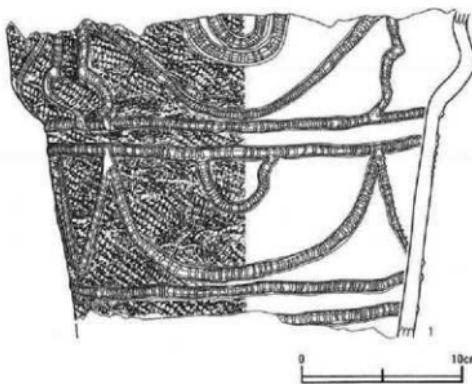
土器（第 48 図）は多量に出土しており、积迦堂 Z 3 式土器（1～17）や黒浜式土器（18・19）、諸磯 a 式土器（20～22）がある。1～3 は R $\ell$  の無筋縄文が施され、1 には焼成前に行われた穿孔が 1 箇所みられる。4 は LL と RR の反の撚りの無筋縄文による羽状縄文が施されており、波状口縁を呈するようである。5 は LR の単筋縄文、6・11 は LR と RL の単筋縄文による羽状縄文が施されており、6 には焼成前に行われた穿孔が 1 箇所みられる。7～9 は RR の反の撚りの無筋縄文、10 は L $\tau$  と R $\ell$  の無筋縄文による羽状縄文が菱形状に、12 は LL の反の撚りの無筋縄文と R $\ell$  の無筋縄文による羽状縄文、13 は R $\ell$  の無筋縄文、14 は LL と RR の反の撚りの無筋縄文による羽状縄文が施されている。15 は無文の小型土器で、焼成前に行われた穿孔が 1 箇所みられる。16 は LR の単筋縄文を地文にして半截竹管による波状の沈線文が、17 は RL の単筋縄文を地文にして半截竹管による連続爪形文が施されている。これら 1～17 の土器の内面には指痕が残っている。18・19 は胎土に纖維を含んでおり、18 は LR の単筋縄文が、19 は半截竹管による刺突文で縱位の区画を行い、その両側に斜方向の連続爪形文が施されている。20 は口縁に刻目があり、半截竹管による波状の沈線文と連続刺突文が施され、21 は RL の単筋縄文を地文にして半截竹管による鋸歯状の沈線文が、22 は半截竹管による横位の沈線文と波状の沈線文が施されている。石器の出土量は比較的多く、石鏃（第 98 図 11～13）、石匙（第 100 図 47～49）、磨石（第 109 図 179）、凹石（第 110 図 202）が出土した。この他に滑石製の块状耳飾（第 114 図 8）も出土している。

なお、本住居跡の覆土中からは、黒曜石の原石やコア・フレークが総数で 112 点と多量に出土している。これらの大半は原石で、一箇所からまとめて出土したのではなく、住居跡全体から出土したものである。この出土数は今回調査された住居跡の中で最も多く、突出した数量であるため参考までに報告しておく。

本住居跡の時期については、出土土器の多くが前期前半の积迦堂 Z 3 式土器であることから、その時期に属するものと考えられる。

## 28 号住居跡（第 43 図）

本住居跡は W-29・W-30・X-29・X-30 グリッドに位置している。26 号住居跡の中で検出された 4 基の埋甕炉を含む 12 基の炉中で、3 号炉として調査した埋甕炉の炉体土器が、他の埋甕炉の炉体土器や住居跡から出土した土器よりも古かつたことから、その存在が考えられた住居跡である。26 号住居跡の構築時に削平されているため、壁や床面を確認することができず、ピットも先述したように 26 号住居跡との区別が困難なことから、規模等を推測することが極めて難しい。ただ、1～2 号地床炉と 5 号炉の下よりピットが 1 本づつ検出されており、本住居跡のピットである可能性が高い。炉は掘り方が梢円形のプランを呈し、長軸 70cm、短軸 61cm、深さは 19cm で、内部に深鉢形土器の口縁部付近から胴部上半を埋設した炉体土器が存在しており、焼土は炉体土



第 49 図 28 号住居跡出土土器

器の外側に8cm程度の厚さで堆積していた。

また、先述したが26号住居跡の炉やピットと重複する上坑が2基検出されている。炉と重複する土坑は直径51cm、深さ13cmで、ピットと重複する土坑は直径66cm、深さ8cmの規模を有している。

土器（第49図1）は1点図示した。埋葬炉の炉体上器で、横方向に転がして施文された結節縄文を地文にして、半截竹管による結節浮線文が施されている。

本住居跡の時期については、埋葬炉の炉体上器から判断して、前期終末の十三菩提式期に属すると考えられる。

## 29号住居跡（第47図）

本住居跡はト-35・チ-35グリッドに位置している。27号住居跡、353号上坑、375号土坑と重複しており、27号住居跡との間に調査順序を誤っているが、重複関係はこれらの遺構を切って構築している。

南東側が調査区城外にあるため、全貌は明らかでないが、平面形は円形を呈するものと思われ、現状で確認できた規模は東西3.8m、南北2.3mである。壁は緩やかに立ち上がっており、確認された壁高は最大で43cmを測る。床は概ね平坦で、貼床は確認できなかつたが、比較的しっかりとをしている。ピットは10本確認されており、径が26cmから47cm、深さが22cmから38cmである。炉は確認できなかつた。

上器（第48図23）はわずかに出土したのみで、1点を図示した。23は波状口縁で、沈線が施されている。曾利IV式土器と思われ、口縁に沿って沈線による弧線文が施され、胴部に沈線による懸垂文が施されるものであろう。石器は打製石斧（第101図68・69）が2点出土した。

本住居跡の時期については、出土した上器が小破片のもので、出土量も極端に少ないことから判断に困難を伴うが、中期後半の曾利IV式期に属するものと考えられる。

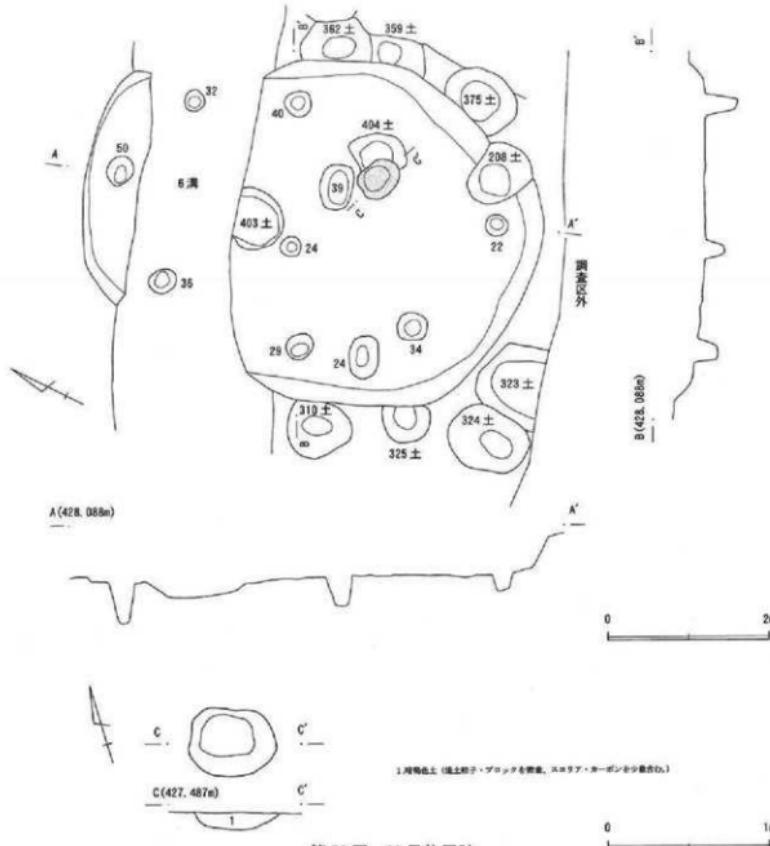
## 30号住居跡（第50図）

本住居跡はヘ-35・ト-34・ト-35・ト-36グリッドに位置している。208号上坑、310号土坑、323号土坑、325号土坑、359号上坑、362号土坑、375号土坑、403号土坑、404号土坑、6号溝状遺構と重複しており、重複関係は208号土坑、310号土坑、323号土坑、325号土坑、403号土坑、6号溝状遺構によって切られ、359号上坑、362号土坑、375号土坑や404号土坑を切って構築している。

平面形は椭円形を呈し、長軸5.7m、短軸4.8mの規模を有する。壁は緩やかに立ち上がっており、確認された壁高は最大で40cmを測る。床は東側が低くなるように緩やかな傾斜がみられ、貼床は確認できなかつたが炉の周辺が硬く硬化していた。炉は地床炉で、住居跡の中央やや南東寄りで確認された。長軸54cm、短軸42cmの楕円形を呈し、深さは11cmを有する。焼土の明確な堆積はみられなかつたが、焼土の粒子やブロックが認められた。ピットは10本確認されており、径が25cmから57cm、深さが22cmから50cmである。

上器（第51図）は黒浜式土器（1～3）、諸磯a式土器（4～6）、諸磯b式土器（7～12）が出土した。1～3は胎土に纖維を含んでおり、1・3はLRの単節縄文を地文にし、2はLRとRLの単節縄文による羽状縄文を地文にして連続爪形文が施されている。4はLRの単節縄文を地文にして連続爪形文が施され、5は波状口縁で、RLの単節縄文を地文にして円形竹管文を縦に並べ、口縁に沿って連続爪形文が施されている。6はRLの単節縄文を地文にして横位の平行沈線文が施されており、7はLRとRLの単節縄文による羽状縄文を地文にして連続爪形文が施されている。8はLRの無筋縄文を地文にして平行沈線文が施されており、9はLRの単節縄文が、10～12はRLの単節縄文が施されており、12の底には木葉痕とRLの単節縄文のU痕がみられる。石器は石匙（第100図50）と石皿（第113図222）が出土した。

本住居跡の時期については、出土上器の多くが前期後半の諸磯b式土器であることから、その時期に属するものと考えられる。

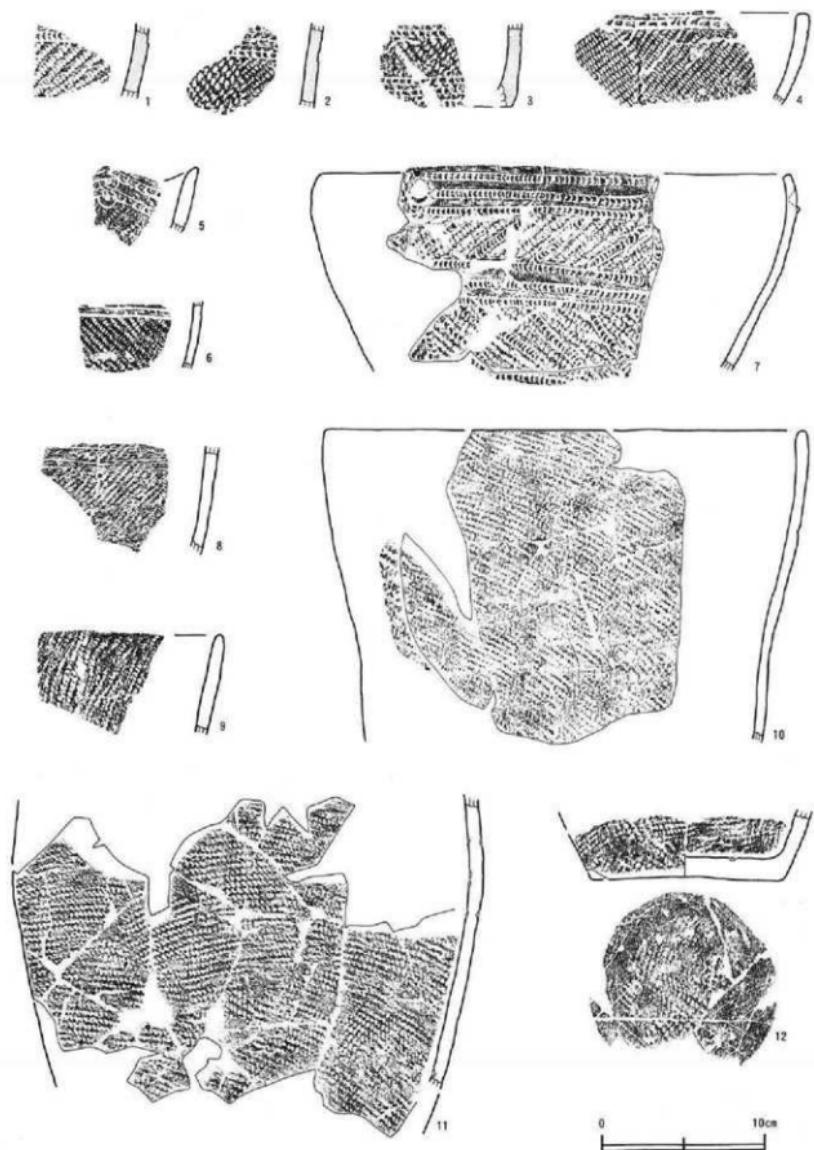


第50図 30号住居跡

### 31号住居跡（第29図）

本住居跡はX-30・Y-30・Y-31グリッドに位置している。20号住居跡、91号土坑、120号土坑、143号土坑、175号土坑、180号土坑、188号土坑、192号土坑、193号土坑、209号土坑、210号土坑、211号土坑、251号土坑、390号土坑、391号土坑、6号溝状遺構と重複しており、重複関係は91号土坑、143号土坑、175号土坑、180号土坑、188号土坑、192号土坑、209号土坑、210号土坑、211号土坑、6号溝状遺構によって切られ、20号住居跡、120号土坑、193号土坑、251号土坑、390号土坑、391号土坑を切って構築している。ところで、本住居跡と20号住居跡の重複関係については、削平の影響により直接的な確認ができなかったため、出土した土器から本住居跡が20号住居跡を切っていると判断した。

北西側が畠境の段差によって削平されており、全貌は明らかでない。平面形は梢円形を呈するものと思われ、現状で確認できた規模は東西5.8m、南北4.3mである。壁はかなり緩やかに立ち上がっており、確



第51図 30号住居跡出土土器

認された壁高は最大で 25cm を測る。床は概ね平坦で、貼末は確認できなかったがしっかりとしている。ピットは 20 号住居跡との関わりがあるため明確でないが、現状で 10 本が確認されており、径は 36cm から 70cm、深さは 8cm から 37cm である。炉は確認できなかった。

土器（第 52 図）は諸磯 b 式土器（1）と諸磯 c 式土器（2）、大歳川式土器（3）が出土した。1 は横位の平行沈線文が施された口縁部の破片で、口唇部に刻目がみられる。2 は横位の条線が施されている。3 は粘土紺上に Σ 状工具で連続刺突を行った特殊凸帯文が施されており、地文は R L の単節繩文と思われる。

本住居跡の時期については、出土した土器が小破片のもので、出土量も極端に少ないことから判断に困難を伴うが、前期後半の諸磯 c 式土器や終末期人巣山式（十三善様式）土器が出土していることから、その時期に属するものと考えられる。



第 52 図 31 号住居跡出土土器

### 32 号住居跡（第 53 図）

本住居跡はニ-35・ホ-35 グリッドに位置している。220 号土坑、225 号土坑、238 号土坑と重複しており、本住居と 225 号土坑、238 号土坑との間で調査順序を誤っているが、重複関係はこれらの遺構によって切られている。

平面形は梢円形を呈し、長軸 3.7m、短軸 3.3m の規模を有する。壁は緩やかに立ち上がっており、確認された壁高は最大で 35cm を測る。床は北側が低くなるように緩やかな傾斜がみられ、炉跡の周辺は硬く硬化していたが、他は軟弱であった。炉は地床炉で、住居跡の中央から若干北西に寄ったところで確認された。東側がカク且されているため、全貌は不明であるが、長軸 77cm、短軸 40cm の不整形で、深さは 9cm を有する。焼土の明確な堆積はみられなかったが、焼土の粒子やブロックが多量に認められた。ピットは 14 本確認されており、径が 20cm から 50cm、深さが 11cm から 68cm である。

土器（第 54 図）の上量はさほど多くないが、积込堂 Z 3 式土器（1・2）や諸磯 a 式土器（3～8）、北白川下層 1 b 式土器（9）がある。1・2 は R L の単節繩文が施され、内面には指頭痕が残っており、4 の底には木葉痕がみられる。3・4 は L R の単節繩文が施されており、内面にはほとんど指頭痕が残っていない。5・6 は口縁に沿って半截竹管による連続爪形文が施されており、さらに、円形刺突文が押捺されている。また、6 の口唇部には刻目が施されている。7 はコ縁に沿ってコンバス文が 8 は L R の単節繩文を地文にして爪形文が施されている。9 は口縁部に刻目、内外面に C 字形連続爪形文が施されている。

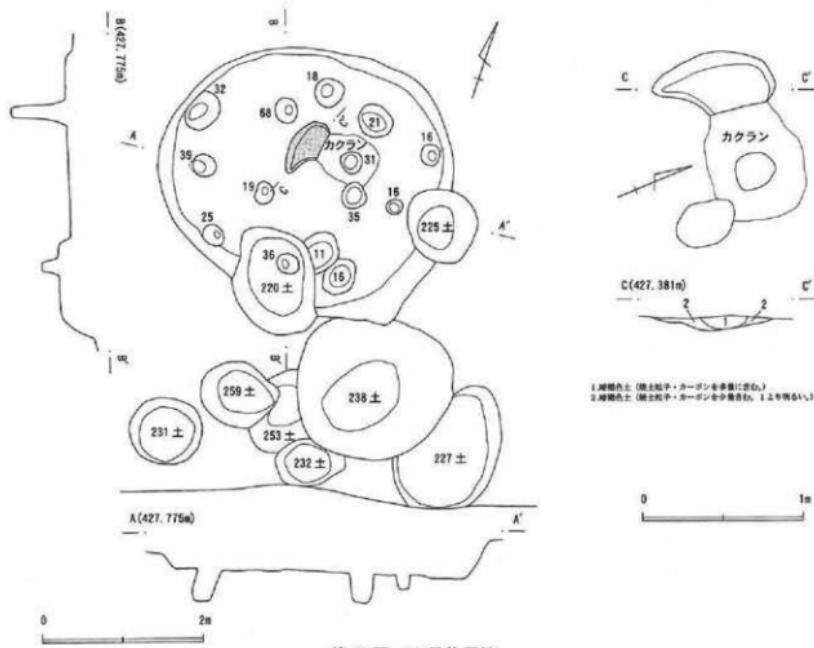
本住居跡の時期については、出土した土器のほとんどが前期後半の諸磯 a 式土器であることから、その時期に属するものと考えられる。

### 33 号住居跡（第 55 図）

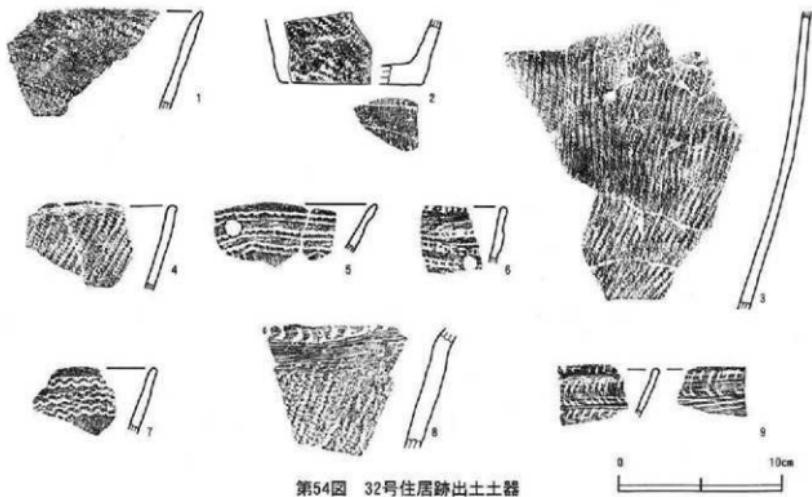
本住居跡はハ-33・ハ-34 グリッドに位置している。25 号住居跡、37 号住居跡、184 号土坑、185 号土坑、214 号土坑、365 号土坑、388 号土坑、6 号溝状遺構と重複しており、重複関係は 25 号住居跡、184 号土坑、185 号土坑、214 号土坑、365 号土坑、6 号溝状遺構によって切られ、37 号住居跡、388 号土坑を切って構築している。

平面形は円形を呈し、直径 5.1m の規模を有する。壁は緩やかに立ち上がっており、確認された壁高は最大で 28cm を測る。床は北側が低くなるように緩やかな傾斜がみられ、全体的に軟弱で、貼末や硬化した面は確認できなかった。ピットは 10 本が確認されており、径が 26cm から 70cm、深さが 12cm から 48cm である。炉は確認できなかった。

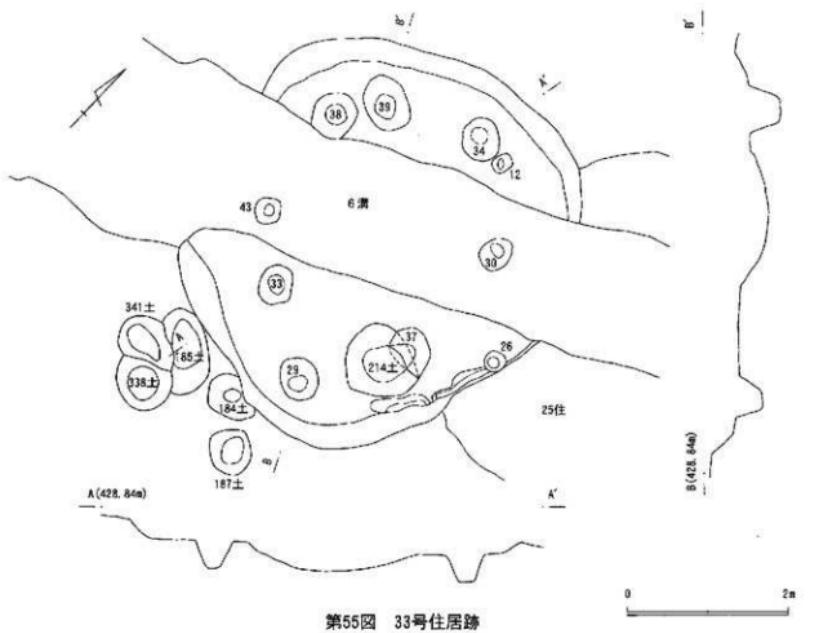
この他に住居跡の東壁付近で、幅 18cm 前後、深さ 8cm 前後の原溝が確認された。



第53図 32号住居跡



第54図 32号住居跡出土土器



第55図 33号住居跡

上器（第56図）はわずかに出土したのみで、2点を図示した。1はC字形連続八形文が施されている。この十器は胎土や器厚が他の北白川下層I式土器のものと異なり、諸磯系の十器の胎土や器厚に酷似しているものである。このことから、上器の文様を模倣したものではないかと思われる。2は半截竹管による横位の平行弦線文が施されている。

また、部分的であるが平行弦線間に刻目が施されているところがある。

本件居跡の時期については、土器の出土量が少ないことから判断に困難を伴うが、前期後半の諸磯b式土器が出土していることから、その時期に属するものと考えられる。

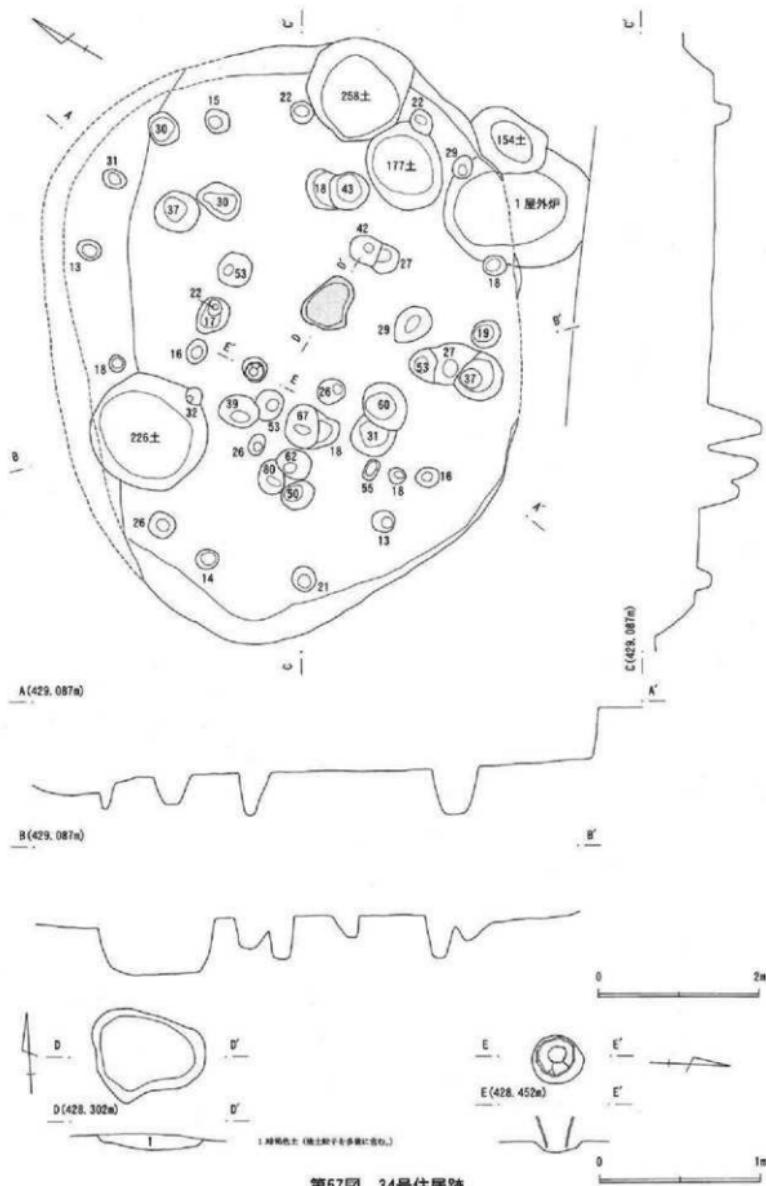


第56図 33号住居跡出土土器

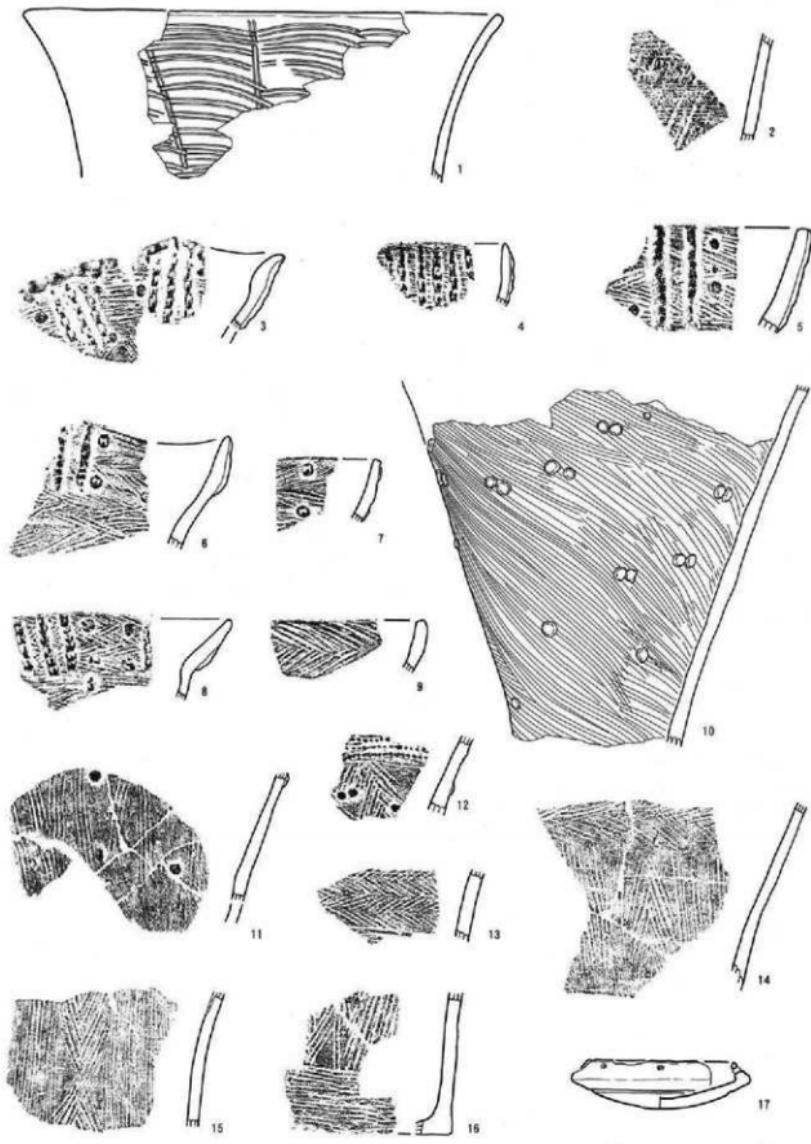
### 34号住居跡（第57図）

本住居跡はイ-31・イ-32・イ-33・ロ-31・ロ-32・ロ-33グリッドに位置している。154号土坑、169号土坑、176号土坑、177号土坑、216号土坑、218号土坑、221号土坑、237号土坑、257号土坑、258号土坑、265号土坑、269号土坑、271号土坑、272号土坑、275号土坑、298号土坑、309号土坑、399号土坑、6号溝状遺構、1号屋外炉と重複しており、重複関係は169号土坑、177号土坑、216号土坑、218号土坑、221号土坑、237号土坑、257号土坑、265号土坑、269号土坑、271号土坑、272号土坑、275号土坑、298号土坑、309号土坑、399号土坑、6号溝状遺構、1号屋外炉によって切られ、154号土坑、176号土坑、258号土坑を切って構築している。

北西側が6号溝状遺構によって切られているため、企貌は明らかでないが、住居のピットを6号溝状遺



第57図 34号住居跡



第58図 34号住居跡出土土器

構の底より検出することができたことから、住居跡の様相を捉えることが可能となった。平面形は梢円形を呈し、長軸 7.4m、短軸 5.8m の規模を有するものと思われる。壁は南側が急角度で立ち上がっているものの、他は緩やかに立ち上がっており、確認された壁高は最大で 62cm を測る。床は北東側が低くなるように緩やかな傾斜がみられ、貼床は確認できなかったが、炉跡周辺が硬く硬化していた。炉は地床炉で、住居跡のほぼ中央で確認された。長軸 69cm、短軸 59cm の不整形で、深さは 10cm を有する。焼上の明確な堆積はみられなかったが、焼上の粒子が多量に認められた。ピットは 43 本確認されており、径が 20cm から 63cm、深さが 13cm から 80cm である。

この他に、住居西側の壁寄りで土坑が 1 基確認されている。平面形は円形を呈し、規模は径が 140cm、深さが 89cm である。また、炉の西側で床面を直角 32cm、深さ 7cm 程度掘りくぼめ、そこに口縁と底部を打ち欠いた深鉢形土器が、口縁部側を上、底部側を下にして置かれたような状態で出土した。調査段階では、住居跡の覆土中に掘り込まれたような土の色調の変化を確認することができなかつたため、本住居跡に伴うものと判断した。

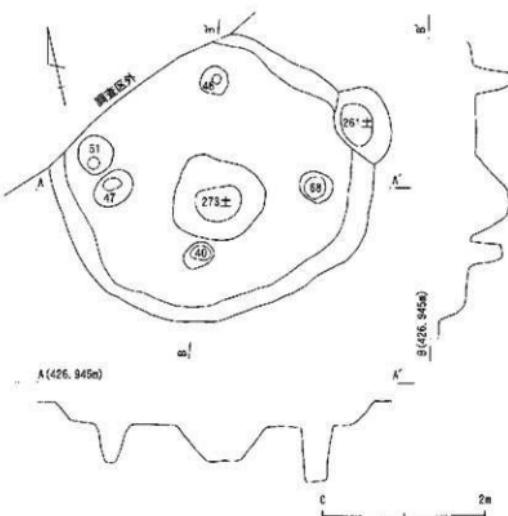
土器（第 58 図）は比較的多く出土しており、諸磽 a 式土器（1）や諸磽 b 式土器（2）、諸磽 c 式土器（3～17）がある。1 は肋骨文で、縦位の平行沈線による区画を中心に、その両側に弧状の平行沈線が施されている。2 は横位の平行沈線文が施されており、地文は Lr の無筋縄文である。3 は横位の条線の上に棒状結節浮線文とボタン状貼付文が施され、4 は横位の条線の上に棒状結節浮線文が施されている。5～9 は横方向の矢羽根状条線が施されているが、その上に 5・6・8 は棒状結節浮線文とボタン状貼付文が、7 はボタン状貼付文が施されている。10 は斜位の条線上にボタン状貼付文が施されており、口縁部と底部を欠損している。11 は縦位の条線上にボタン状貼付文が施されており、12 は縦方向の矢羽根状条線上に横位の結節浮線文とボタン状貼付文が、13～16 は横方向の矢羽根状、縦方向の矢羽根状をはじめとする条線が施されている。17 は有孔浅鉢土器で、口縁付近に赤彩痕がみられる。石器の出土量は多く、石刀（第 98 図 14～18）、石匙（第 100 図 51～55）、打製石斧（第 101 図 70～76）、磨製石斧（第 104 図 140）、磨石（第 107 図 171～174）四石（第 110 図 204）が出土している。

本住居跡の時期については、出土した土器から前期後半の諸磽 c 式期に属するものと考えられる。

### 35 号住居跡（第 59 図）

本住居跡はト-37・チ-37 グリッドに位置している。261 号土坑、273 号土坑と重複しており、重複関係はこれらの造構によって切られている。

北側の一部が調査区域外にあるため、全貌は明らかでないが、平面形は円形を呈するものと思われ、現状で確認できた規模は東西 3.9m、南北 3.4m である。壁は緩やかに立ち上がっており、確認された壁高は最大で 31cm を測る。床は北側が低くなるように緩やかな傾斜がみられ、全体的にやや軟弱で、貼床や硬化した面は確認できなかった。ピットは 5 本確認されており、径が 36cm か



第 59 図 35 号住居跡

ら 53cm、深さが 40cm から 68cm である。炉は確認できなかった。

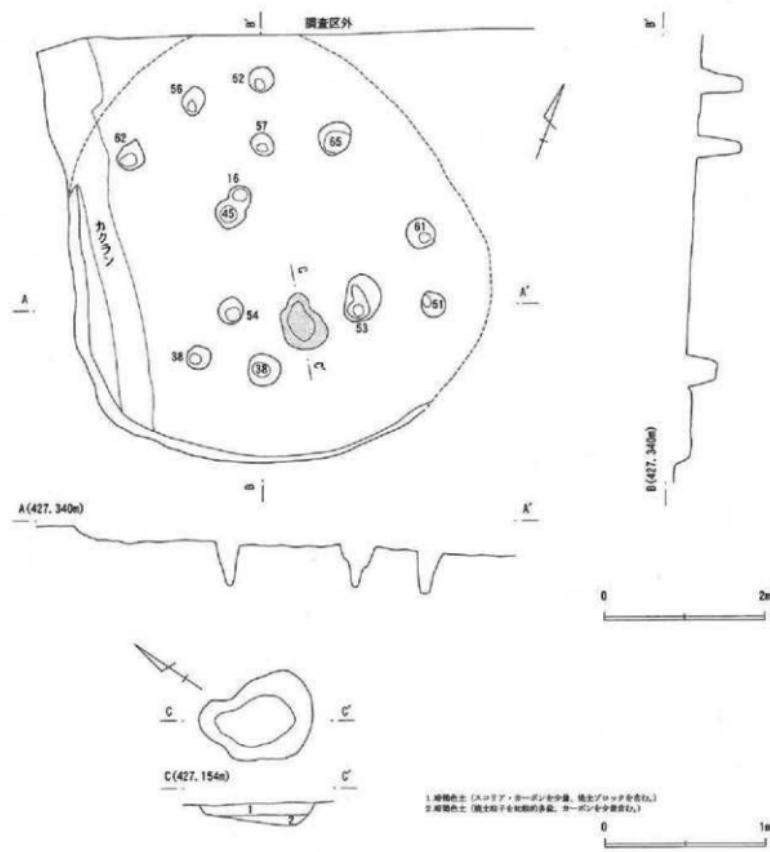
土器（第 62 図 1）はわずかに出土したのみで、1 点を図示した。1 は口縁に沿って太目の沈線が施されているもので、地文は L R の單節繩文である。

本住居跡の時期については、土器の出土量が非常に少ないとから判断に困難を伴うが、中期後半の加曾利 EIII 式土器が出土していることから、その時期に属するものと考えられる。

### 36 号住居跡（第 60 図）

本住居跡はト-36・ト-37・チ-36・チ-37 グリッドに位置しており、他の遺構との重複関係はない。

表土を除去した段階で炉やピットが確認された住居跡で、北側の概ね半分が多少なりとも削平を受けている。平面形は不整円形を呈するものと思われ、規模は東西 5.4m、南北 5.3m と想定される。壁は確認できたのが住居跡の北東側から南西側で、緩やかに立ち上がっており、確認された壁高は最大で 19cm を測



第60図 36号住居跡

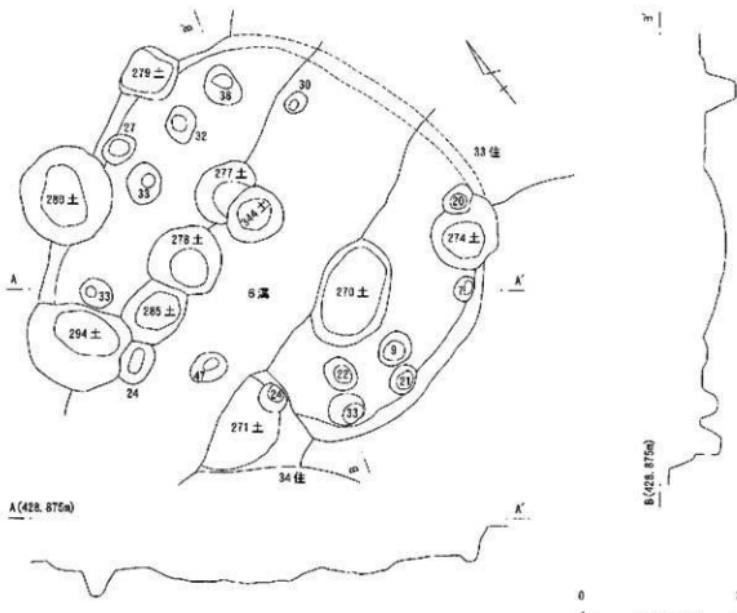
る。床は平坦で、貼床は確認できなかったが比較的しっかりとしている。炉は地床炉で、住居跡の中央から若干東寄りで確認された。長軸 71cm、短軸 55cm の不整形で、深さは 13cm を有する。焼土の明確な堆積はみられなかつたが、焼土の粒子やブロックが多量に認められた。ピットは 13 本確認されており、径が 32cm から 58cm で、深さが 16cm から 65cm である。

本住居跡からは遺物がまったく出土していない。また、他の遺構との重複もないことから、本住居跡の時期の判断が極めて困難なものとなっている。ただ、本住居跡の炉が地床炉であり、今回の調査において、地床炉を有する住居跡の時期が中期初頭の正領ヶ台式期以前であるということから、本住居跡もその時期以前に属するものと考えられる。

### 37号住居跡（第61図）

本住居跡はロー-32・ロー-33・ハ-32・ハ-33 グリッドに位置している。33号住居跡、270号土坑、271号土坑、274号土坑、277号土坑、278号土坑、279号土坑、280号土坑、285号土坑、294号土坑、344号土坑、6号溝状遺構と重複しており、重複関係はこれらの遺構によって切られている。

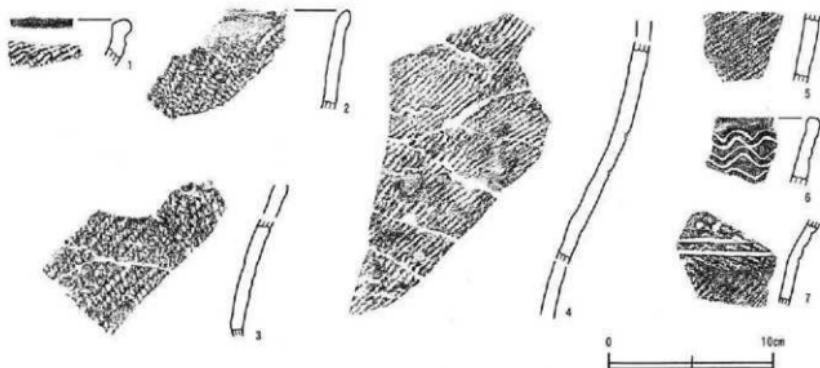
北東側が 33 号住居跡によって切られているため、全貌は明らかでないが、住居のピットを確認することができたことから、生居跡の様相を捉えることが可能となった。平面形は円形を呈するものと思われ、規模は直径 5.2m と想定される。壁は急角度で立ち上がりつておらず、確認された壁高は最大で 37cm を測る。床は北西側が低くなるように緩やかな傾斜がみられ、貼床は確認できなかつたが、全体的に硬化している。ピットは 15 本確認されており、径が 30cm から 54cm、深さが 7cm から 47cm である。炉は確認できなかつた。



第61図 37号住居跡

土器（第62図2~7）の出土量はさほど多くないが、积迦堂Z3式土器（2~4）や諸磯a式土器（5~7）がある。2・3はLRの単筋縄文が施され、4はLLの反の撫りの無筋縄文が施されている。これらの土器の内面には指頭痕が残っている。5はLRの単筋縄文が施されており、6は口縁に沿って半截竹管による波状沈線文が施され、7はLrとRrの無筋縄文による羽状縄文を地文にして、半截竹管による横位の平行沈線文と円形の刺突文が施されている。7については、今回、諸磯a式土器として扱っているが、内面には2~4の土器ほど明瞭でないが指頭痕が認められることから、积迦堂Z3式土器の可能性もある。

本住居跡の時期については、土器の出土量が少ないことから判断に困難を伴うが、主なものが前期前半の积迦堂Z3式土器であることから、その時期に属するものと考えられる。



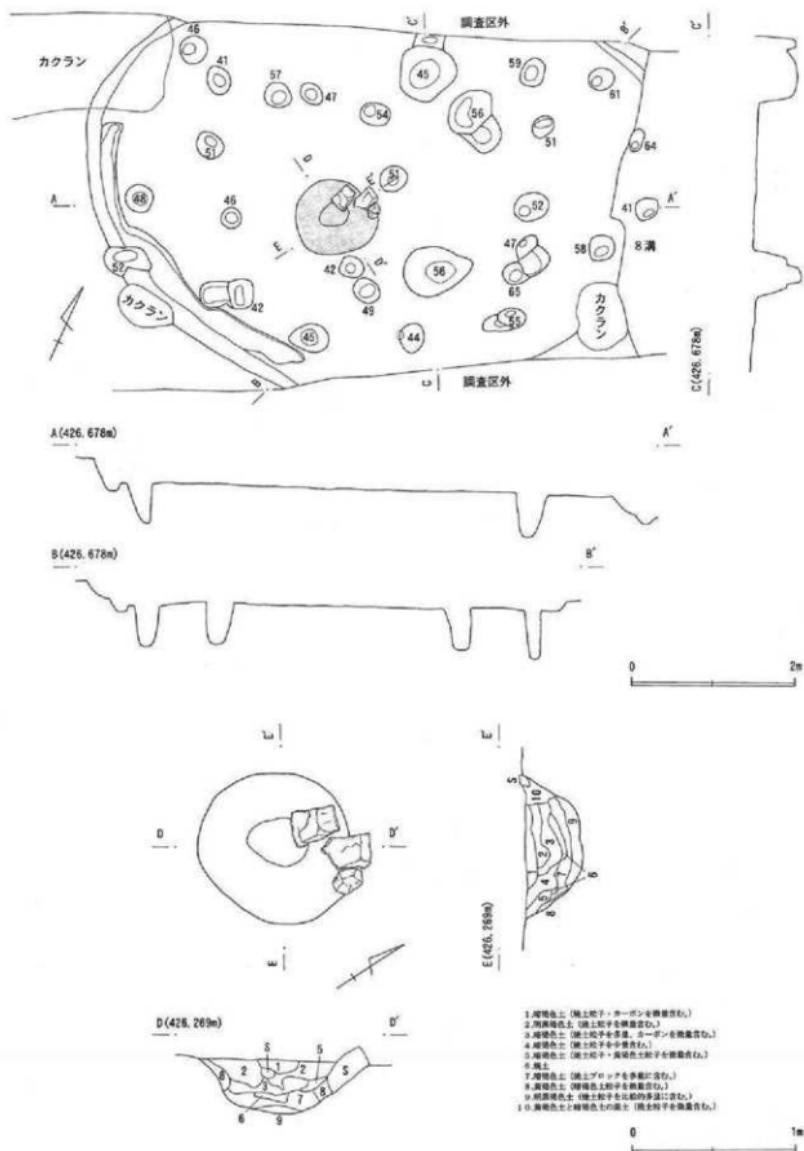
第62図 35号・37号住居跡出土土器

### 38号住居跡（第63図）

本住居跡はリ-37・リ-38・ヌ-37・ヌ-38グリッドに位置している。8号溝状遺構と重複しており、重複関係はこの溝状遺構によって切られている。

東側の一部を8号溝状遺構によって完全に切られ、南側と北側が調査区域外にあるため、全貌は明らかでないが、平面形は梢円形を呈するものと思われ、現状で確認できた規模は東西6.8m、南北4.6mである。壁は緩やかに立ち上がっており、確認された壁高は最大で32cmを測る。床は北側が低くなるように緩やかな傾斜がみられ、貼床は確認できなかったが、全体的に硬化している。炉は石圓炉で、住居跡の中央からやや西寄りで確認された。炉石は引き抜かれたためか、東側に残っているだけである。規模は直径が95cmで、深さは36cmを有する。焼土は4cm程度の厚さで堆積していた。ピットは30本確認されており、径が26cmから68cm、深さが41cmから65cmである。

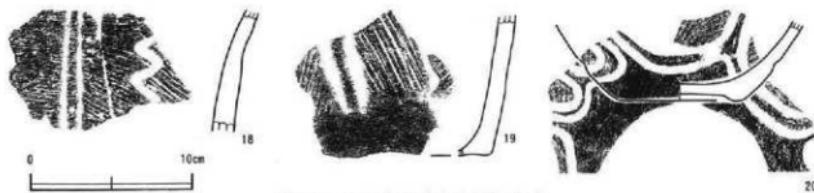
土器（第64・65図）は曾利IV式土器が比較的多く出土した。1は口縁部に渦巻つなぎ弧文が施されている。2は波状口縁で、隆帶により渦巻文が施されている。3は縦位の条線を地文にして、口縁に沿う横位の沈線と、沈線による蛇行懸垂文が施されている。4は口縁に付く突起である。5は隆帶による渦巻文が施されている。6は窓枠状に円文が付くもので、地文は縦位の条線である。7は斜位の条線を地文にして、隆帶により渦巻文が施されている。8は縦位の条線が施されている。9・13・15は沈線による蛇行懸垂文が施されており、地文は9・13が斜位の条線、15が横位の条線である。10・11は縦位の条線を地文にして、横位に隆帶と隆帶に沿うように浅い沈線が施されている。12は綾杉状の条線を地文にして、2本の沈線による縦の区画が行われている。14は縦位の条線を地文にして、隆帶と隆帶に沿う浅い沈線により縦の区画が行われている。16は縦位の条線を、19は綾杉状の条線をそれぞれ地文にして、隆帶による縦



第63図 38号住居跡



第64図 38号住居跡出土土器（1）



第65図 38号住居跡出土土器（2）

の区画が行われ、沈線による蛇行懸垂文が施されている。17・18は横位の条線を地文にして、2本の沈線による縦の区画が行われ、沈線による蛇行懸垂文が施されている。20は両耳把手付土器の底部と思われる。石器の出土量は比較的多く、石鎌（第98図19）、打製石斧（第101図77～80）、磨石（第107図175～178）、圓石（第110図203）が出土した。また、この他に土製円盤（第97図1）も出土している。

本住居跡の時期については、出土した土器から中期後半の曾利IV式期に属するものと考えられる。

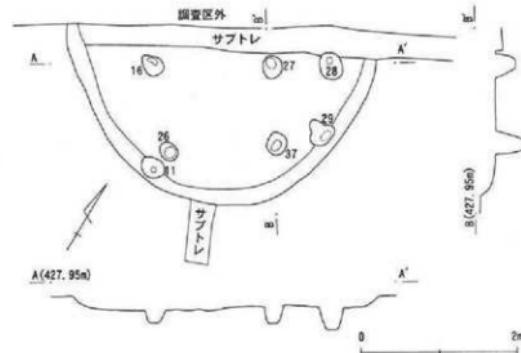
### 39号住居跡（第66図）

本住居跡はロー-34・バー-34グリッドに位置している。

北西側の概ね半分が調査区域外にあるため、全貌は明らかでないが、平面形は円形を呈するものと思われ、現状で確認できた規模は東西4m、南北2.3mである。壁は緩やかに立ち上がっており、確認された壁高は最大で20cmを測る。床は概ね平坦で、貼床は確認できなかったが全体的にしっかりとをしている。ピットは7本確認されており、径が26cmから36cm、深さが11cmから37cmである。ただし、このうち2つのピットは住居の壁から掘り込まれており、削平された別の住居跡の存在が考えられる。炉は確認できなかった。

土器（第67図）はさほど多くないが五領ヶ台II式土器が出土した。1は口縁部に連続する逆U字状文が施されている。2はRLの単節繩文を地文にして口縁に沿う横位の平行沈線と連続する逆U字状文が施されている。3はRLの無節繩文を地文にして縦位の平行沈線が、4は結節繩文を地文にして横位の平行沈線が施されている。石器は石匙（第100図56）が出土した。

本住居跡の時期については、出土した土器から中期初頭の五領ヶ台II式期に属するものと考えられる。



第66図 39号住居跡



第67図 39号住居跡出土土器

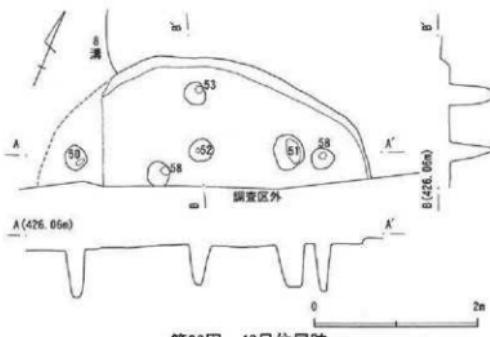
#### 40号住居跡（第68図）

本住居跡はヌー38・ルー38グリッドに位置している。8号溝状遺構と重複しており、重複関係は8号溝状遺構によって切られている。

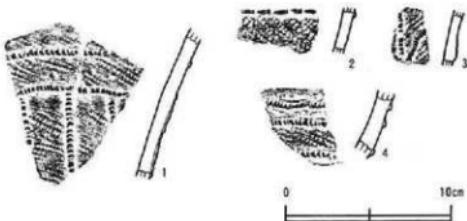
北側が調査区域外にあり、西側が8号溝状遺構によって切られているため、全貌は明らかでないが、平面形は円形または楕円形を呈するものと思われ、現状で確認できた規模は東西3.8m、南北1.6mである。壁は確認された壁高が最大で12cmと低いため、はっきりとは言い切れない面もあるが、緩やかに立ち上がる傾向が窺える。床は概ね平坦で、貼床は確認できなかったが、比較的のしっかりとしている。ピットは6本確認されており、径が29cmから42cm、深さが50cmから58cmである。炉は確認できなかった。

土器（第69図）はさほど多くないが十三菩提式土器が出土した。1・2はRLの単節縄文を地文にして、結節浮線文が施されており、3・4はLRの単節縄文を地文にして、結節浮線文が施されている。石器は打製石斧（第101図81）と磨石（第108図180）が出土した。

本住居跡の時期については、出土した土器から前期終末の十三菩提式期に属するものと考えられる。



第68図 40号住居跡



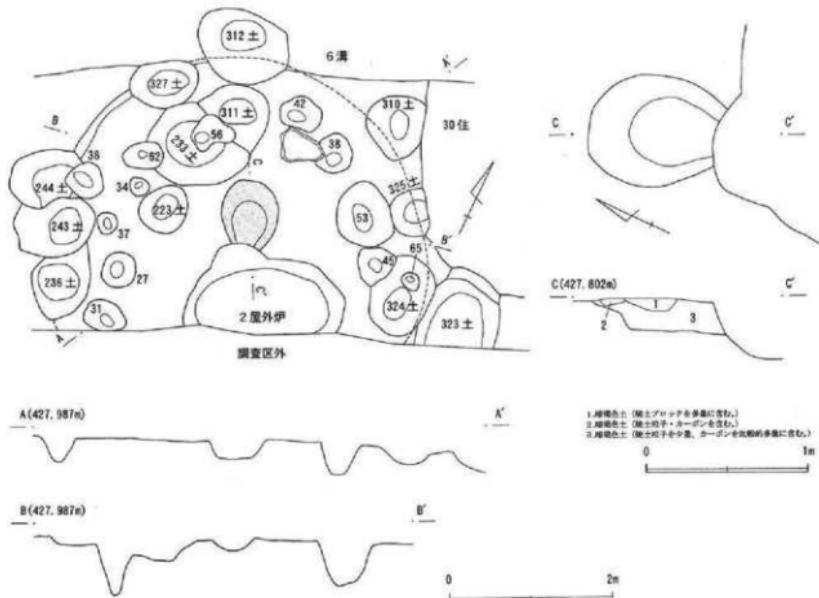
第69図 40号住居跡出土土器

#### 41号住居跡（第70図）

本住居跡はヘー34・ヘー35・トー34・トー35グリッドに位置している。223号土坑、233号土坑、234号土坑、236号土坑、243号土坑、244号土坑、310号土坑、311号土坑、312号土坑、324号土坑、325号土坑、327号土坑、6号溝状遺構、2号屋外炉と重複しており、重複関係は223号土坑、234号土坑、236号土坑、243号土坑、244号土坑、310号土坑、311号土坑、324号土坑、325号土坑、327号土坑、6号溝状遺構、2号屋外炉によって切られ、233号土坑、312号土坑を切って構築している。

南側が調査区域外にあるため、全貌は明らかでないが、平面形は円形を呈するものと思われ、現状で確認できた規模は東西4.7m、南北3.4mである。壁は確認された壁高が最大で11cmと低いため、はっきりとは言い切れない面もあるが、緩やかに立ち上がる傾向が窺える。床は北側が低くなるように緩やかな傾斜がみられ、貼床は確認できなかったが、炉の周囲を中心に硬化している。炉は地床炉で、住居跡の中央付近で確認された。炉の南側が234号土坑によって切られているため定かではないが、楕円形を呈するものと思われ、確認できた規模は長軸80cm、短軸70cmで、深さは20cmを有する。焼土の明確な堆積はみられなかったが、焼土のブロックが多量に認められた。ピットは12本確認されており、径が25cmから80cm、深さが27cmから65cmである。

なお、炉の北側の床面上より出土した礫は、59cm×38cm の大きさで、厚さ 12cm の板状を呈するもので、使用痕は認められないが、作業台的なものではないかと思われる。



第70図 41号住居跡

土器(第71図)は少量だが十三菩提式土器が出土した。  
1は肥厚した口縁部に三角印刻文がめぐり、以下、弧状に結節沈線文が施されている。2は横位に結節沈線文が施されている。石器は打製石斧(第101図82、第102図83)、磨石(第108図181)、凹石(第110図205)が出土した。  
本住居跡の時期については、土器の出土量が非常に少ないので判断に困難を伴うが、前期終末の十三菩提式土器が出土していることから、その時期に属するものと考えられる。

## 2. 土坑

今回の調査では848基の土坑が検出された。出土した土器等から構築時期の判明可能な土坑は153基で、前期前半の釈迦堂Z3式期が5基、前期後半の諸磯a式期から諸磯c式期が32基、前期終末期の十三菩提式期が11基、中期初頭の五額ヶ台式期が59基、中期中葉の落沢式期から井戸尻式期が13基、中期後半の善利式期が32基、後期前葉の堀之内1式期が1基となっている。これ以外の土坑については遺物がま



第71図 41号住居跡出土土器

まったく出土していないか、出土しても小破片のものであることから、時期の判断が困難となっている。しかし、これらの土坑の覆土は、今回の調査で確認された縄文時代の住居跡や時期判断可能な土坑の覆土と色調や状態が酷似していることから、これらの遺構と同様の時期に属するものと思われる。

これらの土坑は丘陵上の平坦地から集中して検出されており、この平坦地から西側に続く緩斜面地と一段低い平坦地では検出されていない。また、上坑が集中して検出される丘陵上の平坦地でも、ワ-38・ワ-39・ワ-40グリッドからタ-39・タ-40・タ-41グリッドの間を境にして、土坑の分布状況に大きな違いがみられる。このワ-38・ワ-39・ワ-40グリッドとタ-39・タ-40・タ-41グリッドの間は、調査区を境に南側（山側）は丘陵上の平坦地が広がっているが、北側（盆地側）には狭く深い谷状の地形があり込んできているところで、ここよりも東側では上坑が密集していて分布密度も濃いが、西側では土坑と住居跡が混在しており、分布密度も東側と比較して希薄な感がある。

## 土坑の概要

ここでは、主だった土坑の概要説明を行うこととするが、他の土坑については、遺構配置図（附図）や平面図（第72図～第80図）、観察表（第1表）を参考にしていただきたい。

1号土坑は遺物がまったく出土していないが、断面が袋状を呈している。貯蔵用に用いられたものと考えられる。10号土坑は土坑の底より30cm前後の礫が折り重なるように出土している。また、覆土中から壁飾（第114図9）も出土している。23号土坑は覆土中から胴上半から11線を欠く深鉢形土器（第81図8）が正位の状態で出土しており、前期終末期の十三菩提式期に位置付けられる。50号土坑は確認面から中層あたりまで焼粒子が認められ、その下より20cm前後の礫が複数検出されており、祭祀的な性格の強いものと思われる。土坑内から出土した土器から、中期後半の曾利V式期に位置付けられる。76号土坑は底からは3個の礫が検出されているが、この礫の上から底を欠いた深鉢形土器（第82図20）が、内側から外側に向かって押し広げられたように潰れた状態で出土している。中期中葉の新道式期に位置付けられる。140号土坑は隅丸方形を呈する土坑で、西壁と底に密着するような形で35cm前後の礫が出土している。167号土坑は底部を欠いた深鉢形土器（第83図34）が正位の状態で出土しており、中期中葉の井戸尻式期に位置付けられる。176号土坑は覆土中より多量の礫とともに、磨石（第108図186）と伏せられた状態の石皿（第111図216）が出土している。土坑内から出土した土器から前期後半の諸磧b式期に位置付けられるが、祭祀的な性格を有するものと思われる。190号土坑は覆土中より2個体分の土器（第84図41・42）が出土している。11線部の大きめな破片と、口縁から脇部にかけての部分で、今回は土器の推定口径や色調の違いから別個体として扱っているが、同一個体の可能性も捨てきれない。前期後半の諸磧b式期であろうか。208号土坑は覆土中から深鉢形土器（第84図44）が横位で出土しており、前期終末期の十三菩提式期に位置付けられる。223号土坑は覆土中から深鉢形土器（第85図48）が横位で出土しており、中期後半の曾利IV式期に位置付けられる。234号土坑は底より33cm程度の礫が出土している。235号土坑は、確認面から10cm～20cm程度の礫を用いた石組みが2箇所で検出されており、覆土には一度掘り返してから、再度、埋め戻したような土層の変化が確認されている。このように礫を用いた石組みがみられ、覆土を掘り返して、再度埋め戻したような形跡が窺える土坑は、笛吹市御坂町上黒駒に所存する杜野遺跡で確認されており、墓の可能性が指摘されている。236号土坑は覆土中より20cm前後の板状の礫とともに、底部を欠いた深鉢形土器（第85図51）が正位の状態で出土しており、中期後半の曾利IV式期に位置付けられる。237号土坑は底から少し浮いた状態で、深鉢形土器（第86図52）が正位の状態で出土しており、中期中葉の井戸尻式期に位置付けられる。268号土坑は覆土中より33cm程度の板状の礫が出土している。土坑内から出土した土器から、中期後半の曾利IV式期に位置付けられる。269号土坑は土坑の底から、底部に穿孔された深鉢形土器（第87図64）が逆位の状態で出土しており、中期後半の曾利IV式期に位置付けられる。489号土坑は土坑の底から少し浮いた辺りで、15cm前後の礫とともに、土器の破片（第87図68～71）がまとまって集中して出土している。中期初頭の五輪ヶ台式期に位置

付けられる。526 号土坑は土坑の底から少し浮いた辺りで、18cm 前後の礫とともに、土器の破片（第 88 図 74～77）が多量に出土している。中期初頭の五領ヶ台式湖に位置付けられる。750 号土坑は覆土中より上側の脚部（第 113 図 1）が 1 点出土しており、祭祀的な性格を有するものと思われる。759 号土坑は覆土中より 35cm 程度の礫が 2 個、761 号土坑は土坑の底より 15cm 程度の小振りな礫が出土している。

## 出土遺物

### （土器）（第 81 図～第 88 図）

1 は 2 号土坑山上で、Lr の無筋縄文を地文にして櫛齒状工具による横位の沈線が施されており、諸磯 b 式土器である。2・7 は 3 号土坑出土である。2・3 は結節浮線文が、4 は横位に集合沈線、5 は矢羽状に集合沈線、6 は矢羽状の集合沈線と三角印刻文、7 はレンズ状および矢羽状の集合沈線と三角印刻文が施されている。十三井提式土器。8 は 23 号土坑から出土。LR の単節縄文を地文にして、溝巻状や斜位、横位、櫛齒状に結節浮線文が施されているもので、十三井提式土器である。9 は 27 号土坑出土で、結節縄文が施されており、五領ヶ台式土器である。10 は 50 号土坑出土で、ハの字文が施されており、曾利 IV 式土器である。11 は 67 号土坑から出土したもので、ハの字文を地文にして、沈線により II 状の区画が行われている。曾利 V 式土器。12 は 71 号土坑から出土したもので、藤手状に沈線が施されているもので、堀之内 I 式土器。13～16 は 117 号土坑出土である。13・15 は綾杉状の条線を地文にして、2 本の沈線による直線の懸垂文が施され、14 は綾杉状の条線を地文にして、隆帯と隆帯に沿う浅い沈線により縦の区画と蛇行懸垂文が施されている。16 は綾杉状の条線を地文にして、蛇行懸垂文が施されている。曾利 IV 式土器。17～19 は 119 号土坑出土で、17 は刻目を有する隆帯と三叉状の沈線が施され、18 は刻目を有する隆帯と綾位の沈線が施されている。19 はわずかに張り出す屈折底で、RL の単節縄文が施されている。井戸尻式土器。20 は 76 号土坑から出土したもので、口縁に把手を持ち、隆帯による長方形や三角等の区画を配し、隆帯に沿って三角押文が施されている。また、縦の隆帯上には刻目が施されている。新道式土器。21 は 131 号土坑出土で、地文は縄文だが詳細は不明で、横位の平行沈線が施されている。諸磯 b 式土器。22 は 142 号土坑出土で、粘土紐の貼り付けによる格子目文が施されており、曾利 II 式土器。23～26 は 154 号土坑出土で、23 は C 字形連続爪彫文が施されている。33 号住居跡より出土したものと同様に、胎土や器厚が北山川下層 I 式土器のものと異なり、諸磯系の土器の胎土や器厚に酷似したことから、文様を模倣して製作したものではないかと思われる。同一個体の可能性がある。24 は平行沈線による綾位の区画を中心にして、両側に斜位の直線が施されているので米字状文になるものであろう。25 はコンパス文と波状の平行沈線が施されている。26 は底部で網代の圧痕が残っており、これらは諸磯 a 式土器である。27 は 159 号土坑出土の大歳山式土器で、波状口縁を呈し、LR の単節縄文を地文にして、粘土紐上を Σ 状工具によって押し引く特殊凸凹文が施されている。また、口唇部内面には LR の単節縄文が押捺されている。28 は 140 号土坑出土で、II 線に把手を持ち、横位や櫛齒状、溝巻状の結節沈線文と三角印刻文が施されており、十三井提式土器である。29・30 は 172 号土坑からの出土で、29 は X 字状把手、30 は斜位の条線を地文にして、隆帯と隆帯に沿う浅い沈線による縦の区画や、沈線による蛇行懸垂文が施されている。曾利 IV 式土器。31 は 143 号土坑出土で、綾杉状の条線を地文にして、2 本の沈線による縦の区画や蛇行懸垂文が施されている。曾利 IV 式土器。32 は 178 号土坑出土で、II 線に沿って矢羽状の集合沈線、以下、胴部に結節縄文が施されている。五領ヶ台式土器。33 は 176 号土坑山上で、横位の平行沈線文が施されている。諸磯 b 式土器。34 は 167 号土坑出土で、RL の単節縄文を地文にして胴部上半には波状隆帯や沈線による溝巻文や三叉文が施され、下半は逆弧状に縄文が磨消されている。井戸尻式土器。35 は 181 号土坑から出土した突起で、三角押文がみられる。新道式土器。36 は 193 号土坑から出土した底部の破片で、横位の平行沈線文が施されている。諸磯 b 式土器。37・38 は 206 号土坑山上で、37 はコンパス文が施され、38 は RL の単節縄文が施されている。諸磯 a 式土器。39 は 218 号土坑出土で、明確な角押文ではないがそれに近い押し引き文と、粘土紐による三角形の貼付文が施されている。猪沢式土器。40 は

180 番十坑から出土したX字状把手をもつ深鉢形土器の口縁部で、曾利IV式か。41・42は190号土坑出土で、双方ともLRの単節縄文が施されており、内面の横ナデが比較的丁寧に行われている。諸磯b式土器か。43は219号土坑山上で、LRの単節縄文とRLの無節縄文による羽状縄文を地文にして連続爪形文が施されている。諸磯a式土器。44は208号土坑山上で、RLの単節縄文を地文にして、横位や波状の結節浮線文が施されている。十二菩提式土器。45は215号土坑出下で、口縁部に沈線による弧線文と刺突文が施され、胴部には綾杉状の条線を地文にして、2本の沈線による直線の懸垂文や蛇行懸垂文が施されている。曾利IV式土器。46は221号土坑出土で、条線を地文にして階花による渦巻文が施されている。曾利IV式土器。47は216号土坑出下の浅鉢形土器で、口縁の内側に半截竹管の背を用いた押し引き文が施されている。五領ヶ台式土器。48は223号土坑出土で、口縁に4単位の突起が付くものと思われ、綾杉状の条線を地文にして、茎帶と指頭の押し引きによる懸垂文が施されている。曾利IV式土器。49は232号土坑出下で、RLの単節縄文を地文にして、口縁に沿って2条の平行沈線文が施されている。諸磯a式土器。50は234号土坑出土で、綾杉状の条線を地文にして、明確ではないが茎帶による縦の区画が行われているようである。また、内面は丁寧に磨かれている。曾利IV式土器。51は236号土坑出下で、口縁部に渦巻つなぎ弧文が施され、胴部には綾杉状の条線を地文にして、2本の沈線による直線の懸垂文や蛇行懸垂文が施されている。曾利IV式土器。52は237号土坑山上で、わずかに張り出す屈折底で、外面前面にRLの単節縄文が施されているが、円形や横位帯状に縄文が磨消されている。井戸尻式土器。53は238号土坑出土で、RLの単節縄文を地文にして、隆帶と隆帶に沿う浅い沈線により縦の区画が行われている。曾利V式土器。54は239号土坑出土で、LRの単節縄文とLRと思われる無節縄文が施されており、内面は横ナデが比較的丁寧に行われている。諸磯a式土器。55は250号土坑出土で、隆線の横にキャタピラ文が施されている。新道式土器。56~58は257号土坑出下で、56はRLの単節縄文を地文にして、渦巻つなぎ弧文が、57は条線を地文にして、隆帶による縦の区画が行われており、58は粘土紐により弧線文が施されているものと思われる。曾利IV式土器。59は267号土坑出下で、縦位の条線間に矢羽根状の条線が施されている。諸磯c式土器。60は283号土坑出下で、口縁が「く」の字状に屈折し、矢羽根状と縦位の集合沈線が施されている。五領ヶ台式土器。61・62は302号土坑出土で、61は斜位の条線が施されており、62は条線を地文にして、沈線による懸垂文が施されている。曾利IV式土器。63は398号土坑出土の有孔浅鉢形土器で、内面に赤彩痕がみられる。諸磯c式土器。64は269号土坑出下で、口縁部に隆帶による弧線文が施され、胴部には縦位の条線を地文にして、隆帶によりH字状懸垂文や藤手狀文が施されている。曾利IV式土器で、底部には焼成前に穿孔が行われている。65は404号土坑出下で、LRの単節縄文が施されており、内面には指頭痕が残っている。积迦堂Z3式土器。66は443号土坑出土で、沈線によって三叉文や渦巻文が施されている。井戸尻式土器。67は328号土坑出土で、外面上ナデが行われており、内面には指頭痕が残っている。积迦堂Z3式土器と思われる。68~71は489号土坑出土である。68は口唇部に突起、口縁部に橋状把手を持ち、菱形と長方形のモチーフが交互に各3ヶづつ施されており、69は斜位と格子目状の集合沈線、70は波状の集合沈線、71は横位の集合沈線がそれぞれ施されている。五領ヶ台式土器。72は500番十坑出下で、横位と縦位の集合沈線が交互に施されている。五領ヶ台式土器。73は536号土坑山上で、矢羽根状と縦位の集合沈線が施されている。五領ヶ台式土器。74~77は526号土坑から出土した五領ヶ台式土器で、74は斜位や縦位の集合沈線、75は格子目状の集合沈線、76は波状の集合沈線、77は頸部で、間隔を開けた縦位沈線が施されている。78は558番十坑出土のミニチュア上器で、平行沈線によるY字状文が施されている。五領ヶ台式土器。79~81は625号土坑出土で、79・80は底部、81は頸部に三角の印刻文を有し、胴部には結節羽状縄文が施されている。五領ヶ台式土器か。82は715号土坑山上の浅鉢形土器で、三角押文が施されている。新道式土器。83は717号土坑山上で、縦位の集合沈線が施されている。五領ヶ台式土器。84・85は719号土坑出土で、84は三角印刻文が施されており、85はRLの単節縄文を地文にして平行沈線文を施している。86・87は779号土坑山上の五領ヶ台式土器で、86は口唇部に細線文と連続爪形文が施されている。87は口唇部に連続爪

形文と波状の集合沈線が施されている。88 号～854 号土坑出土で、結節羽状繩文が施されている。五領ヶ台式土器。

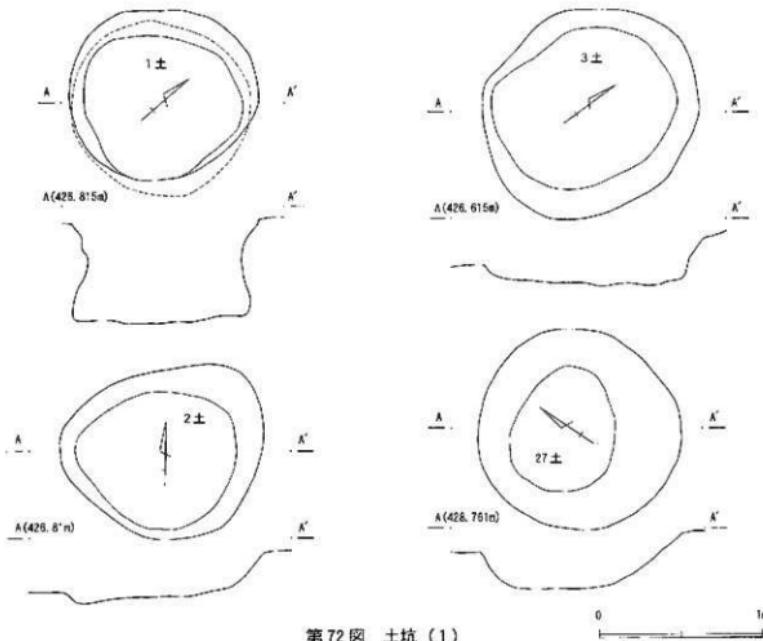
#### (石器)

土坑の覆土中より数量的には少ないが、石鏃、石錐、打製石斧、磨製石斧、磨石、亘石、石皿といった石器が出土している。

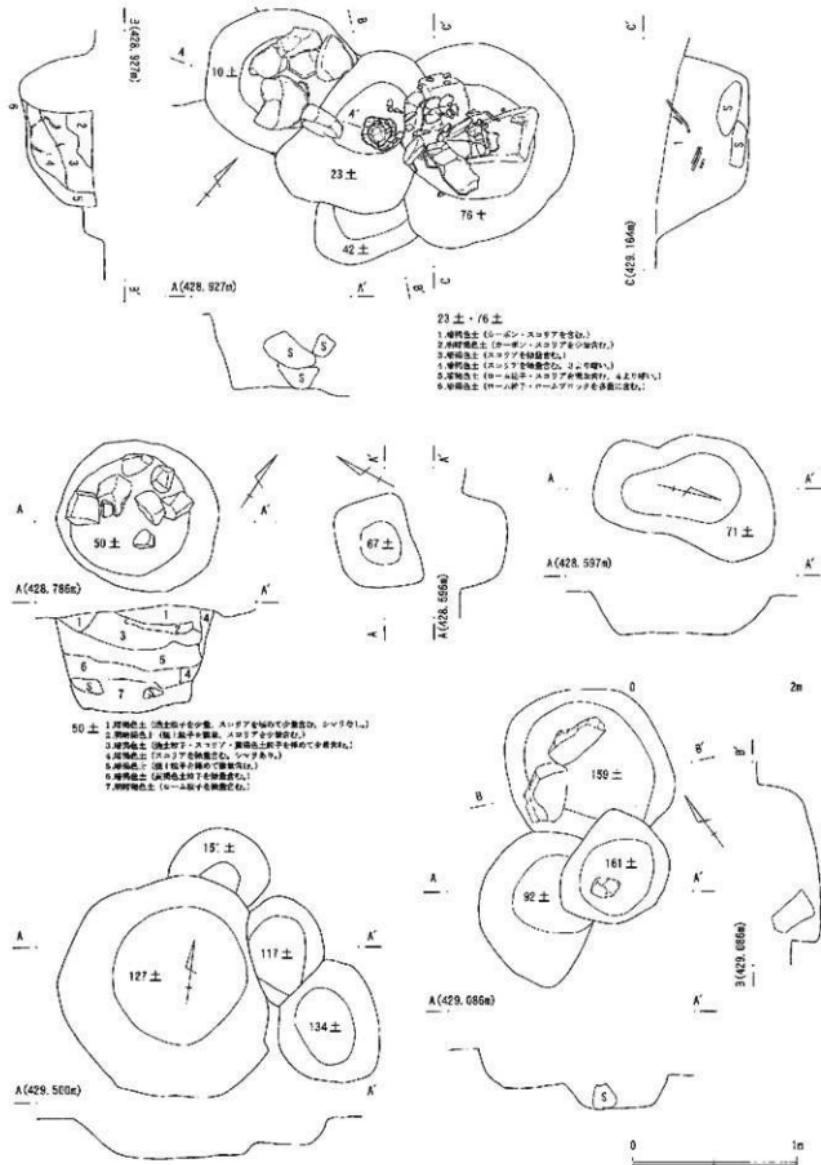
石鏃（第 98 図 20～28）は 10 号土坑、59 号土坑、154 号土坑、180 号土坑、272 号土坑、276 号土坑、365 号土坑、400 号土坑、500 号土坑より各 1 点づつ出土した。すべて黒曜石製であるが、365 号土坑より出土した石鏃の色調は赤色を呈している。石錐（第 99 図 37）は 226 号土坑より 1 点出土した。打製石斧（第 102 図 84～98）は 6 号土坑、48 号土坑、126 号土坑、178 号土坑、180 号土坑、217 号土坑、226 号土坑、275 号土坑、460 号土坑、625 号土坑、650 号土坑、716 号土坑より各 1 点出土し、119 号土坑からは 3 点出土している。磨製石斧（第 104 図 141～143）は 196 号土坑、232 号土坑、360 号土坑から各 1 点出土している。磨石（第 108 図 182～第 109 図 198）は 6 号土坑、20 号土坑、52 号土坑、176 号土坑、219 号土坑、233 号土坑、235 号土坑、243 号土坑、257 号土坑より各 1 点出土し、215 号土坑からは 3 点出土している。圓石（第 110 図 210～第 111 図 214）は 10 号土坑、20 号土坑、76 号土坑、89 号土坑、739 号土坑から各 1 点出土している。石皿（第 111 図 216・217）は 135 号土坑、176 号土坑から各 1 点出土している。176 号土坑から出土した石皿は小型の完形品で、磨面の凹みが浅いものである。

#### (その他の遺物)

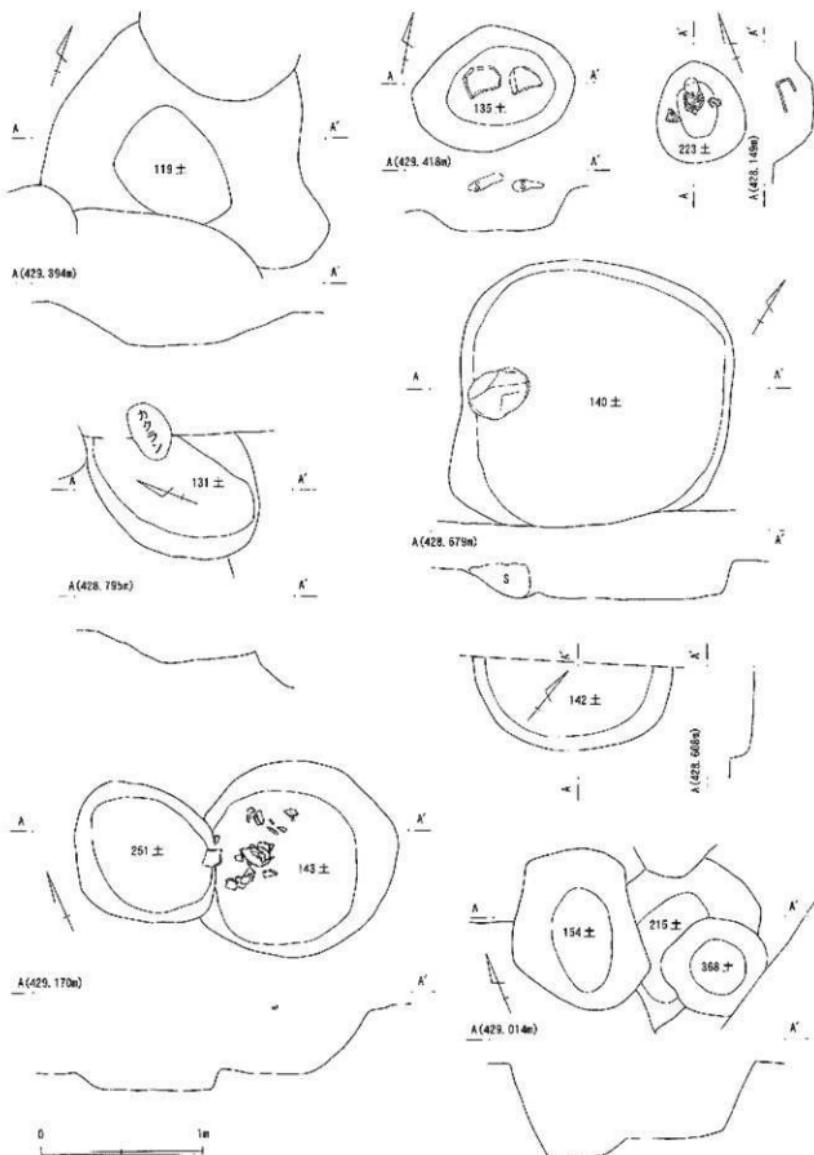
10 号土坑より垂飾（第 114 図 9）が 1 点、750 号土坑より土偶の脚部（第 113 図 1）が 1 点出土している。



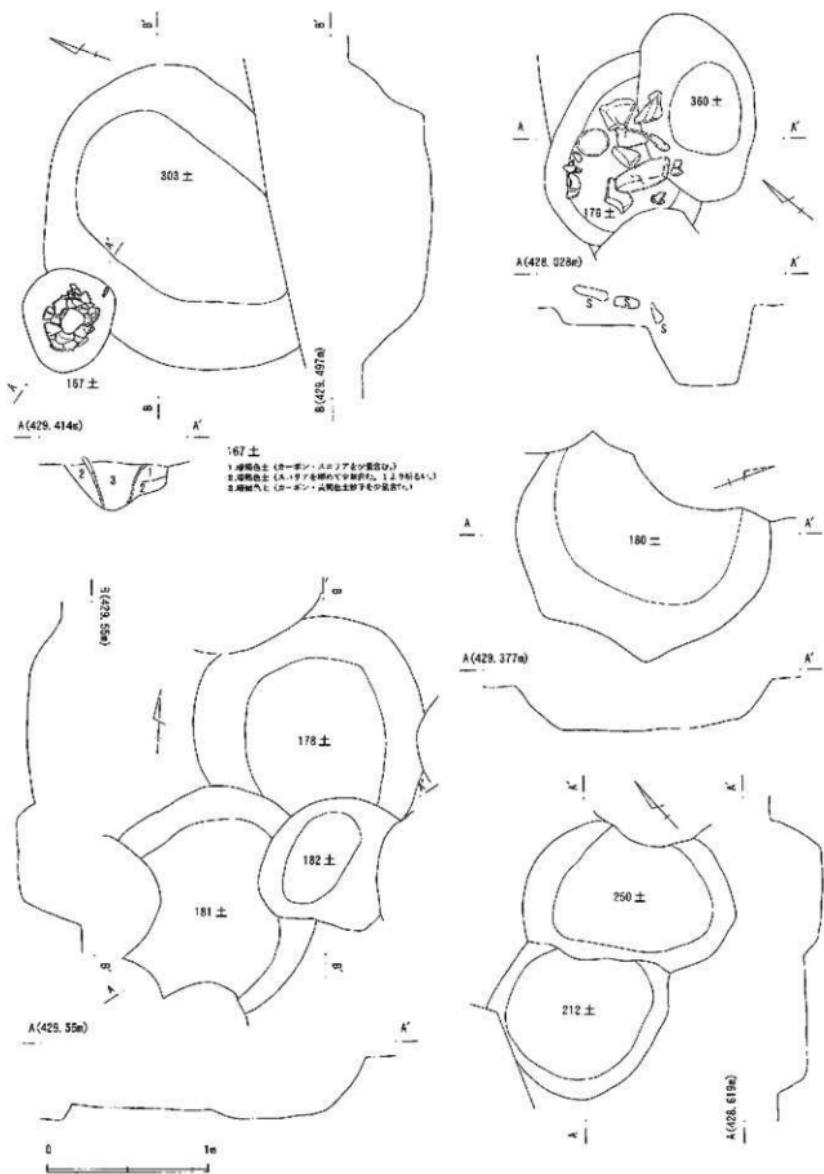
第 72 図 土坑 (1)



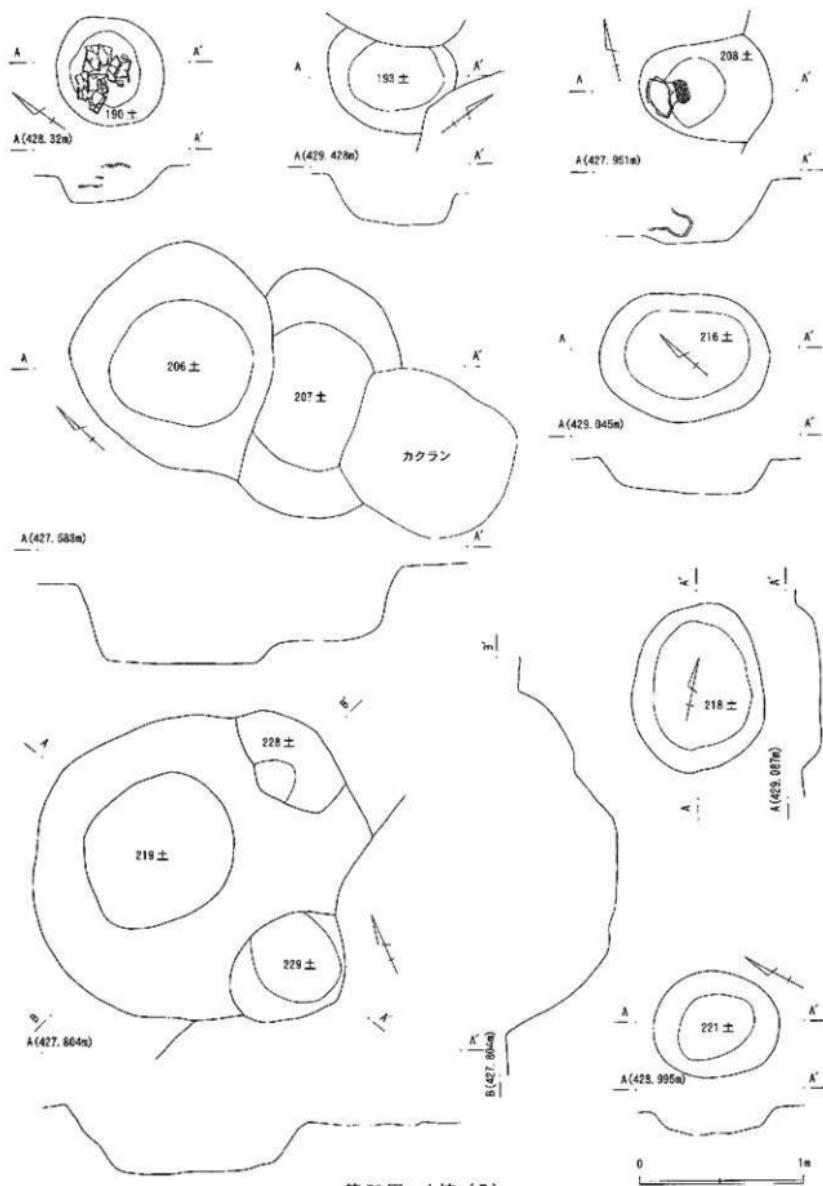
第73図 土坑 (2)



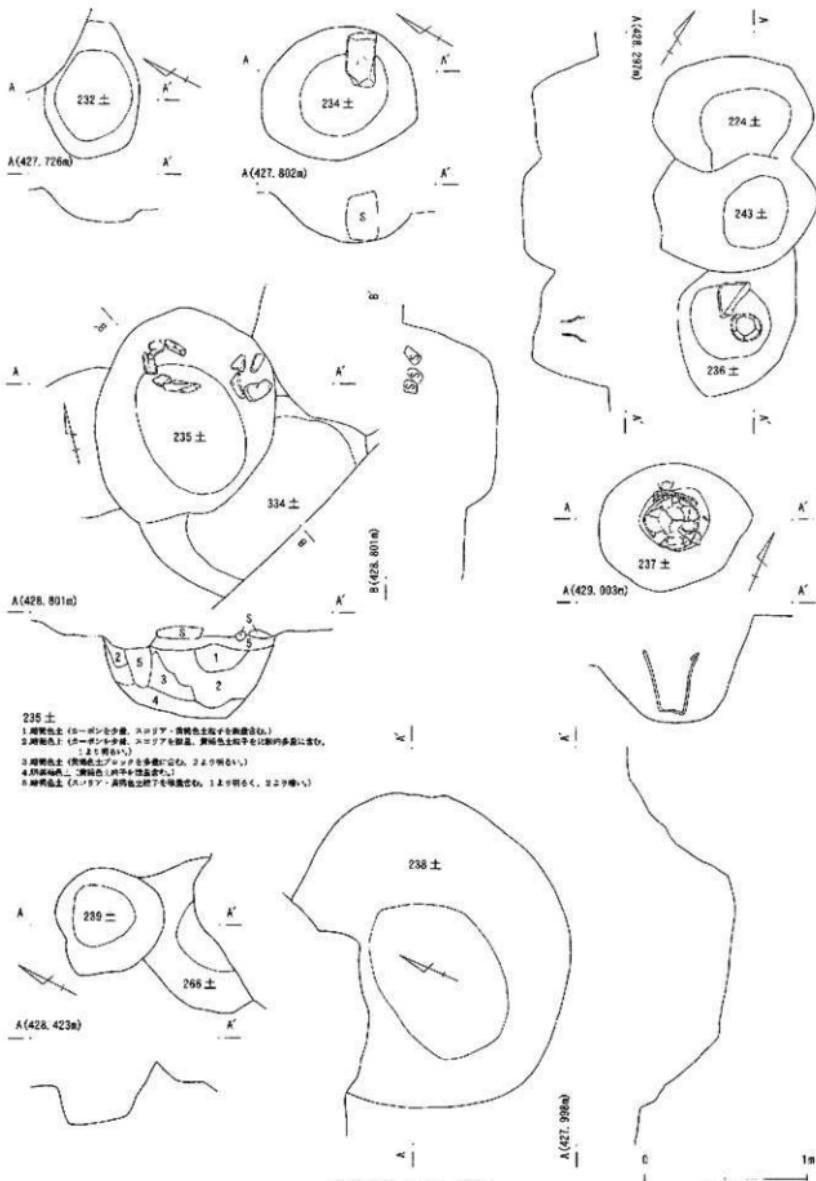
第74図 土坑(3)



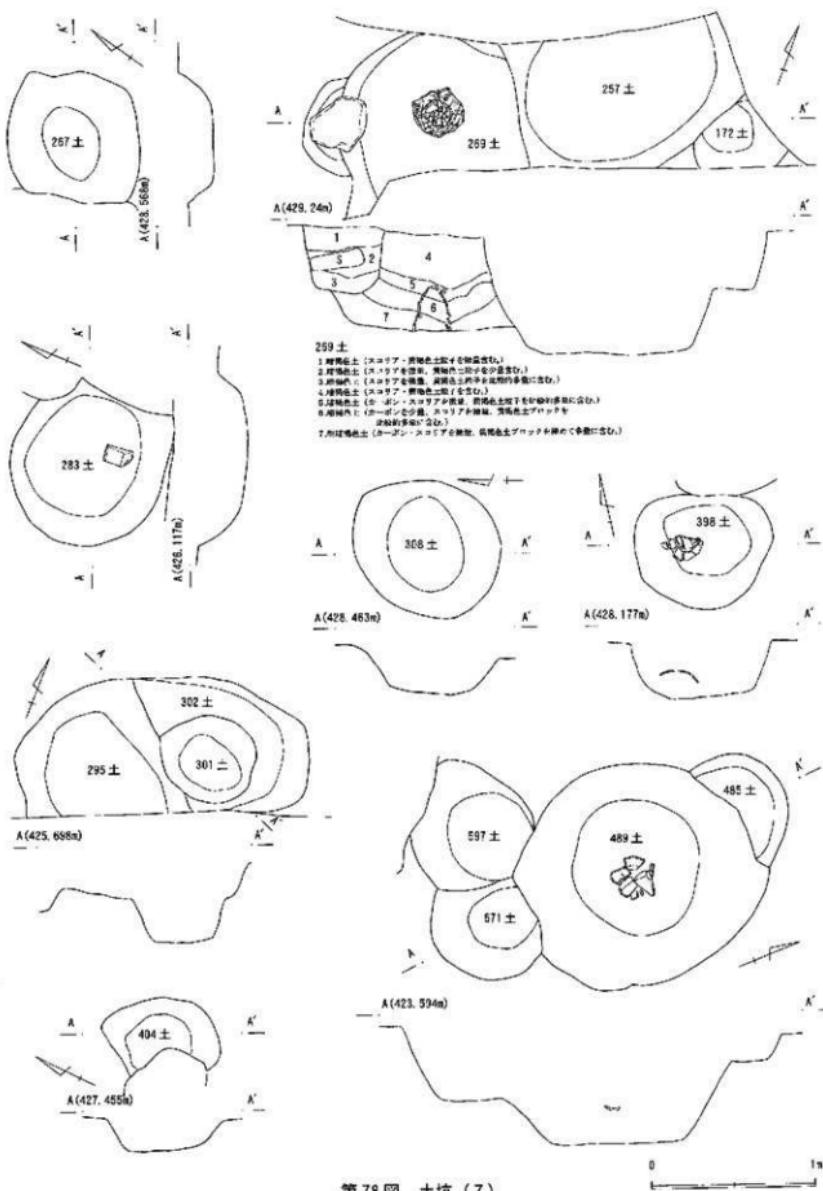
第75図 土坑 (4)



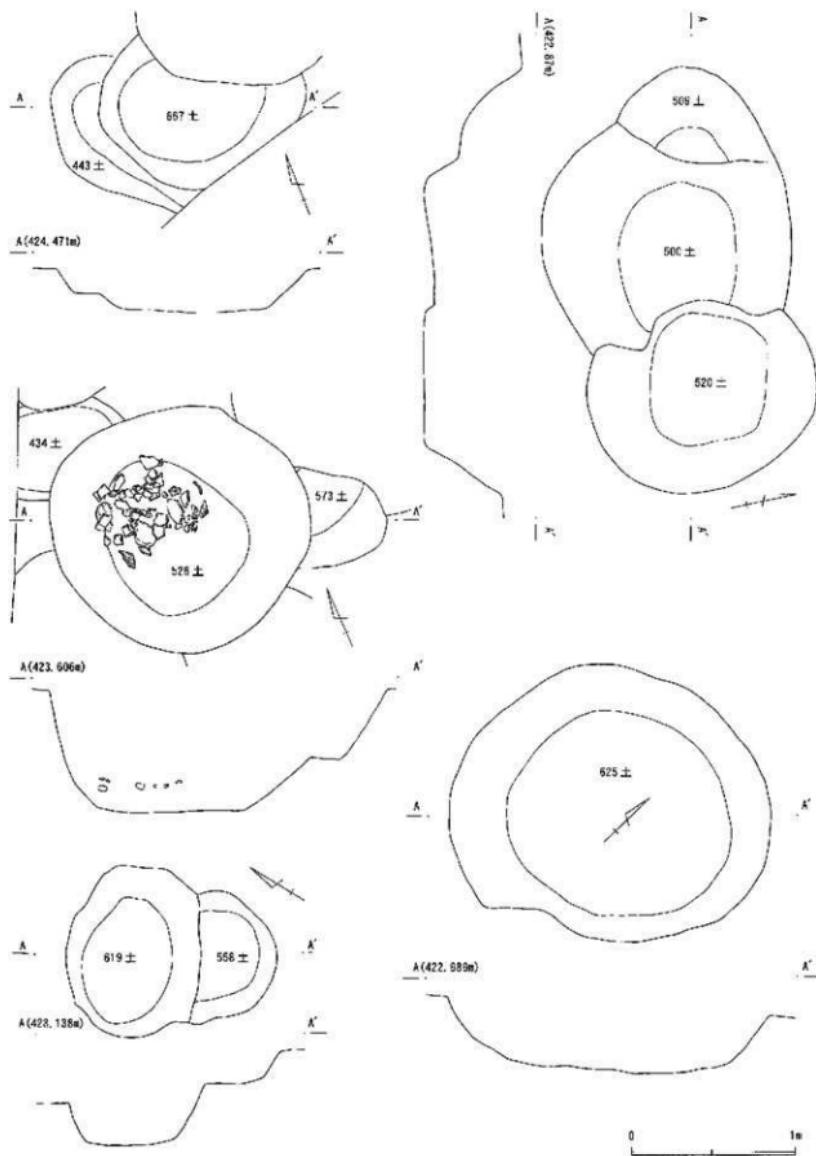
第76図 土坑(5)



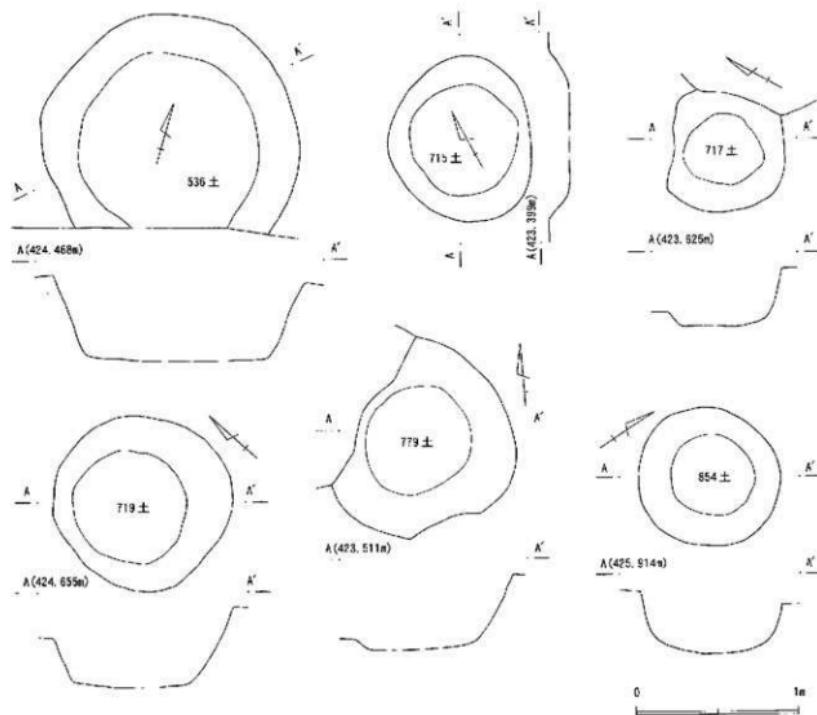
第77図 土坑 (6)



第78図 土坑 (7)



第79図 土坑 (8)



第80図 土坑(9)

番号	位置	深度	底面	形状	底面
1	W-28	125.116	44		
2	W-28	125.116	15	底面	
3	W-28	125.116	46	上-底面	
4	W-28	125.116	46	上-底面	
5	W-28	125.116	46	上-底面	
6	W-28	125.116	46	上-底面	
7	W-28	125.116	26		
8	W-28	125.116	19		
9	W-28	125.116	16		
10	W-28	125.116	16		
11	W-28	125.116	14		
12	W-28	125.116	14		
13	W-28	125.116	14		
14	W-28	125.116	14		
15	W-28	125.116	16		
16	W-28	125.116	16		
17	W-28	125.116	16		
18	W-28	125.116	16		
19	W-28	125.116	16		
20	W-28	125.116	16		
21	W-28	125.116	16		
22	W-28	125.116	16		
23	W-28	125.116	16		
24	W-28	125.116	16		
25	W-28	125.116	16		
26	W-28	125.116	16		
27	W-28	125.116	16		
28	W-28	125.116	16		
29	W-28	125.116	16		
30	W-28	125.116	16		
31	W-28	125.116	16		
32	W-28	125.116	16		
33	W-28	125.116	16		
34	W-28	125.116	16		
35	W-28	125.116	16		
36	W-28	125.116	16		

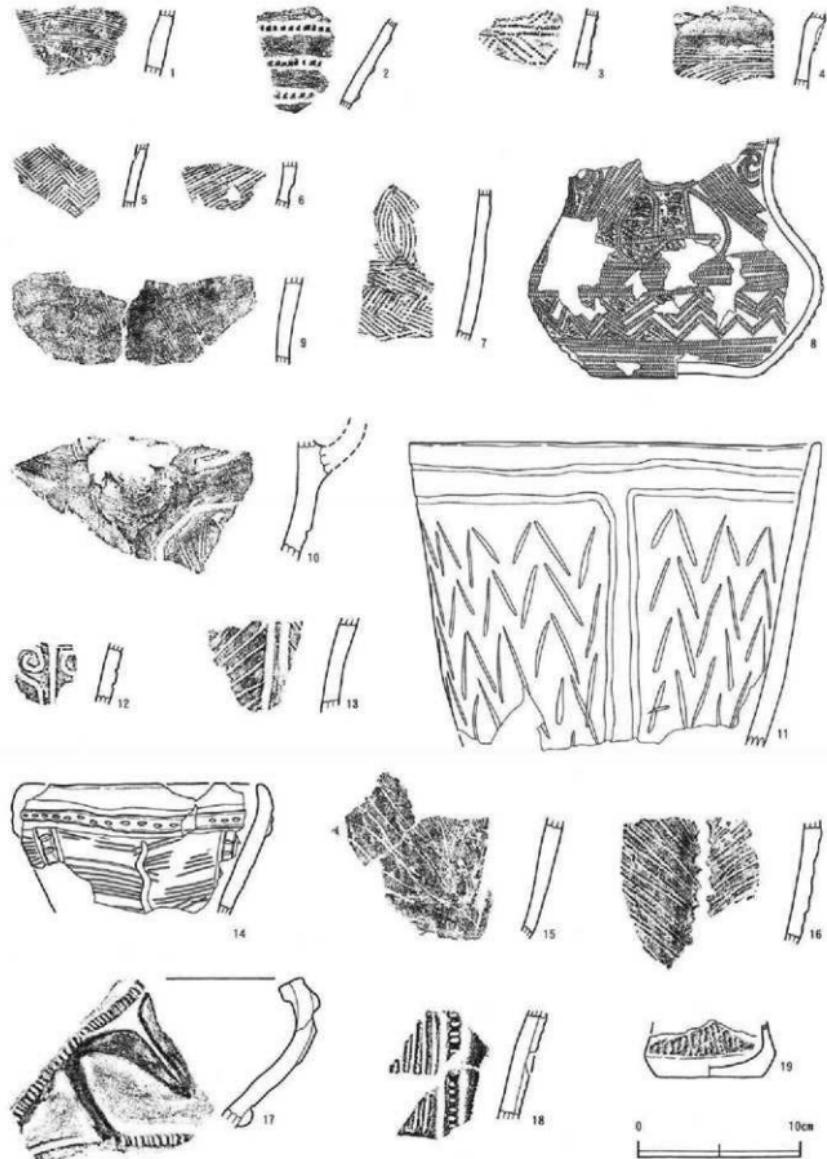
番号	位置	深度	底面	形状	底面
27	W-28	125.116	37		
28	W-28	125.116	37		
29	W-28	125.116	37		
30	W-28	125.116	37		
31	W-28	125.116	37		
32	W-28	125.116	37		
33	W-28	125.116	37		
34	W-28	125.116	37		
35	W-28	125.116	37		
36	W-28	125.116	37		
37	W-28	125.116	37		
38	W-28	125.116	37		
39	W-28	125.116	37		
40	W-28	125.116	37		
41	W-28	125.116	37		
42	W-28	125.116	37		
43	W-28	125.116	37		
44	W-28	125.116	37		
45	W-28	125.116	37		
46	W-28	125.116	37		
47	W-28	125.116	37		
48	W-28	125.116	37		
49	W-28	125.116	37		
50	W-28	125.116	37		
51	W-28	125.116	37		
52	W-28	125.116	37		
53	W-28	125.116	37		
54	W-28	125.116	37		
55	W-28	125.116	37		
56	W-28	125.116	37		
57	W-28	125.116	37		
58	W-28	125.116	37		
59	W-28	125.116	37		
60	W-28	125.116	37		
61	W-28	125.116	37		
62	W-28	125.116	37		
63	W-28	125.116	37		
64	W-28	125.116	37		
65	W-28	125.116	37		
66	W-28	125.116	37		
67	W-28	125.116	37		
68	W-28	125.116	37		
69	W-28	125.116	37		
70	W-28	125.116	37		
71	W-28	125.116	37		
72	W-28	125.116	37		
73	W-28	125.116	37		
74	W-28	125.116	37		
75	W-28	125.116	37		
76	W-28	125.116	37		
77	W-28	125.116	37		
78	W-28	125.116	37		
79	W-28	125.116	37		
80	W-28	125.116	37		
81	W-28	125.116	37		
82	W-28	125.116	37		
83	W-28	125.116	37		
84	W-28	125.116	37		
85	W-28	125.116	37		
86	W-28	125.116	37		
87	W-28	125.116	37		
88	W-28	125.116	37		
89	W-28	125.116	37		
90	W-28	125.116	37		
91	W-28	125.116	37		
92	W-28	125.116	37		
93	W-28	125.116	37		
94	W-28	125.116	37		
95	W-28	125.116	37		
96	W-28	125.116	37		
97	W-28	125.116	37		
98	W-28	125.116	37		
99	W-28	125.116	37		
100	W-28	125.116	37		
101	W-28	125.116	37		
102	W-28	125.116	37		
103	W-28	125.116	37		
104	W-28	125.116	37		
105	W-28	125.116	37		
106	W-28	125.116	37		
107	W-28	125.116	37		
108	W-28	125.116	37		
109	W-28	125.116	37		
110	W-28	125.116	37		
111	W-28	125.116	37		
112	W-28	125.116	37		
113	W-28	125.116	37		
114	W-28	125.116	37		
115	W-28	125.116	37		
116	W-28	125.116	37		
117	W-28	125.116	37		
118	W-28	125.116	37		
119	W-28	125.116	37		
120	W-28	125.116	37		
121	W-28	125.116	37		
122	W-28	125.116	37		
123	W-28	125.116	37		
124	W-28	125.116	37		
125	W-28	125.116	37		
126	W-28	125.116	37		
127	W-28	125.116	37		
128	W-28	125.116	37		
129	W-28	125.116	37		
130	W-28	125.116	37		
131	W-28	125.116	37		
132	W-28	125.116	37		
133	W-28	125.116	37		
134	W-28	125.116	37		
135	W-28	125.116	37		
136	W-28	125.116	37		
137	W-28	125.116	37		
138	W-28	125.116	37		
139	W-28	125.116	37		
140	W-28	125.116	37		
141	W-28	125.116	37		
142	W-28	125.116	37		
143	W-28	125.116	37		
144	W-28	125.116	37		
145	W-28	125.116	37		
146	W-28	125.116	37		
147	W-28	125.116	37		
148	W-28	125.116	37		
149	W-28	125.116	37		
150	W-28	125.116	37		
151	W-28	125.116	37		
152	W-28	125.116	37		
153	W-28	125.116	37		
154	W-28	125.116	37		
155	W-28	125.116	37		
156	W-28	125.116	37		
157	W-28	125.116	37		
158	W-28	125.116	37		
159	W-28	125.116	37		
160	W-28	125.116	37		
161	W-28	125.116	37		
162	W-28	125.116	37		
163	W-28	125.116	37		
164	W-28	125.116	37		
165	W-28	125.116	37		
166	W-28	125.116	37		
167	W-28	125.116	37		
168	W-28	125.116	37		
169	W-28	125.116	37		
170	W-28	125.116	37		
171	W-28	125.116	37		
172	W-28	125.116	37		
173	W-28	125.116	37		
174	W-28	125.116	37		
175	W-28	125.116	37		
176	W-28	125.116	37		
177	W-28	125.116	37		
178	W-28	125.116	37		
179	W-28	125.116	37		
180	W-28	125.116	37		
181	W-28	125.116	37		
182	W-28	125.116	37		
183	W-28	125.116	37		
184	W-28	125.116	37		
185	W-28	125.116	37		
186	W-28	125.116	37		
187	W-28	125.116	37		
188	W-28	125.116	37		
189	W-28	125.116	37		
190	W-28	125.116	37		
191	W-28	125.116	37		
192	W-28	125.116	37		
193	W-28	125.116	37		
194	W-28	125.116	37		
195	W-28	125.116	37		
196	W-28	125.116	37		
197	W-28	125.116	37		
198	W-28	125.116	37		
199	W-28	125.116	37		
200	W-28	125.116	37		
201	W-28	125.116	37		
202	W-28	125.116	37		
203	W-28	125.116	37		
204	W-28	125.116	37		
205	W-28	125.116	37		
206	W-28	125.116	37		
207	W-28	125.116	37		
208	W-28	125.116	37		
209	W-28	125.116	37		
210	W-28	125.116	37		
211	W-28	125.116	37		
212	W-28	125.116	37		
213	W-28	125.116	37		
214	W-28	125.116	37		
215	W-28	125.116	37		
216	W-28	125.116	37		
217	W-28	125.116	37		
218	W-28	125.116	37		
219	W-28	125.116	37		
220	W-28	125.116	37		
221	W-28	125.116	37		
222	W-28	125.116	37		
223	W-28	125.116	37		
224	W-28	125.116	37		
225	W-28	125.116	37		
226	W-28	125.116	37		
227	W-28	125.116	37		
228	W-28	125.116	37		
229	W-28	125.116	37		
230	W-28	125.116	37		
231	W-28	125.116	37		
232	W-28	125.116			



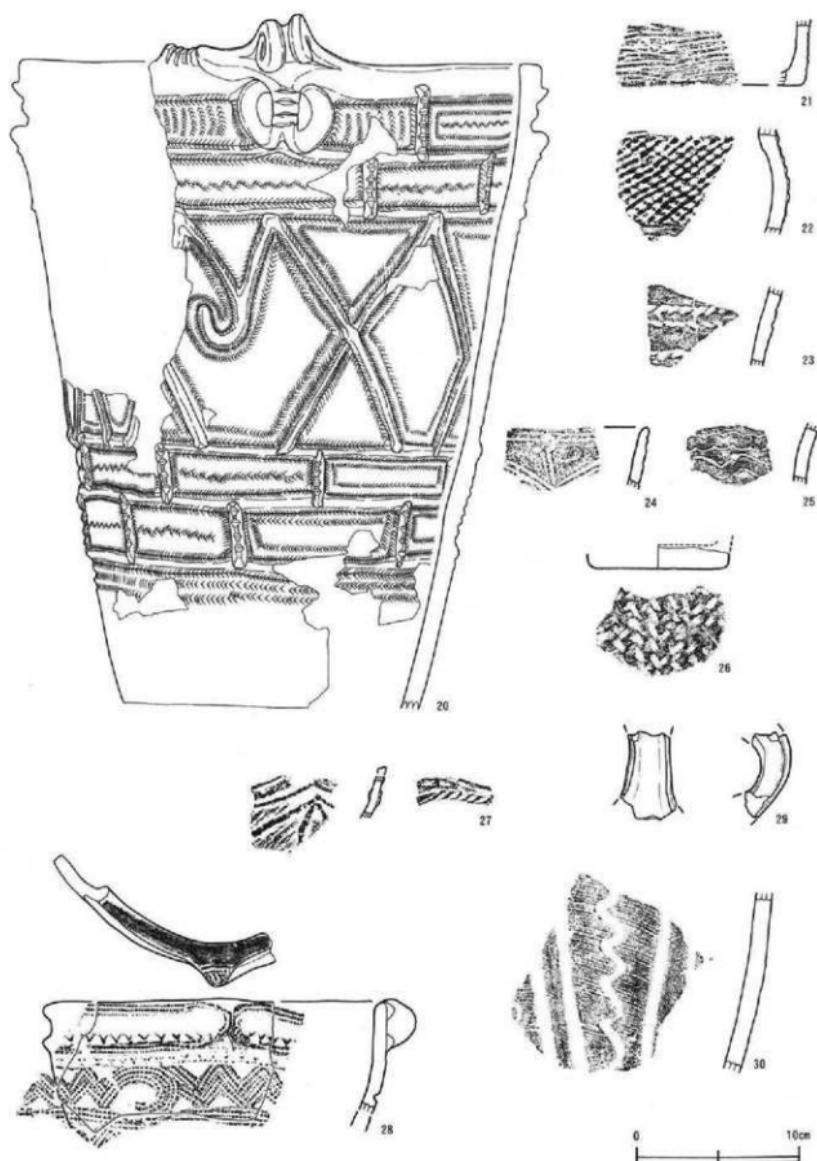




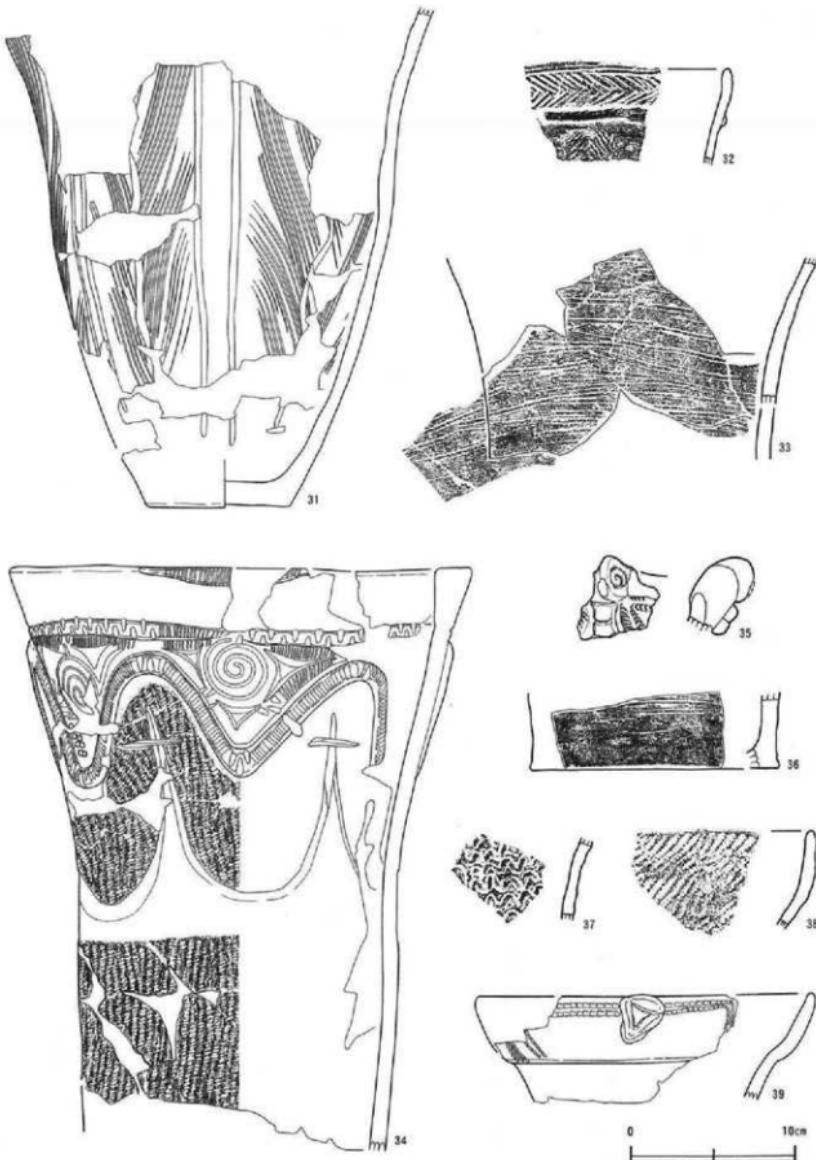




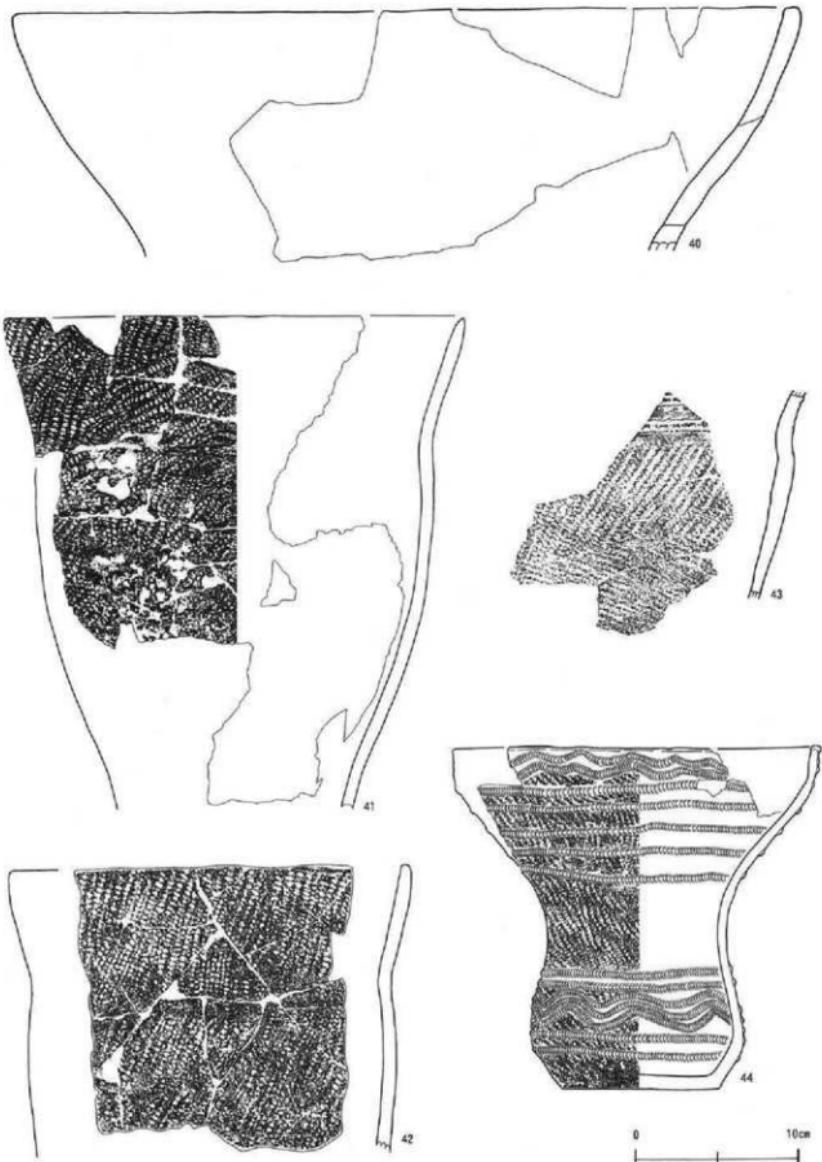
第81図 土坑出土土器 (1)



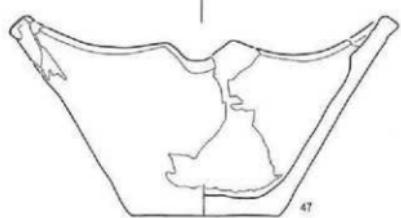
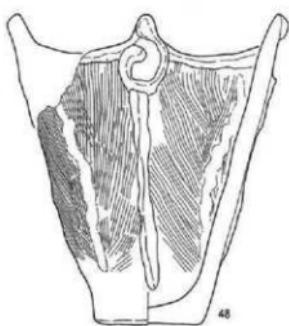
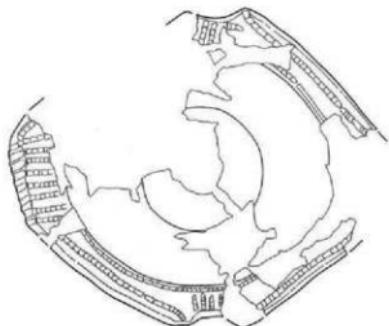
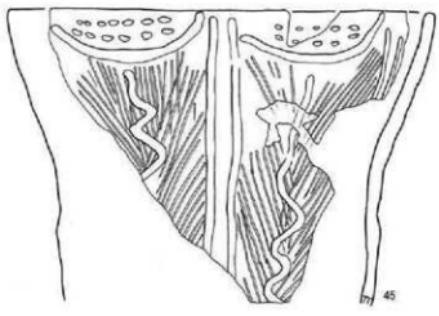
第82図 土坑出土土器（2）



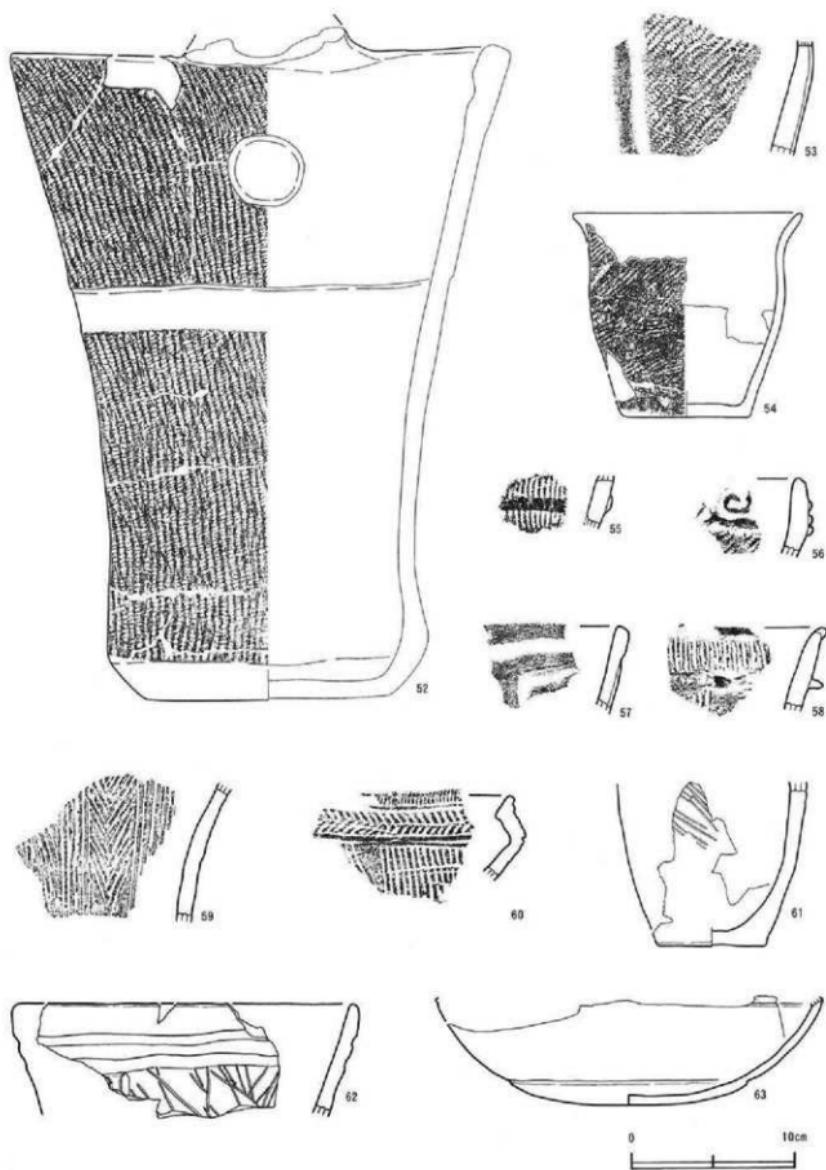
第83圖 土坑出土土器 (3)



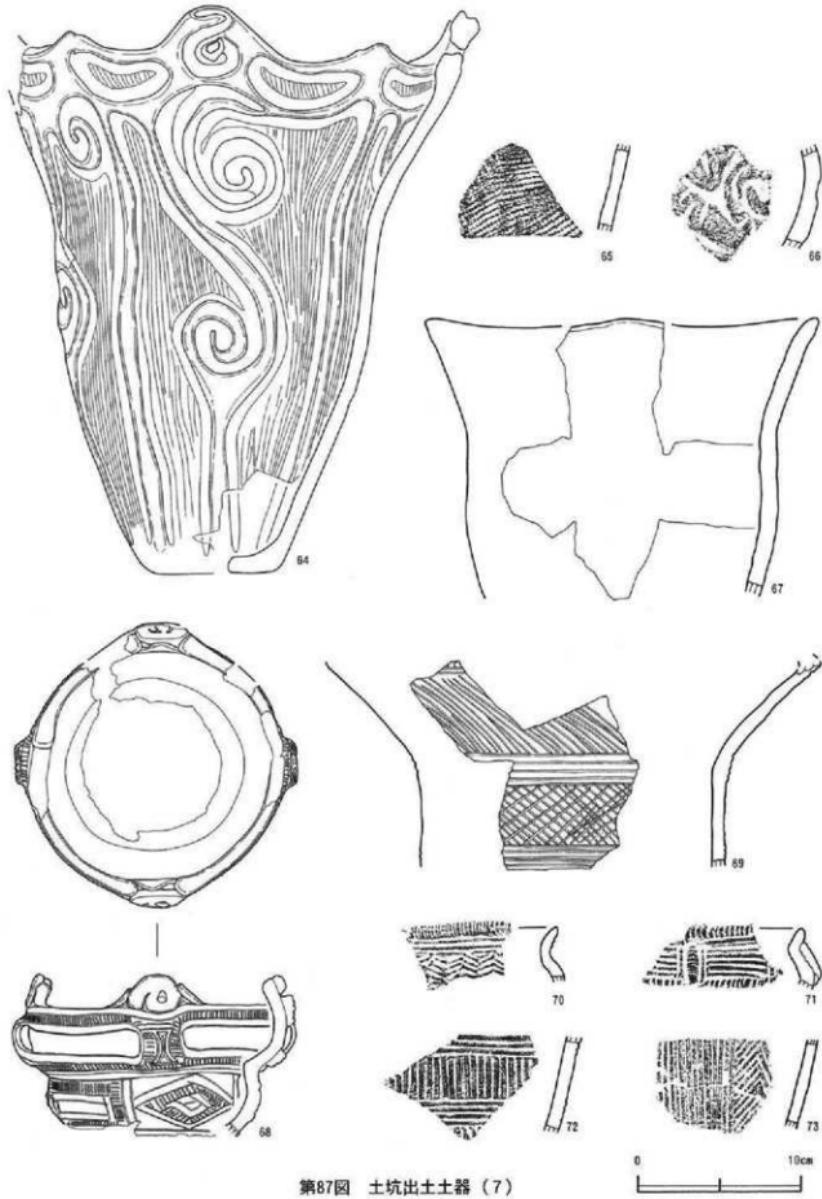
第84図 土坑出土土器 (4)



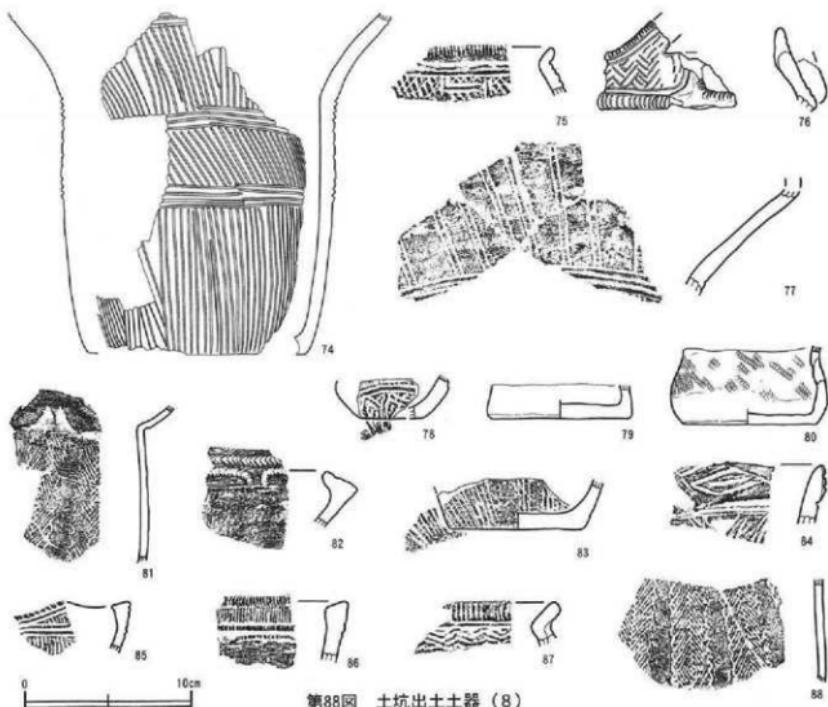
第85図 土坑出土土器 (5)



第86図 土坑出土土器（6）



第87図 土坑出土土器 (7)



第88図 土坑出土土器(8)

### 3. 屋外炉

#### 1号屋外炉(第89図)

ロ-31・ロ-32 グリッドに位置している。34号住居跡、154号土坑、275号土坑と重複しており、重複関係はこれらの遺構を切って構築している。

遺構検出のための精査を行ったところ土坑が検出された。そこで、検出された土坑の調査を行ったところ、中から石圓炉ではないかと思われる焼土粒子を伴った石組が検出された。このため、住居跡の存在も視野に入れながら周辺を丹念に精査したが、床面やピット、壁等が確認されなかったこと、また、周辺に出土した遺物と同時期の遺物がみられないことから屋外炉と判断した。

炉石は引き抜かれたためか、南側と西側に残っているだけである。ただ、炉の東側と北側で平らな礫が検出されていることから、これらの礫が炉石に用いられていたものと考えられる。南側が調査区域外にあるため、全貌は明らかでないが、平面形は楕円形を呈するものと思われ、規模は東西が 149cm、南北が 180cm で、深さは 56cm を有する。焼土はブロックや粒子が多く認められた。

土器(第90図)は曾利IV式土器(1・2)と曾利V式土器(3)が出土した。1は口縁部に細い隆帯により弧線文が施され、弧線文と弧線文のつなぎ目に円または渦巻状の沈線が施されている。2は渦巻つなぎ弧文が施されており、地文はR Lの単節繩文である。3はハの字文が施された土器で、隆帯と隆帯に沿う沈線により綴の区画が行われている。

本屋外炉の時期については、中期後半の曾利IV式土器と曾利V式土器が出土していることから、その時期に属するものと考えられる。

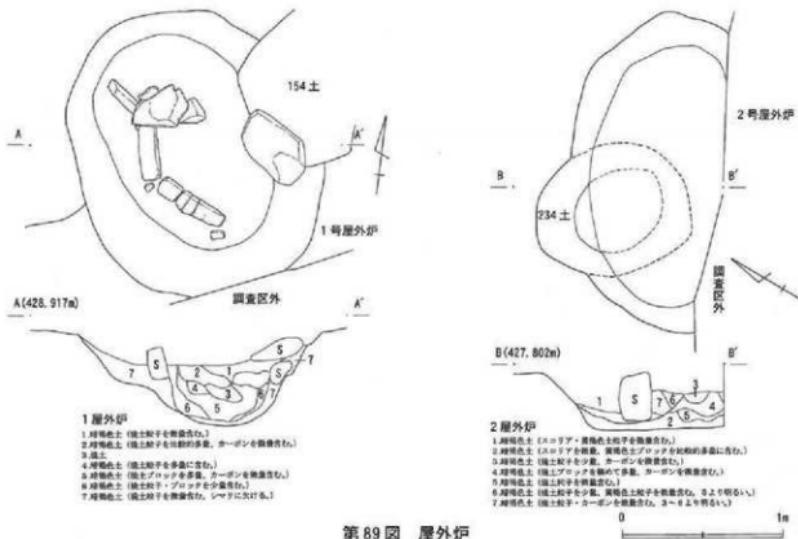
### 2号屋外炉（第89図）

ヘ-34・ト-34 グリッドに位置している。41号住居跡、234号土坑と重複しており、重複関係は234号土坑によって切られ、41号住居跡を切って構築している。

遺構検出のための精査を行ったところ、焼土の粒子やブロックを覆土に含む土坑が検出された。このため、住居跡の存在も視野に入れながら周辺を丹念に精査したが、床面やピット、壁等が確認されなかつたことから屋外炉として扱った。

南側が調査区域外にあるため全貌は明らかでないが、平面形は橢円形を呈するものと思われ、現状で確認できた規模は東西が1.9m、南北が1.0mで、深さは35cmを有する。焼土の明確な堆積はみられなかつたが、焼土の粒子やブロックが多量に認められた。

本屋外炉から出土した遺物は、磨耗した土器の小片がわずかに出土しただけである。このため、本住居跡の時期の判断が極めて困難なものとなっているが、中期後葉の曾利IV式に属する234号土坑によって切られ、前期終末の十三菩提式期に属する41号住居跡を切っていることから、前期終末から中期後葉の間の時期に属するものと考えられる。



第89図 屋外炉



第90図 1号屋外炉出土土器

#### 4. 竪穴状遺構

##### 1号竪穴状遺構（第92図）

V-27グリッドに位置している。48号土坑と重複しており、重複関係は48号土坑によって切られている。

南東側が調査区域外にあるため、全貌は明らかでないが、平面形は円形を呈するものと思われ、現状で確認できた規模は東西2.5m、南北1.7mである。壁は確認された壁高が最大で9cmと浅いため、はつきりとは言い切れない面もあるが、緩やかに立ち上がる傾向が窺える。床は概ね平坦で、硬化面は確認されず軟弱である。

上器（第91図）は十三苦提式土器（1）と正領ヶ台式土器（2・3）が出土した。1は横位や波状の結節浮線文が施され、2は横位の集合沈線、3は弧状を呈する平行沈線文と三角形の刻目が施されている。

本竪穴状遺構の時期については、土器の出土量が非常に少ないとから判断に困難を伴うが、中期初頭の正領ヶ台式土器が出土していることから、その時期に属するものと考えられる。



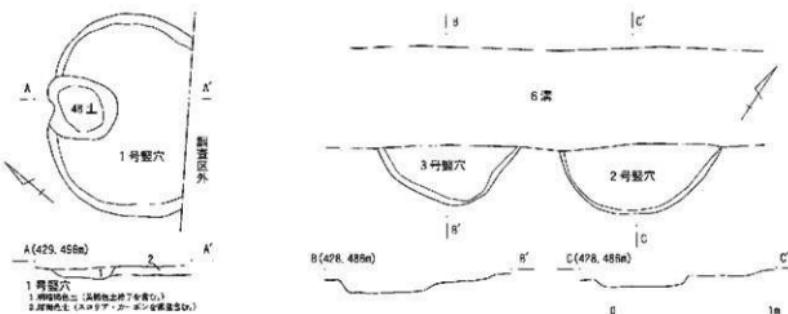
第91図 1号竪穴状遺構出土土器

##### 2号竪穴状遺構（第92図）

T-28・U-28グリッドに位置している。6号溝状遺構と重複しており、重複関係は6号溝状遺構によって切られている。

北西側の概ね2分の1が6号溝状遺構によって完全に切られているため、全貌は明らかでないが、平面形は円形を呈するものと思われ、現状で確認できた規模は東西2.0m、南北0.9mである。壁は確認された壁高が最大で8cmと浅いため、はつきりとは言い切れない面もあるが、緩やかに立ち上がる傾向が窺える。床は概ね平坦で、硬化面は確認されず軟弱である。

本竪穴状遺構からは遺物がまったく出土していない。このため、本遺構の時期を判断することが極めて困難なものとなっている。ただ、6号溝状遺構によって切られていることから、6号溝状遺構よりも古いということは確実である。ところで、本遺構の覆土は今回調査された縄文時代の住居跡や時期の判断が可能な土坑の覆土と色調や状態が酷似している。このことから、これらと同様の時期に属するのではないかと思われる。



第92図 1号・2号・3号竪穴状遺構

### 3号堅穴状造構（第92図）

T-28グリッドに位置している。6号溝状造構と重複しており、重複関係は6号溝状造構によって切られている。

北西側の概ね2分の1が6号溝状造構によって完全に切られているため、全貌は明らかでないが、平面形は円形を呈するものと思われ、現状で確認できた規模は東西1.8m、南北0.8mである。壁は確認された壁高が最大で15cmと浅いため、はつきりとは言い切れない面もあるが、緩やかに立ち上がる傾向が窺える。床は北西側が低くなるように緩やかな傾斜がみられ、硬面は確認されず軟弱である。

本堅穴状造構からは遺物がまったく出土していない。このため、本造構の時期を判断することが極めて困難なものとなっている。ただ、6号溝状造構によって切られていることから、6号溝状造構よりも古いということは確実である。ところで、本造構の覆土は今回調査された縄文時代の住居跡や時期の判断が可能な土坑の覆土と色調や状態が酷似している。のことから、これらと同様の時期に属するのではないかと思われる。

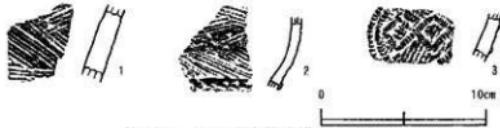
### 4号堅穴状造構（第16図）

R-24・R-25グリッドに位置している。7号住居跡、9号住居跡、77号土坑、5号溝状造構と重複しており、重複関係は7号住居跡、5号溝状造構によって切られ、9号住居跡、77号土坑を切って構築している。

本堅穴状造構の北西側が畠境の段差によって削平を受けていることから、全貌は明らかでないが、平面形は不整円形を呈するものと思われ、現状で確認できた規模は東西3.1m、南北3.9mである。壁は緩やかに立ち上がっており、確認された壁高は最大で23cmを測る。床は北西側が低くなるように緩やかな傾斜がみられ、硬面は確認されず軟弱である。

土器（第93図）は諸磯c式土器（1・2）や十三菩提式土器（3）が少量ながら出土した。1は横方向の矢羽根状条線と横位の条線が施され、2は横方向の矢羽根状条線と文様帶を区画する結節浮線文が施されている。3はR-Lの単節縄文による羽状縄文を地文にして、結節浮線文が施されている。

本堅穴状造構の時期については、前期後半の諸磯c式土器や終末の十三菩提式土器が出土し、また、7号住居跡と9号住居跡との重複関係から、前期終末の十三菩提式期に属するものと考えられる。



第93図 4号堅穴状造構出土土器

### 5号堅穴状造構（第20図）

T-26・U-26グリッドに位置している。13号住居跡と重複しており、重複関係は13号住居跡によつて切られている。

南東側が調査区域外にあるため、全貌は明らかでないが、平面形は円形または椭円形を呈するものと思われ、現状で確認できた規模は東西2.4m、南北1.1mである。壁は確認された壁高が最大で12cmと浅いため、はつきりとは言い切れない面もあるが、緩やかに立ち上がる傾向が窺える。床は若干凸凹しており軟弱である。

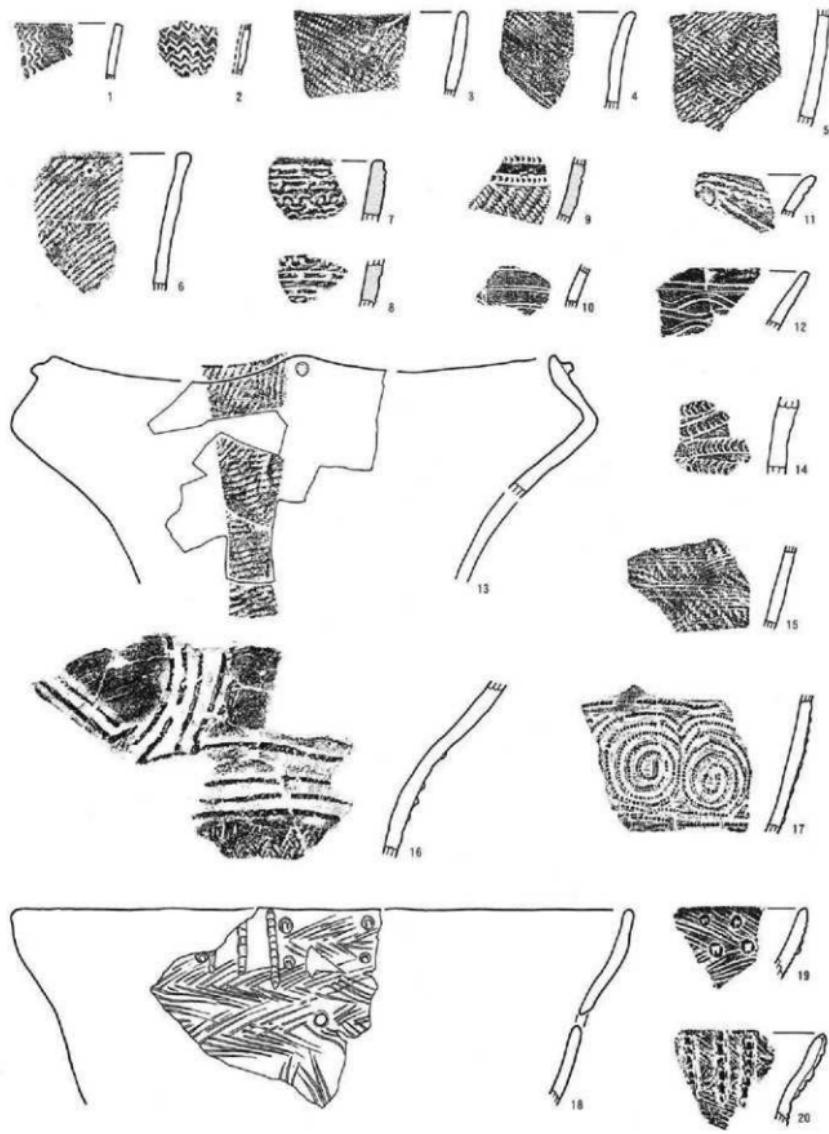
本堅穴状造構からは遺物が出土していないため、時期を判断が極めて困難なものとなっている。ただ、中期後半の曾利V式期に属する13号住居跡によって切られていることから、その時期以前に属するものと考えられる。

## 5. 遺構外出土遺物

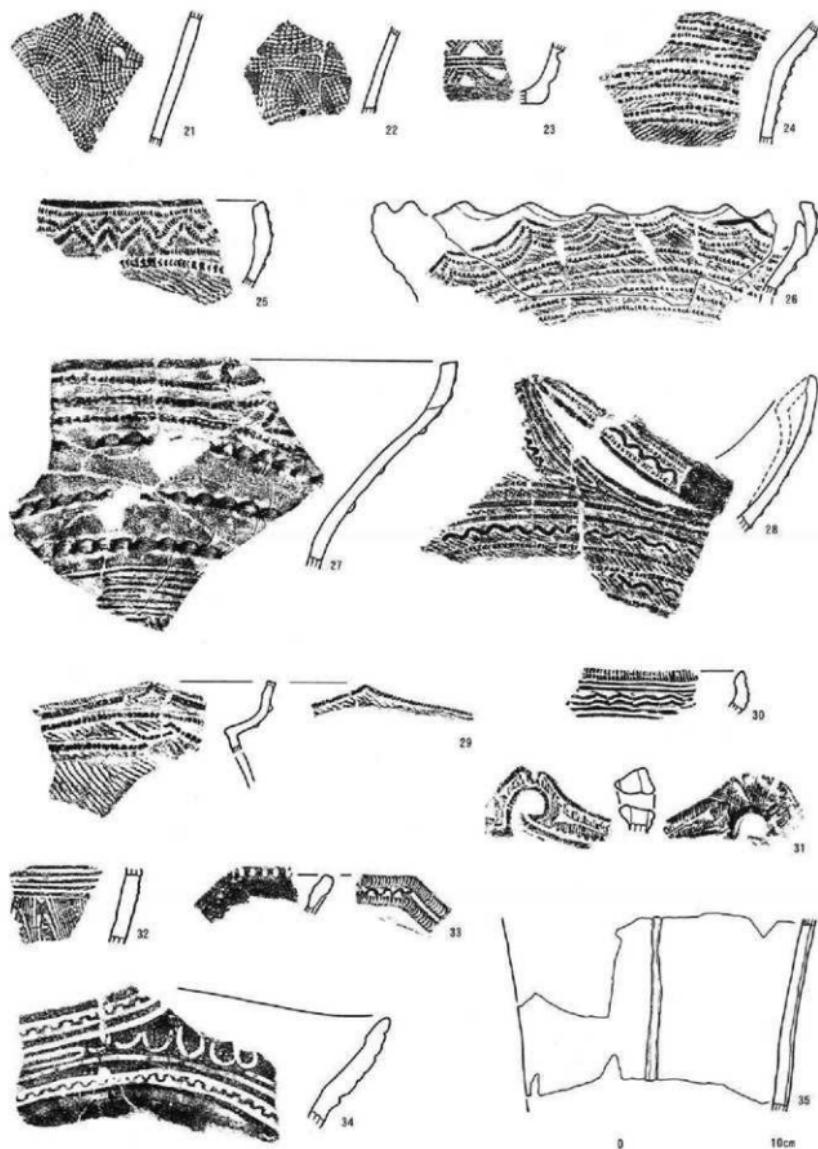
ここでは、遺構外から出土した縄文時代の土器や石器、上製品等を示した。土器は今回の発掘調査で検出された遺構の時期に伴わないものもわずかながらみられるが、大方は検出された遺構の時期と同様の時期のものが出土している。このような傾向は土器以外の石器や土製品等でも、同様の傾向を示しているものと思われる。本報告においては、紙面の関係上、全ての遺物を図示することはできないため、主なものと報告する。

### 土器（第94図～第96図）

1・2は押型文土器で、1は楕円と山形の押型文が縦位に施されており、2は山形の押型文が横位に施されている。3～6は駿迎堂ア式土器で、内面に指痕痕が残っているものである。3はL.Rの単節縄文によるものと思われる羽状縄文、4はR.Lの単節縄文とR.Rの無節縄文による付加条縄文、5はL.LとR.Rの無節縄文が格子目状に、6はL.Rの無節縄文が施されている。7～9は黒浜式土器で、胎土には纖維を含んでいる。7・8は半截竹管による横位の押し引き文とコンパス文が施されており、9はL.Rの単節縄文を地文にして横位の連続爪形文が施されている。10～12は諸穂a式土器で、10は肋骨文で、平行沈線による縦位の凸凹と、横位の緩やかな弧線が施され、11は波状口縁で、口縁に沿うように半截竹管による押し引き文が施されており、さらに、円形刺突文が押捺されている。12は半截竹管による波状の沈線文が施されている。13～16は諸穂b式土器で、13は波状口縁で、L.Rの無節縄文が施されており、波頂部にボタン状突起を有する。14は連続爪形文、15はR.Lの単節縄文を地文にして、横位の平行沈線文が施され、16はヘラで斜めに刻まれた浮線文が施されている。17～20は諸穂c式土器で、17は横位の条線上に渦巻状結節浮線文が施されている。18は横方向の矢羽根状条線の上に棒状結節浮線文とボタン状貼付文が、19は横方向の矢羽根状条線の上にボタン状貼付文、20は横方向の矢羽根状条線の上に棒状結節浮線文が施されている。21～28は十三菩提式土器で、21・22は結節回線文が施されており、23は三角印刻文が施されている。24はL.Rの無節縄文を地文にして、横位に結節浮線文が施され、25はR.Lの単節縄文を地文にして、横位や船底に結節浮線文が施されている。26は波状口縁で、口縁に沿って2条の結節浮線文が施され、以下、横位の結節浮線文が施されており、地文はL.Rの単節縄文である。27は結節浮線文と押圧隆脊が施されており、28は波状口縁で、口縁を板状にして折り返し、貼り合わせたものである。R.Lの単節縄文を地文にして、横位の結節浮線文と波状の浮線文が施されている。29は大藏山式土器で、波状口縁を呈し、R.Lの単節縄文を地文にして粘土紐上をU状工具によって押し引く特殊山帯文が施されている。また、口唇部内面にR.Lの単節と思われる縄文が施されている。30～35は五鶴ヶ台式土器で、30は口縁が「く」の字状に屈折しているもので、波状の集合沈線が施されており、31は口唇部のアーチ状突起で、無線文と三角形の刻目、三叉文が施されている。32は横位の集合沈線と木口状擦糸文が施されている。33は浅鉢形上器の口縁部破片で、内面の口唇部下に連続爪形文と父瓦刺突文が施されている。34は波状口縁で、交矢刺突文とU字状の沈線が施されている。35は脣部に峰帶が垂下しているだけだが、おそらくY字状の峰帶であろう。36～38は猪沢式土器で、角押文が施されている。39～41は新道式土器で、キャタピラ文と三角押文が施されている。42～45は藤内式土器で、42は峰帶に沿ってキャタピラ文や三角押文が施されているが、峰帶上には刻目が施されている。一応、峰帶上の刻目から藤内式土器としたが、三角押文が施されていることから新道式土器とすべきなのかもしれない。43は爪形文と半截竹管状の工具による刺突が施されている。44はパネル文で、区画内は横位の平行沈線文で充填されている。45は突起で刻目がつけられている。46～48は井戸尻式土器で、46は口縁部が無文で、頸部にある低い峰帶上に縦位や横位の沈線や三叉文状の沈線が施されている。47は交矢刺突文や縫線上に縫杉上:の刻目が施され、48は縦位の沈線や斜行する峰帶上に刻目が施されている。49・50は曾利II式土器で、49はR.Lの単節縄文を地文にして、粘土の貼り付けによる蛇行懸垂文等が施されている。50は頸部に3本の横位縫線や蛇行峰帶が施



第94図 遺構外出土土器 (1)



第95図 造構外出土土器 (2)



第96図 遺構外出土土器（3）

されており、地文は縦位の条線である。51～54は曾利IV式土器で、51はL Rの単節縄文を地文にして、II線上に沈線による弧形文が施され、以下、胴部に沈線による懸垂文が施されている。52は条線を地文にして、隆帯により渦巻文が施されている。53は縦位の条線を地文にして、沈線による蛇行懸垂文が施されている。54は斜位の条線を地文にして、隆帯と隆帯に沿う浅い沈線による縱の区画や、沈線による蛇行懸垂文が施されている。55・56は曾利V式土器で、55はハの字文を地文にして、沈線によるII状の区画が行われ、56はハの字文を地文にして、隆帯による区画が行われている。57・58は称名寺式土器で、太めの沈線により文様を描き、57はR Lの単節縄文が、58はL Rの単節縄文がそれぞれ区画内に充填されている。

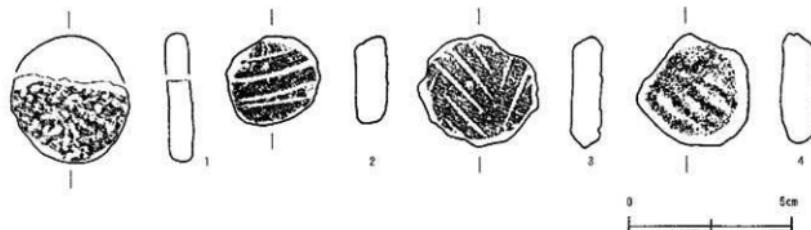
#### 石器（第98図～第112図）

本遺跡では住居跡や土坑等の遺構外や、古墳時代や平安時代の住居跡や溝状遺構といった縄文時代以外の遺構の中からも石器が出土しており、種類も石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧、圓石、石皿がみられる。

石鏃（第98図1、第99図29～36）は9点図示した。1は1号住居跡出土、29は8号溝出土、他はグリッドから出土したもので、すべて黒曜石製である。石匙（第100図57）はグリッドから出土したもの1点図示した。つまみ部分を欠損している。打製石斧（第102図99～第104図136）は38点図示した。3号溝状遺構から出土したものが3点、5号溝状遺構から出土したものが4点、6号溝状遺構から出土したものが11点、グリッドから出土したものが20点である。磨製石斧（第104図144～146）は3点図示した。すべて6号溝状遺構から出土したものである。圓石（第110図206～209）は4点図示した。5号溝状遺構から出土したものが1点、6号溝状遺構から出土したものが3点である。石皿（第112図221・223）は2点図示した。グリッドから出土したものである。

#### その他の遺物（第97図2～4）

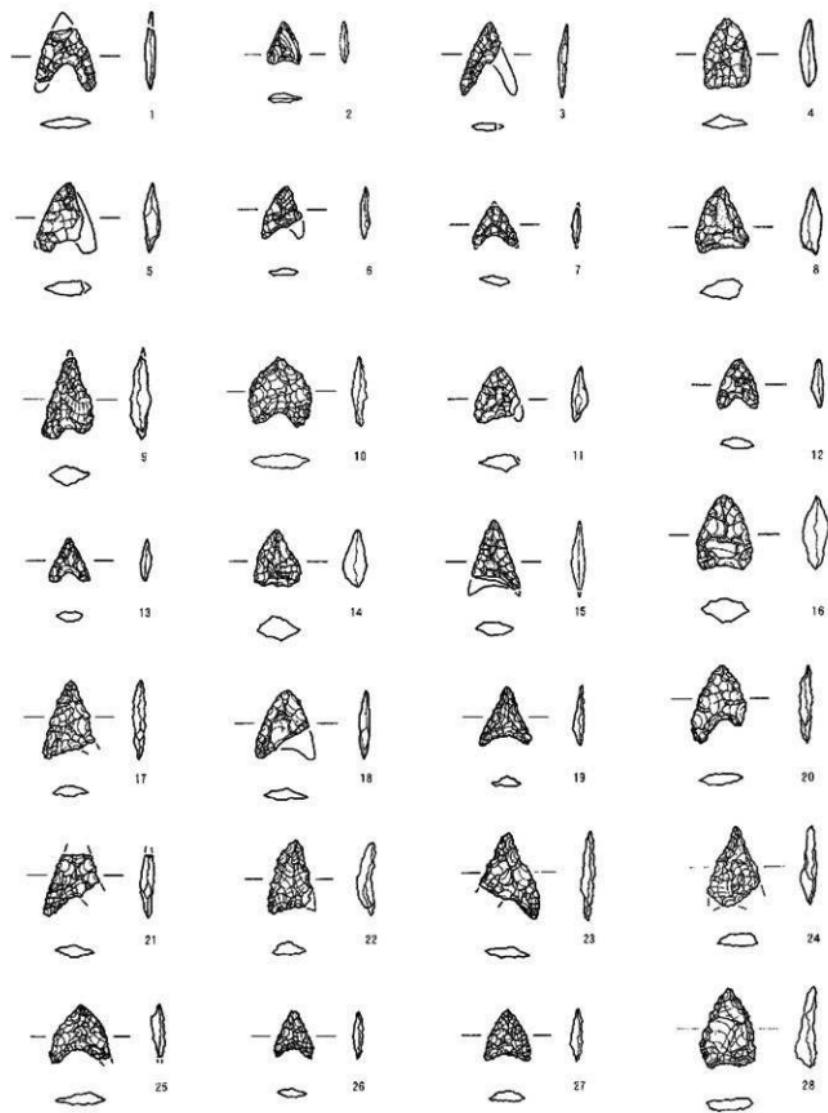
土製円盤が3点出土している。2は円盤の側面全周が研磨されており、打ち欠かれたままの面は残っていない。3は円盤側面の対角線にあたる部分が一部研磨されているだけで、ほとんどが打ち欠かれたままの状態である。4は全体的に磨耗気味であるが、円盤側面の3分の2が研磨されている。



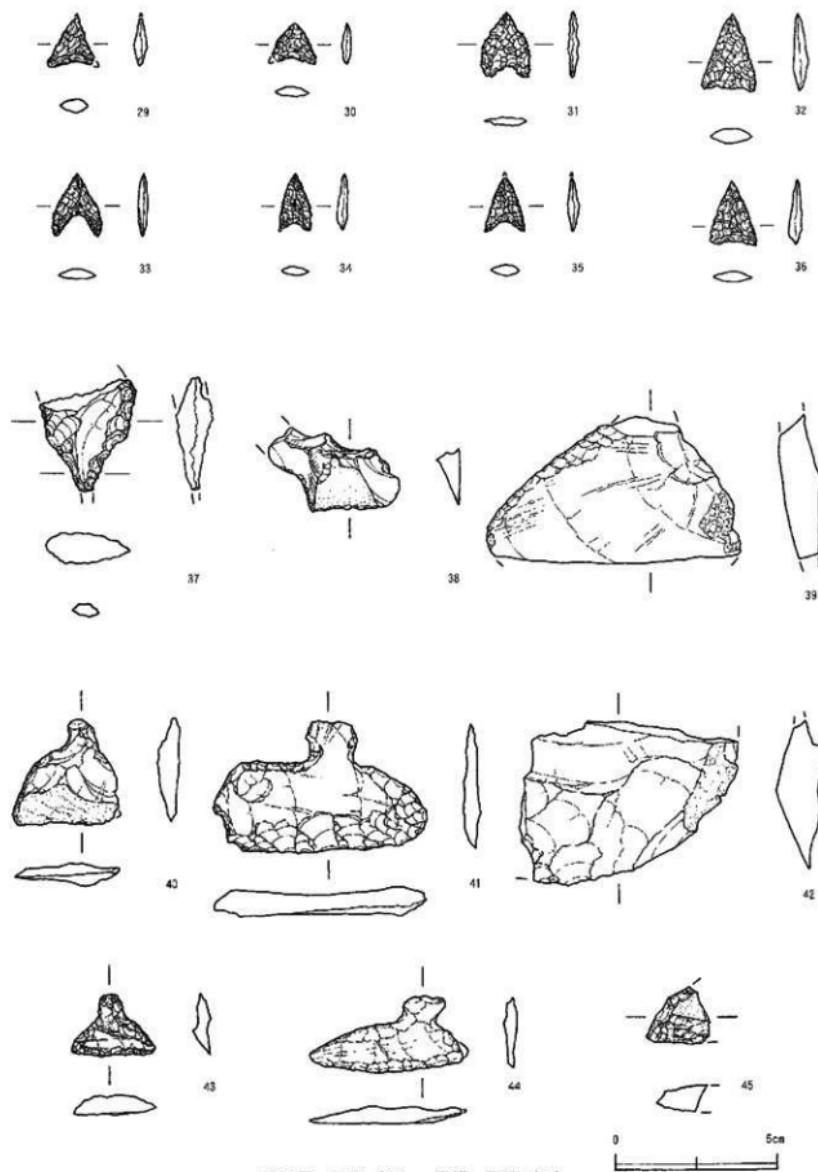
第97図 土製円盤

第2表 土製円盤一覧表

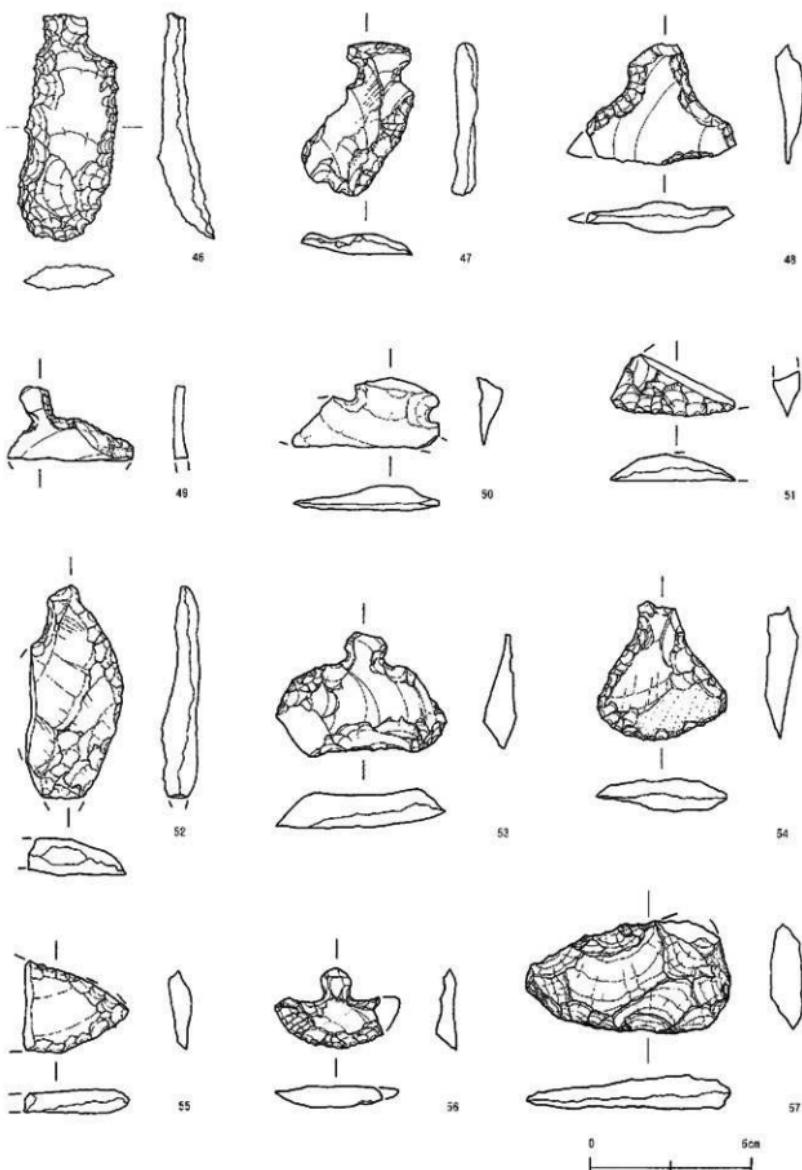
番号	出土位置	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
1	3号住	(27.5)	36.0	7.5	8.7	一部欠損
2	6号溝	(27.0)	28.5	10.0	8.4	
3	イ-3-1	34.5	37.0	9.5	14.4	
4	ロ-3-2	34.5	34.5	11.0	14.4	



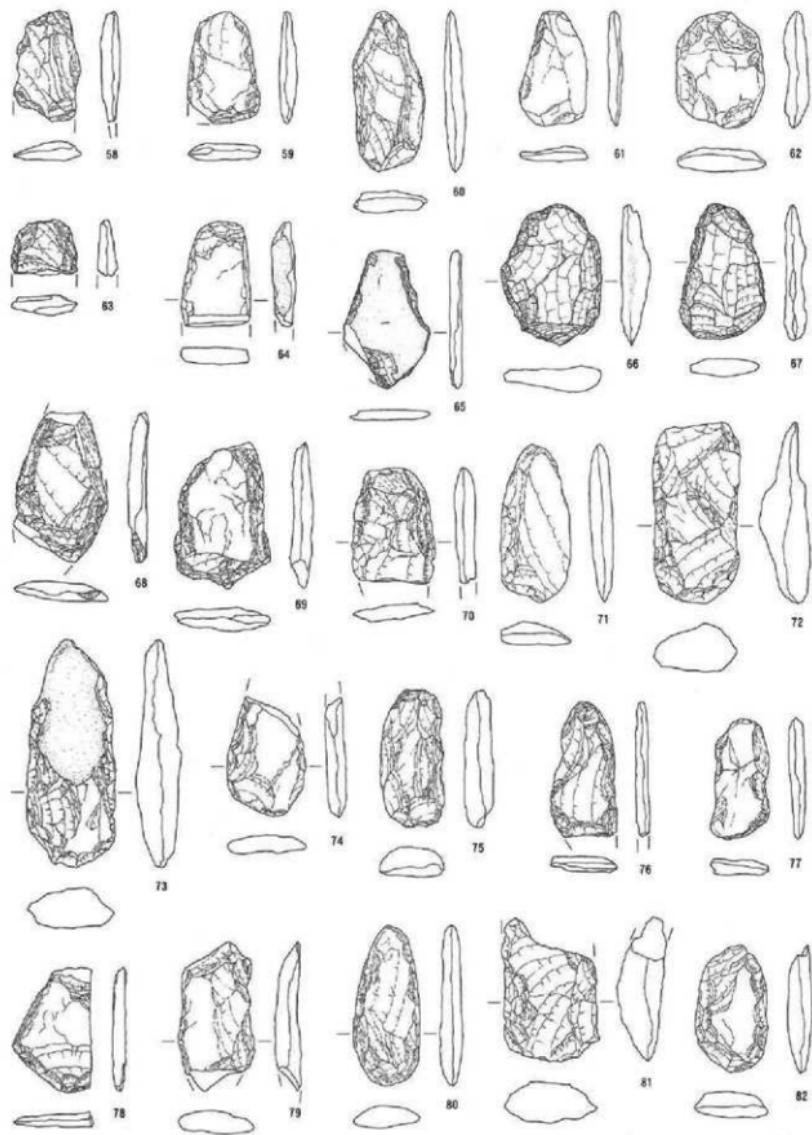
第98図 石鐵 (1)



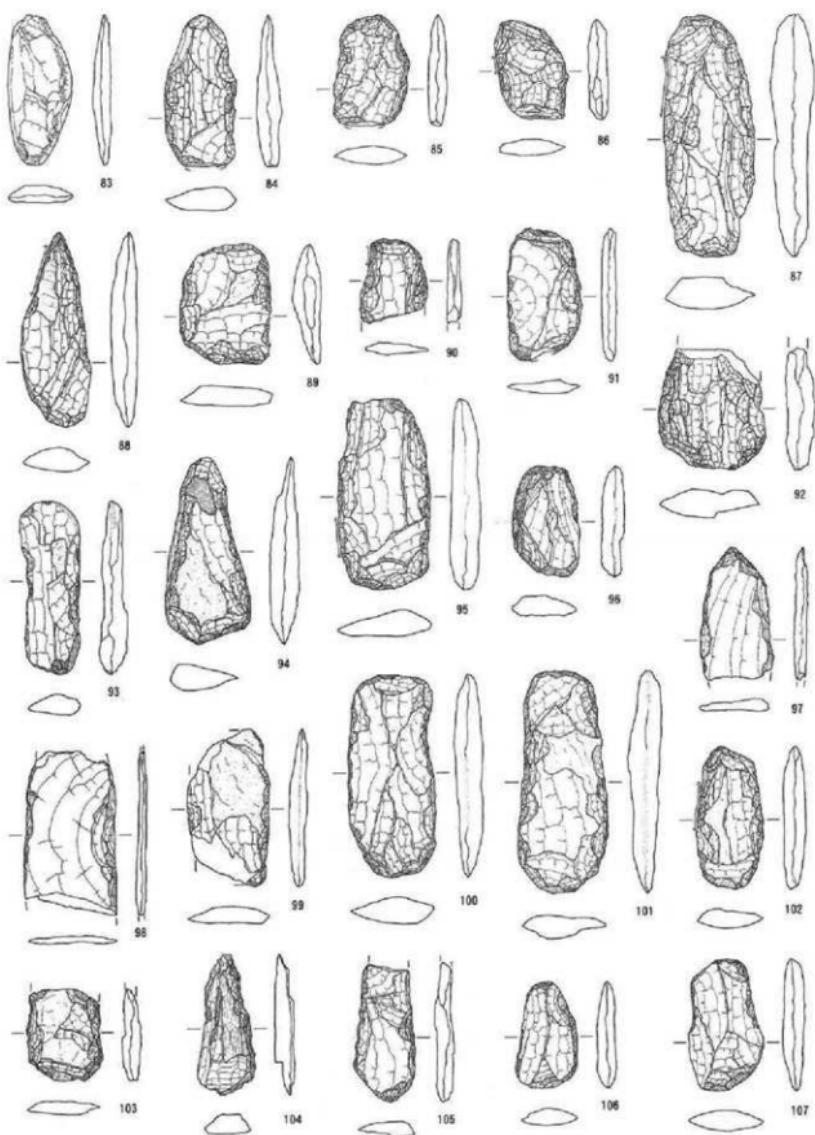
第99図 石鎌（2）・石錐・石匙（1）



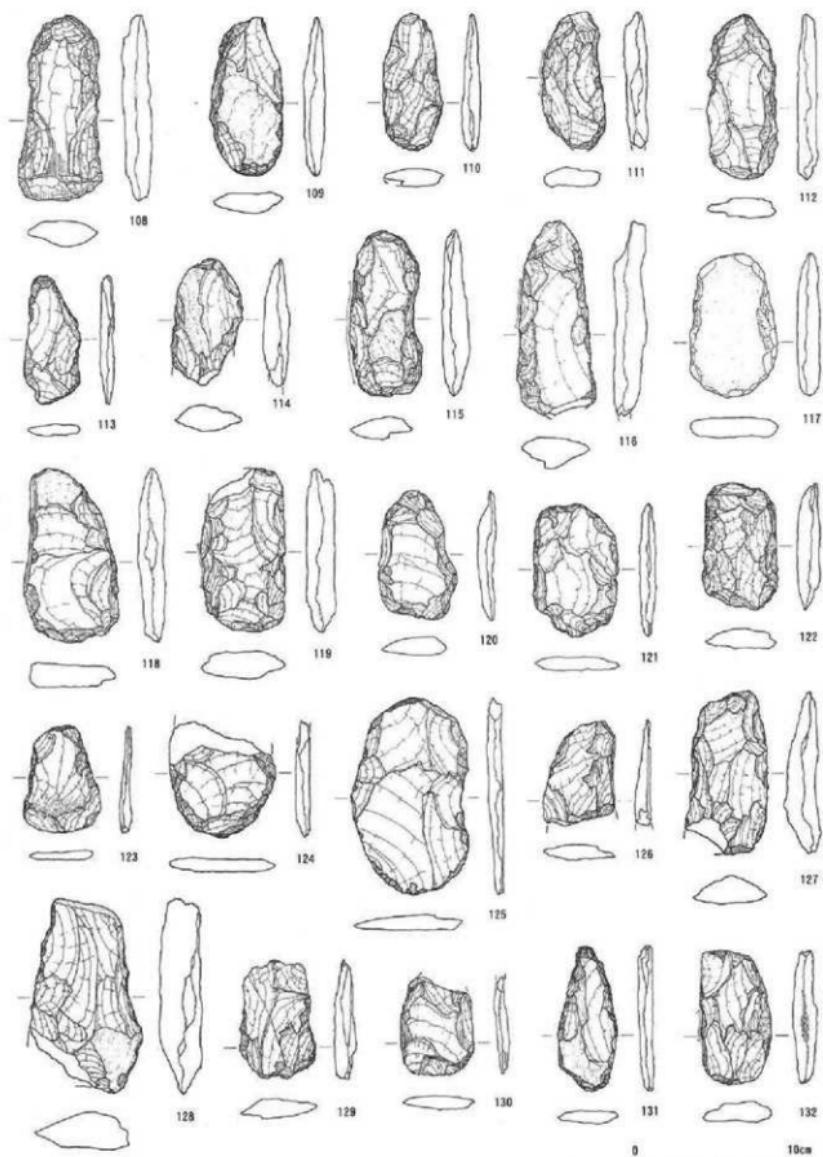
第100図 石匙 (2)



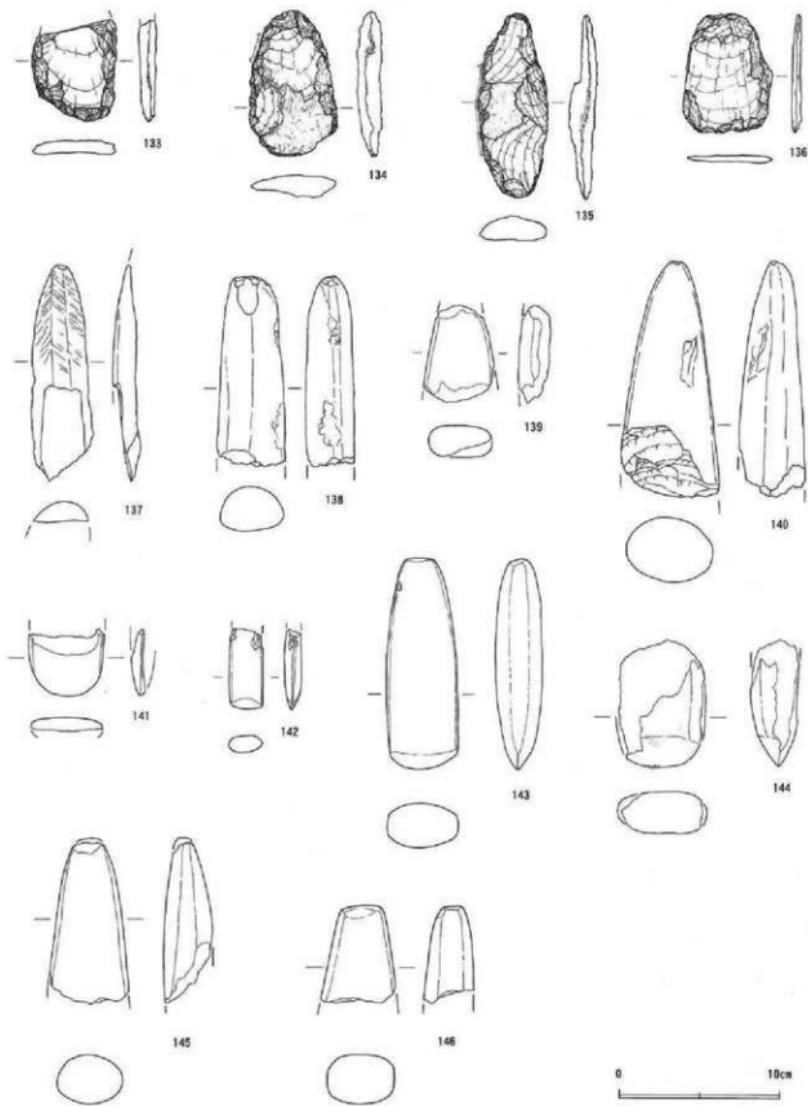
第101図 打製石斧(1)



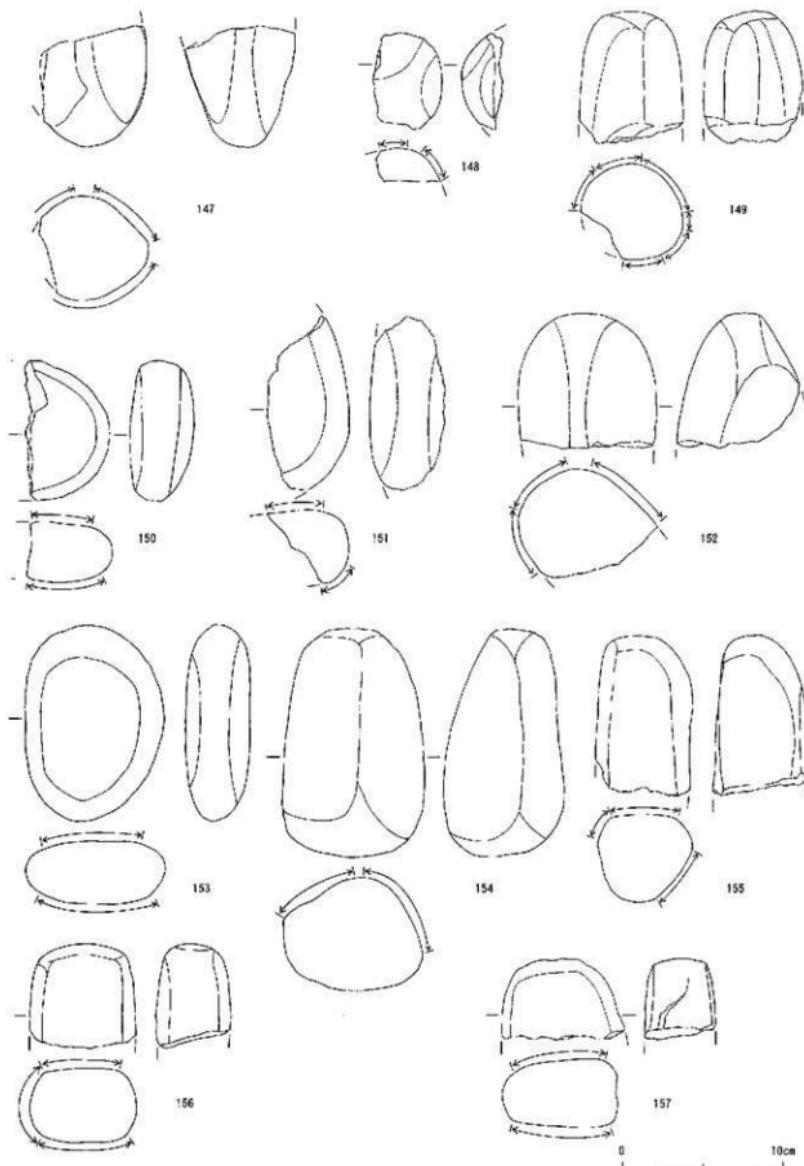
第102図 打製石斧(2)



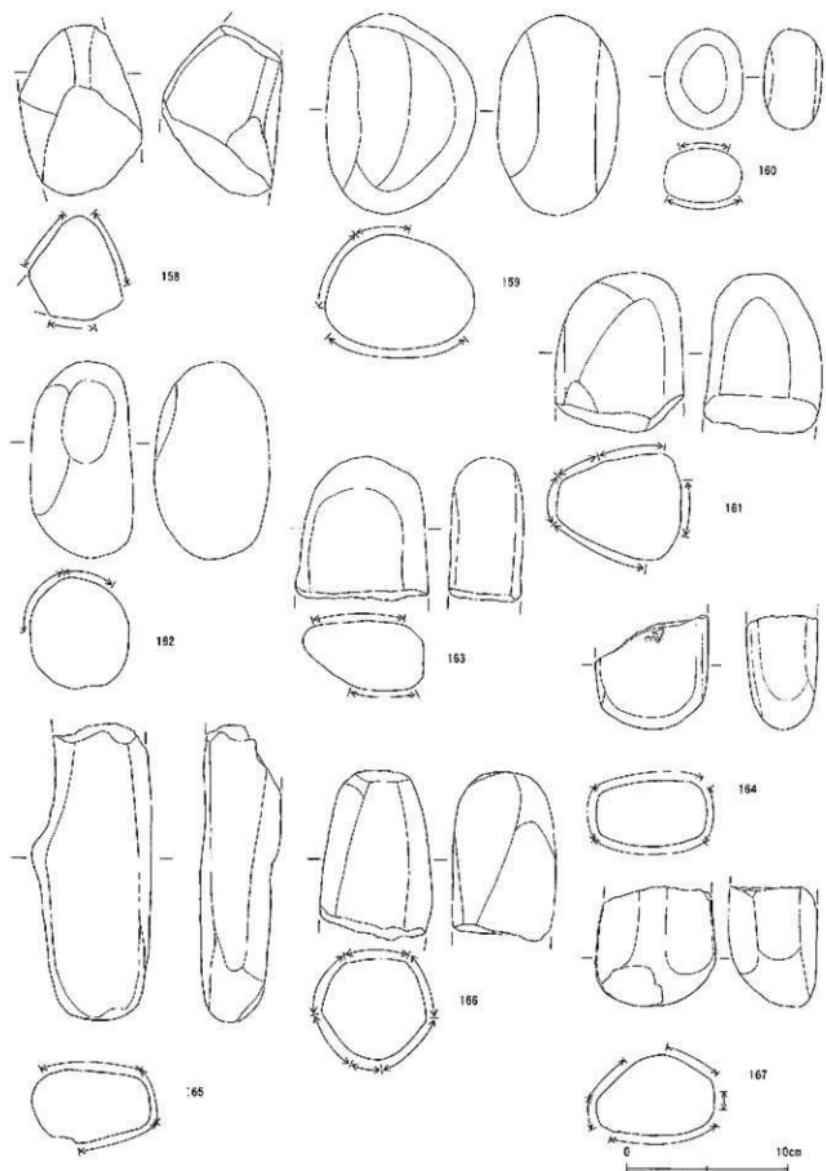
第103図 打製石斧(3)



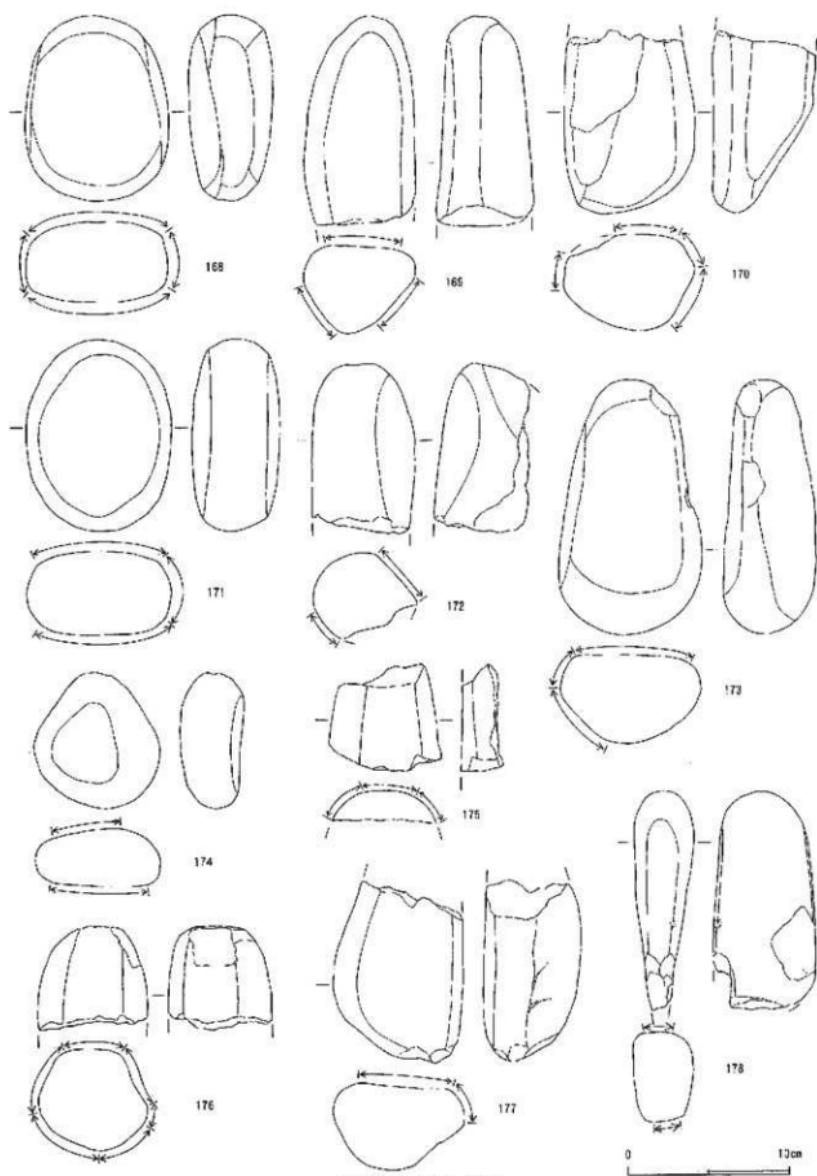
第104図 打製石斧(4)・磨製石斧



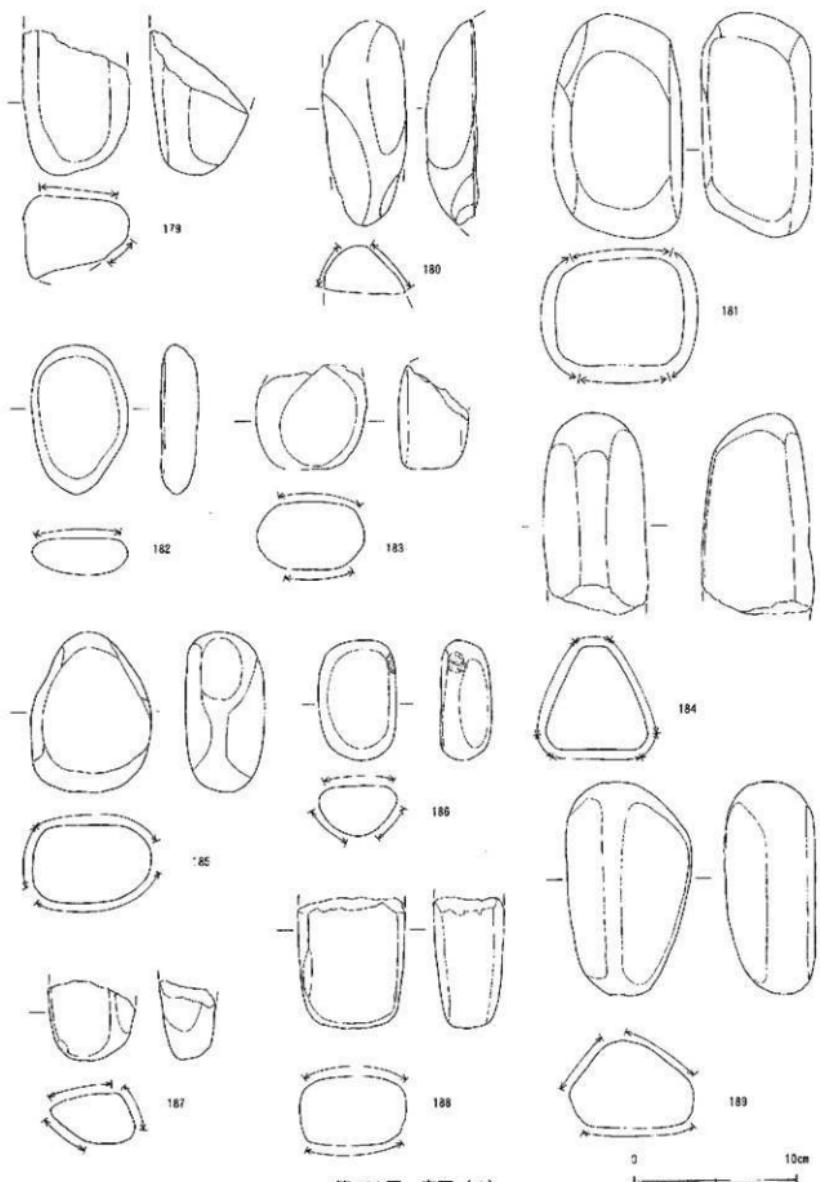
第105図 磨石(1)



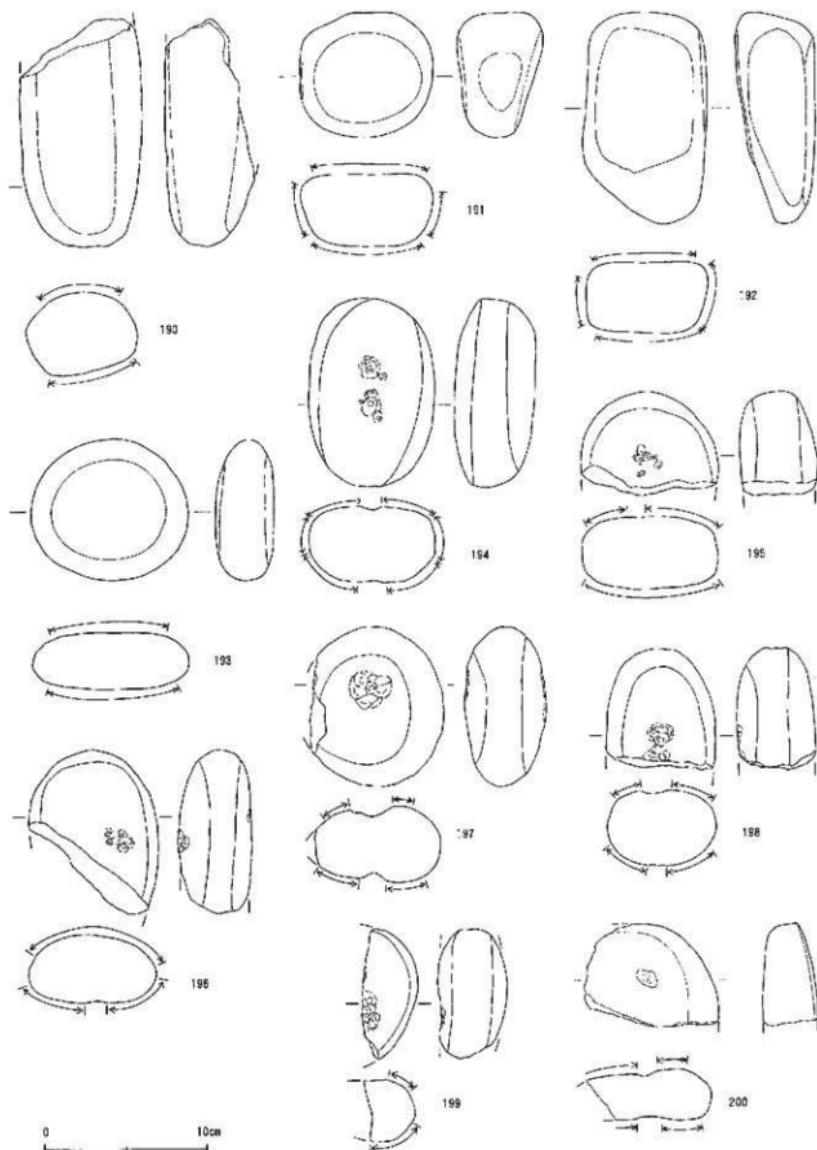
第106図 磨石(2)



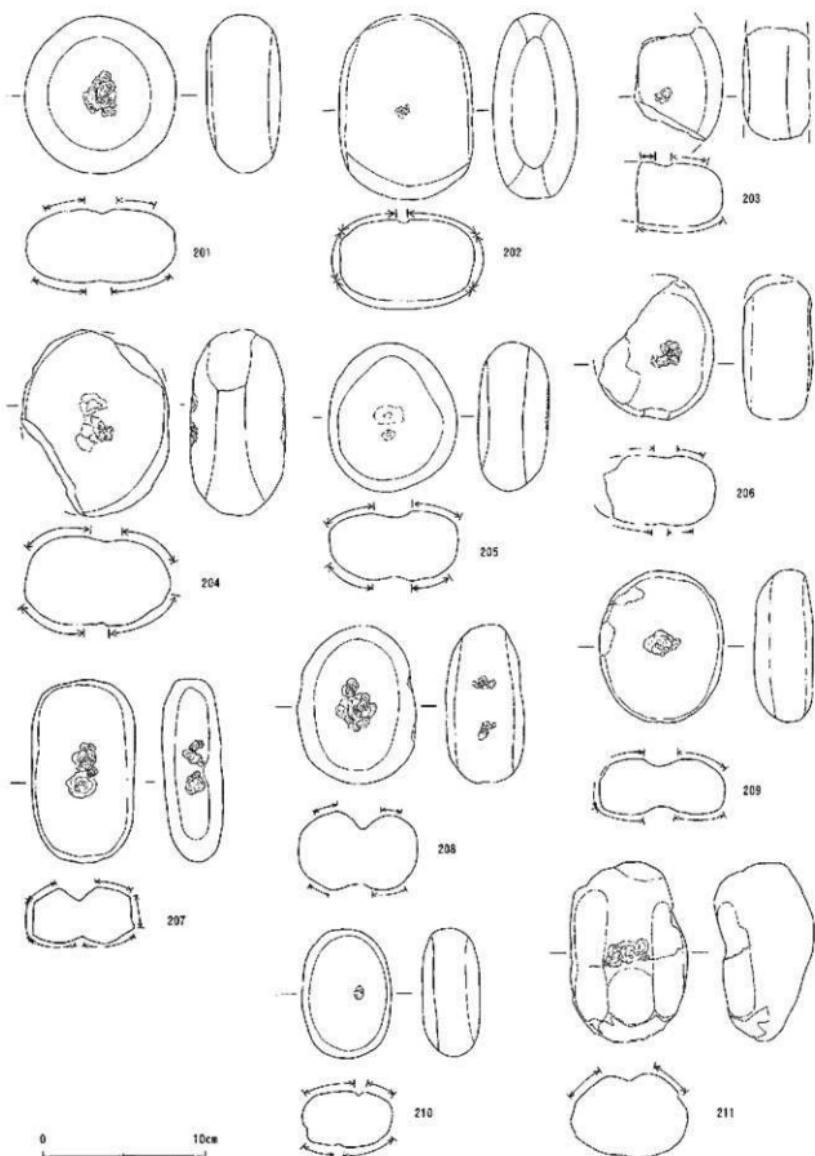
第107図 磨石(3)



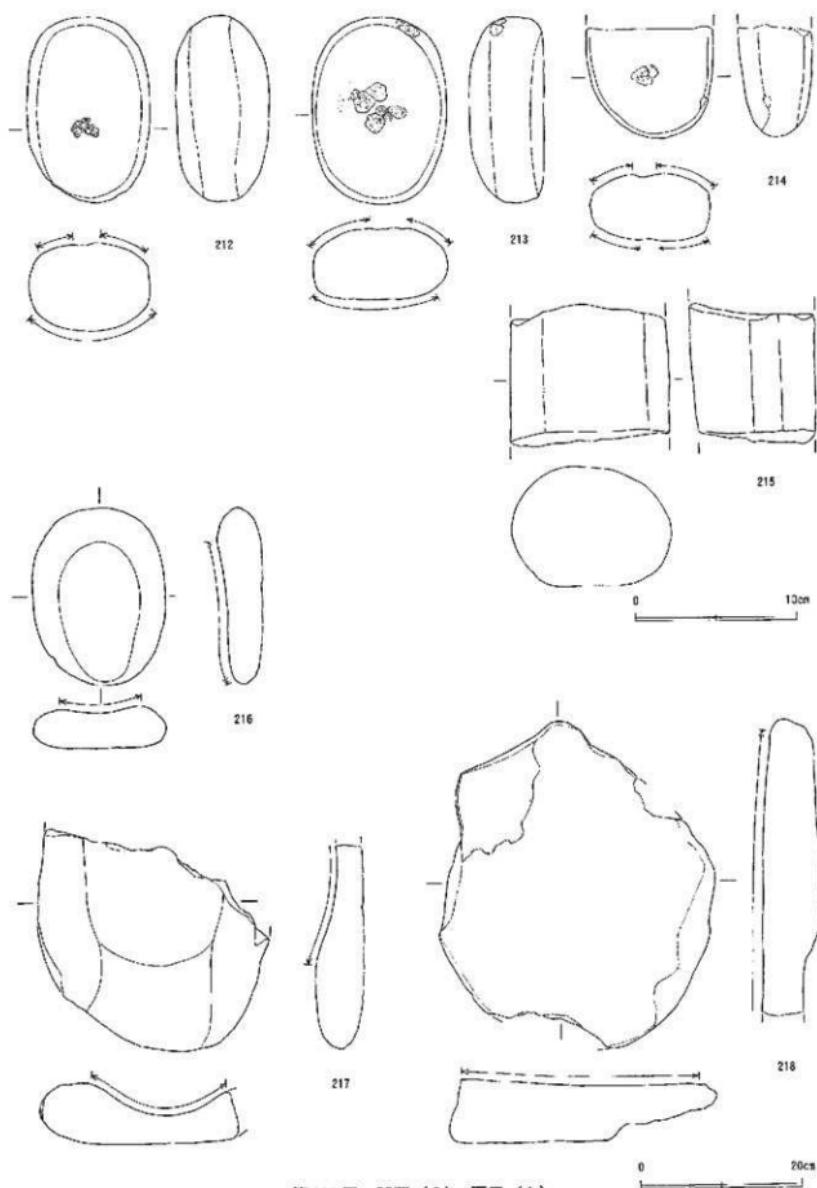
第108図 磨石(4)



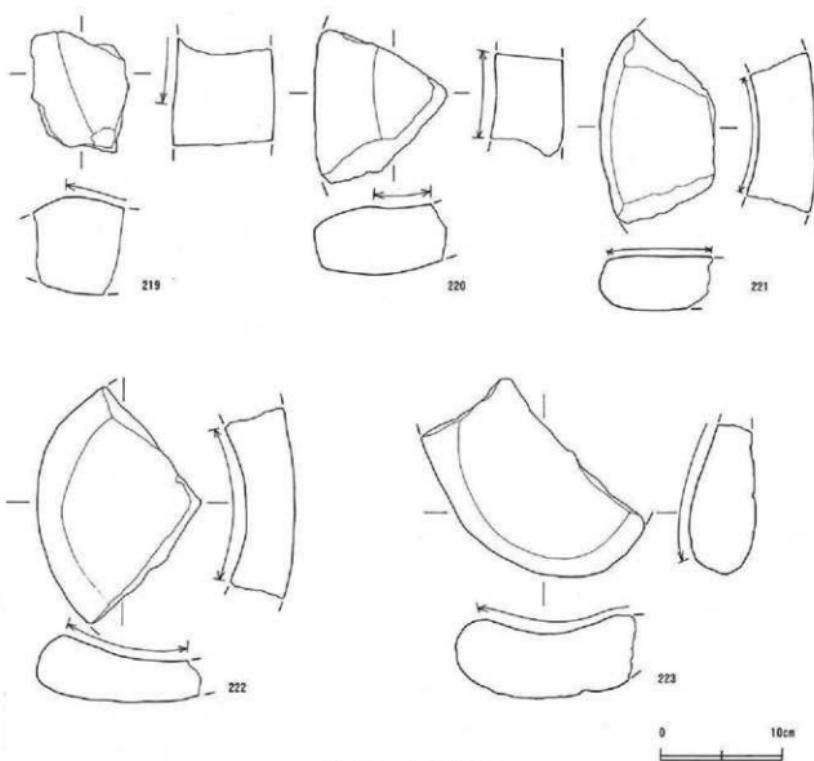
第109図 磨石(5)・凹石(1)



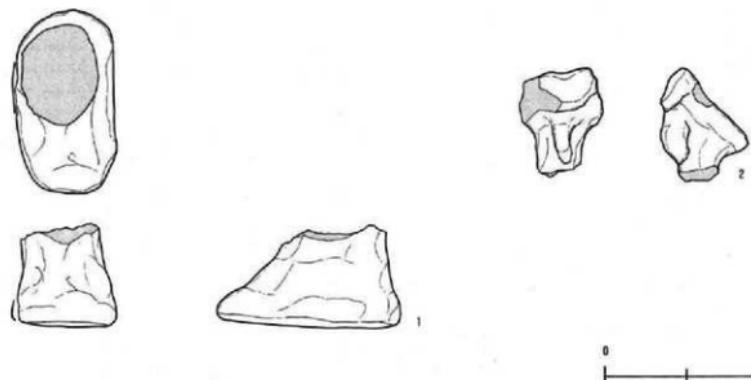
第110図 固石(2)



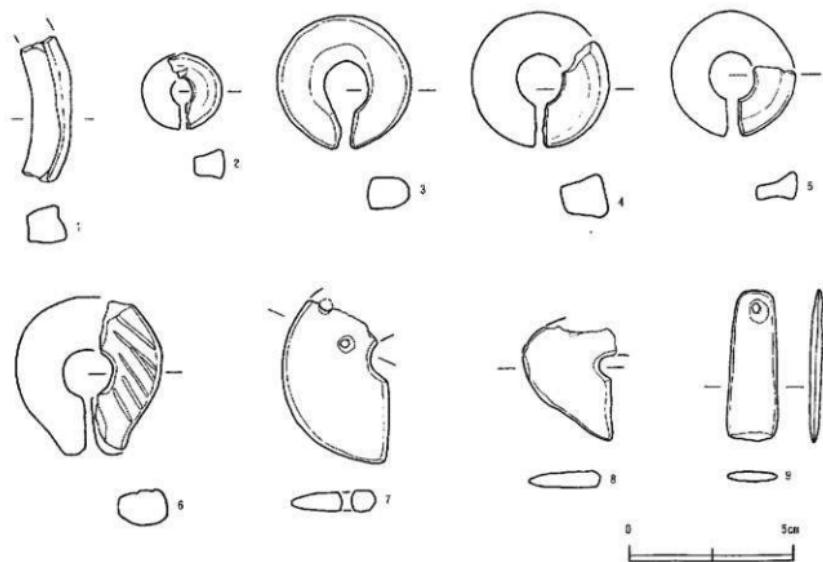
第111図 凹石(3)・石皿(1)



第112図 石皿(2)



第113図 土偶



第114図 装飾品

第3表 石器觀察表

番号	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	形態	備考
1	1号住	石鏃	(2.0)	(1.8)	0.3	0.7	黒曜石	凹基無茎	
2	4号住	石鏃	1.3	1.0	0.3	0.3	黒曜石	凹基無茎	
3	5号住	石鏃	2.3	(1.2)	0.2	0.5	黒曜石	凹基無茎	
4	16号住	石鏃	2.2	1.5	0.4	1.3	黒曜石	平基無茎	
5	19号住	石鏃	2.1	(1.4)	0.5	1.0	黒曜石	凹基無茎	
6	24号住	石鏃	1.6	(1.2)	0.2	0.3	黒曜石	凹基無茎	
7	24号住	石鏃	(1.2)	(1.3)	0.3	0.4	黒曜石	凹基無茎	
8	25号住	石鏃	2.0	1.6	0.6	1.5	黒曜石	平基無茎	
9	26号住	石鏃	(2.5)	1.5	0.6	1.2	黒曜石	凹基無茎	
10	26号住	石鏃	2.2	1.9	0.4	1.2	黒曜石	凹基無茎	
11	27号住	石鏃	1.7	(1.4)	0.5	0.7	黒曜石	凹基無茎	
12	27号住	石鏃	1.5	1.2	0.3	0.5	黒曜石	凹基無茎	
13	27号住	石鏃	1.4	1.2	0.3	0.4	黒曜石	凹基無茎	
14	34号住	石鏃	1.8	1.4	0.7	1.6	黒曜石	平基無茎	
15	34号住	石鏃	(2.1)	(1.4)	0.4	0.7	黒曜石	凹基無茎	
16	34号住	石鏃	2.3	1.7	0.7	2.1	黒曜石	凹基無茎	
17	34号住	石鏃	(2.4)	(1.5)	3.5	0.8	黒曜石	凹基無茎	
18	34号住	石鏃	(2.1)	(1.7)	0.3	1.0	黒曜石	凹基無茎	
19	38号住	石鏃	1.8	1.5	0.3	0.5	黒曜石	凹基無茎	
20	10土坑	石鏃	2.4	1.7	0.4	1.0	黒曜石	凹基無茎	
21	59上坑	石鏃	(1.9)	(1.7)	0.4	0.8	黒曜石	凹基無茎	
22	154土坑	石鏃	2.3	1.4	0.5	1.0	黒曜石	凹基無茎	
23	180土坑	石鏃	(2.7)	(1.8)	0.4	0.9	黒曜石	凹基無茎	
24	272土坑	石鏃	(2.5)	(1.6)	0.4	1.2	黒曜石	凹基無茎	

番号	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	形態	備考
25	2 7 6 土坑	石鏹	(1.8)	(1.9)	0.4	0.7	黒曜石	凹基無茎	
26	3 6 5 土坑	石鏹	1.4	1.1	0.3	0.3	黒曜石	凹基無茎	色調は赤色
27	4 0 0 土坑	石鏹	1.6	1.4	0.4	0.6	黒曜石	凹基無茎	
28	5 0 0 土坑	石鏹	2.5	1.7	0.6	2.0	黒曜石	凹基無茎	
29	8 号溝	石鏹	(1.5)	(1.4)	(0.4)	0.5	黒曜石	凹基無茎	
30	F-9	石鏹	(1.3)	(1.3)	0.3	0.3	黒曜石	凹基無茎	
31	T-27	石鏹	2.0	1.5	0.3	0.6	黒曜石	凹基無茎	
32	Y-30	石鏹	2.4	1.7	0.4	1.2	黒曜石	平基無茎	
33	イ-33	石鏹	1.9	1.5	0.3	0.6	黒曜石	凹基無茎	
34	イ-31	石鏹	1.7	0.9	0.3	0.3	黒曜石	凹基無茎	
35	ロ-32	石鏹	(1.7)	1.2	0.3	0.4	黒曜石	凹基無茎	
36	ハ-33	石鏹	2.0	1.4	0.3	0.7	黒曜石	凹基無茎	
37	2 2 6 土坑	石錐	(3.4)	(2.9)	1.0	7.6	泥岩		
38	1 9 号住	石匙	(2.6)	(4.0)	0.8	5	黒曜石	横形	
39	1 9 号住	石匙	(4.6)	7.8	1.3	40	泥岩	横形	
40	1 9 号住	石匙	3.2	3.2	0.7	5	安山岩	横形	
41	1 9 号住	石匙	4.0	6.5	0.9	16	チャート	横形	
42	2 0 号住	石匙	(5.0)	(6.7)	1.4	44	泥岩	横形	
43	2 0 号住	石匙	1.9	2.6	0.6	2	黒曜石	横形	
44	2 4 号住	石匙	2.3	(4.8)	0.5	4	泥岩	横形	
45	2 6 号住	石匙	(1.7)	(2.0)	0.9	2	黒曜石	横形	
46	2 6 号住	石匙	7.0	3.0	1.2	20	泥岩	縦形	
47	2 7 号住	石匙	4.7	3.4	0.6	8	碧玉	縦形	
48	2 7 号住	石匙	3.7	(4.7)	0.9	10	チャート	横形	
49	2 7 号住	石匙	(2.3)	3.9	0.4	4	チャート	横形	
50	3 0 号住	石匙	(2.2)	(4.5)	0.8	5	泥岩	横形	
51	3 4 号住	石匙	(1.9)	(3.8)	0.8	4	珪質頁岩	横形	
52	3 4 号住	石匙	(6.5)	(2.9)	1.1	23	泥岩	縦形	
53	3 4 号住	石匙	3.8	5.2	1.1	18	チャート	横形	
54	3 4 号住	石匙	4.2	4.0	1.0	12	珪質凝灰岩	横形	
55	3 4 号住	石匙	(2.8)	(3.2)	0.7	7	泥岩	横形	
56	3 9 号住	石匙	2.5	(3.3)	0.7	4	玉髓	横形	
57	T-26	石匙	(3.5)	6.2	1.0	25	泥岩	横形	
58	5 号住	打斧	(6.9)	4.2	1.2	36	ホルンフェルス	短冊形	
59	7 号住	打斧	7.0	4.5	1.1	42	ホルンフェルス	撥形	
60	9 号住	打斧	10.0	4.5	1.3	49	粘板岩	短冊形	
61	9 号住	打斧	7.1	4.2	0.9	28	粘板岩	撥形	
62	9 号住	打斧	7.3	5.5	1.4	68	粘板岩	短冊形	
63	9 号住	打斧	(3.5)	4.1	1.2	17	粘板岩	短冊形?	
64	1 1 号住	打斧	(6.6)	4.4	1.2	52	粘板岩	撥形	
65	2 0 号住	打斧	8.6	5.4	0.8	43	ホルンフェルス	撥形	
66	2 6 号住	打斧	8.8	6.2	1.8	97	粘板岩	短冊形	
67	2 6 号住	打斧	8.4	5.4	1.4	61	ホルンフェルス	撥形	
68	2 9 号住	打斧	(9.4)	5.9	1.1	71	粘板岩	撥形	
69	2 9 号住	打斧	9.1	6.0	1.4	71	粘板岩	短冊形	
70	3 4 号住	打斧	(7.2)	5.2	1.1	55	ホルンフェルス	短冊形	
71	3 4 号住	打斧	9.8	4.4	1.4	63	粘板岩	短冊形	
72	3 4 号住	打斧	11.3	5.5	3.0	203	ホルンフェルス	短冊形	
73	3 4 号住	打斧	14.2	5.6	2.4	214	ホルンフェルス	撥形	
74	3 4 号住	打斧	(7.4)	4.9	1.2	54	粘板岩	撥形	
75	3 4 号住	打斧	8.5	4.0	1.8	70	砂岩	短冊形	
76	3 4 号住	打斧	(8.4)	4.1	0.9	36	粘板岩	撥形	
77	3 8 号住	打斧	7.5	3.7	1.0	25	粘板岩	短冊形	
78	3 8 号住	打斧	7.8	4.9	0.8	42	粘板岩	撥形	

番号	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	形態	備考
79	3 8号住	打斧	(9.2)	4.8	1.5	75	ホルンフェルス	短冊形	
80	3 8号住	打斧	9.9	4.2	1.4	71	粘板岩	撥形	
81	4 0号住	打斧	(8.9)	6.0	2.6	148	ホルンフェルス	短冊形	
82	4 1号住	打斧	7.9	4.5	1.6	65	粘板岩	短冊形	
83	4 1号住	打斧	9.3	4.0	1.1	44	粘板岩	短冊形	
84	6上坑	打斧	(9.4)	4.5	1.6	66	粘板岩	短冊形	
85	4 8土坑	打斧	(7.0)	4.6	1.2	44	粘板岩	短冊形	
86	1 1 9土坑	打斧	6.2	4.6	1.1	40	粘板岩	短冊形	
87	1 1 9土坑	打斧	15.1	5.6	2.7	244	結晶片岩	短冊形	
88	1 1 9土坑	打斧	12.1	4.3	1.6	86	粘板岩	撥形	
89	1 2 6土坑	打斧	7.5	5.7	1.8	81	粘板岩	短冊形	
90	1 7 8土坑	打斧	(5.2)	(4.3)	0.9	21	粘板岩	短冊形	
91	1 8 0土坑	打斧	(8.2)	4.6	0.9	38	粘板岩	短冊形	
92	2 1 7土坑	打斧	(7.6)	6.7	1.9	108	粘板岩	短冊形	
93	2 2 6土坑	打斧	10.8	3.7	1.8	71	ホルンフェルス	短冊形	
94	2 7 5土坑	打斧	11.7	5.3	1.8	111	ホルンフェルス	撥形	
95	4 6 0土坑	打斧	11.9	5.8	1.9	170	ホルンフェルス	短冊形	
96	6 2 5土坑	打斧	6.9	4.2	1.4	43	粘板岩	短冊形	
97	6 5 0土坑	打斧	(8.3)	(4.6)	0.8	33	粘板岩	短冊形	
98	7 1 6土坑	打斧	(10.2)	(5.7)	0.6	47	粘板岩	短冊形	
99	3号溝	打斧	(9.7)	5.1	1.1	66	粘板岩	短冊形	
100	3号溝	打斧	12.6	5.4	1.8	137	ホルンフェルス	短冊形	
101	3号溝	打斧	14.0	5.5	2.1	161	粘板岩	短冊形	
102	5号溝	打斧	8.9	4.2	1.4	62	粘板岩	短冊形	
103	5号溝	打斧	(5.7)	4.7	1.2	36	粘板岩	短冊形	
104	5号溝	打斧	8.7	3.6	1.2	30	粘板岩	撥形	
105	5号溝	打斧	(8.6)	3.9	1.2	41	粘板岩	短冊形	
106	6号溝	打斧	6.6	3.7	1.2	31	粘板岩	撥形	
107	6号溝	打斧	8.2	4.7	1.3	56	ホルンフェルス	撥形	
108	6号溝	打斧	11.6	5.2	1.9	122	粘板岩	撥形	
109	6号溝	打斧	9.9	4.5	1.3	62	ホルンフェルス	短冊形	
110	6号溝	打斧	(8.5)	3.5	1.2	38	粘板岩	撥形	
111	6号溝	打斧	(8.6)	3.9	1.4	56	粘板岩	撥形	
112	6号溝	打斧	10.4	4.1	1.3	67	粘板岩	短冊形	
113	6号溝	打斧	8.0	3.5	0.9	24	粘板岩	撥形	
114	6号溝	打斧	(7.9)	(4.2)	(1.6)	53	粘板岩	短冊形	
115	6号溝	打斧	10.4	4.4	1.7	85	粘板岩	短冊形	
116	6号溝	打斧	(12.1)	5.0	2.1	125	砂岩	短冊形	
117	S - 2 5	打斧	8.9	5.3	1.3	81	粘板岩	撥形	
118	U - 2 7	打斧	10.8	5.9	1.7	128	粘板岩	撥形	
119	U - 2 7	打斧	(10.2)	5.2	1.9	127	粘板岩	短冊形	
120	U - 2 7	打斧	8.1	4.8	1.1	47	粘板岩	撥形	
121	U - 2 7	打斧	8.3	5.3	1.0	53	ホルンフェルス	短冊形	
122	V - 2 8	打斧	8.0	4.5	1.4	66	粘板岩	短冊形	
123	V - 2 8	打斧	6.7	4.7	0.8	24	ホルンフェルス	撥形	
124	X - 3 0	打斧	(7.2)	(6.6)	(0.9)	53	粘板岩	撥形?	
125	X - 3 0	打斧	12.2	7.0	1.1	104	ホルンフェルス	短冊形	
126	イ - 3 1	打斧	(6.5)	(4.5)	(1.0)	28	粘板岩	撥形	
127	イ - 3 1	打斧	(10.1)	(5.0)	2.3	100	ホルンフェルス	短冊形	
128	イ - 3 1	打斧	(12.1)	(6.9)	2.6	223	ホルンフェルス	撥形	
129	イ - 3 1	打斧	7.4	4.7	1.4	43	粘板岩	短冊形	
130	イ - 3 2	打斧	(6.0)	4.4	1.0	26	粘板岩	撥形	
131	イ - 3 2	打斧	9.0	3.7	0.9	32	粘板岩	撥形	
132	イ - 3 2	打斧	8.2	4.2	1.5	63	粘板岩	短冊形	

番号	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	形態	備考
133	三-3-3	打斧	(6.3)	5.2	(1.2)	45	粘板岩	短冊形	
134	ト-3-6	打斧	9.0	5.5	1.6	81	粘板岩	撥形	
135	ト-3-6	打斧	11.5	4.3	1.7	81	粘板岩	短冊形	
136	手-3-7	打斧	7.4	5.5	0.6	36	粘板岩	撥形	
137	9号住	磨斧	(13.4)	(3.8)	(1.3)	72	緑色凝灰岩		
138	19号住	磨斧	(11.9)	4.2	3.0	254	緑色凝灰岩		
139	26号住	磨斧	(6.0)	(4.1)	(1.9)	67	結晶片岩		
140	34号住	磨斧	(14.7)	6.1	4.0	452	緑色凝灰岩		
141	196上坑	磨斧	(3.7)	(4.4)	(0.9)	23	緑色凝灰岩		
142	232土坑	磨斧	(5.0)	2.1	1.0	20	緑色凝灰岩		
143	360土坑	磨斧	13.2	4.4	2.8	285	緑色凝灰岩		
144	6号溝	磨斧	(7.9)	(5.3)	2.6	187	緑色凝灰岩		
145	6号溝	磨斧	(9.9)	(4.9)	3.0	227	緑色凝灰岩		
146	6号溝	磨斧	(6.0)	(4.6)	3.0	133	硬質砂岩		
147	2号住	磨石	(7.5)	(6.9)	6.5	418	デイライト		
148	5号住	磨石	(6.0)	(4.3)	(2.1)	71	花崗岩		
149	9号住	磨石	(8.2)	6.4	6.0	416	安山岩		
150	9号住	磨石	(8.7)	(5.2)	3.9	204	安山岩		
151	9号住	磨石	(10.8)	(5.1)	(4.6)	208	安山岩		
152	9号住	磨石	(8.4)	8.6	7.2	674	安山岩		
153	20号住	磨石	12.2	8.6	4.0	508	安山岩		
154	20号住	磨石	14.3	8.9	7.0	1354	花崗岩		
155	20号住	磨石	(10.0)	6.1	5.5	493	花崗岩		
156	20号住	磨石	(6.5)	6.6	4.6	293	玄武岩		
157	20号住	磨石	(5.0)	7.6	4.3	220	安山岩		
158	20号住	磨石	(10.6)	(7.6)	6.5	626	砂岩		
159	19号住	磨石	12.5	9.3	7.2	922	安山岩		
160	19号住	磨石	6.2	4.9	3.4	148	安山岩		
161	19号住	磨石	(9.9)	8.0	6.6	739	花崗岩		
162	16号住	磨石	12.3	6.3	6.9	672	安山岩		
163	26号住	磨石	(9.0)	8.3	4.4	529	花崗岩		
164	26号住	磨石	(7.1)	(7.0)	4.1	274	安山岩		
165	26号住	磨石	(18.3)	(7.3)	4.5	983	花崗岩		
166	26号住	磨石	(10.5)	7.0	6.3	629	安山岩		
167	26号住	磨石	(7.4)	(7.4)	4.9	413	安山岩		
168	24号住	磨石	11.5	9.0	5.0	713	安山岩		
169	24号住	磨石	(13.1)	6.9	5.5	745	花崗岩		
170	24号住	磨石	(11.4)	8.0	6.0	793	安山岩		
171	34号住	磨石	11.9	9.0	5.3	887	安山岩		
172	34号住	磨石	(10.6)	6.4	(5.0)	529	安山岩		
173	34号住	磨石	15.9	8.8	5.6	1091	安山岩		
174	34号住	磨石	8.5	7.9	3.6	302	結晶片岩		
175	38号住	磨石	(6.7)	(7.0)	(2.0)	134	安山岩		
176	38号住	磨石	(6.4)	6.9	6.3	357	花崗岩		
177	38号住	磨石	(11.3)	8.1	5.7	734	花崗岩		
178	38号住	磨石	(13.6)	3.7	5.5	418	結晶片岩		
179	27号住	磨石	(9.0)	6.6	(5.2)	338	硬質砂岩		
180	40号住	磨石	(12.7)	(5.1)	(3.0)	252	花崗岩		
181	41号住	磨石	14.0	6.9	6.7	1304	安山岩		
182	6土坑	磨石	9.3	5.9	2.3	189	安山岩		
183	219土坑	磨石	(6.5)	(6.8)	4.5	250	花崗岩		
184	20上坑	磨石	(12.6)	6.2	6.5	802	花崗岩		
185	52土坑	磨石	10.0	7.4	4.9	566	花崗岩		
186	176土坑	磨石	7.5	4.7	3.1	177	安山岩		

番号	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	形態	備考
187	2 3 3 土坑	磨石	4.9	(5.3)	3.2	104	花崗岩		
188	2 3 5 上坑	磨石	(8.1)	(6.5)	4.3	396	花崗岩		
189	2 4 3 土坑	磨石	13.3	7.7	5.5	884	花崗岩		
190	2 5 7 上坑	磨石	(14.2)	(7.4)	(5.4)	739	安山岩		
191	2 1 5 土坑	磨石	7.8	5.3	4.5	524	花崗岩		
192	2 1 5 土坑	磨石	13.2	7.7	4.4	887	安山岩		
193	2 1 5 土坑	磨石	8.7	9.6	3.5	455	安山岩		
194	1 9 号住	凹石	11.7	7.8	4.8	614	安山岩		
195	1 9 号住	凹石	(6.5)	8.5	4.6	295	安山岩		
196	2 0 号住	凹石	(10.2)	8.0	4.4	372	安山岩		
197	2 4 号住	凹石	9.9	(8.2)	4.8	450	安山岩		
198	2 4 号住	凹石	(7.6)	6.7	4.7	343	花崗岩		
199	2 6 号住	凹石	(8.0)	(3.4)	4.0	108	安山岩		
200	2 6 号住	凹石	(6.4)	(8.3)	3.2	238	安山岩		
201	2 6 号住	凹石	9.8	9.3	4.6	560	安山岩		
202	2 7 号住	凹石	11.6	8.3	5.1	699	安山岩		
203	3 8 号住	凹石	(7.1)	(5.5)	4.1	227	安山岩		
204	3 4 号住	凹石	(11.6)	(9.1)	5.6	795	デイライト		
205	4 1 号住	凹石	9.3	8.0	4.3	371	安山岩		
206	5 号溝	凹石	(8.7)	(7.2)	4.3	357	安山岩		
207	6 号溝	凹石	11.4	6.5	3.5	363	安山岩		
208	6 号溝	凹石	9.8	7.4	4.8	451	安山岩		
209	6 号溝	凹石	9.4	7.7	3.5	366	安山岩		
210	7 3 9 土坑	凹石	8.0	5.5	3.5	182	安山岩		
211	1 0 上坑	凹石	11.2	7.3	5.3	559	花崗岩		
212	7 6 土坑	凹石	11.6	7.6	5.5	749	花崗岩		
213	2 0 土坑	凹石	11.6	8.3	4.4	718	花崗岩		
214	8 9 土坑	凹石	(7.0)	(7.8)	4.2	319	安山岩		
215	1 3 号住	石棒	(7.9)	9.7	7.5	1065	安山岩		
216	1 7 6 土坑	石皿	22.1	16.5	5.3	2770	安山岩		
217	1 3 5 土坑	石皿	(27.7)	(28.5)	(7.5)	6530	安山岩		
218	2 0 号住	石皿	(40.5)	(34.0)	(8.0)	13500	花崗岩		
219	5 号住	石皿	(10.0)	(8.0)	7.9	945	安山岩		
220	5 号住	石皿	(12.7)	(10.9)	5.6	793	安山岩		
221	ト-3 6	石皿	(15.9)	(9.3)	(4.6)	950	安山岩		
222	3 0 号住	石皿	(19.4)	(13.3)	4.9	1308	安山岩		
223	ハ-3 3	石皿	(16.3)	(18.2)	(6.0)	1330	安山岩		

第4表 装飾品一覧表

番号	出土位置	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
1	2 4 号住	耳栓?	(45.0)	12.0	11.5	8.1	上製
2	2 6 号住	玦状耳飾	24.0	(16.0)	9.0	2.5	土製,一部赤彩
3	2 6 号住	玦状耳飾	41.0	42.0	10.0	14.1	土製,一部赤彩
4	2 6 号住	玦状耳飾	(33.5)	(20.0)	13.5	7.3	土製
5	2 6 号住	玦状耳飾	(21.0)	(18.0)	8.5	2.1	土製
6	2 6 号住	玦状耳飾	(45.5)	(21.5)	11.0	10.0	土製
7	2 6 号住	玦状耳飾	(51.0)	(26.0)	6.5	15.7	滑石製
8	2 7 号住	玦状耳飾	(36.0)	(22.5)	5.0	6.0	滑石製
9	1 0 土坑	垂飾	47.0	15.5	3.0	4.0	蛇紋岩製

第5表 土偶一覧表

番号	出土位置	部位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
1	7 5 0 号土坑	脚部	(32.0)	31.0	56.0	51.2	
2	5 号住	頭部	(34.0)	(26.0)	27.0	15.2	

### 第3節 古墳時代の遺構と遺物

#### 1. 壁穴住居跡

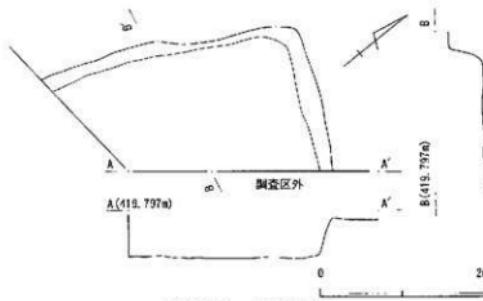
##### 3号住居跡（第115図）

本住居跡はE-8・F-8グリッドに位置しており、他の遺構との重複関係はない。

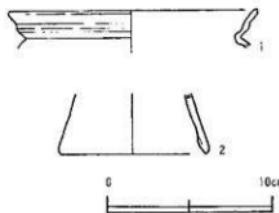
調査できたのは北西コーナー付近のごく一部だけで、大半が調査区域外にあるため全貌は明らかでない。平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するものと思われ、現状で確認できた規模は東西1.9m、南北3.1mである。壁は緩やかに立ち上がりがっており、確認された陥向は最大で49cmを測る。床は概ね平坦で、貼床は確認できなかつたが、全体的に硬化している。炉は確認できなかつた。

遺物（第116図）は覆土中から山墳時代前期後葉の土師器が出土しているが、量は極めて少ない。1はS字状口縁台付甕の口縁部破片で、内外面とも横ナデが行われている。2はS字状口縁台付甕の台部破片で、内外面とも横ナデが行われており、台部の端は折り返されている。

本住居跡の時期について、遺物の出土量が非常に少ないことから判断に困難を伴うが、出土した土師器が4世紀後葉から5世紀前葉頃のものであることから、その時期に属するものと考えられる。



第115図 3号住居跡



第116図 3号住居跡出土土器

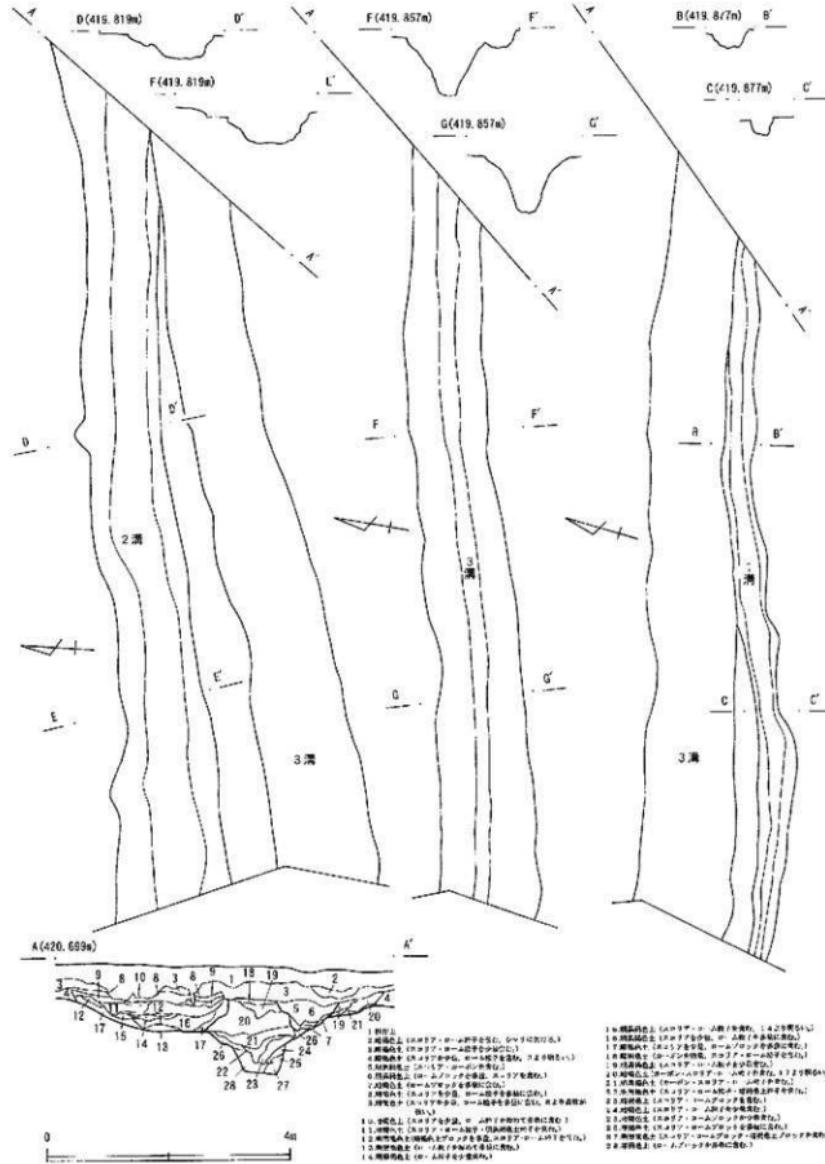
#### 2. 溝状遺構

##### 2号溝状遺構（第117図）

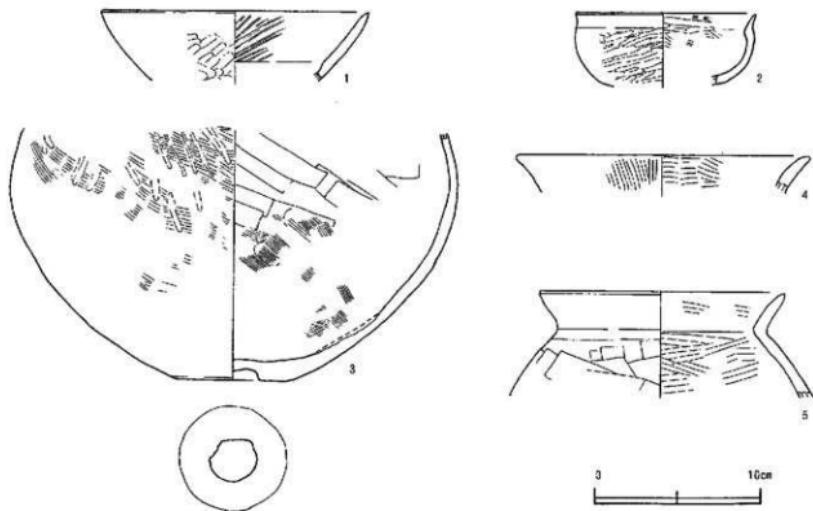
本溝状遺構はB-5・B-6・C-5・C-6・D-6・E-6グリッドに位置している。3号溝状遺構と重複しており、重複関係は3号溝状遺構を切って構築している。

調査区を東西に横切る溝で、両端とも調査区外に達しているため、全貌は明らかでない。現状で確認された規模は、長さ13.2m、幅117cm~188cm、深さは最大で72cmである。

遺物（第118図）は覆土中から古墳時代中期の土師器が出土している。1は高壺の口縁部破片で、内外面とも横ナデ整形後ヘラミガキが行われている。2は壺で外面はヘラミガキを行っているが、部分的にハケ痕が残っており、内面は横ナデ整形後胴上半に横ハケ調整やヘラミガキを行っている。3は壺の胴下半から底部で、外面は斜めハケ調整後ナデが行われ、部分的にヘラミガキを行っている。内面は斜めハケ調整後ヘラミガキが行われており、指頭痕も認められる。また、底の中央に直径約2.7cm、深さ約6mmの凹みがある。4は甕の口縁部破片で、外面は縦ハケ調整、内面は横ハケ調整が行われている。5は甕の口縁から肩部にかけての破片で、外側はヘラミガキ、内面は横ハケ調整が行われている。



第117図 1号・2号・3号溝状遺構



第118図 2号溝状遺構出土土器

本溝状遺構の時期については、出土した土師器が5世紀第2四半期頃のものであることから、その時期に属するものと考えられる。

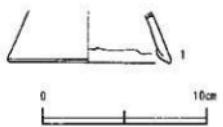
### 3号溝状遺構（第117図）

本溝状遺構はB-5・C-5・C-6・D-5・D-6・E-6グリッドに位置している。1号溝状遺構・2号溝状遺構と重複しており、重複関係はこれらの溝状遺構によって切られている。

調査区を東西に横切る溝で、両端とも調査区外に達しているため、全貌は明らかでない。現状で確認された規模は、長さ11.8m、幅110cm~162cm、深さは最大で124cmである。

遺物（第119図）は覆土中から古墳時代前期後葉の土師器が出土しているが、量は極めて少ない。図示したのは1点で、S字状口縁台付壺の台部破片で、内外面とも横ナデが行なわれており、台部の端は折り返されている。

本溝状遺構の時期については、遺物の出土量が非常に少ないと判断に困難を伴う。しかし、5世紀第2四半期頃に位置付けられる2号溝状遺構によって切られていることや、1点だけではあるが4世紀後葉から5世紀前葉頃の土師器が出土していることから、その時期に属するものと考えられる。



第119図 3号溝状遺構出土土器

### 3. 遺構外出土遺物

遺構外から出土した古墳時代の遺物（第120図）を報告する。

1・2ともに円筒埴輪の破片で



第120図 遺構外出土遺物

ある。1は内外面とも継ハケ調整、2は内外面とも斜めハケ調整が行われている。これらの埴輪は、本遺跡が所在する丘陵の先端に位置する「岡・銚子塚古墳」に樹立されていたものである。

#### 第4節 平安時代の遺構と遺物

##### 1. 積穴住居跡

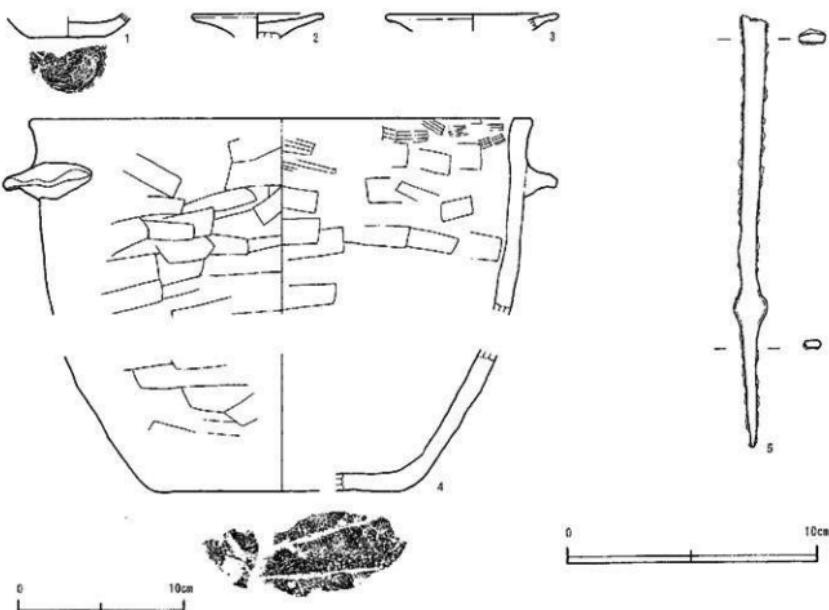
###### 1号住居跡（第122図）

本住居跡はA-2・B-2・B-3グリッドに位置しており、他の遺構との重複関係はない。

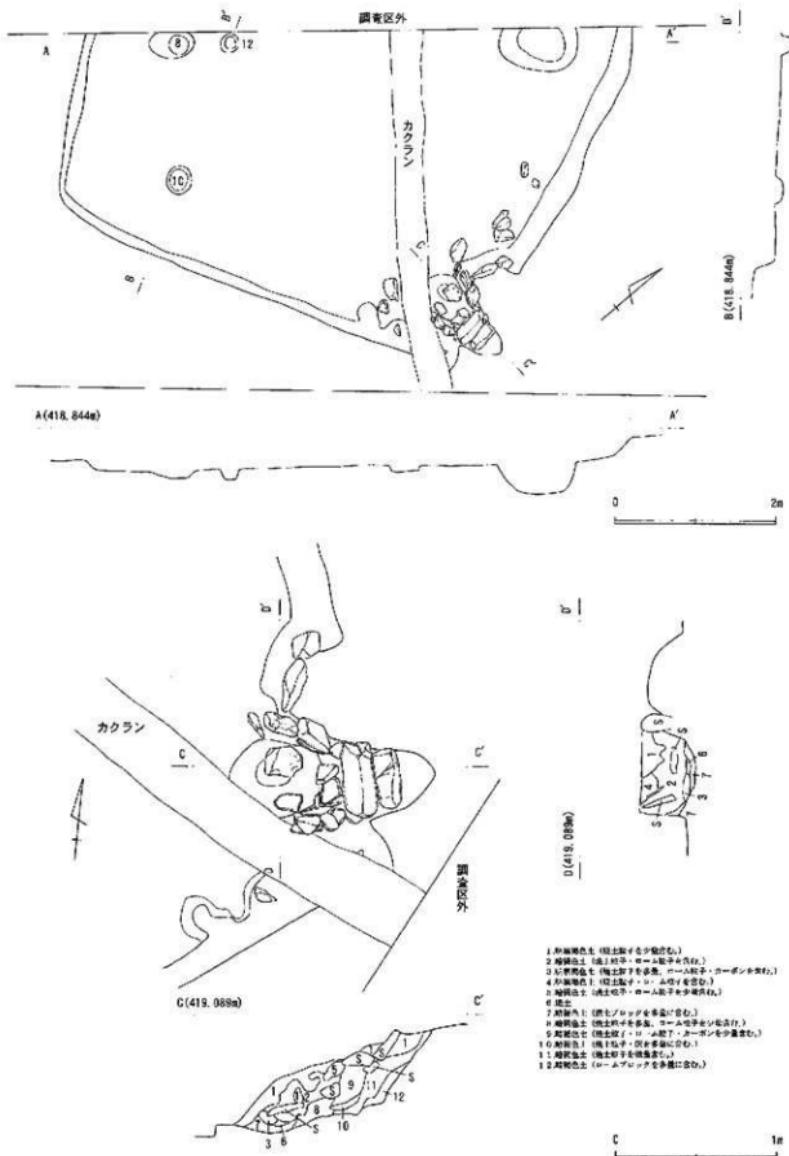
北西側が調査区域外にあるため企貌は明らかでないが、平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するものと思われ、現状で確認できた規模は東西5.2m、南北4.8mである。壁は緩やかに立ち上がっており、確認された壁高は最大で24cmを測る。床は概ね平坦で、貼床は確認できなかったが、カマド周辺が硬く硬化している。カマドは東壁でも南東コーナーの近くに構築されており、燃焼部の右側がカク乱を受けているため企貌は不明であるが、全長256cm、幅268cmの規模を有する。両袖とも大きめの石を並べた袖石が遺存しており、天井部には長さ33cmと48cmの大坪石が2個遺存していた。燃焼部は6cm程度のごく浅い掘り込みがみられ、焼上がり3cm程度の厚さで堆積していた。

その他にピット3本と土坑1基が確認されている。ピットは径が24cmから58cm、深さが8cmから12cmである。土坑は住居の北西側で確認されており、平面形は梢円形を呈するものと思われ、確認できた規模は東西が86cm、南北が92cm、深さが20cmである。

遺物（第121図）はカマドの内部や覆土中から土師器や鐵鏃が出土した。1は住居の南西コーナー付近



第121図 1号住居跡出土遺物



第122図 1号住居跡

の床面近くから出土した小皿で、底径 4.6cm を測る。内外面ともロクロナデが行われており、底には回転糸切り痕が残っている。2は覆土中から出土した柱状高台皿で、柱状高台部を欠損する。口径 7.8cm を測り、内外面ともロクロナデが行われている。3は覆土中から出土した柱状高台皿の皿部の破片で、推定口径は 9.8cm を測る。内外面ともロクロナデが行われている。4はカマド内やその周辺から出土した釜で、推定口径 27.8cm、推定底径 15.2cm、推定器高 22.7cm を測る。外面はヘラ削り、内面の上半はハケ調整後ヘラ削り、下半には指頭痕があり、底には木葉痕が残っている。5は覆土中から出土した鉄鎌で、鎌身部を欠いているため型式は不明だが、現存する全長は 17.5cm で、茎部は 5.5cm である。茎部・頭部とも断面形は長方形である。

本住居跡の時期については、出土した土器が 11 世紀末から 12 世紀のものであることから、その時期に属するものと考えられる。

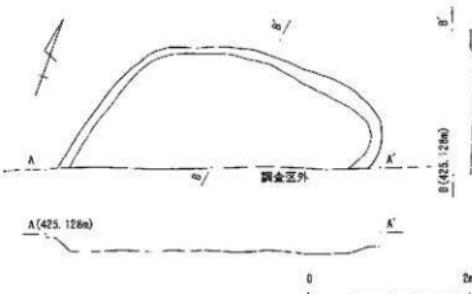
#### 42号住居跡（第123図）

本住居跡はネー41・ナー41 グリッドに位置しており、他の遺構との重複関係はない。

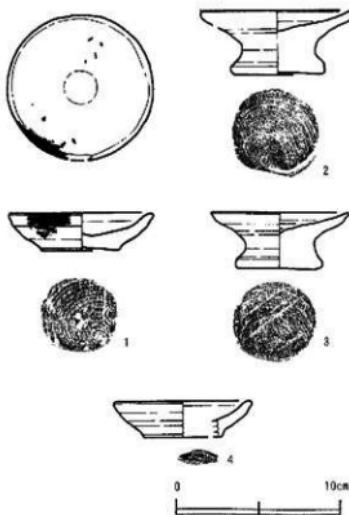
南側が調査区域外にあるため全貌は明らかでないが、平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するものと思われ、現状で確認できた規模は東西 3.1m、南北 1.9m である。壁は確認された壁高が最大で 18cm と低いため、はっきりとは言い切れない面もあるが、緩やかに立ち上がる傾向が窺える。床は概ね平坦で、貼床は確認できなかったが、若干硬化している。カマドは確認できなかった。

遺物（第124図）の量は少ないが、ほぼ床面上から土器が出土している。1は小皿の完形品で、口径 8.6cm、底径 4.8cm、器高 2.3cm を測る。内外面ともロクロナデが行われており、底には回転糸切り痕が残っている。なお、口縁部には擦が付着しており、灯明皿として使用されたものである。2は柱状高台皿で、推定口径 9.2cm、底径 5.6cm、器高 4cm を測る。内外面ともロクロナデが行われており、底には回転糸切り痕が残っている。3は柱状高台皿のほぼ完形で、口径 8.4cm、底径 5cm、器高 3.5cm を測る。内外面ともロクロナデが行われており、底には回転糸切り痕が残っている。4は小皿で、推定口径 8.2cm、推定底径 4.8cm、器高 2.2cm を測る。内外面ともロクロナデが行われており、底には回転糸切り痕が残っている。

本住居跡の時期については、出土した土器が 11 世紀末から 12 世紀のものであることから、その時期に属するものと考えられる。



第123図 42号住居跡



第124図 42号住居跡出土土器

## 2. 溝状遺構

### 5号溝状遺構（第125図）

本溝状遺構はO-23・P-23・P-24・Q-23・Q-24・R-24・R-25・S-24・S-25・S-26・S-27・T-25・T-26グリッドに位置している。7号住居跡、9号住居跡、16号住居跡、19号住居跡、34号土坑、35号土坑、36号土坑、39号上坑、40号上坑、41号上坑、44号土坑、57号土坑、65号土坑、66号上坑、67号土坑、68号土坑、69号土坑、76号土坑、6号溝状遺構と重複しており、重複関係は6号溝状遺構によって切られており、その他の遺構を切って構築している。

O-23グリッドから北東に向かって直線的に延び、T-26グリッドで北西方向にL字形に屈曲して6号溝状遺構に合流している。確認された規模は、長さ33.8m、幅63cm～193cm、深さは最大で46cmである。

遺物は示しなかったが覆土中から縄文土器が出土している。しかし、覆土の色調が今回の調査で確認されている古墳時代や平安時代の遺構と同様の黒褐色土系であることから、出土遺物から本溝状遺構の時期を縄文時代と判断するには困難を伴う。重複関係から見ると10世紀後半に位置づけられる6号溝状遺構に切られており、それ以前に構築されたことは確実である。ところで、覆土の色調や状態は、重複している6号溝状遺構と酷似しており、このことから、さほど変わらない時期に構築されたのではないかと考えられる。

### 6号溝状遺構（第126図）

本溝状遺構はQ-26・R-26・R-27・S-27・T-27・T-28・U-28・U-29・V-29・V-30・W-30・X-30・X-31・Y-31・Y-32・Z-31・Z-32・イ-32・イ-33・ロ-32・ロ-33・ハ-33・ハ-34・ニ-33・ニ-34・ホ-34・ホ-35・ヘ-34・ヘ-35・ト-35・ト-36・チ-36・リ-36・リ-37・メ-36・メ-37・ル-37・ジ-37・ヲ-38・ワ-38・カ-38・カ-39・ヨ-39・タ-39・タ-40グリッドに位置している。5号住居跡、6号住居跡、20号住居跡、25号住居跡、26号住居跡、27号住居跡、30号住居跡、33号住居跡、34号住居跡、37号住居跡、41号住居跡、5号溝状遺構、7号溝状遺構、2号竪穴状遺構、3号竪穴状遺構や多くの土坑と重複しており、重複関係はこれらの遺構を切って構築している。

Q-26グリッドから北東に向かって直線的に延びる溝で、確認された規模は、長さ186.2m、幅144cm～272cm、深さは最大で65cmである。

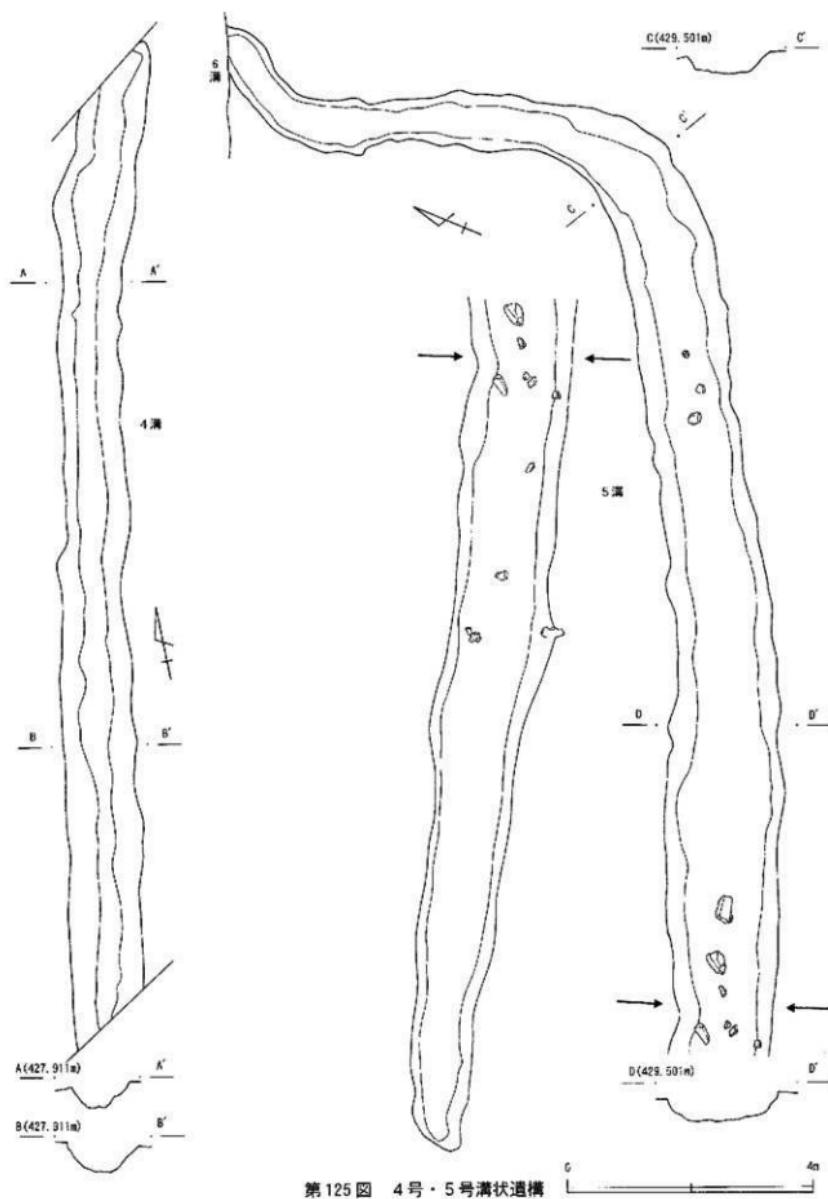
遺物（第128図）は覆土中から平安時代の土師器、灰釉陶器が出土している。1は土師器皿の口縁部破片で、推定口径11.6cmを測る。内外面とも横ナデが行われている。2は土師器壺の口縁部破片で、推定口径12.6cmを測る。内外面とも横ナデが行われている。3は土師器壺の口縁部破片で、推定口径13.8cmを測る。内外面とも横ナデが行われている。4は灰釉陶器の瓶の破片である。5は灰釉陶器の鉢で、推定高台径10.2cmを測る。内外面ともロクロナデが行われている。

本件居跡の時期については、出土した土師器や灰釉陶器が10世紀後半のものであることから、その時期に属するものと考えられる。

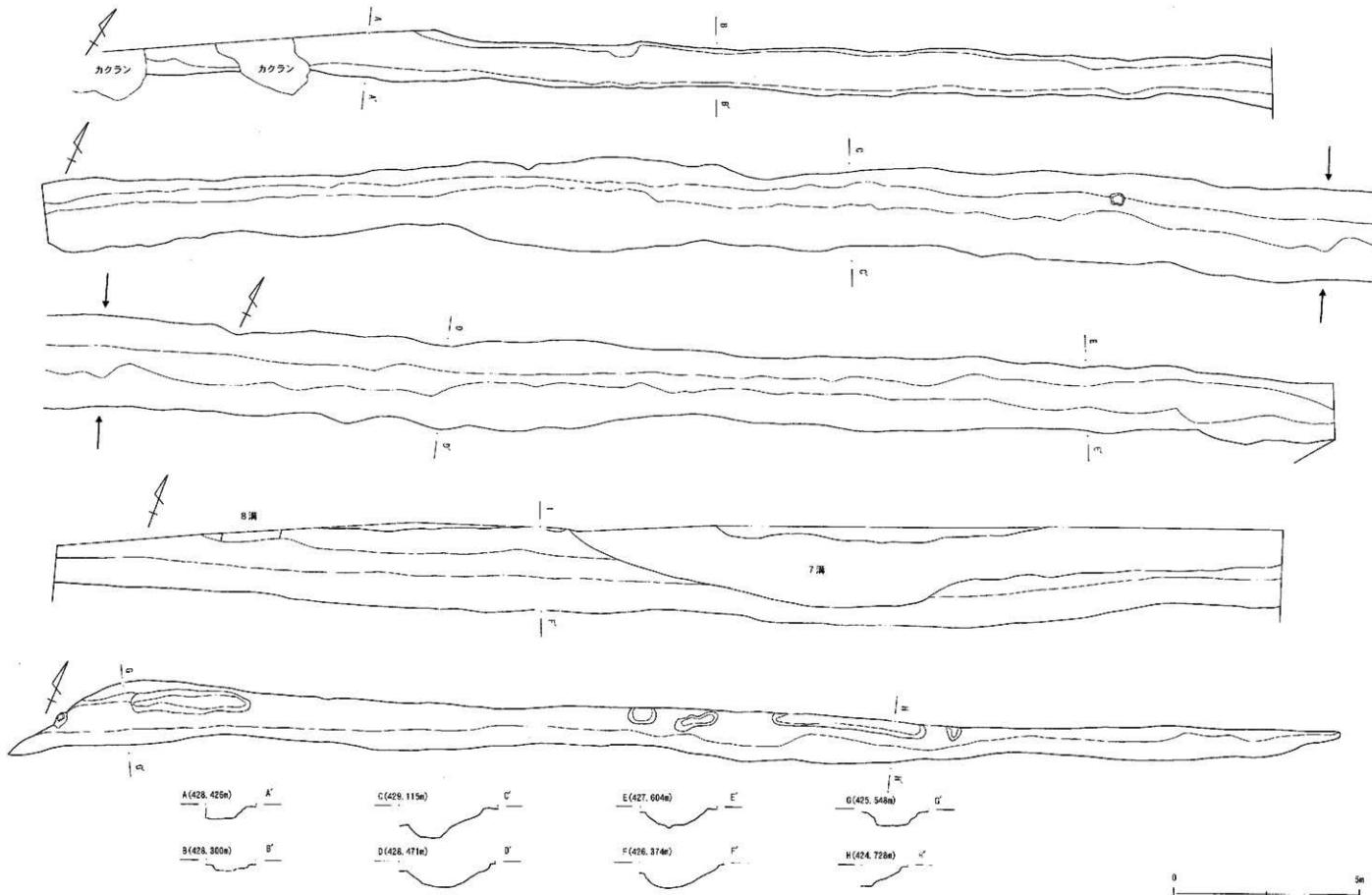
### 7号溝状遺構（第127図）

本溝状遺構はヲ-38・リ-38・リ-39・カ-38・カ-39・ヨ-39・ヨ-40・タ-40グリッドに位置している。282号土坑、292号土坑、287号土坑、315号土坑、317号土坑、319号土坑、320号土坑、322号土坑、345号土坑、349号土坑、363号土坑、367号土坑、373号土坑、377号土坑、381号土坑、6号溝状遺構と重複しており、重複関係はこれらの遺構を切って構築している。

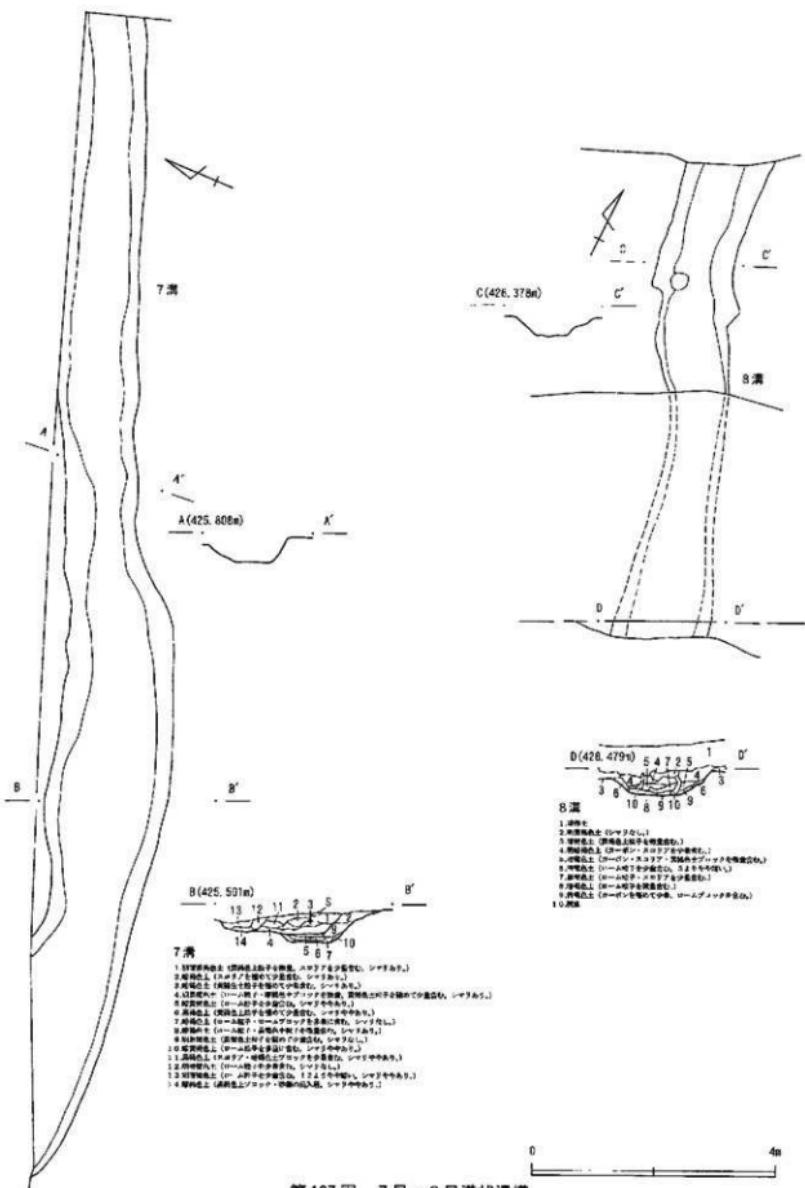
ヲ-38グリッドから緩い弧状を呈しながら北東に向かって延びる溝で、両端とも調査区外に達しているため、全貌は明らかでないが、現状で確認された規模は長さ17.4m、幅115cm～198cm、深さは最大で



第125図 4号・5号溝状遺構



第126図 6号溝状造構



第127図 7号・8号溝状遺構

80cm である。

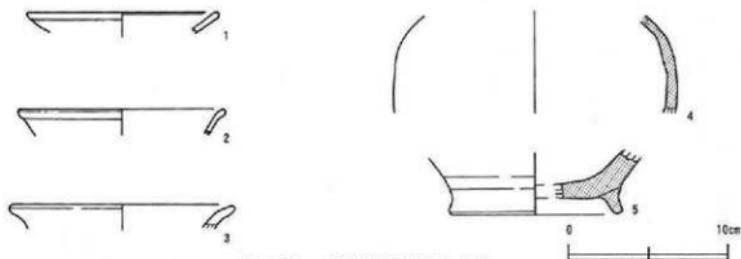
遺物は図示しなかったが覆土中から縄文土器が出土している。しかし、覆土の色調が今回の調査で確認されている古墳時代や平安時代の遺構と同様の黒褐色土系であることから、出土遺物から本溝状遺構の時期を縄文時代と判断するには困難を伴う。重複関係から見ると 10 世紀後半に位置づけられる 6 号溝状遺構を切っていることから、それ以後に構築されたことは確実である。ところで、覆土の色調や状態は、重複している 6 号溝状遺構と酷似しており、このことから、さほど変わらない時期に構築されたのではないかと考えられる。

#### 8 号溝状遺構（第 127 図）

本溝状遺構はヌー-38・ル-37・ル-38 グリッドに位置している。38 号住居跡、40 号住居跡、6 号溝状遺構と重複しており、重複関係は 38 号住居跡と 40 号住居跡を切って構築しているが、6 号溝状遺構との重複関係については、慎重に精査したが土の色調の変化ではまったく確認することができなかった。場合によっては 6 号溝状遺構から分岐している溝状遺構の可能性もある。

ル-37 グリッドで 6 号溝状遺構から分岐して、ほぼ北に向かって直線的に延びる溝で、北側は調査区外に達し、途中、既存の道路下を通っているため全貌は明らかでない。現状で確認された規模は長さ 7.9m、幅 97cm～207cm、深さは最大で 47cm である。

遺物は図示しなかったが覆土中から縄文土器が出土している。しかし、覆土の色調や状態は 10 世紀後半に位置づけられる 6 号溝状遺構とほとんど変化がないため、これとほぼ同じ時期に構築されたのではないかと思われる。



第128図 6号溝状遺構出土土器

#### 3. ピット群

遺構検出のための精査を行ったところ、B-4・C-4・C-5 グリッドで 8 本のピット（第 130 図）を検出した。これらのピットは周囲から床面や壁等が確認されず、配列からも住居跡や掘立柱建物跡の存在を想定することができないところからピット群として扱った。

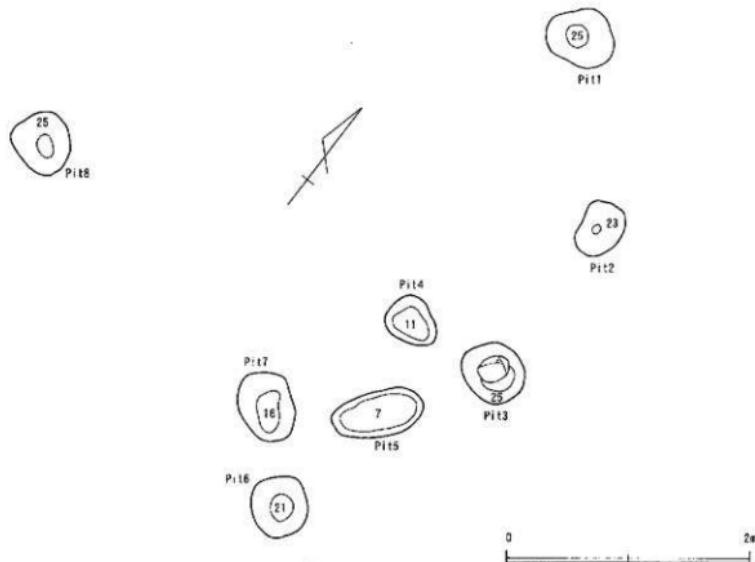
平面形は円形や梢円形、不整形を呈し、径が 45cm から 74cm、深さが 7cm から 25cm で、3 号ピットの覆土中からは 27cm 程度の板状を呈する礫が出土した。

遺物（第 129 図 1）は 1 号ピットから須恵器壺が出土している。口径 13.6cm、底径 6.6cm、器高 3.8cm を測るもので、内外面ともロクロナデが行われており、底には回転糸切り痕が残っている。



第129図 1号ピット出土土器

本ビット群の時期であるが、1号ビットは9世紀前半の須恵器が出土していることから、その時期に属するものと考えられる。その他のビットについては、現状、出土遺物から時期を判断することができないが、覆土が1号ビットと酷似していることから、1号ビットと同様の時期に属するものと考えられる。



第130図 ビット群

#### 4. 造構外出土遺物

ここでは、造構外から出土した平安時代の遺物（第131図）を報告する。

1は須恵器の蓋で、口径13.6cm、器高2.2cmを測る。内外面ともロクロナゲが行われている。2は土衝器皿の底部破片で、推定底径5.0cmを測る。外面および底はヘラケズリ、内面は縦ハケ調整後ナゲが行われており、部分的にハケ調整痕が残っている。



第131図 造構外出土遺物

#### 第5節 時期不明の造構

##### 1. 溝状造構

###### 1号溝状造構（第117図）

本溝状造構はB-5・C-5・D-5・D-6グリッドに位置している。3号溝状造構と重複しており、重複関係は3号溝状造構を切って構築している。

調査区を東西に横切る溝で、両端とも調査区外に達しているため、全貌は明らかでない。現状で確認さ

れた規模は、長さ 11.8m、幅 32cm~66cm、深さは最大で 55cm である。

本溝状遺構からは遺物がまったく出土していない。しかし、4 世紀後葉から 5 世紀前葉頃に属すると考えられる 3 号溝状遺構を埋っていることから、これ以降に構築されたことは確実である。ただ、それ以上の時期の判断ができないことから、今回は時期不明の遺構として扱った。

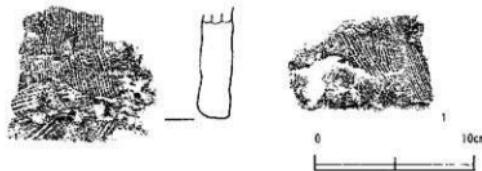
#### 4号溝状遺構（第 125 図）

本溝状遺構は N 21・N 22・O 21・O 22・O 23・O 24 グリッドに位置している。4 号住居跡、38 号土坑と重複しており、重複関係はこれらの遺構を切って構築している。

調査区を南北に横切る溝で、両端とも調査区外に達しているため、全貌は明らかでない。現状で確認された規模は、長さ 15.8m、幅 90cm~132cm、深さは最大で 49cm である。

遺物（第 132 図）は覆土中から円筒埴輪の破片が 1 点出土している。1 は基部の破片で、外面は縦ハケ調整、内面は斜めハケ調整が行われているが、内面には指頭によるオサエ痕が認められる。

本溝状遺構の時期であるが、出土した埴輪は本溝の北西約 70m に所在する「岡・鏡子冢古墳」に樹立されていた埴輪であり、古墳が構築された 4 世紀後葉以降の時期であることは確実である。ただ、それ以上の時期の判断ができないことから、今回は時期不明の遺構として扱った。



第132図 4号溝状遺構出土遺物

## 第V章 まとめ

鏡子原遺跡の発掘調査はこれまでに 3 回行われている。調査面積はさほど広くないが、縄文時代前期後半の諸窯式炉と中期後半の当利期に属する住居跡や土坑、古須時代に属する溝状遺構が確認されている。また、縄文時代前期後半から中期後半の遺物も多く出土していたことから、縄文時代前期後半から中期後半を中心とする極めて規模の大きな集落跡であろうことは把握されていた。今回の発掘調査ではこれに近い結果が得られたわけだが、この他に、今から 26,000~24,000 年前頃の切山形石器や縄文時代前期前半の駆逐堂 2 3 式と後期初頭の称名寺式、後期前葉の堀之内式の遺構や遺物、さらに、平安時代の遺構や遺物も新たに確認されたことから、本遺跡の知られざる様相をある程度明確にできたものと思われる。

さて、今回の調査で特に注目されるものは、26 号住居跡、即ち、山梨県で初めて発見された大型住居跡である。この住居跡については、山梨県考古学協会が発行している山梨考古の第 73 号に、本住居跡のピットの配列から見て、2 间の立て替えにより住居が徐々に大型化していく様子が、野代立和氏により紹介されている。また、2001 年 5 月 20 日に刊行された山梨県考古学協会誌の第 12 号には、その概要を掲載させていただいた。これらはいずれも室内整理作業が行われる前の段階での見解であったが、今回は室内整理作業も終わり、出土遺物の様相も明らかとなったことから再度検討を加えてみたい。

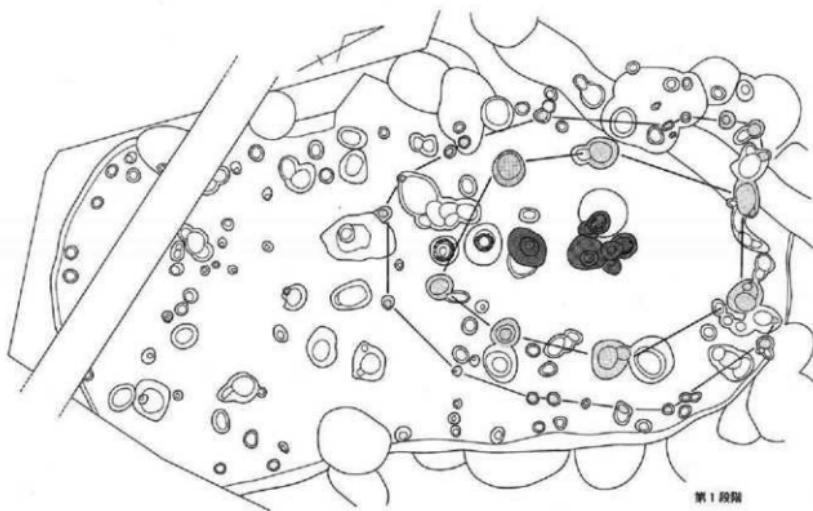
本住居跡は、覆土中より出土した上器から中期初頭の五領ヶ台 I 式期の中でも新段階に位置づけられるものである。規模は長軸が約 12.2m、短軸が約 6.0m を有し、かは反転に沿って 1 号炉から 4 号炉が一列に並んで検出され、この炉跡列から外れたところで 6 号炉と 7 号炉が検出されており、6 箇所で確認されている。ピットは重複している 28 号住居跡のピットも含まれており、その区別が困難な状況もあるが、主柱穴となりえる直徑 40cm を超えるピットは、壁よりも若干内側で、住居の長軸を中心にして、概ね左右対称の配列がみられる。また、壁柱穴と思われる直徑 20cm 前後のピットが壁際を走っている。

さて、本住居から検出された炉の中には 3 基の埋壠炉がある。これらの炉の炉体土器をみると、1-1 号壠壠炉は十三菩提式の最終末、1-2 号壠壠炉は五領ヶ台 I 式の新段階、4 号炉は五領ヶ台 I 式の古段階であって、1-1 号炉や 4 号炉に用いられている炉体土器と本住居との間には時期差がみられる。さらに、1 号炉は埋壠炉以外にも 4 基の地床炉があり、これらが互いに重複していることから、炉を造り直して繰り返し使用していたことがわかる。つまり、十三菩提式の最終末に構築された住居が、五領ヶ台 I 式の新段階まで継続して使用されていたということになる。また、住居の主柱穴と壁柱穴の配列、特に、壁柱穴の配列を詳細に観察してみると、住居内を廻るような配列が何通りかみることができる。そこで、炉の時期や配置状況を加味して見てみると、炉の中でも最も古い炉体上器が検出された 1 号炉と 2 号炉を取り囲むように、楕円形を呈するようなピットの配列をみることができる。そして、これを基にして北から南に向かって、少なくとも 3 度にわたって拡張されたと思われる痕跡を捉えることができる。

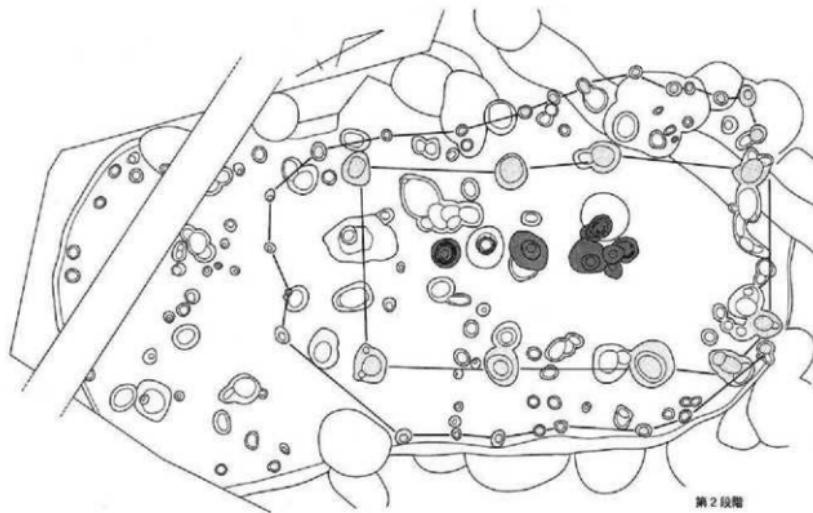
第 1 段階（第 133 図）は十三菩提式の最終末期にあたり、先述したように 1 号炉と 2 号炉を取り囲むような楕円形を呈する住居で、長軸約 7.0m、短軸約 5.4m の規模が想定される。第 2 段階（第 133 図）は南側に向かって最初の拡張が行われた段階で、4 号炉が新たに設けられ、1 号炉、2 号炉、4 号炉が同時に使用されていたと考えられる。この時の住居の想定される規模は長軸約 9.0m、短軸約 6.0m で、五領ヶ台 I 式の古段階にあたる。続く第 3 段階（第 134 図）では、さらに南側に向かって小規模であるが拡張が行われ、住居の想定規模が長軸約 9.5m、短軸約 6.0m となり、5 号炉の新設により 1 号炉、2 号炉、4 号炉、5 号炉が使用されたと考えられる。ただ、五領ヶ台 I 式の古段階なのか新段階なのかは明確ではない。そして、第 4 段階（第 134 図）は五領ヶ台 I 式の新段階で、再度南側へ向かって拡張が行われ、住居の規模が長軸約 12.2m、短軸約 6.0m に達し、6 号炉、7 号炉と 2 基の炉が新たに設けられ、6 箇所の炉が同時に使用されたと考えられる。このような変遷を経て本住居の発見時の姿に至ったものといえよう。また、本住居跡では壁柱穴である直径 20cm 前後のピットが壁際を走っているということを先に述べたが、住居跡の北側だけは壁際に壁柱穴と考えられるピットが細っていた痕跡を捉えることができなかつた。これは、ここに出入り口が設けられていたため、壁柱穴が設置されなかつたのではないかと考えられ、今回想定した住居の初段階から最終段階まで、北側を出入り口としていたと思われる。

大型住居は集団が共有した公共の建物で、協同作業施設や集会所、祭祀施設等と考えられている。今回発見された大型住居は、十三菩提式の最終末もしくは五領ヶ台 I 式のごく初頭から五領ヶ台 I 式の新段階まで、徐々に拡張されながら使用されていたもので、八住居を使用していた集団の構成人員の増加に合わせ拡張されていったものと思われる。つまり、大型住居が構築された十三菩提式の最終末もしくは五領ヶ台 I 式のごく初頭から五領ヶ台 I 式の新段階にかけて、集落が徐々に拡大していったということになる。ところがこの時期の住居跡は、これまで行われてきた調査ではまったく確認されておらず、今回の調査でも 1 軒確認されただけで、決して多いといえるような状況ではない。しかし、今回、土坑が比較的多く確認されていることから、周囲に存在している可能性が極めて高く、安定した拠点的な集落が営まれていたものと考えられる。

本遺跡の周辺では、市内御坂町上黒駒・下黒駒に所在する桂野遺跡や甲府市下向山町に所在する上の平遺跡といった五領ヶ台式の規模の大きな集落の調査が行われている。桂野遺跡ではこれまでに 4 回の調査が行われており、五領ヶ台 I 式期の住居跡 2 軒、五領ヶ台 II 式期の住居跡 24 軒が確認されている。この五領ヶ台式の集落については櫛原功一氏によって分析が行われており、五領ヶ台 I 式期は小規模で分散した集落が台地先端部に立地し、五領ヶ台 II 式期になって台地先端部の集落域が広がり隣接面や同一面の上方に集落が分散・拡大するという指摘がなされている。一方、上の平遺跡はこれまでに 6 回の調査が行われ、五領ヶ台 I 式期の住居跡 5 軒、五領ヶ台 II 式期の住居跡 11 軒が確認されており、桂野遺跡と同様に五領ヶ台 I 式期に比べ五領ヶ台 II 式期の集落が拡大する傾向が窺える。本遺跡では五領ヶ台 II 式期の住居跡が 3 軒確認されており、大型住居の廃絶後も引き続き集落が営まれている。ただ、調査した範囲が遺跡全体からみるとごく一部に過ぎず、さらに、確認された住居跡も非常に限られたものであることから、

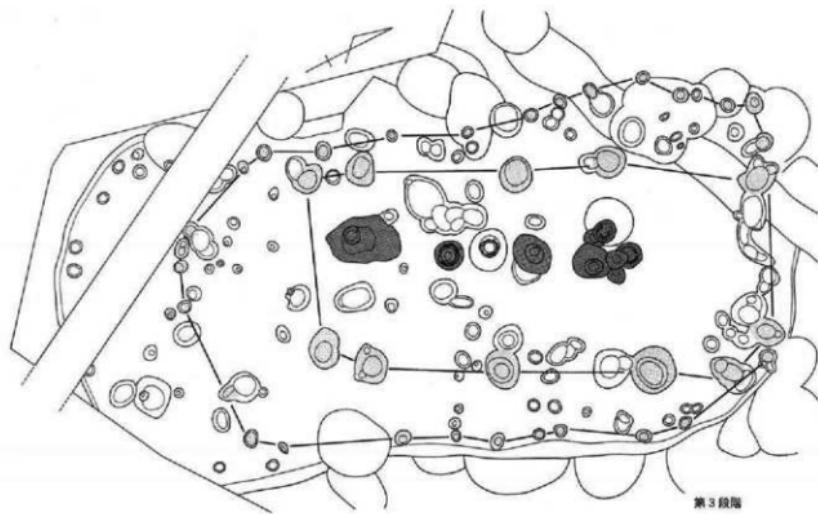


第1段階

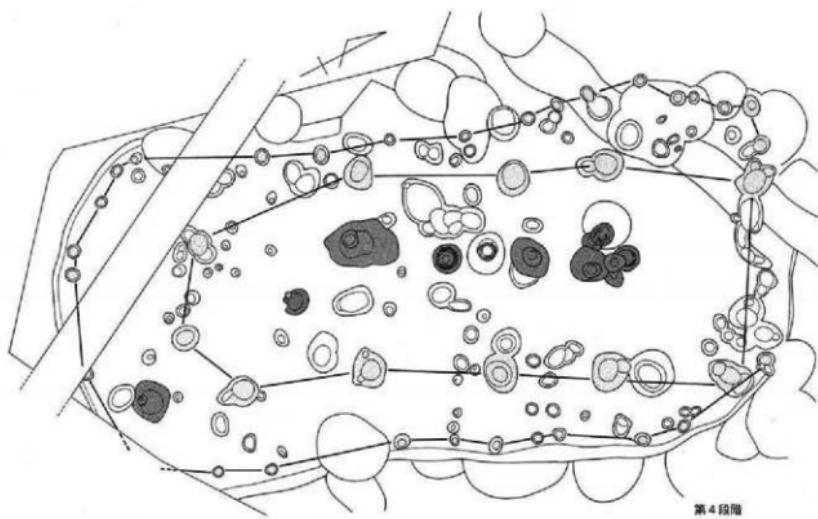


第2段階

第133図 26号住居跡拡張想定図(1)



第3段階



第4段階

第134図 26号住居跡拡張想定図（2）

桂野遺跡や上の平遺跡でみられるような五領ヶ台Ⅱ式期の集落が拡大化していく傾向が窺えるかどうか、今後の調査によるところが大きい。

ところで、この縄文時代前期の終末期から中期初頭という時期は、長期にわたるような定住は行わず、短期間で移動を行っていた時期とされている。実際に、平成8年から平成10年にかけて、山梨県教育委員会によって行われた桂野遺跡の発掘調査でも、定住をするものの中期中葉以降にみられるような長期定住型ではなく、付近に獲物や採集ができるものが少なくなると別の場所に移動し、一定期間経過すると元の場所に戻ってくるという短期定住型の生活を送っていたという指摘がなされている。しかし、今回、本遺跡でみられた状況はこれとはまったく違い、少なくとも五領ヶ台Ⅰ式という1型式の間、本遺跡内で継続して生活を営んでいたということを示すものである。つまり、本遺跡のように長期的な集落が営まれていた拠点的な道跡と、桂野遺跡のような短期定住型の生活を送っていた遺跡との存在していることは確かにことで、場合によっては、人型住居を桂野遺跡のような周辺の遺跡とともに共有していた施設と考えられないこともない。大型住居を持つ遺跡と持たない遺跡との違いやその関係、また、大型住居と通常の居住用住居との遺跡内における関係等、今後に残された課題は大きいといえる。

#### 引用・参考文献

- 小川 望 1985 「縄文時代の「人型住居」について（その1）－その定義と機能をめぐる若干の考察－」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要 第4号』東京大学文学部考古学研究室
- 小川 望 1989 「縄文時代の「人型住居」について（その2）－一定義と機能に関する統論－」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要 第7号』東京大学文学部考古学研究室
- 若谷通保 1987 「縄文時代特殊住居論批判－「人型住居」研究の展開のために－」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要 第6号』東京大学文学部考古学研究室
- 野代幸和 1999 「ちょうどいい発見 遺跡をのぞこう」『山梨考古 第73号』山梨県考古学協会
- 伊藤修二 2001 「銚子原遺跡の大型住居」『山梨懸考古學會誌 第12号』山梨県考古学協会
- 境川村教育委員会 1994 『仲原遺跡・真福寺遺跡』
- 境川村教育委員会 1998 『遺跡分布地図』
- 境川村教育委員会 2002 『西原遺跡・柳原遺跡（二次）』
- 八王子市南部地区遺跡調査会 1996 『南八王子地区遺跡調査報告 第10号』御坂山遺跡
- 御坂町教育委員会 2004 『桂野遺跡』
- 御坂町教育委員会・(財)山梨文化財研究所 2004 『桂野遺跡』
- 八代町 1975 『八代町誌』(上巻)
- 八代町教育委員会 1985 『上の平遺跡』
- 八代町教育委員会 1990 『遺跡詳細分布調査報告書』
- 八代町教育委員会 1994 『大谷沢A遺跡』
- 八代町教育委員会 1995 『山梨県指定史跡 岡・鏡子塚古墳 一保存整備報告書』
- 八代町教育委員会 2004 『帝塚古墳』
- 山梨県 1998 『山梨県史』資料編1 原始・古代1
- 山梨県 1999 『山梨県史』資料編2 原始・古代2
- 山梨県教育委員会 1986 『駿迎堂I』
- 山梨県教育委員会 1987 『駿迎堂II』
- 山梨県教育委員会 1987 『上の平遺跡 第4次・第5次発掘調査報告書』
- 山梨県教育委員会 1989 『花島山遺跡・水季場北遺跡』
- 山梨県教育委員会 1994 『上の平遺跡 第6次調査・東山北遺跡 第4次調査・銚子原古墳南東部試掘』
- 山梨県教育委員会 2000 『仲原遺跡(第1~第3次)・西馬齋遺跡』

# 図 版

図版 1



遺跡遠景（南東側から）



遺構検出状況（チ-36 グリッド付近から南西側）



遺構検出状況（チ-45 グリッド付近から北東側）

図版2



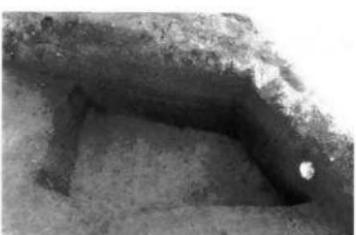
遺1号住居跡



1号住居跡カマド



2号住居跡



3号住居跡



5号住居跡・6号住居跡



5号住居跡 1号埋甕出土状況



5号住居跡 2号埋甕出土状況

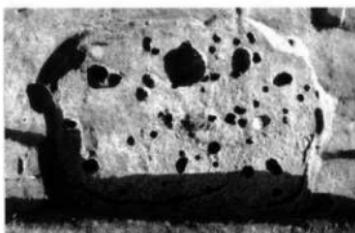


9号住居跡・4号竪穴状遺構

圖版 3



11 号住居跡



19 号住居跡



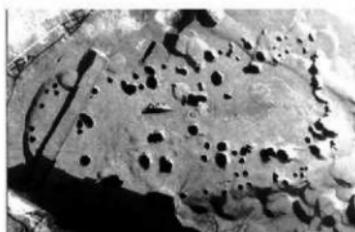
20 号住居跡



20 号住居跡 台石・磨石出土状况



25 号住居跡



26 号住居跡



26 号住居跡 1-1号埋甕炉体土器出土状况



26 号住居跡 4号炉体土器出土状况

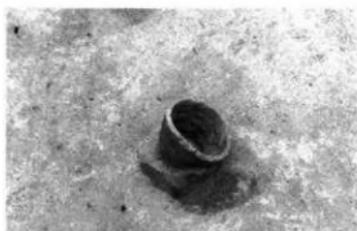
图版 4



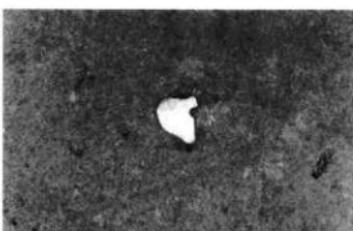
26号住居跡 塊状耳飾出土状況



27号住居跡



27号住居跡 土器出土状況



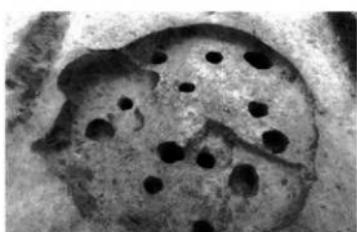
27号住居跡 塊状耳飾出土状況



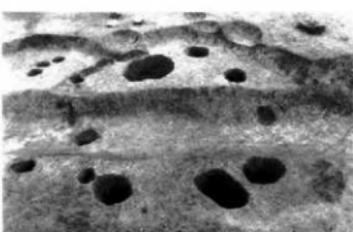
28号住居跡 埋甕炉炉体土器出土状況



30号住居跡

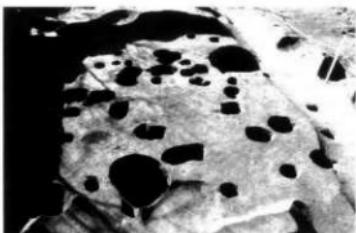


32号住居跡



33号住居跡

图版 5



34号住居跡



34号住居跡 土器出土状況



35号住居跡



36号住居跡



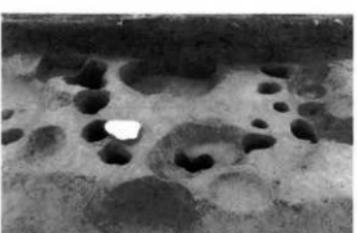
37号住居跡



38号住居跡

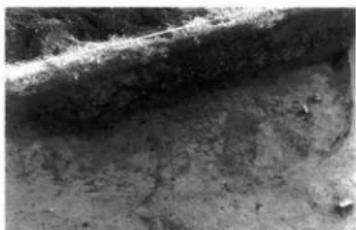


39号住居跡



41号住居跡

图版 6



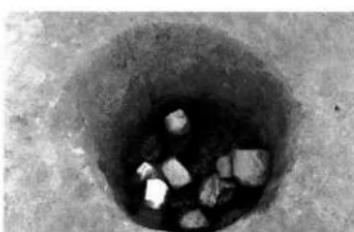
42号住居跡



42号住居跡 土器出土状况



23号土坑 土器出土状况



50号土坑



76号土坑 土器出土状况



176号土坑

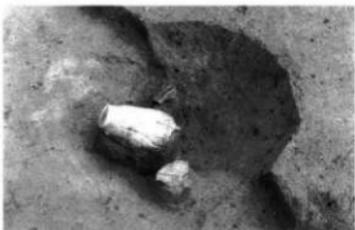


190号土坑 土器出土状况



208号土坑 土器出土状况

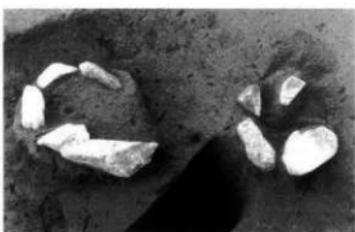
図版 7



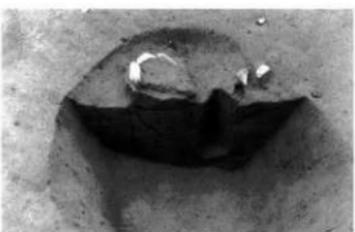
223号土坑 土器出土状況



236号土坑 土器出土状況



235号土坑 石組検出状況



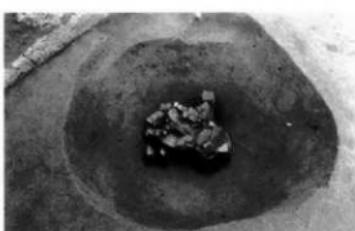
235号土坑 セクション



237号土坑 土器出土状況



268号土坑・269号土坑 土器出土状況

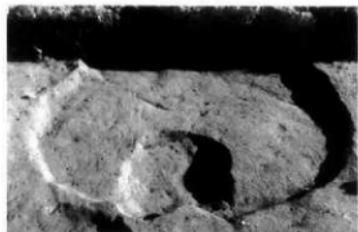


526号土坑 土器出土状況



1号屋外炉

図版 8



1号竪穴状遺構・48号土坑



7号溝状遺構



4号溝状遺構



8号溝状遺構



6号溝状遺構（ヘー35グリッド付近）

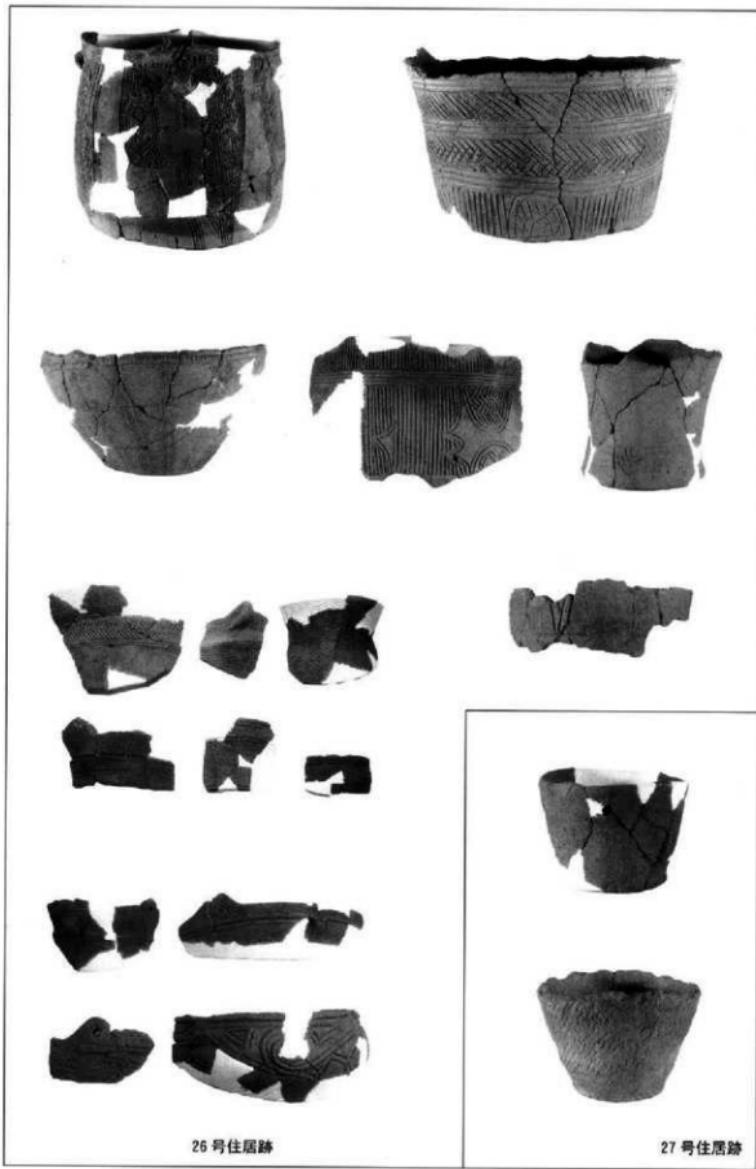


6号溝状遺構（ルー37グリッド付近）

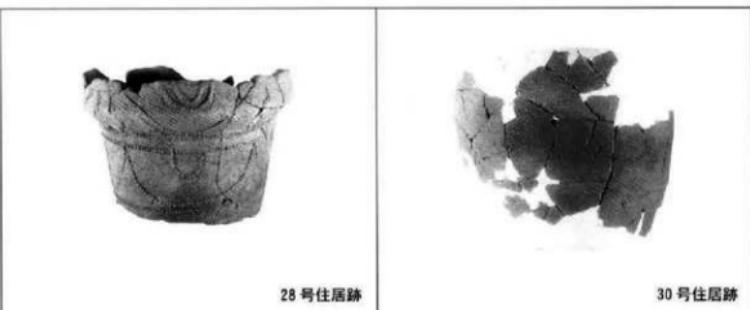
图版 9 出土遗物 (1)



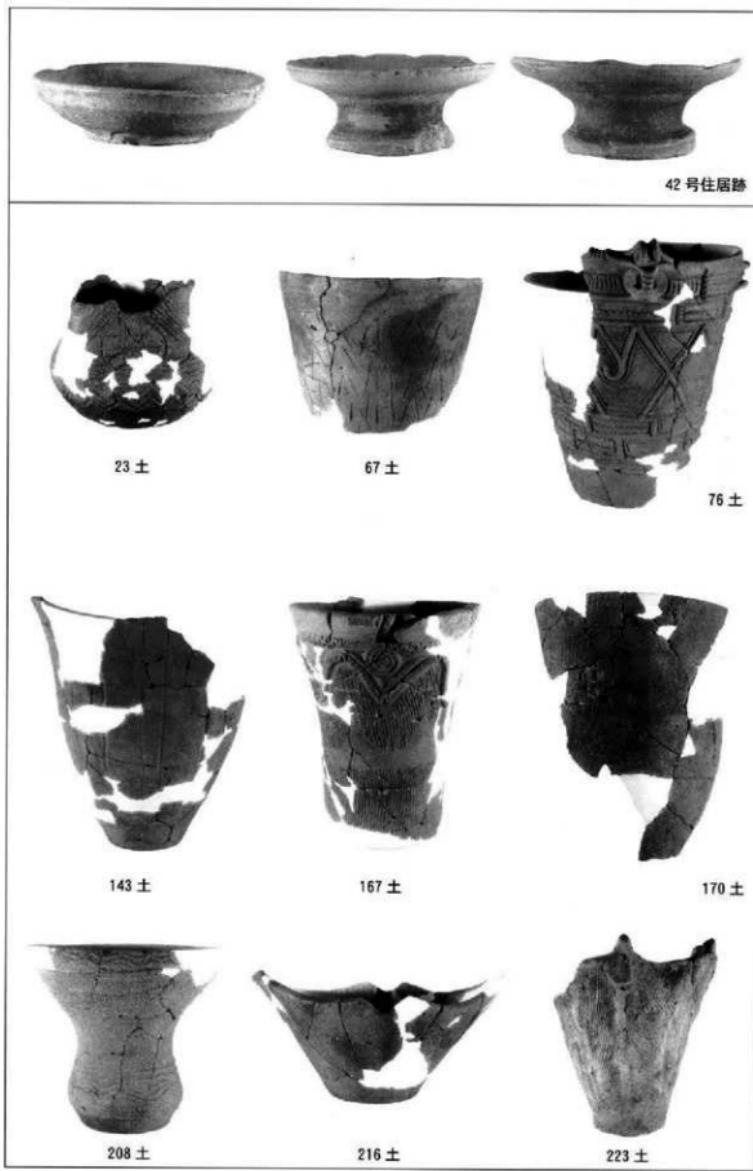
图版 10 出土遗物 (2)



圖版 11 出土遺物 (3)



图版 12 出土遗物 (4)



図版 13 出土遺物 (5)



237 土



269 土



236 土



239 土



489 土

5号住居跡



2号溝状遺構



1号ピット



C-6 グリッド

图版 14 出土遗物 (6)



土製円盤

土偶



切出形石器



石皿

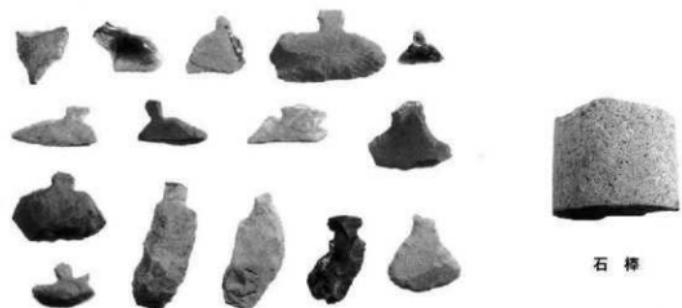


石鉄族



石皿

圖版 15 出土遺物 (9)



石 棒

石錐・石匙



磨 石



打製石斧



凹 石

磨製石斧

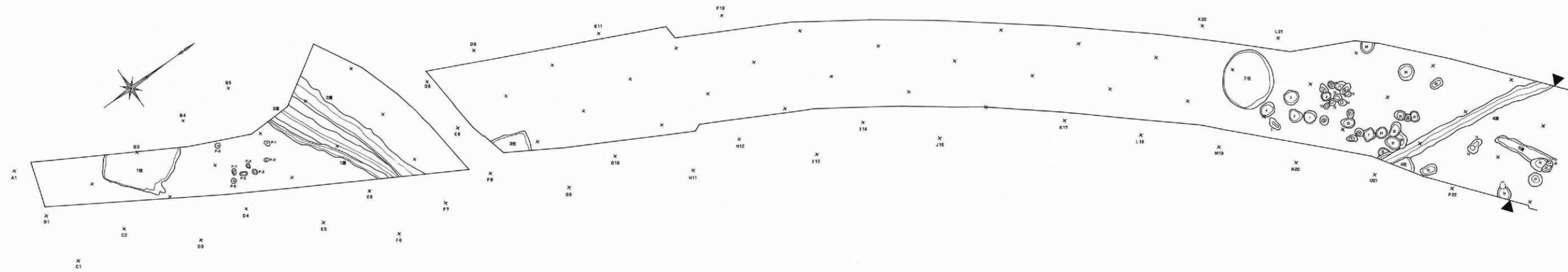
報告書抄録

ふりがな	ちょうしつばらいせき							
書名	銚子原遺跡							
調査名	県道農林漁業用排水渠設置事業に伴う山梨文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	笛吹市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第4集							
編著者名	伊藤修二							
編集機関	笛吹市教育委員会							
所在地	〒406-8556 山梨県笛吹市八代町南527 Tel 055- (265) 4852							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな	ふりがな	在地	ニード	調査地系		調査期間	調査面積	調査概況
所取遺跡名	所取遺跡名	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
よながい まさ 夜長遺跡	山梨県笛吹市 八代町岡 宇都山原2190他			35° 36' 1"	138° 38' 41"	19961202 ～19990906	約3,400m <sup>2</sup>	県道農林漁業用排水渠設置事業に伴う発掘調査
所取遺跡名	種別	上な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
銚子原遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 30軒 土坑 848基 屋外炉 2基 竪穴状遺構 6基	縄文土器・石器・装飾品・土製品			中期初頭の大型住居1軒	
		古墳時代	竪穴住居跡 1軒 溝状遺構 2条	土器・埴輪				
		平安時代	竪穴住居跡 2軒 溝状遺構 4条 ピット群	土器・須恵器・灰釉陶器・鉄鎌				

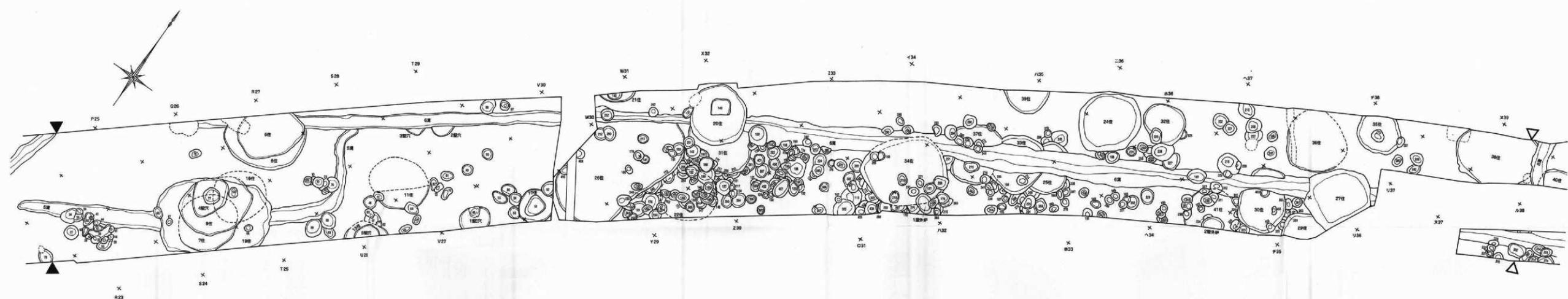
笛吹市埋蔵文化財調査報告書 第4集

銚子原遺跡

発行日 平成18年3月31日  
発行 笛吹市教育委員会  
印刷 横村印刷社  
山梨県東八代郡石和町下平井1370



付図 銚子原遺跡遺構配置図



The Report of  
Archaeological Research of CHOSHIIPPARA Site

Archaeological Rescue Survey prior to the Construction of  
Farm Road "Miyasaka-Michi"

March, 2006

Agricultural Department, Yamanashi Prefectural  
Development Office of Kyoto Area  
Fuefuki City Board of Education